魔法少女 リリカルなのは ～時の引き金～

テスタメント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女　リリカルなのは　～時の引き金～

【Ｎコード】
Ｎ６７６９Ｔ

【作者名】
テスタメント

【あらすじ】
なのはクロスリレー第三弾！　うん、またかと言うツッコミは勘弁して下さい（笑）
原始、アルハザード魔法王国、古代ベルカ、現代ミッドチルダ――そして壊れた未来。
様々な、なのはＳＳオリキャラ＆原作キャラ達が時代を超える。
そして行き着く真実とは――？
なのはＳＳでクロノトリガーをやってみようと言う無謀な企画（笑）

ぜひ、お楽しみあれ♪

始まりを告げる引き金　―プロローグ？―（前書き）

前クロスリレーＳＳが失敗して早一年。今度こそは失敗すまいと、頑張る次第であります！

クロスリレー走者は、

ボン太郎さん。

ほっぱーさん。

ムーギネーターさん。

白河シンジさん。

夕さん。

樟葉櫂さん。

イクス・スタンスさん。

回覧板さん。

月兎さん。

ｍｅｂｉｕｓさん。

二階堂さん。

オメガさん。

クロックさん。

ヨシュアさん。

そして、俺。テスタメントの計十四名で走らせて頂きます♪
果たしてどうなるやら――お楽しみ下さい♪

では、まずプロローグ”1”（笑）
ええ、1です1。うん、やり過ぎた（笑）
と、とにかくお楽しみあれ♪　では、

魔法少女　リリカルなのは　～時の引き金～

始まります。

始まりを告げる引き金　―プロローグ？―

忘れないで。

どれだけ離れていても、どれだけ時間の隔たりがあっても。

私達は一緒だった事を。

過去も、現在も、未来も。

共に歩んで行った事を。

どうか、忘れないで。

いつか、また。

また、必ず。必ず会えるから。

待ってて。

約束だよ？

いつか、来るべきあなた――。

【――きろ】

ぴぴぴ、という音がする。

それは少年の眠りを妨げる音であり、目覚めを促す音。

――有り体に言うと、目覚まし時計の音だった。

だが、少年は――風間カナンは、その音を盛大に無視した。何故なら、まだ眠いから。

とても簡潔かつ、人間らしい理由である。本人もとても納得のいく理由であろう。

故に、カナンは布団を引き寄せ丸くなった。

【マスター！　もう時間だぞ？】

【困りましたね……。いつもは、主も寝起き良いのですが……】

「――いいわよ、別に。起きなきゃこうするだけだから！」

瞬間。とても、恐ろしい気配をカナンは察知。あまりにも鋭く、またあまりにも慣れ親しんだその気配は――！

「必殺！　裂破爆砕拳！」

「ぬぉおおおお！？」

―撃！―

叫びと共に、炎を纏った拳が振り下ろされる！　カナンが、起きるなり自身の希少技能『空間突破』を発動するのと、その一撃がベ

ッドに突き刺さるのは、全く同時であった。
そして、ベッドが技の名の通りに爆砕する！

―爆！―

「お、俺のベッドが――――――――！」

チーン。ベッドは力尽き、その後、ベッドの行方を知るものは誰もいなかった……。

「妙なナレーションいらねーよ！　力尽きたってなんだよ！　行方も何も大型ゴミ行きだろ！　てか、裕希奈――！」
「うっさい！」
「がふ！」

裕希奈の飛び蹴り！　カナンに百のダメージ。カナンは力尽き――

「尽きてねー！　そして何で蹴りやがるかな！？　裕希奈――！」

裕希奈。そう呼ばれた銀髪をロングにした少女は、カナンの叫びに、しかしフンと鼻を鳴らした。
そんな反論は予想しているとばかりである。

「いつまで経っても起きないあんたが悪いのよ」
「だからって、いきなりベッド燃やす一撃ぶっ放すかフツー！？」
「いつもの事じゃない」
「いや、そうなんだけど……頷けちまう自分が嫌だ……」
「どうでもいいけどよ、二人とも……」

と、ト〇とジ〇リーよろしく仲良く口喧嘩している二人の背後か

ら声が掛かる。
そちらに振り向くと、一人の少年が居た。こちらも銀髪の、カナン達より少し年上の少年である。
彼は苦笑しながら、ぴっと一点を指差した。

「それ、火事になるんじゃね？」
「「へ？」」

くるりと言われるまま振り向き――そこに、めらっさめらっさとばかりに燃えるベッド（＋カナンの部屋）を見て、二人は青ざめた。慌てて消しにかかる。

「お、俺の部屋が燃えるー！」

「火の勢い、なかなか強いわね……よし、こうなったらジャッジメント・アローで――」

「やめてー！　もう部屋のライフは限界よ！？　て、何言わすか！」

「あんたが勝手に言ったんじゃない！　じゃあ、どうしろってのよ！？」

「……メイデンかレナスいるじゃん」

「「それだ！」」

【……言われるまで忘れてたのか……私は悲しいぞマスター】

【……主……】

「う、ごめん……」

自分の融合騎二人から責めるような目で見られ、流石にカナンも縮こまる。

裕希奈はと言うと、逆に火事を指摘した少年をキッと睨んでいた。

「あんたもあんたよ！　さっさと言いなさいよね！　シオン！」

「……いや、気付くだろフツー」

裕希奈の怒りにも、流石に少年――神庭シオンは肩を竦めるだけであった。

メイデンやレナスの二人が立ち入れない口喧嘩をしていた二人に割って入ったのだから、むしろ褒めて欲しいくらいである。……言ったら蹴られるので、絶対に言わないが。

ともあれ、メイデンとレナスが水属性の魔法で消火を完了したのを見計らって、シオンは踵を返す。

一同も――カナンは、まだ『……俺、今日からどこで寝よ……？』とか呟いていたが、シオンに続いて階段を下りて行く。その時、ちょうど、鐘の音が鳴り響き、シオンは微笑したのであった。

「ミッドチルダ建国四百年祭か……すげーよなー」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

唐突だが、ミッドチルダは何気に古い歴史を持つ世界――国である。

古代ベルカ時代が崩壊した百五十年前には、既にミッドチルダは存在していたのだ。

誤解されがちだが、新暦とは管理局が立ち上がったと同時に開始

された年号であって、ミッドチルダと言う世界が始まった年代ではないのである。
と、言う訳でミッドチルダ建国四百年のお祭りが、ミッドチルダ全域で始まりを待っていた。
開催は、午前9時――首都クラナガンでも建国記念祭を心待ちにする市民で道は溢れ返っている状態だ。
道路は自動車等の通行が禁止され、歩行者天国。ここで、パレードも行われる筈である。

この日に合わせて、ほとんどの企業が休業し、あるいは祭りの露店や数々のショーやイベントを行っていた。
……だが、その中でどうしても、普段と変わらない――いや、あるいは普段よりとても地味かつ厄介な仕事をミッドチルダ政府より押し付けられた組織がある。
言わずもがな、治安維持組織でもある時空管理局だ。
彼等は当然、警備員や各イベントの警邏。あるいは人員整理などに駆り出されていたのである。

管理局も一応、新型次元転移装置のデモンストレーションや戦技披露会と言ったイベントも用意してあるのだが――戦技披露会はともかく、次元転移装置のデモンストレーションなど、地味としか言えまい。
かくて、管理局局員のほとんどは祭りを楽しむ事なく職務に励む事になったのであった。南無ー。

「……いや、別にいいけどね……」

そう呟くのは、元機動六課前線メンバーであったティアナ・ランスター執務官である。
あのフェイト・T・ハラオウンが三度も落ちた執務官試験に一発

合格を先日成し遂げた彼女ではあるが、それはそれ、これはこれとばかりに建国記念祭の新型次元転移装置の警護任務に就いていた。
なお、もう一度言うが彼女は立派な執務官である。なのに、なんでこんな人気の無いイベントの警護に回されているのかと言うと――。

「ごめんね、ティアナー。こっちの都合に付き合わせちゃって」
「いえ、シャーリーさん。気にしないで下さい」

そうティアナが苦笑を返すのはフェイトの執務官補佐、シャリオ・フィニーノであった。
彼女は今、新型の次元転移装置とやらのセッティングを行っているのだが、何を隠そう。この転移装置、開発したのは彼女である。
元よりデバイス・マイスターとしても高名な彼女ではあるが、その才能はデバイスだけに留まらなかったらしい。
そんなシャーリーが開発したものであるが為に、元執務官補佐仲間としてティアナが声を掛けられた訳だ。

……まぁ、この警護任務を受けなければ、戦技披露会に参加させられそうだったので、こちらでも全然いいと言えばいいのだが。
ちなみに、あちらは高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、シグナム、ヴィータと言った面々が参加しているとの事である。……つまり、元機動六課隊長陣。それに高名な魔導士達も参加しているとの事なので、さぞや凄まじい事になっているであろう。

……正直、会場の心配を今からしてしまう程である。

「よっと、後はエネルギーバイパスを繋げて……そう言えば、スバルやエリオ、キャロはどうしたの？」
「スバルは、ノーヴェ達家族とＤＳＡＡ（ディメンション・スポー

ツ・アクティビティ・アソシエイション）公式魔法戦競技会の観戦に。エリオとキャロはミッドに遊びに来たルーテシアと祭りの観光だそうです」

カチャカチャと動かす手を止めずに聞いてくるシャーリーに、ティアナは丁寧に答える。

そうして、少しばかり彼女は空を見上げた。

……ここでこうして仕事をしているのは、別に嫌ではない。この仕事を選んだのは自分自身なのだから。でも、だけど――。

「……やっぱり、ちょっと遊びたかったかな……？」

あいつと一緒に――。

そう思ってしまう、十代女子なティアナであった。

もうそろそろ午前9時、祭りが始まる――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ぽん、ぽん、ぽん。

空に花火が打ち上げられ、航空魔導師達が空中ショーよろしく飛んで行く。同時にスピーカーが一つの宣言をここに告げた。

《あ、てすてす、マイックチェック1、2、3♪　あ～～本日も晴天なり♪　……こほん。では、これよりミッドチルダ建国記念祭を開幕します♪》

わっと、宣言と共に街中が比喩では無く沸いた。
風船が多数同時に飛ばされ、花火が先より派手に打ち上がる。
「おっ、盛り上がって来たなー」
「お祭りだしね」

わいわいと喧騒の中で、笑いを浮かべるのはカナン、裕希奈だ。
二人は物珍し気に周りを見渡す。
街中は多くの露店が立ち並び、パレードが早くも行進を開始していた。
いわば、街中がテーマパーク状態なのである。よほどの事が無い限り、誰でもテンションが上がろうと言うものだろう。
さて、どこから回ろうかと一緒に来たシオンへと振り向き――。

「……あれ？　シオンは？」

そこに居たはずの、シオンの姿が無い事に二人は気付いた。
陰も形も無くなっている。まさか、早々と迷子になってしまったとでも言うのか――シオンなら、有り得そうで怖い所である。

「どこ行ったんだ、あいつ……？」
「さぁ？　まぁ、でもあいつも子供じゃないんだし、別に大丈夫じゃない？　後で念話で合流すればいいんだし」
「うーん、それもそっか……」

そもそも、シオン自身黙って独りでどっかにふらふらと出歩く事が多いのである。
確かに、心配するだけ損かもしれない。
そう思いなおすと、カナンはいきなり裕希奈の手をとった。

「んじゃ二人で見て回るかー。どこから回る？」
「ちょっ……！？　あんた、いきなり何、手繋いでんのよ！？」
呑気に話すカナンに当然、慌てたのは裕希奈である。
いきなり手を繋がれれば焦りもしようと言うものだ。
対し、カナンは裕希奈の態度に不思議そうな顔を浮かべた。
「へ？　何って……。シオンみたくはぐれるのどうかと思って、手繋いだんだけど――あ、わり。嫌だったか？」
「べ、別に嫌じゃないけど……」
ごにょごにょごにょと、裕希奈にしては珍しく口ごもるように、小さな声で何ごとかを呟く。
当然、この喧騒の中で、カナンの耳にそれが届く筈がない。
カナンはちゃんと聞こうと裕希奈に顔を近づけ――。
「あ、あーもう！　近いのよあんた！　少し離れなさいっ！」
「あ、あだっ！？　手ェ繋いだまま殴んなよ！」
顔を真っ赤にした彼女に、手を塞がれたままブン殴られる羽目となったのであった。
……うん、リア充だから仕方ない。裕希奈もっとやれ。
「だ、誰がリア充――て、裕希奈ストップ！　これ以上殴られたら――――――！」
「うるさいうるさいうるさいうるさ――――――――――い！」
そして、なーんーでーと、少年の幸せ（異論は認めない）な、絶叫がクラナガンの街中に響き渡るのであったー。合掌。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ん？」

何やら愉快な悲鳴のような声が聞こえた気がして、リンゴ飴を口に含んでいたシオンが振り向く。

しかし、そちらに誰がいる訳でもなし。シオンは、はてなと首を傾げた。

【……どうかしたか、シオン？】

「んにゃ、なんでも」

肩の上でミニサイズのわた飴を舐めていた融合騎の青年（？）の問いに、シオンは肩を竦める。

気のせいだとも思ったし、何より微妙に幸せそうな声であったし。

と言うわけで、シオンは気にせず他の露店を回る事にした。

「お、射的あんじゃん。やろっかなー」

【……それはいいんだがシオン？　さっきから、盛大に金使いまくりだが、財布は大丈夫なのか？」

その呆れたような声に、シオンは心配性だなぁと笑い、財布の中身を見て――直後、凍りついた。

その顔色が、さぁっと青ざめる。

シオンの融合騎である彼は、その様子にやはりかとため息を吐いた。

【……やはりか】
「ど、どどどど……！　どうしよう！　ま、祭りが始まって早三十分で破産の危機に……！」

……そりゃあ、見る露店見る露店に、節操なく飛び込めばお金も足りなくはなるだろう。
神庭シオン。お祭り大好きな彼は、お祭りで使うお金も半端では無かった。
おろおろとするシオンを、もう知らんと彼はそっぽを向く。

ああ、悲しくもシオンの祭りはここで終わってしまうのか――。
しかし、そこは捨てる神あらば拾う神あり。あたふたとするシオンに掛かる声があった。

「おー、シオン君やんかー。どないしたん？　可愛らしくあたふたして？」
【ですぅ？】
「へ？　て、はやて先生にリイン？」

声に振り向くと、そこに居たのは、八神はやてと彼女の融合騎であるリインフォース？であった。

それに――。
「咲夜（さくや）に、新（あらた）さん――？」
「よっ」
「久しぶりだな、シオン」

シオンとほぼ同年代の少年と、彼等や、はやてより若干年上の青年。

東条咲夜と、八神新がそこに居た。

しかし珍しく、ヴォルケンズの皆の姿も無い、これは――？　と思うと、シオンは目を細めてニンマリと笑った。

「フフフ……はやて先生、まさかの男二人つれてのデートですか？　いやぁ、両手に花ならぬ両手に男！　隅におけませんなぁ……」

「「て、こらこらこらこら」」

「そうなんよー、咲夜君も、お兄ちゃんも離してくれへんねん。お姉さん身体保たへんわー」

「て、はやてさん！？」

「お前も何を言ってるか……」

【て言うか、リインも居ますぅ！　忘れないで下さいっ！】

「いや、わりわり。で、マジで三人だけって珍しいっすね？　どうかしたんですか？」

ぷんぷんと怒るリインを宥めつつ、シオンは一応聞いてみる事にした。

仕事時はともかく、プライベートは八神家は滅多にバラバラに行動しない筈なのだが。

そんなシオンの問いに、はやてはちょっとだけ微苦笑しながら答えてくれた。

「今日はほら、戦技披露会とＤＳＡＡの試合があるからなー。皆、そっち関係でおらへんのよー。私も、解説で呼ばれとるし。咲夜君も、お兄ちゃんもそれぞれ別のイベントに借り出される予定なんよ。今は、たまたま三人共時間が空いたから、祭りを見てるってわけや」
「あー、成る程ー」
「そう言うシオン君はどないしたん？　一人で？」
「いや、最初はカナン、裕希奈と一緒に来たんですけど――お邪魔虫になりそうでしたから」
「成る程なー」

うんうんと頷くはやてに、シオンも苦笑して――唐突に、今自分の財政を思い出して、顔色を青くした。
あわわとなる少年に、三人は不思議そうな顔となる。

「シオン君、百面相やなー。どないしたん？」
【……露店で金を使い過ぎて、現在絶賛破産のピンチだ】
「あ、馬鹿……！」

自分の恥を晒してくれる相棒に、シオンは抗議の声を上げるが、肝心の彼はどっちが馬鹿だと言わんばかりの目を向ける。
それだけで、全部合点がいったのか、はやてはかんらかんらと笑った。咲夜、新やリインも同じくである。

「計画性ないなー、シオン君」
【ダメダメですぅ】
「ま、あるっちゃあ、あるけどなー」
「ぐ、ぐぬ……！」

一同に笑われ、シオンがぶすぅと頬を膨らませて拗ねた。
そんな様子に、一同更に笑う。だが、それだけでは悪いと感じた

か、年長である新がやれやれといった感じで、シオンへと話す。
「なら、金稼げばいいじゃないか」
「……賭け事は御法度ですよぅ……」
「アホ。そうじゃねぇよ。このお祭りには、ちょっと特殊なルールがあるんだよ」
そう言いながら新は笑い、シオンをある場所へと連れて行ったのであった――。

「シルバーポイント？」
「そう。このお祭り専用の通貨みたいなもんだな。これがあれば、MD（ミッドチルダドル）が無くても、祭りを遊べるって寸法だ」
元々、お祭りをあまり金を持ってない子供達にも長く楽しんでもらおうと決まった制度らしい。
お祭りの各種イベントに参加すると、その成績に応じてシルバーポイントが手に入ると言う訳だ。
これが1ポイント10MD分ともなるのだから、なかなかに馬鹿には出来ない。
日本円にすると、千円である。これはかなり大きかった。
……もちろん、シルバーポイントゲットの為には相応の成績を残さなければならないのだが。

と、言う訳で――。

「『対決、ゴンザレス君！』だ」

「……はぁ」

新が意気揚々と指差すモノを見て、シオンはげんなりとなる。

そこには、こう何と言うべきか――ずんぐりとしたボディのロボットが居たのだ。

どうにも、これと戦って勝てばシルバーポイントをくれるらしいが――。

「ではルールを説明しますっ」

「にょわっ！？」

いきなりにょきっと現れた眼鏡女子、シャーリーにシオンは叫び声を上げる。

……ちなみに彼女、今現在も新型次元転移装置の起動中の筈である。どうやってここに現れたのかは、聞いてはいけない。

ありとあらゆる科学者は『こんな事もあろうかと』と言った場面には必ず出現するものなのである――多分。

「多分って何だ多分て――――！？」

「ルールは簡単。木刀を渡すので、それでゴンザレス君をぶっ叩いてライフをゼロにしちゃいましょう♪　すると、シルバーポイントを何と１５ポイントもあげちゃいます♪」

「て、何気にポイントでけぇし」

ＭＤに換算すると、１５０ＭＤだ。これは高い。

しかし何故に木刀なのか――。シャーリーはきらりんと眼鏡を光らせながらルール説明を続ける。

「ただしっ、当然ゴンザレス君も攻撃するので悪しからず♪　プレイヤーの皆さんにもＤＳＡＡ公式試合用タグでライフを管理しますので、これがゼロになったら負けですよー。他にも木刀が破壊されても負けとなるので、注意して下さい♪　もちろん木刀は魔力で強化しちゃダメですよー♪」

「……わりとルール細かいなぁ。よし、それじゃあ……」

「いっちょやりますか！」

「おう！」

「て、ええ！？」

やる気まんまんで木刀をひっ掴んだシオンであったが、何故か咲夜と新までもが木刀を持って前に出てきた。

これはどう言う事か――。驚くシオンに、二人は笑う。

「ルール上、人数制限はないようだしな。一人だけシルバーポイントゲットはなしだろー」

「１５ポイントも、参加人数で振り分けられる訳じゃなくて全員に配られるみたいだしな。参加しない手はないな」

「ああ、もう、いいですよっ。そんじゃあ、早速――」

「あ、待って下さい。試合やるには、ゴンザレス君の歌を一曲聞いてからって決まってます」

「「「て、何でだよ！？」」」

「ゴンザレス君の歌を聞いてもらいたいからです♪」

斉唱して放たれたツッコミにも、シャーリーは動じない。
ある意味、大した才能である。げんなりとすらした三人をよそに、ゴンザレス君が動き出し――。

そのゴツい手に見合った巨大なマイマイクを取り出した。

『『は？』』

唖然となる一同、しかしゴンザレス君は構わない。
何故なら、彼は歌を唄うのだから――！

そして、祭りの一角にてゴンザレス君の歌が始まった。

その歌は聞く者を高ぶらせ、喜ばせるリズム。見事なまでのＢ－ＰＯＰである。
一同ならずその場にいる全員が、その歌に聞き惚れていた。やがて、歌が終わり――。

『『お、おお――――！』』

見事なＢ－ＰＯＰにシオン達だけではなく、周りから拍手がゴンザレス君に送られる。
それ程までに見事な歌だったのだ。とても機械の固まりであるロボットに出せる歌とは思えない。
魂を震わせる素晴らしい歌に惜しみ無い拍手を送り続け――。

「ははじめ♪」

―撃！―

「「「どぉおおおお！？」」」

シャーリーのにこやかな宣言と共に、ゴンザレス君の土手っ腹が開き、そこからグローブに包まれたバネ式ロケットパンチが”音速超過”で飛んで来る！

辛うじて三人とも直撃は避けたが、ライフがそれぞれ５００ほど減っていた。

地面を削り、三人は着地。のそりと動くゴンザレスに、今度は新が木刀を構えて突っ込む！　瞬間移動にも等しき速度で彼はゴンザレス君に接近すると、”渾身の力”を込めて振り放ち――。

「新さん、ダメだっ！」

「な――！？」

突如、シオンから制止の声が飛ぶ。しかし、今更放たれた木刀が止まる筈も無く、ゴンザレス君へとこちらも音速超過で叩き込まれ――。

―壁―

その直前でゴンザレス君を光の膜が覆う。

プロテクション――対物理障壁（アンチ・マテリアル・シールド）の一種が展開されていたのだ。

木刀はそれに阻まれ、ダメージをゴンザレス君に与えられない。

いや、むしろ――。

―軋―

「っ――！？」

握る木刀が軋む音を立てた事に、新は息を飲んだ。
だが、ゴンザレス君はそこで止まらない。今度は右の拳を叩き込む！　――が、そこは近接戦のスペシャリストである騎士。
新は、拳を紙一重で躱すと後方に下がった。

「大丈夫ですか？　お義兄さん？」
「だれがお義兄さんか！？」

いい感じにボケてくれる咲夜に突っ込みをいれながら、新は木刀を見る。
そこには微細ながら、ひび割れが生じていた。

そう、単純な事である。
デバイスならともかく、強化もされていない木刀なんぞをSオーバーの騎士の力で放てば、どうなるか――。
答えは木刀の破壊。そして敗北である。今は何とかなったが。

「ち……！　厄介だな」
「はい。何気に考えてますね。確かに、これじゃあ全力で攻撃出来ない」

舌打ちする新に、咲夜も頷く。
シオンも苦々しくゴンザレス君を睨むばかりだ。
プロテクションさえ無ければ、乱打でライフを削っていく戦法も取れたのだが、あれがあってはそうも行かない。

事実、ゴンザレス君のライフは少しも無くなっていなかった。

しかし、遊戯用のロボットがこんなに強くていいのか？　子供達には危険でないのかと疑問が頭を過ぎると。まるで、それを読んでいたかのように、シャーリーがマイク片手に説明を始めていた。

《ちなみに、今のゴンザレス君は対Ｓオーバー設定となっています♪　他の方の場合はこんなに強くないので安心して下さい♪》

野郎……。

そう、三人が思ったのも無理からぬ事だろう。

ともあれ、どうにかゴンザレス君にダメージを与える術を探さねばならない。

流石に、このロボットにやられるのはプライドが許さなかった。

それに――。

「お兄ちゃ――ん！　咲夜く――ん！　シオンく――ん！　頑張りや――！」

【ファイトですぅ――！】

「……こいつはぁ、負けらんねぇな！」

「おう！」

「当たり前だ！」

はやてとリインの声援に、三人は気を奮い立たせる。

特に、はやコンと噂される（事実だが）咲夜と兄バカと噂される（しつこいようだが、事実だか）新は気合い＋３００くらいになってそーな感じである。

しかし、どうするか――。

全力攻撃もダメなら、乱打もダメ。果たして、ゴンザレス君にダメージを与える方法なぞあるものなのか。

だが、三人は目を見合わせるとにやりと笑った。

そう、一つだけ手段がある。

それぞれの木刀に負担を掛けず、尚且つプロテクションを打ち貫く手段が。

三人は頷き合うと、一気にゴンザレス君へと突貫する！

《おーと、これは……？　三人共、別方向から仕掛けるつもりかー！》

シャーリーの実況の通り、三人はそれぞれ左右真ん中に分かれて、ゴンザレス君へと突っ込んでいた。

咲夜が右、新が左、シオンが真ん中である。しかも、シオンは他の二人に比べて出遅れていた。

瞬発力には定評のあるシオンがである。これは何を意味するのか――答えは直後に来た。

「咲夜、右を！　俺は左だ！」

「はい、お義兄さん！」

「だからお義兄さん言うなっ！」

恒例の漫才を繰り広げながら、咲夜が右から新が左からゴンザレス君へと木刀を振り放つ！

それに合わせるように、シオンが真っ正面からゴンザレス君を強襲した。

しかし、ゴンザレス君には三本の腕があるも同然。土手っ腹が開き、例のロケットパンチが放たれんとする。

咲夜、新にはそれぞれ左右の拳で迎撃だ。

……だが、ここで咲夜と新は不思議な行動を行う。

放った木刀を振る途中で止めたのだ。
当然、ゴンザレス君に木刀は当たる筈も無く、迎撃の拳は空を切る――それが、二人の狙いであった。
止めた軌跡から、木刀をＳの字を描くようにして翻し、空を切って止まってしまった拳を外側からぶっ叩く！

―撃！―

快音が鳴り、プロテクションが発動したものの左右の腕は内側へと弾き飛ばされてしまった。
さて問題。その軌跡には何があるでしょう？

―轟！―

答えはシオンに放たれたロケットパンチであった。
それは、弾き飛ばされた左右の腕と激突して、それぞれ盛大に吹き飛ぶ！
ダメージも入ったのか、ゴンザレス君のライフが３０００から２０００に減っていた。
そして、これで終わらない！
シオンは地面に身体を擦りつけんばかりに身を低くして、ゴンザレス君の下に入る。
地擦り八相の構えから、木刀を一閃。しかし、それはあまりにも柔らかい一撃であった。
その証拠に、ゴンザレス君のプロテクションをかつんと叩くだけで一撃は止まる――シオンの一閃は、そこからであった。
プロテクション越しにゴンザレス君のバランスを木刀で操作して、一気に掬い上げる！

それは一見、軽く足を払ったようにしか見えなかったであろう。
だが、その一閃でゴンザレス君の巨体が宙を舞った。
あまりに非常識な光景に観客も唖然とする。
しかしシオン達にとっては、その一閃は当たり前の技術であった。
合気術の応用――そこに力は要らない。

つまり、シオンは木刀でゴンザレス君を投げたのである。そして――シオンはまだ止まらない。

横へと薙いだ木刀を翻し、打ち上げの斬撃が宙を舞って無防備なゴンザレス君の背中を襲う！　が――。
その一撃もまた、プロテクションにより阻まれてしまった。貫けられない……！
きしりと軋む木刀。だが、それでもシオンは動きを止めない。
シオンは前へと、ゴンザレス君と上下で交差するように踏み込む。
力点を操作、テコの原理を応用して木刀を今度は振り下ろす！

今度は、ゴンザレス君を真下に投げたのである。
その軌道上には石畳が待っている――！

―轟！―

まるで、爆発したかのような音が辺りに鳴り響いた。
ゴンザレス君が石畳に叩き付けられた事による音である。どうやらダメージも入ったのか、５００ポイントほど点数が減っている。
残り、１５００。そして、次の一撃こそが、”三人の本命の一撃！”

「フィン、ブルバイト――」
「覇王、断空剣――」
「神覇・壱ノ太刀、絶影――」

朗々と告げられるは、それぞれが有する高速斬撃魔法。

そう、故事にもあるではないか。
一本の矢は折るのも容易い。だが、三本の矢は折れない、と――。

それは、彼等の木刀もまた然り！

故事の通りに、三つの高速斬撃が重なる軌跡を描き、放たれる！
その名は――。

「「「裂閃！　三絶！」」」

―斬！―

十字の真ん中に一本のラインが引かれる形で全く同時に放たれた高速斬撃はゴンザレス君のど真ん中を違わず打ち据え、摺り抜ける！

がしゃんっと、あっけ無くプロテクションが破壊され、技が終わる――三人とゴンザレス君は時間が制止したかのようにピタリと止まり。

次の瞬間、ゴンザレス君が膝から崩れ落ちた。

ライフも０。つまり――。

「「「俺達の、勝ちだ」」」

その勝利宣言を聞いて、観客がわっと沸いたのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「負けちゃいましたかー」

シャーリーがちょっとだけ残念そうな顔をする。
まぁ、自分が作ったものである。それが何であれ、負けたならば残念ではあるだろう。
だが、シオン達としては、そんな事はどうでも良かった。

「さぁ、勝ちましたよ！　シルバーポイントを寄越せェェェ

「さて、では私はこれで♪　お祭り楽しんで行って下さいね♪　ではー♪」

言うなり、シャーリーの姿がいきなり消えた。

魔導士でもない彼女がである。果たして、どんな真似をしたのやら――ツッコミを入れては恐らく負けである。

「……さて、当面の資金も手に入ったし、どうするかな」

【戦技披露会まで、まだ時間ありまくりですぅ】

「うーん」

頭を悩ませるはやて達に、シオンは苦笑した。

ぶっちゃけ、彼としては他にさっさと遊びに行きたい所なのだが、ここでどこかに行くのも後味悪い気がしたのである。

なので、一同が頭を悩ませてる間、シオンは暇であった。

とりあえず、倒れたゴンザレス君に背中を預けて待つ事にする――と。

いきなりゴンザレス君が、がくんと震えた。

何の前触れも無くである。シオンは？と疑問符を浮かべて、ゴンザレス君を見る。

すると、土手っ腹のロケットパンチ射出口が何故か開いていた。

一人でに開くものなのか――訝し気な顔となり、シオンはゴンザレス君の上に登って、確認してみる事にした。

このまま開きっぱなしでロケットパンチが唐突に出ては危険でもある。

そして、ロケットパンチ射出口を覗いたシオンが見たものは――

――穴、であった。

なんで穴？　と言われるかもしれないが、シオンの印象としてはそう見えたのである。

穴の奥には、斑な暗黒が広がっていた。これは一体何なのか――？

シオンは、それを自身で確かめる羽目となった。

唐突に、ゴンザレス君が立ち上がり始めたのである。

そして、その突き出した腹を覗き込んでいたシオンは、ものの見事にバランスを崩した。

倒れる彼の行く先には例の穴が待ち構えている――！

「ちょっ、ま――！？」

【っ！　馬鹿者！】

悲鳴を上げるが、それすらも穴に飲み込まれた。

シオンは穴へと飛び込む形となり、そして……。

「よっし、んじゃ次はここに行くか」

「決まりですね、おーいシオン……？」

ようやく行く先が決まり、咲夜はシオンに呼び掛ける。

だが、返事が無い。一同はシオンが居た場所に振り返る――が、

そこにはただゴンザレス君だけがあった。

「あれ？　あいつどこ行ったんだ……？」

「まぁーシオン君やしなー、また一人でフラフラとどっか行ったんやろ」

【相変わらず、落ち着きないです】

「まあ、あの年頃で祭りの最中じっとしてろってのも無理だろ。んじゃ、俺達も行こうぜ」

新の言葉に皆頷き、賑やかにそこから離れる。

何があったのか、誰も気付かずに――。

……そして、そこにはただゴンザレス君だけが残されたのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

斑な暗黒を、シオンは流される。

いや、斑では無かった。

それは波、である。

暗黒の波とでも言うべきか、そこをシオンはたゆたっていたのだ。

これ、なんだ……！？

叫びたいが、声が出ない。

いや、そもそも身じろぎも出来そうに無かった。

ここは、ゴンザレス君の腹の中である筈だ。しかし、何故こんなに広いのか――。

……ひょっとして、次元の狭間にでもすっ飛ばされたかと、シオンはぞくりとする。
だが、その珍妙な旅もすぐに終わりを迎えた。
更なる穴が、向こう側にあったのである。シオンは、抵抗すら出来ずにそこに流されて行く。
これ、どこに出るんだ……！？
疑問を胸中叫ぶが、当然答える声も無く。シオンは穴に辿り着き、その妙な暗黒から弾き出されたのであった――。

「どわっ！？」
【くっ！】

どさりと、空から地面に落ちる。
そこは、一面の花畑であった。シオンはそのど真ん中に落っこちたのである。
背中を強打した痛みに、彼は悶絶。……まぁ、花畑がクッションになっていなければ悶絶どころでは済まなかったであろうが。
ともあれ、涙目となりながらシオンは辺りを見渡すと――。
「あの、大丈夫ですか？」
声を掛けられた。鈴が鳴るような、爽やかな声である。

しかし、どこかで聞き覚えあるなーと、シオンは訝しみながら顔を上げる――と、声を掛けてきた人物を見て、思わず名を呼んだ。

彼女は――。

「ヴィヴィ、オ……？」

「え？」

「いや、違う……。あんた、誰だ？」

赤と翠の光彩異色に、鮮やかな金の髪。何より顔立が、高町ヴィヴィオの大人バージョンを思わせる。

……しかし、似てはいるが、うり二つと言う程でもない。

だが、全く似ていないと言うには面影が重なり過ぎていた。

混乱するシオンに、彼女は小首を傾げ。しかし、くすりと微笑む。

そして、胸に手を当て自らの名を彼へと告げた。

「私は、オリヴィエ。オリヴィエ・ゼーゲブレヒトと申します。貴方のお名前は？」

古代ベルカ王朝の一つ、聖王家の性（かばね）。

そして、”最後のゆりかごの聖王女”。

その名を、彼女はシオンへと告げたのであった――。

（プロローグ2に続く）

始まりを告げる引き金　―プロローグ？―（後書き）

はい♪　プロローグ1、どうでしたでしょうか？
できれば全キャラ出したかったのですが――うん、無理がある（笑）
てな訳で、次回も続くよプロローグ（笑）
よろしくです♪　プロローグ2までは、テスタメントが走ります♪
……ぶっちゃけ、書き足りねぇ……！（笑）
ではでは～～♪

引き金の始まり　―プロローグ？―（前書き）

と、言う訳でプロローグ２でございます♪
うん、超展開目白押し（笑）
さて、ここからいよいよリレーが始まります。
リレー参加者のみなさん。そして、読者様。
　ついてこれるか？
では、プロローグ２をどうぞ～～♪

引き金の始まり　―プロローグ？―

「ん？」
「……？　どうしたのよ？」

ミッドチルダ建国記念祭を見ている最中。いきなり風間カナンは何もない方向へと振り向いた。
連れ立って歩いていた、祐希奈が怪訝そうな顔をする。
カナンはうーんと、首を傾げて頭を振った。

「……なんか呼ばれた気がしたんだけど、気のせいだったみたいだ」
「……ふーん。それ、女の子の声？」
「いや、シオンっぽかったんだけどな。……て、何で、そんな事気にするんだよ？」
「別にー」

祐希奈は、ぷいっとそっぽを向くなり前へと一人で進んでしまう。
何をふて腐れていると言うのか――カナンは首を捻りながら、祐希奈の後を追った。

「なぁ、どうしたんだよ？　何怒ってんだ？」

「……怒ってないわよ」

「いや、怒ってるって」

「怒ってないって言ってるでしょ」

「絶対、怒ってるって。ほら、こうぴくぴくと寄せられた眉とか――」

「怒ってないって言ってんでしょうがっ！　ああもう！　このバカは！　一遍殴らなきゃ分かんないようね！　そんなに怒られたいなら全力で怒ってやるわよ！」

―撃！―

「へぶしっ！　でも、いつも通りで安心した――――――！」

……いたらん事さえしなければ殴られずに済んだものを、地雷を踏む事に関してシオンと同じく定評のあるカナンは、祐希奈に盛大にブン殴られ、すっ飛んでいく。

そして、祭りの記念にと作られた大きな鐘まで彼は飛んで行き――その先に、人影があった。

「げ！？」

【マスター！】

【主！？】

カナンは慌て急停止、空間突破で躱そうとするものの間に合わない。結果――。

「あだっ！」

「きゃう！？」

人影と、ものの見事にぶつかってしまった。

二人はぶつかった衝撃で、地面に転がる。それを見て、カナンを

ブン殴った祐希奈が青ざめた。

「ちょっ、大丈夫――？」

「痛たた……。すみませ――て、あれ？」

「こっちこそ、よそ見しててごめんなさ――」

カナンはぶつかった人に起き上がりながら、謝ろうとして――その人物を見るなり、硬直した。

何故なら、それはよく知る人物であったから。

ぶつかった人物――少女も、カナンを見るなり固まる。そう、彼女は――。

「「ヴィヴィオ！？」」

「カナン君！　それに、裕希ちゃん！」

高町ヴィヴィオ。

かのエース・オブ・エース、高町なのはの娘にして、カナン、祐希奈の友人。

ぶつかった人物は、彼女だったのである。さらに、彼女は一人では無かった。

「ヴィヴィオー、大丈夫？」

「怪我とか無い！？」

ぞろぞろと、ヴィヴィオの後ろから三人の少女達が現れる。

二人はヴィヴィオと同年代の少女、そして残る一人は――。

「……ヴィヴィオさん、ご無事ですか？」

「あ、はい。アインハルトさん。ありがとうございます」

転がったヴィヴィオに手を貸すのは、彼女より若干年上の少女であった。
アインハルト・ストラトス。覇王の血を引く少女。それが彼女であった。
アインハルトは、ヴィヴィオを起き上がらせると、カナンに視線を送った。

「……あなたは？　大丈夫ですか？」
「俺も平気です。頑丈だけが取り柄だし……」
「そうですか」

カナンの返事に、あくまでも無表情なアインハルト。
カナンは困ったなぁと頭を掻いて、そんな彼に二人の少女が話しかけて来た。

「えーと、カナン君だよね？　それに祐希奈ちゃん。話しはヴィヴィオから聞いてるよ♪　はじめまして♪」

「……確かヴィヴィオがミッドの学校に居た時の同級生の――？」
「うん。私はリオ・ウェズリー。リオでいいよー。で、こっちが」
「コロナ・ティミルっていいます。私もコロナで大丈夫だよ」

元気の良い活発な少女と、やや大人しめの少女。
コロナ、リオにカナンも笑顔を浮かべる。

「はじめまして、俺は風間カナン。よろしくな。で、あの俺をブン殴ったのが――」
「一之瀬祐希奈よ。直接会うのは、はじめてよね。よろしく、リオ、

コロナ」

カナンに続き、追いついて来た祐希奈も挨拶する。
そして、祐希奈はそのままヴィヴィオに視線を転じた。

「ごめん、ヴィヴィオ。大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ裕希ちゃん。でも、その……あんまり人が多い所でカナン君殴っちゃダメだよ？」

「そうね、気をつける。今度は人が少ない所で殴るとするわ」

「いやいやいやいや！　そもそも殴んなよ！？」

「ヴィヴィオも祭りを見に来たの？　そう言えば、そっちの女の子は？」

「て、無視か！？」

「うん。紹介するね。この人はアインハルト・ストラトスさん」

「アインハルトで結構です。祐希奈さん、よろしく」

「うん、よろしくね！」

カナンを置いてきぼりにして、話しを進める一同。
女が三人寄らば姦しいとはこの事か。それが五人もいるのだから当然と言える。
置いてきぼりにされたカナンは悲痛に胸中叫んだ。

シオン……！　頼むから、援護に！　俺一人じゃ無理！

しかし、肝心のシオンにその叫び（念話）は届かない。

返事が無い事にカナンは少し訝しみ――。

「ほらカナン。あんたもいつまで拗ねてんのよ、さっさとアインハルトに挨拶する！」

「て、呼び捨て早っ！？　お前ねー。年上なんだから、初対面くらいは『さん』を付けろよ！」

「別にいいじゃない」

「よくねえだろ、ったく。……連れがすみません」

「いえ、結構です。カナン君、で私も？」

「え？　ああ、なんなら呼び捨てでも構わないですけど……」

「いえ、カナン君で」

カナンの申し出に、しかしアインハルトは首を横に振る。……案外、照れ屋さんなのかもしれない。

苦笑してそう思っていると、今度はヴィヴィオが慌て出した。

首もとに手をやり、今度はポケット等を探りだす。一体何があったと言うのか。

「あ、あれ？　無い、無いよ！？」

「……？　どうしたのよ、ヴィヴィオ」

そんな彼女の様子に、祐希奈が見ていられないとばかりに問うてみた。
それにヴィヴィオはしばし、迷い――だが、うんと一人頷くと答えてくれた。

「えっと、その……。今日、青い宝石のペンダントしてて、それ落としたみたいで……」
「へぇ、ペンダントねぇ……。なーに、色気づいちゃって？　誰かに見せるつもりだったの？」
「そ、そんなのじゃないよ！　カリムさんが、渡してくれて――」

半眼で、にまーと笑う祐希奈に、ヴィヴィオはぱたぱたと手を振りながら否定する。
それをはいはいと受け流しながら、祐希奈は地面を探し出した。

「さっきぶつかったので、どっかに落としたんでしょ？　この辺にあるだろうから、探すわよ！」
「あ、ありがとう裕希ちゃん」
「いいわよ、半分私のせいみたいなもんだし――」
「は？　半分？」

―撃！―

「半分よ？」
「……はい」

頭にたんこぶをこさえられ、カナンは神妙に頷く事にする。
そうしないと、今度はどこにすっ飛ばされるか分かったものではないからだ。
ともあれ、近場の地面を探し出そうとして――ウサギ型のマスコ

ットが、ぽんぽんとカナンの肩を叩いて来た。これは、確か――。
「ヴィヴィオの補助型デバイスのセイクリッド・ハート――クリス、だっけ？　どうかしたのか？」
【あちらの方に、マスターの探しものを見つけたと言ってるようですよ？】

――と、こちらはヴィヴィオの祈願型デバイス、フェアリーが相方のフォローをして話してくれる。
果たして、その指差す方向にきらりと光るものがあった。
カナンはそちらに小走りに走り寄り、それを拾う。確かに、青い宝石をあしらったペンダントである。
それを握りしめると、カナンは一同の元へと戻った。

「ほら、これだろ？」
「うん。ありがとう、カナン君」

ペンダントを手渡され、笑顔を浮かべるヴィヴィオにカナンは照れ臭さそうに目を泳がせる。
目的のものが見つかった事で、一同も集まって来た。
ヴィヴィオの手で光るペンダントに、皆注目する。

「へぇ、綺麗ねーこれ。カリムさんが渡してくれたんだっけ？」
「うん。確か、聖王家ゆかりのものとかで――」
「ええ！？　ならこれ、聖王の聖遺物なんじゃないの！？」

驚きの叫び声を上げるのは、リオであった。コロナも目を丸くしている。
その中で一人、アインハルトだけが冷静に頷いていた。

「……ええ、覚えがあります。確かに、これは聖王女、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの遺品です」
「えっと、それって――」
「はい」

多くは語らず、ただ頷くアインハルト。
それはつまり、彼女の中の記憶――覇王、クラウス・G・S・イングヴァルトの記憶であると言う事であった。
事情を知らないカナンと祐希奈は不思議そうな顔をするも、他の三人はそうではない。
少しばかり寂しそうな顔をして――でも、ヴィヴィオはこくりと頷いた。

「……そうですか」
「はい。……でも、何故そんな聖遺物を？」

どちらかと言えば、そちらの方が気になっていたのであろう。アインハルトが、小首を傾げる。
それにヴィヴィオは少しだけ困った顔をした。

「実は、私もよく分かってなくて……。カリムさんは、『これはヴィヴィオが持つべきものだから』って言ってくれたんですけど」
「まぁ、カリムさんがそう言ってるならいいんじゃねぇか？　折角くれるって言ってるんだし」

ヴィヴィオの言葉に、カナンが横で頷く。アインハルトは、それでも思案顔ではあった――が、ここで考えても仕方ない事だと思ったらしい。
頭を一つだけ振って、話しを終わらせた。

「さーて、ここで立ち話しもなんだし。祭り一緒に見て回りましょ？」
「賛成ー♪」
早速とばかりに、祐希奈が同行を申し込み。リオが元気良く賛同する。だが、ヴィヴィオはそんな祐希奈に耳打ちした。
（……いいの？　裕希ちゃん？）
（なにが？）
（だってカナン君と二人っきりで――）
（ああ、いいのいいの。そんな事は気にしないで。折角のお祭りなんだし、一緒に行きましょうよ）
「……何の話ししてんだ？　お前ら？」
「「わぁ！？」」
こそこそと内緒話しをする二人に、カナンがいきなり近付き声を掛ける。
当然、二人は驚きの声を上げ、全く一緒に拳を振り上げた。
「「カナン／カナン君のエッチぃっ！」」
「えー！？　ちょっ、何でそこまで言われぐわしっ！」
―撃！―
綺麗に顔面にヒットした拳で、カナンはその場に崩れ落ちた。
まさかのヴィヴィオからも打撃を受けた事により、ダメージは二倍。哀れ、風間カナンの旅はここで――。
「終わりじゃねぇーから！？　変なナレーションいらねーて言ってんだろ！」

「あ、あの大丈夫？」
「怪我はありませんか？」

ツッコミを虚空に向けて放つカナンに、流石に心配になったか――まぁ、彼らのやり取りを初めて見る人間なら仕方ないかもしれない。

ともあれ、コロナとアインハルトが心配そうに声を掛けてくれた。

あぁ、優しいなぁと、ほろりと目頭が熱くなるカナン。

そんな彼に、コロナとアインハルトは手を貸そうと伸ばし、カナンも手を差し出そうとして――。

――ここで不幸な事故が起こった。

そう、事故。全くの事故である。……言い訳に聞こえるかもしれないが、絶対にわざとではありませんと後にカナンは供述する。

カナンが手を差し出した瞬間。後ろから、突然ボールがかなりの速度で飛んで来たのだ。

これをカナンは持ち前の空間把握能力で察知。コロナとアインハルトを庇おうと、立ち上がり。ボールの方を見ながら二人を退かそうと手を伸ばして――もにゅっとした感触を両手に覚えた。

「「……え？」」
「あれ？」

何だろう、この感触？

それは、とても気持ちの良い感触であった。こう、弾力のあるマシュマロと言うか――。

思わずカナンはボールの事も忘れて振り向く。そこで見たものは。

右手と左手で、それぞれコロナとアインハルトの胸をわし掴みにした自分の両手であった。

え？　なんで？　と真っ白になった頭で思うが、分かる筈は無い。

コロナとアインハルトも唖然とした顔である。

しばし場が綺麗に硬直。

やがて、飛んで来たボールがカナンの頭に直撃し、皆が一斉に我に返った。

一番に動いたのは、やはりこの人。

「あ、ごめ――」

「何やってんのよアンタは――――――！」

「ぶごっ！」

―撃！―

何と、コロナもアインハルトも動けぬ速度で祐希奈がカナンを蹴り飛ばす！

地面に転がる彼に、容赦無く祐希奈は追撃をかけた。

「このこのこのこのっ！　母性の象徴をわし掴みにするなんてこのこのこのこのこのこのこのこの！」

「げふ、ぐぇ！　し、死ぬ！　だ、誰かお助け――！」

とは言うものの、コロナもアインハルトも顔を真っ赤にしてへたり込むだけである。

リオはやり取りが楽しいのか、あっはっはーと笑うだけ。

なら頼みの綱のヴィヴィオさんと言えば――。

「カナン君のえっち」

「ちょ――！　ち、違うって！　これは偶然で――」

「偶然がそう何回も続いてたまるか、このスケベ――――！」

「だ、だから死ぬって――――――――――！」

拝啓、シオン様。

ミッドチルダ建国記念祭を、あなたはどうお過ごしでしょうか？

俺はいますぐ死にそうです。

出来うるなら、今すぐ助けに来て下さい。いや、マジで。お願いします――

そんな妙な文章が頭を過ぎりつつ、カナンは祐希奈にマウントポジションで殴られ続けるのであった――合掌。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……死ぬかと思った……」

「大変だったねー♪」

「嬉しそうに言ってんじゃねーよ！」

ズタボロとなったカナンがぼそりと呟く。それに、リオが笑いながら肩をぽんぽんと叩くも厭味にしか聞こえない。

あの後、結局メイデンとレナス。そして祐希奈のデバイスであるアシェルによって助けられた訳だが、祐希奈の怒りはまだ収まりそうな気配は無かった。

どこで購入したのか、露店で買った焼きそばをずびーとかっ喰ら

っている。
ヴィヴィオはと言えば、たまにカナンをじとーと睨むのみ。こちらの方が辛いかもしれない。
コロナとアインハルトに至っては、まだ顔を赤くしたままであった。
まぁ、いきなり胸を揉まれれば顔も赤くはしようが――あ、キャロは例外です。
「……いや、そんな事はどーでもいいから。はぁ、どうしよ……」
「まぁまぁ、すぐに許してくれるって。それより、これからどこ行く予定だったの？」
ひょこっとリオが上目遣いに、カナンに聞いて来る。
それに、ちょっとだけドキマギしながらカナンは頷いた。
「一応、今日は管理局関連のイベントを見に行く予定だったんだけど」
「あ、それって戦技披露会？」
「ああ、それとＤＳＡＡの公式魔法戦競技会だな」
「あ、それ私達も出るよ！」
「え？　マジで？　でも確かこれ、インターミドルと違って大人も出る奴だろ？」
インターミドル――未成年を対象とした、公式魔法戦競技会である。
毎年開かれるこれは、１９歳以下と言うルールがある訳だが、今回開かれるこれには年齢制限が無い筈であった。
驚くカナンに、リオはえっへんと腰に手を当てて胸を張る。

「あくまで年齢制限無しなだけだから、実力あると認められたら出場してもいいんだよー」
「へぇー。んじゃ、俺が出ても大丈夫なのかな？」
「んー、どうだろうね。調べてみてもいいんじゃない？」

ふーんと、リオにカナンは頷きながら、ちょっとだけ考える。
知り合いに、剣を使う奴らも結構いるし誘って出場してみるのも悪くは無い。
だが、肝心のＤＳＡＡは正午からであった。時間がかなり余っている。
まぁ、お祭りなのだしそこらを見て回れば時間も過ぎるかな？
と思っていると、前を歩くヴィヴィオがちらりと別方向に視線を向けていた。
怪訝に思い、視線をそちらに巡らせると、そこには看板があった。

『新型次元転移装置はこちら　Ｂｙ、シャリオ・フィニーノ』

……よりにもよって、シャーリーさんの発明かー。

確かに、管理局関連のイベントで新型次元転移装置のお披露目をやるとは聞いていた。
いたのだが、あまりにも地味なイベントだったため見逃していたのである。
まさか、それがヴィヴィオの目に止まるとは思わなかったが。

「……これ、見たいのか？」
「あ、カナン君。……うん。ちょっとだけ、興味があるかな？」
「へぇ、こんなのヴィヴィオ好きだったっけ？」
「えっと、その……なのはママがこう言うの好きで、それで――」

なるほどと、カナンは合点が行く。
確かに、ヴィヴィオのママである高町なのはは、こういった機械機器関連を見るのが好きだった。
今日は管理局の戦技披露会の方に出ている筈だから、見には来れないだろう。
ちょっと顔を赤くするヴィヴィオにカナンは頷き、彼女にこう告げた。

「よっし、んじゃ見に行くか」
「え？」

思わぬ言葉に、ヴィヴィオの目が丸くなる。
その間にも、カナンは祐希奈やアインハルト達に声を掛けて、こちらに集合させていた。

「……なによ？」
「いやな？　これ見に行かないかなーて」
「んー？　新型次元転移装置～～？　……あんたこう言うの好きだっけ？」
「最近好きになったんだよ。いやー最新鋭の設備だぜ？　興味あるじゃん」

カナンの台詞に、祐希奈はふーんと半眼で見る。
そしてヴィヴィオへ。しばらくカナンとヴィヴィオを交互に眺めて、彼女は首を縦に振った。

「ま、別にいいわよ。アインハルト達はどう？」
「はい、私も構いません」
「私も大丈夫だよ」

「私も私もー！」

なら決まりね、と祐希奈は決を取って、さっさと先を歩いて行ってしまう。

アインハルト達も、彼女に付いて行った。

それを見てカナンは苦笑、気付かれたかなーと思いながら前に進もうとして。

その前に、ヴィヴィオから袖を掴まれて止まった。振り返る。

「……その、カナン君……」

「ん？　どした？　早く行こうぜ」

カナンは何も言わず、ただ先に行く事を勧める。

それにヴィヴィオは申し訳ないような、嬉しそうな感情がない混ぜとなった笑顔を浮かべて。

「――ありがとう」

ただそれだけを言って、走って行ってしまった。

カナンはしばらく硬直。

参ったなと、頭を掻き苦笑すると歩き出す。

……顔、赤くなってないだろうな、とちょっと頬をぺちぺち叩いたのは内緒である。

そして――。

「カナンー！　あんたの頼み聞いて上げたんだからアイス奢りねー！　早く来なさーい！」

【アイスっ！？】

「え、ちょっ、なんでメイデンが目を光らせて！？　ま、待った！
そんなに俺金持ってな――！」

その後、カナンの財布の中身がかなり寂しくなったのも、まぁ仕方ない事なのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「あら？　ヴィヴィオ達じゃない。どうしたの？　こんな所で」

新型次元転移装置が置いてあるのは、祭りの一角にある広場であった。
そこでヴィヴィオ達を出迎えたのは、警護に来ていたティアナ・ランスターと、新型次元転移装置の開発者であるシャーリーである。
二人は、ヴィヴィオ達を見るなり？と疑問符を浮かべていた。
まぁ、年頃の少年少女達が見に来るものではないかも知れない。

ともあれ、ヴィヴィオはシャーリーの元に駆け寄ると、早速次元転移装置を眺め始めていた。
それに苦笑しつつ、アインハルト達に挨拶されていたティアナに聞いてみる。

「で、ティアナさん。何でこんな所に――て、仕事ですよねー」
「うん、まぁね。一応、これも管理局の最新鋭の設備だし……地味だけど」
「ええ、地味ですけど」

ティアナにうんうんと頷く一同。いくら最新鋭と言えど次元転移装置である。

ただ送るだけ、来るだけ、では地味と言われても仕方がない。
だが、そんな一同にシャーリーはきらんと眼鏡を光らせた。
「ふふふ……。そう言っていられるのも今のうちだよカナン君」
「……と言うと？」
「何と、この次元転移装置は今まで不可能とされた、転移における時間をゼロにする事に成功したんだよ！」
おー、と一同拍手。
確かに、次元転移における時間をゼロにするのは不可能と言われていた筈である。
それを成功させたのは、何気に凄いかも知れない。
だが――。
「でも、シャーリーさん。何故か次元転移ポートが二つあるんですけど？」
カナンに言われ、一同次元転移装置を見遣る。
確かに、そこには転移ポートが二つあった。これを行き来するのであろう。
しかし、何故に二つもあるのか――？　シャーリーはふっ……と遠くに視線を送り、ただこうとだけ告げた。
「……場所が借りられなかったの……」
『『……』』
せち辛い世の中である。

その一端を見て、一同沈黙。
だがやがて、沈黙を破るかのようにシャーリーは顔を上げる！
その目はきらりん♪　とばかりに光り輝いていた。……いや若干――かなり、とても危険な光りのような気もしないでもないが。
ともあれ、シャーリーは持ち直すと近場に居たカナンの肩をポンと叩いた。

「と言う訳でカナン君ＧＯ♪」
「……はい？」

いきなり話しが飛んだ事に、カナンはきょとんと疑問符を浮かべる。
しかし、そんな事は構わないとばかりにシャーリーはカナンを真っ正面から見つめた。

「いい？　カナン君。これから君には、この新型次元転移装置初の転移者になっていただきます」
「え？　いや、ちょ……！　待った！　俺は承諾してませんよね！？　なんですでに確定！？」
「そう言われても、もう転送ポートに入れちゃったし」
「いつの間に！？」

気付いたら、既にカナンは転送ポートの中へと閉じ込められていた。
ガラスの筒がカナンと周囲を阻んでいる。いつの間にとか、なんでとか聞いては恐らくは負けだ。

「いやいやいやいや！　負けとか関係ねぇし！　なに！　時間でも止められたのか！　シャーリーさん、クロノスとでも契約してんの！？」

「カナン君！」
「は、はいっ！？」
いきなり叫ばれ、カナンは思わず気をつけをしながら、大声で答える。
そんな少年に、シャーリーは口元に人差し指を置いて、ちっちっと鳴らした。
「……世の中、不思議な事っていうのは色々あるものなんだよ♪」
「科学者が一番言っちゃいけない事言った――――――！？　いやそうじゃなくて……！」
「大丈夫♪　痛いのは最初だけだから♪」
「痛いのかよ！？　どんな転送装置だっ！？　いや――――――！　こんな転送装置で死にたくない――――――！　助けて――――――！」
「みんな……カナンに敬礼！」
「て、助けろよっ！？」
祐希奈を筆頭に、にこにこ顔のリオが敬礼してしまい、天然が入ってるヴィヴィオやアインハルトはオタオタしながらも二人に合わせて敬礼なんぞをしてしまう。
ただ一人、コロナの『と、止めたほうがいいんじゃ……？』と言うのは綺麗に無視された。
残る良心は後一人。常識人で知られるティアナだけであったが―

―。

「シャーリーさん。魔導炉フルドライブ。エネルギーバイパス解放。いつでもいけます」

「手伝ってるし！？」

まさかの助手をしている始末である。

ああ、味方はいないのかとカナンはほろほろ泣いて。

しかしっ！　そんなカナンにもまだ頼れる仲間がいた――いや、仲間と言うよりは家族と言っても過言ではなかろう。

そう、彼の融合騎であるメイデンとレナスである。

カナンはさっそく呼び掛けようとして――。

「レナス、メイデン。ここに、かに玉があるわよ～～？」

【【かにですって！？／たまごだと！？】】

「頼りになんねぇえええええええええ――――――――！」

あっさりと食い物に釣られるカナンの家族二人（しかも、かに玉片手に二人を呼ぶのは祐希奈）。

ああ、所詮はカナン。かに玉に負ける主であったのか……。

「うるせぇよ！　て、ツッコミ入れてる場合じゃねぇ！？　は、早く逃げないと……！」

と言うより、空間突破を使えばいいだけじゃないかと言うツッコミはアリなのだろうか？

「あ」

「でももう遅いです♪　スイッチオン♪」

「あ――――――――――――！？」

……ようやく気付いたカナンをよそに、シャーリーは転送ポートを起動。
カナンの体が下からゆっくりと消えて――。
「あ――――――――――――――――あ？」
――同時に、反対側の転送ポートに少年の姿が現れた。
ちょうど、消えたのと一緒に向こう側に出た形である。
カナンは叫んだ口のまま、疑問符を浮かべ。シャーリーはふふんっと胸を張った。
「どうですか？　成功です♪」
『『お～～！』』
これに、一同は惜しみなく拍手を送る。シャーリーは有頂天だ。
ただ一人、転送ポートから出て来たカナンのみどんよりとした目を彼女に向けてはいたが。
「……成功したから良かったものの、失敗したらどうするつもりだったんだ……？」
「あっはっはー♪　まぁ、成功は確実だったからカナン君を跳躍(と)ばしたんですけどね～～♪」
「……はい？」
今確実と、シャーリーは言わなかっただろうか？　と、カナンは疑問符を浮かべる。
確か、先程は自分が最初の転送者やら何やら言っていた筈である。これはどう言うことか――と、その後ろでティアナが微苦笑を浮かべて、疑問に答えてくれた。

「何の実験もしていない転送装置なんかに、人を使わないわよ。”お客さん”としては、初だったって事」

「……えー、じゃあ？」

「耐久試験もろもろ含めて、数千、数万回って転送実験はやってるわよ。未完成品をデモンストレーションなんかに使う訳ないでしょ」

【マスター、本当に気付いていなかったのか……？】

【主……私はてっきり演技されているのかと】

だ、騙された――――――――！

真実に気付き、がっくりと崩れ落ちるカナン。穴があれば、入りたい気分とはこのことか。いつの間にやら、他のお客さんも来ていたりするので恥ずかしさ倍増である。

そんな少年に、ヴィヴィオが近付き肩をぽんぽんと叩いてくれた。カナンは救いを求めるかのように、顔を上げ――。

「大丈夫だよカナン君。とっても面白かったよっ」

「うぬぁ――――！」

フォローになっていないフォローを受けて、カナンは更に恥ずかしい思いをするのであった。

アインハルトやコロナは、そんなカナンにあたふたするのみである。

さてシャーリーはと言えば、そんなカナンをほっぽいて大声を上げていた。

「さぁさぁ！　新型次元転移装置が今なら跳躍び放題ですよー♪
跳躍んでみたいって方は是非、挑戦あれ♪」
「あ、じゃあ私もやってみたいかも！」

と、シャーリーの呼び掛けに元気良く片手を上げるのはヴィヴィオである。
意外な挑戦者（？）に、シャーリーも流石に目を丸くする。

「んんー、まさかのヴィヴィオが来たましたかー。これは意外かも」
「え、えと……ダメ？」
「そんな事ないですよ」

ヴィヴィオの上目遣いの問いに、シャーリーは優しく微笑み転送ポートに彼女を誘導する。
ヴィヴィオは顔をぱぁっと綻ばせると、シャーリーに従って転送ポートの中に入っていった。

「これでオッケー♪　さぁ、ヴィヴィオ。跳躍ばしますよ～～？
準備はいいですか？」
「はい！」
「よし、元気のいい返事です♪　ではスイッチオン♪」

ヴィヴィオの返事を聞き、シャーリーは転送ポートを起動。
今度はヴィヴィオの身体が下から消え、あちら側の転送ポートに現れる――”筈、であった”。

本来ならば、そうであったであろう。曲がりなりにも、管理局が

デモンストレーションで使うものである。
安全性は当然確保されている筈であった。――だが。

突如、ひぃんと言う甲高い音が鳴り響く。それは転送ポートのヴィヴィオ――その胸元から鳴っていた。
より正確には彼女がつけて来た、”聖王女、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの聖遺物であるペンダント”が！
少女も驚きに目を見開いて、ペンダントを見つめている。
何があったと言うのか――その最中で、異変に気付いたシャーリーが転移装置のエネルギーデータを見るなり悲鳴を上げる！　そこに表示された数字とは――。

「嘘……！　なにこれ、魔導炉の駆動率が４００％超えてる！？　こんなの……！」
「シャーリーさんっ！　ダメです、安全装置が全部ダウンしてます！」
「そんな……！」

有り得ない事態なのだろう。シャーリーとティアナのやり取り。
そして、彼女達の顔色がそれを物語っている。何より、転送ポート自体が異常な光を放出していた。
シャーリーは慌てて、ヴィヴィオへと振り返る！

「ヴィヴィオっ！　今すぐ転送ポートから出て！」
「は、はいっ！」

一も二も無くヴィヴィオは頷き――しかし、そこで愕然とする事になった。
身体が動かなかったのである。まるで金縛りにあったかのように、ぴくりともしない。これでは出られない！

事情に気付いた一同も騒然とし、祐希奈が一歩前に踏み出す。その手には彼女のデバイスであるアシェルが起動されていた。

「ヴィヴィオっ！　こうなったらこの装置を破壊して――！」

「ダメ！　こんな異常なエネルギー状態で装置を破壊なんかしたら、何が起こるか分かりません！」

「じゃあ、どうしろってのよ！？」

「っ――！」

叫ぶ祐希奈に、それでも首を振るシャーリー。最悪、転送ポートのエネルギーが起爆して、辺り一帯をどことも知れない場所に跳躍ばしかねないのだ。

どうあっても転送ポートの破壊は、最悪な事にしかならない。

その中で、カナンが立ち上がり空間突破でヴィヴィオの元に転移しようとする！　次元転移が起動している所に、空間転移なぞを割り込ませれば何が起こるか分かったものではない――が、カナンは構わなかった。

一気に転送ポート内に転移！　ヴィヴィオを抱きしめ、外に出ようとして――。

その直前に、ヴィヴィオの姿が消えた。

抱きしめようとした腕は空を切り――ヴィヴィオがつけていたペンダントのみが指に引っ掛かる形で残った。

カナンは愕然としながらも向こう側へと振り返る――と、そこで更なる驚きの光景を目にする事になった。

穴――穴、だ。

転送ポートと転送ポートのちょうど真ん中に、穴が開いていたの

である。
カナンは知らない。それがつい先程、神庭シオンを飲み込んだ穴と同じものであると言う事を。

それに何より、カナンはそんな事を気にしてはいられなかった。
何故なら、その穴にヴィヴィオが飲み込まれていたのだから！
ヴィヴィオは動かぬ身体で、それでも腕を必死に伸ばす。

「裕希ちゃん！　みんな……！　カナンく――ん！」
「くぉっ！」

その悲鳴に、カナンは迷わず空間突破。
その穴が何であろうと構わなかった。ヴィヴィオの元まで跳躍する。……しかし、神様はどこまでも優しく無かった。
無情にも、カナンの手が届く直前に穴が閉じてしまったのである。

……そして、後には静寂のみが残ったのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ヴィヴィオ……！」

手を伸ばす。だが、すでにそこには何も無かった。
先程まであった穴も――ヴィヴィオも。
何も無くなってしまったのである。

呆然とする一同。ただならぬ空気を感じたのか、観客が一人、また一人とその場を立ち去っていく。

その中で、ただシャーリーの呟きだけが辺りに響いた。

「今のは……次元断層による虚数空間にも似ている……？　でも、次元震が発生した訳でもなさそう。もしそうなら私達が無事な理由が分からない。でも、あれは次元の狭間と言うよりは、むしろ虚数空間に直接繋がったようにも見える。だとするなら、あれがディラックの海――？　でも、ディラックの海は理論上否定されるべき存在の筈……」

「シャーリーさん……シャーリーさん！」

ぶつぶつと呟き続けるシャーリーであったが、いち早く我に返ったティアナの叫びに、ようやく彼女も戻って来た。

一同を見回し――カナンに視線を転じると、彼の元へと歩く。そうして、カナンへと呼び掛けた。

「ごめん、カナン君……。そのペンダント見せてくれる？」

「……これ……ですか……？」

「うん」

のろのろと、しかしカナンはシャーリーに従いペンダントを渡す。彼女はそれを受け取って、まじまじと見つめた。

一見すると、ただのペンダントである。確かにあしらわれた青い宝石は不思議な輝きを放ってはいるが、取り立てて重要なものとも思えなかった。

……それが、あの現象さえなければ。

そして、こんな小さなペンダントでもあれ程のエネルギー量を放出させられる理由もまた考えられる。

恐らくはロスト・ロギア――それも、ジュエル・シードやレリックと同じくエネルギー結晶型のロスト・ロギアである。

何故こんなものをヴィヴィオが――とか聞きたい事は山とあるが、シャーリーは一端それを全て思考から排除する。
今重要なのは、ヴィヴィオがどこに行ったか。そして、彼女を救出に向かわなければならない事であった。

「ちょっと……ヴィヴィオはどこに行っちゃったのよ……！」
「シャーリーさん……！」

祐希奈をはじめとして、アインハルト達もまたシャーリーに詰め寄る。その中で、彼女はただ自分に言い聞かせるように頷いた。
恐らく、思考を纏めて仮説を立てたのであろう。
ティアナも呼んで、皆に説明を始める。

「あくまで仮説だけど……多分、転送ポートの次元転移とヴィヴィオのペンダントが共鳴してあんなエネルギーを生み出したんだと思うの。結果として、あの穴が生み出されてしまったんだわ……」
「あの穴は一体……？」
「……あくまで想像の範囲でなら説明出来るけど、仮説の域を出ないからそれについては説明を省きます。それより、問題はヴィヴィオがどこに行ってしまったか……」
「そう！　それよ！　ヴィヴィオは結局どこ行っちゃったのよ！？」

シャーリーに頷き、まくし立てる祐希奈。でも、シャーリーはそれに首を横に振った。
流石にあれだけでは、彼女も分かりようがあるまい。
祐希奈は何かを言おうとして、でも口を噤(つぐ)んだ。ここでシャーリーを責めても何もならないと思ったのだろう。

シャーリーは少しだけ目を伏せ――しかし、次の瞬間にはきっと前を向いた。

今は後悔している場合でも、落ち込んでいる場合でもないのだから。

「一つだけ、手があります。ヴィヴィオの居場所を知る方法。そして、ヴィヴィオを助けに行く方法」

「え……？」

「これを使います」

そうして彼女が見せたのは、ヴィヴィオが残したペンダントであった。それを見て、一同は理解する。

シャーリーはこう言っているのだ。先程と同じ現象を起こして、ヴィヴィオを追いかけると。

だが、それには問題もあった。

果たして、どうやって戻って来れば良いのかだ。

――が、シャーリーは一同に凜とした表情で頷く。

「この次元転移装置は私が作ったものです。次、上手くデータを取れれば、あの穴を安定して発生出来るようにして見せます。……でも、その為には――」

誰かが、ヴィヴィオと同じくあの穴へと飛び込まなければならない。

シャーリーの説明を最後まで聞く事無く、みんながそれを理解した。

その上で、即座に行動する。

シャーリーからやんわりとペンダントを奪い取り、彼は頷いた。

「だったら、俺が行きます」
「カナン！」
「俺があの時、ヴィヴィオを助けられ無かったんです。だから、俺が――」
「ダメよ！」
今度、叫んだのはティアナであった。
彼女はきつい眼差しでカナンを睨むと、否定するように首を振る。
「民間人に、そんな危険な真似はさせられないわ……！　私が行く！」
「俺は嘱託魔導師です！」
「同じよ！　どちらにしろ、子供のあんたに――！」

―閃―

――それ以上、ティアナは言葉を続けられなかった。
何故なら、カナンが起動したエクスカリバーを彼女に突き付けたからである。
その目はこう語る。力付くでも俺が行く、と――。
その刃、なによりカナンのその目を見てティアナは悔しげに唇を噛む。
ここで、自分達が喧嘩をしている場合ではないのだ。
今は一刻も早くヴィヴィオを追わなければならないのだから。
こんな所で無為に時間を潰すわけにも行かない。
……何より、カナンの目が絶対に譲らないと告げていた。
ティアナの表情を見て、彼はぐっと呻くようにして刃を引く。
「俺が、行きます」

「……勝手にしなさい。……あいつと一緒でバカなんだから……」

その言葉――なにより、あいつとやらを思い出してカナンは微苦笑し、転送ポートに向かう。

しかし、その前にカナンへと立ち塞がる影があった。

言わずとしれた、祐希奈。そして、アインハルト、リオ、コロナである。

彼女達も無言。だが、その無言こそが何より言いたい事を物語っていた。

私達も連れて行け。

だが、カナンはそんな彼女達に首を振る。

「……転送ポートは一人用だよ」

その言葉に彼女達が明確に歯を軋ませたのが分かる。

それでもカナンは頷かなかった。ただ首を横に振り、転送ポートへと歩き出す。擦れ違う途中、幼なじみがたった一言だけを自分にくれた。

「私達も行くから……！　すぐに、行くから！　だから、あんたは――」

「……ああ、任せろ。ヴィヴィオは必ず俺が助ける」

たった一言だけの、だけど力強い言葉に、幼なじみは頷いてくれた。

カナンはそれに笑いながら、転送ポートに入る――と、彼と一緒に転送ポートに入る者達がいた。

言わずと知れた、彼の融合騎であるメイデン、レナスである。

【まさか、私達も置いていくなんて言わないだろうな？】

【もしそうなら怒りますよ？　主】

二人の言葉にカナンは苦笑。だが、それぞれ頷く。そしてシャーリーへと。

「……いい？　カナン君。これから君を跳躍ばすわ。さっきと違って安全性は無いに等しい。それでも――」

「いいからやって下さい！」

皆まで言わせずに叫んだ言葉に、シャーリーは頷く。

転送ポートを起動。同時に、さっきと同じくヴィヴィオのペンダントが輝き出した。

カナンの姿が消え、穴が開く――！

次の瞬間、カナンは穴の中にいた。

深淵、底の知れない穴へと。

ヴィヴィオ、待ってろ……！　今、行くから！

そうして、一人の少年の姿もまた現代から消えた。

だが、カナンは知らなかった。

自分やヴィヴィオよりも前に穴へと入ったもの達がいた事を。

それが旧知の仲であり、仲間であり――敵にもなっている事を。

そして、何より。この出来事から、自分がどのような旅に出る事になるのかを！

時の引き金は、今ここに引かれたのだから。

タイムパラレルストーリー。

魔法少女　リリカルなのは　～時の引き金～

はじまります。

引き金の始まり　―プロローグ？―（後書き）

はい♪　プロローグ２でした～～♪
これで分かる通り、本当にプロローグ（笑）

さて、いよいよ本編開始♪
その前に、現在の時間跳躍はどうなっているかを少し。

神庭シオン。

現代ミッドチルダ→古代ベルカ時代。

高町ヴィヴィオ。

現代ミッドチルダ→？

風間カナン。

現代ミッドチルダ→？

ちなみに、これは時間を跳躍した際には皆さん書くようにお願いします♪
だって、こんがらがるかも知れないじゃない（笑）

では、次のバトンを――毎回、活動報告にコメくれてる三人の内、回覧板さん！　君に決めた！
さぁ、受け取れテスタメントのバトン♪

ではでは～～♪

ＰＳ：次の走者関係なしに、プロフィールを近日載せます♪
よろしくお願いいたします♪

時の引き金、クロスオリキャラ説明♪（前書き）

ども～～♪　テスタメントです♪
今回予告していた時の引き金におけるクロスオリキャラの説明であります♪
……登場人物数が登場人物数のため、凄まじい文字数でありますが（笑）
読む際は覚悟を決めて下さいな（笑）
では、キャラ紹介。どうぞ～～♪

時の引き金、クロスオリキャラ説明♪

時の引き金、クロスリレー登場キャラ説明。（クロス設定あり）

ちなみに、原作組は基本的に全員（死亡組も？）出る予定です。

魔法少女　リリカルなのは　ＳｔＳ，ＥＸ。（作者、テスタメント）

神庭シオン。

性別：男。

年齢：１６歳。

魔導士ランク：Ｓ＋。

（魔導士とは魔導師と騎士を併せたランクの総称。ＳｔＳ，ＥＸオリジナルな設定なので注意されたし）

武器：聖剣アルトス、刀（無銘）

ＳｔＳ，ＥＸ主人公、１８歳（クロス設定では１６歳）。銀髪、紅眼の中性的と言うよりは、むしろ女性的な顔立ちの少年。なお、アルビノであるもようだが、太陽光を苦手とはしない不思議体質。

とっても不幸体質な不幸キャラ。でも、めげない。

ＳｔＳ，ＥＸ本編では、恋慕を抱いていた義姉、ルシア・ラージネスを異母兄、伊織タカトにより意識不明にされた事により物語は始まる。

最初こそはクールを装っており、原作キャラ達にも心の壁を作っていたのだが、物語が進むにつれ過去が明らかになっていき、心の成長が著しい。

当初はイクスカリバーと言うユニゾン・アームド・デバイスを使用していたが、現在は離別し、刀を使っている。
クロス設定では、本編中の様々な出来事に決着を付けており、アルトスの真名も見つけている。
ただし、時の引き金では物語後半まで真名は出ない。
男性では風間カナンやルミオ・デュアリス、東条咲夜、神藤昶。
女性ではスバル・ナカジマやティアナ・ランスター、高町ヴィヴィオ、一之瀬裕希奈と友人が非常に多い為、人望には篤く、人を良くも悪くも惹き付ける才覚がある模様。
なお、カナンとは親友の間柄。ミッドチルダ建国祭にカナンと一之瀬裕希奈を誘ったのもシオンである（一応、ヴィヴィオも誘っていた）。
本来が刀術使いであるため、刀を使用した際は至近戦の戦闘能力が跳ね上がるものの、こちらはアビリティー・スキル。精霊融合、精霊装填が使えない為、奥義が使えず火力がとても低い。クロス設定では、アルトスも刀も使用可（ストーリー中では途中でアルトスが使えなくはなるが）

アビリティー・スキル。

このスキルは、後天的かつ修練により得られる能力の総称。
レア・スキルは先天的かつ偶発的に得られる能力の総称なので、両者は正反対の性質となる。

神庭シオンの代表アビリティー・スキル。

精霊融合、精霊装填。

精霊契約した主な精霊と融合、もしくはデバイスに装填する事により能力を跳ね上げるスキル。

一気に能力は倍加するものの反動により一日寝込んだりする羽目となるので注意が必要。なお、刀使用時はこれを使えない。

零落零無。

単一固有アビリティー。神覇ノ太刀を極める段階で得られる特殊技能であるが、しかし後天的かつ修練で得られる能力な為、アビリティー・スキルに分類される。

このスキルは、自身の魔力を虚数魔力と呼ばれる擬似的な虚数空間に近い魔力に異常変質させる能力で、魔法術式の整数を全て虚数に変化させ魔法を無効、もしくはすり抜ける事が出来る。

大威力砲撃等と言った大規模魔法を無効とする事は出来ない（整数を虚数に変えるのに時間が掛かる）が、防御術式には覿面（てきめん）に効果を発揮し、これにより至近戦では防御無効の圧倒的なアドバンテージを得る。

シオン自身の極めて高い刀術能力から、至近戦では恐ろしく有用と化す。

ただし、この能力を使用する際には深い自己暗示を必要とする為、刀を使用しない場合には使用不可能となる。

使用武装一覧。

聖剣アルトス。

元名はイクスカリバー。

まつろわぬ神、騎神アルトス・ペンドラゴンが変化した姿であり、ＳｔＳ，ＥＸ本編ではシオンに試練を与える為、離別している。

ユニゾン・デバイス（？）であるのだが、その特殊な経歴によりアームド・デバイス化もしている為、ＳｔＳ，ＥＸでは中途半端なユニゾンしかしていない。

クロス設定では、既に試練を終了している為、真名（銘？）が明らかとなっているのだが、諸事情によりこちらではアルトスと名乗る事になる。
戦闘能力は絶大の一言で、明らかにシオンより強い。
騎士としての戦闘を極めており、突撃→斬撃の単純な一連の攻撃が凄まじい威力と化す（通常斬撃がＳＳ＋）。
デバイスとしての性能は精霊融合、精霊装填、双重精霊装填と特殊なスキルが出揃っており、かなり高く。シオンと正式なユニゾンをした際にはどれ程の戦闘能力と化すのか現状予測不可能。

刀（無銘）。

神庭家、神覇ノ太刀の正式な後継者が受け継ぐ刀。
名前は時の使用者が決めるので、シオンはまだ決めておらず、ただの刀とか呼ばれる。
様々な謎を持つ刀であり、そもそも使用者の魂と融合する性質からしてとんでもない。
また、いかなる攻撃にも堪えうる程頑丈で。アルトスと戦闘した際にも、刃は欠けることすら無かった。
何故かデバイスとしての演算能力まで有している――と、謎だらけの刀である。
なお、その妙な性質から魔力（魔素）で形成されている訳でも強化されている訳でもない為（と言うより必要ない）、ＡＭＦや某ＥＣ感染者が持つディバイド（魔力分断能力）には極めて強靭な性質を持つ。ぶっちゃけ効果無し。
その為、両者の能力を持つ場合、注意が必要。

伊織タカト。

性別：男。

年齢：１９歳。
魔導士ランク：ＥＸ。
使用デバイス：無し。

ＳｔＳ，ＥＸ本編、最強の男。
シオンとは異母兄弟の間柄に当たり、シオンから『タカ兄ぃ（ぃ、がアクセントとなる）』と呼ばれる。
本編では２１歳だが、こちらでは１９歳。
元々、生れつき魂の霊格が神級であったが為に魂と身体を切り離され、魂は武者鎧に定着。身体は封印され、地獄と呼ばれる謎の空間に捨てられた経緯を持つ。
そこで２４時間戦う事を宿命付けられ、２歳から６歳までの４年間。ずっと戦い続けていた（また地獄では通常と流れる時間そのものが違うため、おそらく数千年分もの時間を戦い続けていたと思われる）。
その為か、幼少時から既に戦闘技能を完成、極めており。当時で、すでにグノーシス第一位レベルの戦闘能力を有していた模様。
変わりに、人格形成に多大な問題を抱えてしまい。当時は赤子もかくやといった状態だった。
そう言った経歴から、人格は極めて不安定であり、老成した部分もあれば幼児のような部分も見せる。
ぶっちゃけ、凄まじい天然さん。これにより天然魔王とか呼ばれる。
普段は割とぽけぽけさんなのだが、戦闘時は人格ががらりと変わり、冷徹、傲慢を地で行く。
故に、高町なのはからは『戦ってる時の、タカト君は嫌い』とか言われていたりする。
更に、ＥＸであるためか魂に”傷”を負ってしまっており、感情を一つ喪失している。
タカトが喪失した感情は『幸せ』。

本編では、ルシアを意識不明にした後、様々な世界を渡り歩き、アンラマンユ感染者（人間）を徹底的に略奪していった。
後に第一級広域次元犯罪者になる。
クロスでは、様々な出来事に決着が付いているため和解しており。現在、管理局から保護観察処分を受けながら、管理局の仕事を単独でこなしている模様。
なのはの命令（本人曰く、お願い）には何故か絶対に逆らえないようだが……？
戦闘は基本的に素手で行い、八極拳にも似た独自の打撃魔導戦闘法『魔神闘仙術』を使う。
その戦闘能力は前述したように最強の域に到達しており。ＥＸ化能力を使わずとも、管理局を単身で滅ぼせる可能性がある（なら、これに勝った某フェレットはどうなのかと言う話しではあるが、あれはまた別の話し）。
ＥＸ化能力も含めると、恐らく敵はこの世に存在しない。
特に神属性持ちには、絶対の相性からまず負けは無いと言われる。
クロス設定では、ある時代に飛び、それが原因で再びシオン達の前に立ちはだかるのだが……。

アビリティー・スキル。

八極八卦太極図。

タカトオリジナル魔法術式。カラバ式と仙術をベースにして作りあげた人体改造魔法とでも位置付けられる魔法。
リンカーコアを八卦太極炉と言う魔導炉に改造する所から始まり、これにより八つの変換資質を有する事が出来る（風、雷、火、水、山、土、月（冥、闇）、天）。
その変換資質を魔法とする術式が、すなわち八極八卦太極図とな

る訳だ。
これの特殊性は八つの術式を同時に起動出来る事にあり、その為、手数では敵う術式は存在しない。
また術式を組み合わせて全く別の魔法を生み出せる自由性も持つ。
さらに八卦炉は魔素ではなく、八素と言う自然概念を特殊な呼吸法で得る事により駆動し、それにより魔力エネルギー得る為、タカトの魔力容量は実質無限となる。
この性質のせいか、ＡＭＦの効果は薄く。上位能力のディバイドは魔力分断能力（つまり魔素限定）の為、全くの無意味と化す。
これによりＥＣ感染者からは、バグキャラ扱いをされてしまっている――が、あなた達も十分バグキャラです本当にありがとうございます（笑）。
なお、一部のカラバ式は使用出来なくなっているが、仙術は問題無く使える。

レア・スキル（？）

ＥＸ化。

ＳｔＳ，ＥＸの『ＥＸ』の部分の象徴とも言える能力であり、また最大の謎と言える能力。
魂の霊格が神級の人間が、ある特殊な条件により発動出来る力。
ＥＸとは通称であり、略称でもある。
本来の名は『事象概念超越未知存在』。
カミが定めた（あるいはカミ自身）である概念（物理法則）を全て超越、無視、破壊出来ると言う極めて凶悪な能力。『神殺し』であり、『カミ殺し』。
その性質により、介入系能力は全て無効。
時を止めて光速のン京倍で歩く。なんて行動を平然と行い、距離概念、速度概念を打ち破り、魔法攻撃が惑星、銀河、世界破壊レベ

ルにまで昇華される。
明らかに対人や対巨大生物との戦闘の枠組みを超えた能力であり、対神用の能力と推定されているが、詳しくは不明。
普段は封印されている真名を解放する事により発動する事が出来る。

凶悪極まりない能力ではあるのだが、その使用には多大な問題を抱えており。
使用の度に、使用者は魂に”傷”を負っていく。
これにより使用者は感情を喪失していき、最後には魂が破滅した上で崩壊。
転生すら叶わず消滅してしまう事になる。その為、滅多な事では使用出来ない。
タカトもこれの使用は控えているようだが、逆を言えば使用せずとも勝てると言う事でもあり、また使おうと思えば使える能力なので注意が必要。
こんな能力だが、例外としてルシア・ラージネスが有する『真名支配』のみ介入が可能となる。

叶トウヤ。

性別：男。
年齢：２０歳。
魔導士ランク：ＥＸ（ただし擬似）。
デバイス：ピナカ。

ＳｔＳ，ＥＸ最強の男、その２（笑）。
シオンとタカトとは異母兄弟で、一番長兄となる。
概要としては、エロい男――いや、ごめん間違えた。マロい男（笑）

女体に並々ならぬ興味と好奇心を抱く。最近、シオンがしーちゃん（男の娘バージョンｏｒ女体化バージョン）となった事により男の娘もストライクゾーンに入ったまさしく変態。
が、変態と言うと本人は喜ぶだけなので、やめたげて下さい（笑）
一応、ユウオ・Ａ・アタナシアと言う恋人がおり、彼女一筋なのだが、それがそうと分からない程女性陣にセクハラをしまくる。セ・ク・ハ・ラ・をしまくる（大事な事なので二回言いました）。
でも、本編中指は一本も触れておらず何気に紳士。
しかし、それ以外の事は何をやっても問題ないとか思ってる節がある為、やっぱり紳士とは言えないかもしれない（例：下着ドロ。女性陣の着替え覗き＆風呂覗き）。
見事なまでに女性の敵な彼ではあるが、その戦闘能力は相当なもの。
タカトを次元世界最強の格闘士とするならば、トウヤは次元世界最強の槍術士となる。
元々はタカトより圧倒的に弱かったのだが、修練のみで彼に追いついた、ある意味凄まじい人物でもある。
タカトが千の実戦で強くなった人間ならば、トウヤは万の修練で強くなった人間と言える。
擬似ＥＸと言う謎に満ちた力を使えるらしいが……？
今回のクロスでは、ある時代から動けない状態となるため、アドバイザーにしかならない。
つまり、彼は一切戦闘に加わらない為注意されたし。

ルシア・ラージネス。

性別：女性。
年齢：１９歳。
魔導士ランク：Ｓ＋。
デバイス：ケイオース。

シオンの義理の姉でもあり、初恋の女性。また、タカトにとって何より大切な人。
そしてトウヤの義理の妹と、これで分かる通り神庭家（と言うよりＳｔＳ，ＥＸ本編の中で）最重要の人物。
本人の性格はくったくなく強気な元気印のお転婆娘（笑）
とある人曰く、『ＳｔＳ，ＥＸ版裕希奈だ（笑）』との事。
外見は一見おしとやかな美少女に見えるため、非常に勿体ない。
なお、これを本人に言うと普通にぶん殴られる。もしくは真名支配で地獄を見せられる。
本編ではタカトに意識不明にされた為。過去話か、外伝にしか姿を見せた事は無い。何気に不幸な人物。
魔導士としてのランクは、さほど高くは無いが（それでもＳ＋な辺りがグノーシス）、彼女の真に恐ろしい所は戦闘能力にあらず、そのレア・スキルにある。詳しくは後述のレア・スキルを参照の事。
本編ではこの通り、実質未登場なのだが、今回のクロスでは様々な事件に決着（と言うか、ルシアは意識不明にされていない設定）が付いている状態なので、出演予定。
しかし、ある意味シオンを凌駕する不幸っぷりは相変わらずであり、今回のクロスでもある重要な役回りとなるのだが……。
様々な事件の発端になるため、魔性の女扱いされる事もしばしば。
なお、彼女は基本的にいじめっ子であり暴君な女王様気質なので、様々な名言の数々を残しており、代表的なものをここに上げてみる。

「なに、どした？　あたしに会えて朝から感激――？　て、待ったれやコラ」
（朝の挨拶、開口一番これ。タカトさん、ご愁傷様です）

「なによ、へんな顔して？　やましいことでもやってたわけ？　……ちっ、エロ本の一つもありゃしねぇ」

（こちらはシオンに対して。……うん、シオンふぁいと）

「ん？　ああ、んなもんは知らん。愚弟の分際で姉に意見しようなど百年早いわ、小僧っ子」

（こちらもシオンに、まさしく女版ジャ〇アン）

「まあ、それでも襲うってんなら構わないわよ？　お手並み拝見してあげるから。なーに、来ないの？　どうした、根性見せろ。――それとも、あたしから襲ってほしい？」

（こちらはタカト相手に、……うん、タカトもがんば）

「誰だコラァっ！　降りてこいやぁっ！」

（こちらは悪さしたシオンに、マジ姐御ですルシアさん。……この後シオンは地獄を見るのでした、南無ー）

「ん？　いや、そりゃキミ。あの娘に昔のこと洗いざらい、ある事ない事話しちゃってもいいのかなーて♪」

（こちらはタカト。……シオンとタカトは泣いてもいい筈）

「……だからさ、最後にあんたの義姉（あねき）貴の面目ってやつを果たさせてよ。この先、あんたが誰を好きになるとしても、ヘマやらないでいい男になれるように。

――”具体的に言えば、童貞よこせ”」

（さて、これは誰に言ったかは内緒で（笑））

……と、まぁ、こんな女性である（笑）。

クロス設定限定であるが、後々裕希奈あたりに影響が出ないか、戦々恐々としているシオンとタカトなのでした（笑）。

レア・スキル。

真名支配。

ルシアの真骨頂とも言える能力。有り体に言えば、なんでも言う事を聞かせられる最強技能（笑）。

真なる名をルシアに知られ、その真名の名の元に下される命令は例え神だろうが、神殺しだろうが、ＥＸだろうが、容赦なく従わされる。

その命令に拒否権は万物全てに存在しない。

彼女が真名支配で、人に『死ね』と命令したら必ず死ぬし、世界に『消えろ』と命令したら世界も消える。

どんなチート的な存在でも、１００％逃れられない事象概念支配能力。当然、ランクはＥＸとなるのだが、彼女はＥＸでは無い。

このことから分かる通り、ルシアはＥＸ化も使用せずにＥＸ能力を使える事になる。

なお、対魔力能力があろうが、これを封じる手段は介在しない。

スカリエッティ一味や、フッケバインの皆さんは彼女に会わないように注意をお願いします。手下にされますよ？（笑）

ただし、当然弱点もある。

真名を命令する際には必ず読まなければならない事。

たいていの実力者は、彼女が真名を読む間に攻撃可能なので、彼女はそれを耐え抜かなければならない。

同じく名前が長すぎると、それを読むだけで時間が掛かるし、何と人間には発音不可能な真名なんてのもあるからタチが悪い。

その為、わりと介入が可能な能力でもあったりする。

「〇〇〇〇〇（↑ここに真名）、〇〇〇〇（↑ここに命令）しなさい、命令よ？」

基本的には、→のような命令で発動する。

実はタカトの魂と肉体を分けたのも、ルシアの真名支配。
当時２歳の彼女は、グノーシス連中に騙されるまま真名支配でタカトの魂と肉体を切り離している。
後、４年後に無事タカトの魂と肉体を戻したのも彼女の真名支配であった。
そう言った経緯から、彼女にとってタカトは息子であり、弟であり、幼なじみであり――何より自分の能力の犠牲者ともいえる事もあり、何かと世話を焼きたがる。

以上、ＳｔＳ，ＥＸより♪　トウヤは実質仲間にならず時代も一つに固定される為、ゲスト扱い。変わりに、ルシアが入ります♪
よろしくお願いします♪

では、次からクロスリレー参加作品オリキャラ（一部原作あり）の説明を♪
（※ここからは、各作者様から頂いたプロフィールのコピペになります。なので、最初のＳｔＳ，ＥＸとは紹介方法が違いますが、予めご了承下さい）
なお、敬称略とさせていただきます。

魔法少女リリカルヴィヴィオ。（作者、ヨシュア）。

風間カナン

嘱託魔導師
推定Ｓランク相当
※ゆれ幅が大きく、これは安定期の値である。計測上最高値は測定不能値。
年齢：１３歳

利き腕：左利き
デバイス：メイデン、レナス
術式：古代ベルカ
※固定はされていないものの魔法陣の形式上古代ベルカに分類する。
変換資質：無
※ただし、デバイス二機の力により自然との交信を図り、力を借り受けることが可能。天候等の条件はあるものの、実質上、全属性の攻撃を可能としている。
希少技能：空間突破
空間を歪め、対象と自分との空間を自由に操ることが出来る能力。応用性に長け、攻撃、回避、防御にまでも使えるものであるが、本人が未熟であるためにその全てを扱うことは出来ていない。

空間把握
自身の周囲の空間の情報をカナンに集める能力。
実質カナンに死角は存在せず、３メートル以内であれば認識出来る。
ユニゾンによってメイデン、レナスが認識の範囲を大幅に拡大、その距離はミドルレンジにまで巨大化し、中、近距離間では絶大な力を誇る。拡大してもカナンが平気なのは、脳へと流れ込む莫大な情報量をメイデン、レナスが無駄な情報を省いているからである。
また、常時発動してはいるが、非戦闘時は流れ込む情報量を抑え、不意打ち防止程度にとめている。

概要
シオンからミッドチルダ聖誕祭に呼ばれ、地球から遊びに来ている少年。
普段は地球にいるのでミッドのことに関してはあまり詳しくはなく、湾岸地区から先をほとんど知らないためシオンを案内として観

光中。
人柄としては明るく誰とでも良く話し、友人はかなり多い部類ではあるものの、気に入らない人物には露骨に嫌悪感を露にする等、まだまだ精神的に未熟な部分が多い。
最低限の敬語は使えるものの、上記の人物に該当した場合、または心のリミットが外れた場合、言葉使いに気をまわせなくなる。
戦闘方法としてはスピードを生かし、抜刀剣術を使った戦いを得意とするが、同じスピード型であるヴィヴィオとは全く異なり、力押しを得意としている。
回避は苦手というわけではないものの、戦いが進むにつれ減っていき、モチベーションがあがれば上がるほど攻撃にまわる。相手の射撃を斬り飛ばしてのカウンターなども珍しくはない。
また、直感的に出来ると思ったことを実行移すため、思いつきの攻撃を躊躇なく使う等、判断能力などは高いものの、周囲がカナンにあわせられなければチーム戦など到底不可能な戦い方をする。指示を申し訳程度に守るくらいのことは可能。
無意識的に力にリミットをかけているため、魔力値が不安定なことが懸念されている。
とはいえ、潜在能力の塊のような少年であり、ヴィヴィオや祐希奈との模擬戦、六課での訓練などでめきめき腕を上げている。

一之瀬祐希奈

推定Sランク相当
嘱託魔導師
年齢：13歳
利き腕：右利き
デバイス：アシェル
術式：近代ベルカ
変換資質：炎熱

希少技能：リフレクションフェザー
※高い防御能力を持った能力。発動すると三対の白銀の翼を形どる。
祐希奈自身を包むことで死角無しの防御をすることができ、その堅牢な守りの上に、反射能力まであるため、祐希奈に対し砲撃魔法はおろか、集束砲撃ですら耐え切ることが出来るほど。
祐希奈の防御力も重なり、打ち抜くことが出来る砲撃魔導師は極めて稀。
大きさは自由に変えられ、仲間を守ることも可能。

概要
親譲りの綺麗な銀髪を持つ少女。
カナンとは小学三年以来の付き合いであり、幼馴染。本人曰く腐れ縁。
付き合いも長いためかヴィヴィオ以上にカナンのことを理解しており、出会った当初、闇の淵にいたカナンを引きずりだしたのは彼女である。
黙っていればモデルでも活動できるだろうというのはカナン談。あくまでも黙って入ればのため、話し出すとそのイメージは崩壊する。
唯我独尊、傲岸不遜を絵に書いたような正確をしており、自身に逆らうものには容赦なく鉄槌を浴びせるというすさまじい自己中である。
ちなみにヴィヴィオを泣かしてしまったときには死をも越える地獄を覚悟しろとはヘタレーズ二人の言葉。
だが、それゆえにさっぱりとした性格であり、物事の好き、嫌いがはっきりしており、慣れれば非常に付き合いやすい人柄をしている。
上記から話を聞かないようなイメージがあるが、その実重要な局面ではふざけずに冷静な判断を下したりと、案外三人の中では一番

の常識人だったりする。
戦闘方法は高い防御とパワーを生かした近接戦闘。力押し気味なのはカナン達に似たところがあるものの、一撃一撃の威力はカナンをはるかに凌ぐ。
ブレードや体術から繰り出される一撃は、ただの一撃ですら喰らえば並の魔導師ならばノックアウト、魔法で強化された場合の威力は相手の防御魔法ともども打ち砕く威力であり、十八番のブレードエクスプロージョンにおいては防御の貫通までしてしまう。
防御は希少技能もあいまって鉄壁を誇る。
ミドル、ロングレンジでは精度は低いが大威力の弓矢があり、その戦闘方から騎士シグナムを師につけ特訓中である。

高町ヴィヴィオ
二等空尉
※肩書きだけの階級のため後に剥奪
ＡＡＡランク
※実質的にはＳランクの実力を持つが、受けた試験がＡＡＡランク試験なため
年齢：１３歳
利き腕：左利き
※ＶＩＶＩＤ公開後は右かもなので変更あるかもですｗ
デバイス：フェアリー、セイクリッド・ハート（クリスはテスタメントが付け足しました）
変換資質：風
希少技能：聖王の鎧
先天的に持っていたものなため、先天固有技能に属するかもしれないが、不明なためここに記載。
聖王より引き継いでいる虹色の光を放つ防御技能。
常時展開であり、ヴィヴィオの薄い防御を少しでもあげようと考えられ、シャーリーが実用化したもの。

ヴィヴィオの負担を考え出力が絞ってあるが、本人の意思により調整が可能。最大展開時には砲撃級の魔法すら防ぎきる。
砲撃の際は防御を消して魔力に全変換をし集束効率をあげるという応用に使うことも可能。ただし、全解放をした場合、代償として免疫力が低下するなどの点がある。

概要

カナン、祐希奈の友達であり、言わずとしれたなのはの娘。
二人とはとある事件を境に地球に行った際に友達となり、現在もその関係は続いており、期間は短いながらもその人間性からかカナン、祐希奈と関係は良好、親友と呼べる存在にまで発展している。
性格としては天然であり、たとえヴィヴィオが正しい知識を持っていても、こうだと強く押されると信じてしまうため、祐希奈の遊ばれることもしばしば。
例えとして、祐希奈がいったシオンはヴィヴィオの子供発言を未だに信じており、今は収まっているものの多々の問題を起こしたことがある。
非常に優しく、誰にでも平等に接することができる貴重な人材。
基本的には笑っていることが多いが、その内面はかなり複雑で、辛いことは溜め込み、一人で抱え込むことも少なくない。
カナン曰く無意識的に心に鍵をかけているとのこと。
三人の中ではもっとも礼儀を心得ており、目上と認めた相手には敬語使う。ただし、シオンのような例外もあり、仲がよくなった相手には敬語は使わなくなる場合がある。
戦闘においては普段の天然は消え、冷静な判断にその場の状況を整理、なのは譲りの頭を使った戦闘を得意とする。
攻撃、速度、共に優れ、砲撃、射撃、剣術、体術を取得しており、薄い防御を除けば三人の中ではもっともバランスがとれている。
これは、なのは、フェイトの鍛錬を受けた成果であり、地球でもカナンや祐希奈との訓練を怠っていないお陰でもある。

特に速度においては六課最速を誇るフェイト以上の加速を有し、瞬間的な加速においては空間突破を使うカナンをも上回る。（最高速度は負ける）

また、ヴィヴィオは風を利用して加速するため、どのような体勢、状態であっても移動が行え、　実質的に術後硬直が存在しない。

フルドライブが二種類あり、防御は上げ、魔法の集速力を極限まであげたドレスタイプのものと、限界まで装甲を下げ、速度を極めたレオタード型のものがある。

また、この二つを組み合わせたもので、高機動戦闘を行いつつ高威力砲撃を放つという離れ技を見せる。

上記の記述から、三人の中で最も安定して強いのはヴィヴィオであり、正真正銘のＳランク魔導師である。

※カナンは不安定なために状況によってはヴィヴィオを上回ったこともある。

以上、リリカルヴィヴィオからでした～～♪

なお、この三人は時の引き金主役級となるので、覚えておきましょう（笑）

ＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｓｔａｇｅ。（作者、白河シンジ）

名前：ルミオ・デュアリス

年齢：１６

性別：男

魔導師ランク：ＡＡＡ＋相当

武器：雷銃ライデン（プラズマガン）

（剣が多いのであえてサブで使用頻度がほとんどない銃で）

概要

管理外世界リゾルガルド出身の少年。
デュプレス技術により生み出された、エリオ・モンディアルの複写人間。
当初はレプリカであることを気にしていたが、ある事件を切欠に自分は自分であると割り切りって生活できるようになる。
現在はミッドチルダで嘱託魔導師として日々を過ごしている。
普段は低血圧かっと言わんばかりにテンションが低く、自ら人と接することは少ないが、気が合う仲間と居る時は冗談が言えるほど明るい性格になる。

ミッドチルダ建国四百年祭の後、とある事件に巻き込まれ管理局に何故か追われる羽目に。
局員から逃げる際に入り込んだ森で次元の歪みに吸い込まれ今まで見たことのない世界に飛ばされる。
そこでルミオが目にしたのは、荒れ果てた世界だった――。

その他設定

魔力転換能力を持っており、基本的に使用する術技に「雷」属性が付加されている。
魔法と言う魔法は持っておらず、唯一魔法と呼べるものはフィールド系防御魔法の「キャンセラーフィールド」のみ。
残りは拳術、銃術と言った術技をメインに戦闘を行う。
通常攻撃が銃のため、実質的な攻撃力が命中率となるがやや低いのが難点。

以上、ＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｓｔａｇｅからでした♪

魔法少女リリカルなのは　―留まらない流れ―（作者、回覧板）

名前：ヴェル・サ・イユ
歳：見た目１２歳（特に無し）
性別：女（の形）
魔導師ランク：測定不可
使用デバイス：ロストロギア・ベルゼブブ

～時の引き金専用の概要～
世界誕生と共に発生した生命。
本体は魂の渦に霊体として補完されていて、現実にいる体が死んでも蘇る。
次元の歪みにより原始時代に直接現れ、人間にとってマイナスである竜人側に付いてのほほんとしている。
アルハザード時代以降には姿がないので、表れられない理由がある模様。
流留とは基本的に敵対する。

・勅令
対流留限定の強制命令権（分かりやすく言うと、数制限の無い令呪）。イユの流留に対する願いは流留によって実現される。

・悪意の存在
人間の善悪のうち悪によって形造られているため、人間が持つ最悪の欲求であるタナトスを再現したようなもの。そのため、解釈はほとんど人間にとっての悪となるようになされる。

・ロストロギア・ベルゼブブ
銃と剣が接合した銃剣型であり、魂レベルでのユニゾンをするデバイス。そのポテンシャルは、純粋魔力攻撃を威力関係なく飲み込み、己が内に世界を内包している。本来の持ち主は流留のため、反

動の全ては流留に還る。その反動は、過剰な食欲の増加であり、絶えず口に入れ続けなければならない。時々流留を食べたりもする。

名前：村雨流留（むらさめるる）
歳：見た目１２歳（特に無し）
性別：男（の形）
魔導師ランク：最高Ｃ（ユニゾン中は上限無し）
使用デバイス：ロストロギア・サタン
使用魔法陣：古代ベルカを重ね六芒星
個人技能：ベルカの誓い（古代ベルカ式魔法陣間を移動する）

～時の引き金専用の概要～
生まれた時から変わらずにある生命。
その身は死滅と生誕の円環時間上に存在し、その楔から解き放たれる為には、イユを魂ごと消滅させなければならない。
次元の歪みにより、原始時代に直接引きずり込まれる。
とくにすることがないので空を飛ぶ竜の逆さ吊りでぶら下がっている（竜に離してもらえない？）。
時々巨大な竜に食べられるというお茶目な一面も見せている。
アルハザード時代以降には姿が見えないので、何らかの出られない状態にある模様。
イユとは必ずしも敵対しない。

・死なない体
死滅と同時に生誕するため、事実上殺される、消されることはない。代わりに目的が持てず、生きる以外（厳密には生きることはイユから与えられている）の目的意識はすべて他人から与えられている。

・ロストロギア・サタン
短長二つの紅い槍を持つ二鎗型であり、魂レベルでのユニゾンをするデバイス。驚くべきはポテンシャルの高さであり、世界に干渉して事象をねじ曲げたり、一時的に事象を拒絶する。ただし反動がデカく、長時間使えばユニゾン解除とともに全人類の怨鎖を受けて確殺される。

以上、魔法少女リリカルなのは　―留まらない流れ―からでした♪
短いキャラ紹介……♪　ああ、楽だ……（笑）

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　闇を切り裂く者（作者、ボン太郎）

名前：東条咲夜
年齢：１７歳
外見：ざんばら切りにした黒ずんだ碧銀色の髪、紺と青のオッドアイ
性格：基本真面目、決めたことはやり通す、はやてが関わると力百倍アンパン（ｒｙ
魔力光：碧銀色（使用する変換資質で変わる）
魔力変換資質：炎熱、氷結、電気、水、風、重力、光、闇

ＳｔｒｉｋｅｒＳ一話の空港火災事件の際にはやてに助けられた過去がある。
その時にはやてに一目惚れ、以降四年間はやての騎士になるために死にもの狂いで修行し、機動六課に配属されてようやっとはやての護衛騎士になることが出来たはやて大好き少年。別名『はやコン（はやてコンプレックスの略）』でもある。

各魔力変換資質を操ることから【闇を切り裂く者】とも呼ばれている。でもはやコンである。
目上の相手には基本丁寧。だがしかしはやてに害をなした場合は即暴走。厄介この上ない。
ロストロギア『王の一族』によって覇王の力を得たことによって髪色、魔力が覇王に近いものに。身体能力も覇王並。でもはや（ｒｙ
戦闘スタイルは凪による、各変換資質を使用した近接戦闘。ソーディアンで精製した多種多様な刀剣での戦闘、刀剣に込めた魔力を爆発させることにより破壊力にも長けている。レフィリアとユニゾンすることにより、ソーディアンの制御を彼女に任せることが出来る。彼女が精製した刀剣を飛ばしている間に敵の懐に飛び込むなど。

「はやてさんに指一本でも触れてみろ。俺が地獄の果てまで追いかけてやるからよ」

「行くぞ、レフィリア、ミオ！　邪魔する奴は全員ぶっ潰す！」

「はやてさん！　俺！　俺が行きます！」

：使用デバイス

・日本刀型アームドデバイス『凪』
使用者が持つ魔力変換資質の力を増大させることが出来るデバイス。
魔力を刃に纏わせたり、衝撃波にして飛ばしたりなどが出来る。刀身は銀色、カートリッジ排出口は鍔の上。そして口調は乱暴である。

＞使用魔法

・覇王、炎刃、氷刃、風刃、雷刃、水刃、重震、光刃、闇刃（あんじん）一閃

各変換資質の魔力を刃に纏わせ放つ衝撃波。

・覇王断空剣

覇王断空拳の剣バージョン。『俺のマスターは……なんて言えば良いんだろうな……うん、馬鹿だ』

『面倒事は勘弁してくれよ。俺は眠いんだ』

：ガントレット型アームドデバイス『ソーディアン』

蒼いフォルムのガントレットの形状をしている。魔力を込めることによって多種多様な刀剣を創ることが出来る。創った刀剣は爆発させることが可能。込めた魔力の量によって刀剣の耐久力が変わる。

名前：レフィリア

年齢：0歳

外見：目が紺と青のオッドアイ、壁銀色の髪という点以外は闇統べる王

性格：闇統べる王ほど傲慢ではない、一言で表すなら馬鹿

魔力光：碧銀色

古代ベルカの王たちの血――――遺伝子を内部に保存していて、遺伝子と適合した所有者の身体を、その王の身体資質を持った身体に造りかえるというロストロギア『王の一族』の管制人格にしてユニゾンデバイス。初めての適合者、咲夜が現れたことによって長年の眠りから覚めた。要するに、デバイス関連に関しては無類の強さを発揮するが、それ以外のことに関してはからっきしな馬鹿。もう一度言う、馬鹿。あと主（咲夜）大好き。けどプリンも好き。

戦闘は一応出来るが、あくまで一応。咲夜とユニゾンした際に真価を発揮する。

「我と主の前に敵はにゃい！　……ない！」

「主ぃ。腹が、腹が減ったぞぉ……」

「どこからでもかかってこい！　相手になってやる！　……主とミオが！」

：直剣型アームドデバイス『インフィニティ』
碧銀色の刀身の直剣型デバイス。凪と使用法は同様。咲夜も使用可能。

名前：ミオ・レッドフィールド
年齢：１８歳
外見：肩に当たるぐらいにまで伸ばした焔のように紅い髪、黒目
性格：人をからかうのが好きな小悪魔的な感じ、しかしツンデレ
←ここ重要
魔力光：紅
魔力変換資質：炎熱　管理局最強の執務官（闇切り世界で）と噂されており、実力は咲夜にも届き得る。【焔の魔導騎士】と呼ばれている。
闇の書に父と兄を殺された過去があったが、咲夜とはやてによって吹っ切れた。その後は咲夜たちと行動をともにする。咲夜が好き『だった』。はやコン予備軍。
戦闘スタイルはレギオンによる近接戦闘。近接大好き、超大好き。指パッチンで焔が出せ、パンも焼ける。ついでに言うとクーデレである。

「咲（サキ）くんって本当にはやてちゃん好きよねぇ……病気？　……ああ、病気だったわね」

「私の邪魔をするの？　だったら当然、燃やし尽くされる覚悟はあるわけよね？」

「別に心配なわけじゃないわ。ここで倒れられても困るだけよ」

：斧杖型アームドデバイス『レギオン』
焔を象ったような刃を持つ斧杖。斧杖なので近接戦闘で使用することも可能……というかミオの性格上杖としての扱いより近接戦闘で使用される割合の方が高い可哀想な子。

＞使用魔法
・クリムゾンシューター　焔の魔力弾。追尾性能は低いが、威力は高い。が、使用頻度は低い。

・クリムゾンバスター
焔の砲撃。威力はエクセリオンバスター以上……が、使用頻度が（ｒｙ

・クリムゾンエッジ
斧杖状態のレギオンの刃に焔を纏わせての斬撃。使用頻度は激高。

以上、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　闇を切り裂く者からでした～～。
ふぅ、なかなか濃いメンバーが集って来たなと（笑）
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　禁断の刃（作者、ムーギネーター）

四天

並行世界のミッドチルダに存在する巨大宗教組織「ベルカ聖王正教」の暗部組織『王佐の刃』の幹部４人の呼称。全員が強大な力を備えている。

この世界を自分達の目的に利用すべく、長である『鎧のシュヴァルツ』の命を受けて舞い降りた。

鎧のシュヴァルツはこちらの世界には来ないものの、時折化身である禍々しい顔を持つ黒い炎の姿で３人に指令を下す。（番外編にのみ登場）

全員が共通して『聖霊デバイス』を保持し、体内に古代遺物『コア・エレメンタル』を埋め込んでいる。

聖霊デバイス：ベルカ聖王正教の暗部組織である『王佐の刃』のメンバーが携えているデバイス。所有者が魔力素を制御する際の演算補助を行っている。またその特性上、起動には『魔力』ではなく特定の『属性』を有する『魔力素』が必要。

コア・エレメンタル：自然界に満ちる魔力素が結集して出来た物質。それぞれが特定の属性を有している。

鎖鎌のエルデ（エルデ＝ドイツ語で『土』）

ＣＶ：ゆかな

容姿：エメラルドグリーンの長髪に金色の瞳をした少女。服は黒いベルトが何本も付けられた緑色の拘束衣。本人曰く『魔女』の血を引いており、容姿はその魔女に生き写しらしい。

年齢：？？？才（外見年齢：１９才）

出身地：第９５管理世界「カリグス」

騎士甲冑：ノースリーブの黒い服と黒い腕カバー

技

機兵召喚（エクス・マキナ）：異なる次元世界に存在する機械兵器（所謂リアル系の機体限定）を呼び出す魔法。召喚に因って呼び出された機械兵器の大きさは込められた「土」の魔力素（自然界に漂う魔力の源）の量に起因する。また呼び出された機械兵器は全て無人機となるが、搭乗も可能。

石の息吹（プノエー・ペトラス）：触れるだけで対象を石化させる毒ガスを発生させる極めて高度かつ危険な呪文。この霧に触れた時の石化するスピードは対象者の魔法抵抗力が関係しており、通常の人間なら即石化だが上級の魔導師になればなるほど石化スピードが遅くなる。但しあまりに遅いと首部分まで石化した時点で窒息死してしまう。高等魔術らしく詠唱は古典ギリシア語で行われている。本来は下記の様な詠唱の必要な魔法だが、エルデは無詠唱で繰り出せる。

詠唱：『βασιλισκε　γαλεωτε　μετα　κωκτω　ποδων　και　κακοιν　ομματοιν　πνοην　του　ιου　τον　χρονον　παραι　ρουσαν．　ΠΝΟΗ　ΠΕΤΡΑΣ．』『小さき王・八つ足の蜥蜴・邪眼の主よ。時を奪う毒の吐息を。『石の息吹』（バージリスケ、ガレオーテ、メタ・コークトー・ポドーン・カイ・カコイン・オンマトイン・プノエーン・トゥ・イウー・トン・クロノン・

パライルーサン　プノエー・ペトラス）』

冥府の石柱（ホ・モノリートス・キォーン・トゥ・ハイドゥ）：手をかかげ頭上に人間百人分以上はある巨大な石柱を無数に発生させ落下させる魔法。巨大な質量である故に物理防御壁でも防げず、物理的な攻撃なので魔力障壁でも防ぐ事が出来ない。本来は下記の様な詠唱の必要な魔法だが、エルデは無詠唱で繰り出せる。

詠唱：『ヴィシュタル・リシュタル・ヴァンゲイト　おお、地の底に眠る使者の宮殿』

起爆粘土：エルデが得意とする秘伝の忍術。自身の掌にある口に爆発性のある粘土を咀嚼させ、一見紙のように見えるいろいろな種類の粘土細工を作り出す土遁系統の術。土遁系統等で雷系統の攻撃で爆弾を攻撃されてしまうと起爆しないという弱点がある。最終手段として体に直接起爆粘土を捻じ込む事で、自爆して半径１０キロを爆発させる術もある。

・巨大鳥型（梟型）：攻撃用ではなく、上に乗っての移動用。

・蜘蛛型（Ｃ１）：敵に秘密裏に接近し付着、術者の合図（爆ぜろ）と共に爆発。

・小鳥型：飛行して何かに着弾と共に爆発する誘導型。

・小鳥型（その２）：上記の小鳥型より線が長いバージョンで、上記のより高速で飛行する。

・魚型：水中内に飛ばし、爆発させることが可能。

・十八番（オハコ）（Ｃ３）：自身の最高レベルの魔力素をＣ３粘土を混ぜ込んだ巨大人形。普段は小さくなっているが、使用する際には人間の数倍の大きさにもなる。落下させて着弾と共に爆発させる爆弾の様な物で、１つの里を壊滅させる程の威力がある。

・地雷型：球状の物で地面に埋め、対象がその上を踏む事で大爆発をおこす。一度にかなりの量を生成する事が可能。

・竜型（Ｃ２）：巨大な竜を象っている。口から小型バージョンを吐き出しそれを爆発させたり、地雷型の物を吐き出したりする。術者を乗せて飛行することも可能。

・Ｃ４（シーフォー）カルラ：自身で起爆粘土を口を含む事で巨大化して、爆発することで周囲にナノサイズの爆弾を散布する。それを吸い込んだ生物の体内のあらゆる場所に爆弾がセットされる。『昇華』の合図と共に一斉に爆発し、対象を細胞レベルで体内から一気に破壊することが可能。かなりの魔力素を消費する。

Ｃ０（シーオー）：いわゆる自爆。体に直接起爆粘土を捻じ込む事に因って心臓部の魔力系で直接魔力素を練り込み続け、最終的には広範囲に無に返す超爆発を巻き起こす秘伝の術。

自爆分身：分身の口から爆発性のある粘土を咀嚼し、魔力素を集中し自爆させるとっておきの技。周囲一体を吹き飛ばす位の火力はある。

土遁・土竜隠れの術：地面を細かい砂状に変化させる事で地面の中に素早く潜る術。潜ったまま、地上の状態を感知する事が可能。

粘土分身：分身の術のバージョンの１つで、粘土を操る特有の秘

伝。相手の攻撃を受けたりする事で、粘土で出来た分身が相手を取り込みその動きを封じる。分身に起爆粘土を取り込んでおけば、そのまま爆破するという芸当も可能。

潜脳操砂の術：超極小サイズの針を対象の脳の記憶中枢に打ち込む事で、その者の記憶を封じる術。術が解ければ針も消え、記憶も戻る。

土遁・土矛（どとん・どむ）：体内に魔力素を流し込む事に因って皮膚を硬化させる忍術。これに因って防御力だけでなく、肉弾攻撃による攻撃力もアップさせている。弱点は雷遁＆硬化させた部分を動かせないと云う点である。

空砂防壁：鉱物を含む硬度の高い砂を使って、空中に魔力素を流した巨大な砂の盾を展開させる術。その威力は自身のＣ３を完全防御する程だが、その分魔力素の消耗は激しい。

獄砂埋葬：魔力素で地面を砂に変化させた状態で、相手を砂の渦に呑み込ませて地下２００ｍまで沈めてしまう術。通常の人間なら砂の圧力によって指一本動かせぬまま圧死させてしまう。

砂縛柩：砂を相手の体に密着させる術。その部分を潰したり出来る。

砂瀑送葬：『砂縛柩』からの派生みたいな感じで砂縛柩で砂でおおった相手を一気に潰す術。

流砂瀑流：一瞬にして地中の鉱物や岩石を砕き砂に変化させて、巨大な砂の津波を発生させて相手を呑み込んでしまう大技。

砂瀑大葬：『流砂瀑流』の派生技だが、相手が大量の砂に埋もれていれば使用可能。地面に両手を着く事で、砂に埋もれた相手を一気に押し潰す術。

砂縛牢：流動する砂を操り、敵を包み込むかの如く襲い掛からせ巨大な球状の牢として相手を捕らえる術。砂に流し込む魔力素に因って、大きさ・高度・スピードを自在に変化させる事が可能。

砂漠浮遊：砂で体重を支え、空中へ浮遊させる術。

砂雷針：無数の砂柱を作り出し、敵を取り囲む様に布陣する術。この砂柱は砂鉄で構成されており、雷撃のエネルギーを吸収し尽くす。

土遁結界・土牢堂無：地面に両手をつき地面に両手をつき地面に魔力素を送り込む事で、相手を閉じ込める土状のドームを作り出す術。ドームの中に閉じ込められた者は、徐々に魔力素を術者に奪い取られてしまう。中から破壊しようとしてもちょっとの傷ではドーム自体がすぐに再生してしまうので、強力な体術でない限り破壊する事は出来ない。

瞬間錬成（リメン＝マグナ）：触れた物を溶けた黄金に変換する力の込められた鏃と、それと本体を繋ぐ黄金の鎖を形成して一直線に放つ魔術。秒間１０発と言う凄まじい速度で袖から射出される一撃に因って、費用にして『「７兆円』・時間にして『３年以上』の期間が必要となる黄金の錬成を神速と呼べるほどの時間で作り出す。

干割（グラウンドセッコ）：右手で地面の水分を吸い取って、地割れを起こさせる。

浸食輪廻（グラウンドデス）：「干割」から更に進んで、地面を砂にして攻撃する。

砂嵐（サーブルス）：名の通りの技。

砂嵐・重（サーブルス・ペザード）：圧縮した『砂嵐』を、砲丸程の大きさの弾丸にして放つ。着弾すると熱を持たない爆発を起こす。効果範囲はかなり広い。

砂漠の向日葵（デザート・ジラソーレ）：流砂の位置を見つけ出し、創り出してしまう。

砂漠の宝刀（デザート・スパーダ）：一直線に地を這う砂の刃を飛ばして攻撃する。地面を割る程の威力。

砂漠の金剛宝刀（デザート・ラ・スパーダ）：砂漠の宝刀の強化版。

三日月型砂丘（バルハン）：右手が三日月型の形状になり、相手の水分を吸い取ってしまう。

武具融合（ウェポン・バルカ）：自身の持つ武具の本当の姿を解放する魔術。エルデの場合は聖霊デバイス『オロチ』と棍型の非人格アームドデバイス『アキレス』を融合する事で全体が真紅に染め上げられた大鎌『魂刈（ゲート・オブ・ヘル）る冥府の招き手』を現す。

『魂刈（ゲート・オブ・ヘル）る冥府の招き手』：エルデの扱う武具の本当の姿。３つの刃を持ち身の丈を優に越す巨大な真紅の鎌で、斬り付けた相手の魂やそれと連動する魔力器官その物を直接攻撃する特性を有している。この鎌の前では防御の概念は完全に無視され、命中は即ち死を意味する。

固有結界「虚像の都」

Ｉ ａｍ ａ ｐｅｒｓｏｎ ｗｈｏ ｋｅｐｔ ｓｅｅｉｎｇ

the person when old.

—我は古より人を見続けた者。

My body that loses person's frame has already shown me a lot of worlds.

—既に人の枠を逸した我が身は、我に多くの世界を見せた。

Though it is a thing different very much from my hoped thing.

—それは我が望む物とは大いに異なる物であるが。

However, therefore. I came to know.

—だが、それ故に。我は知るに至った。

the twist power of many reasons and the power of winning many fights.

—幾千幾万の理を捻じ曲げる力を、幾千幾万の戦いに勝利する現世の力を。

And, the character of a foolish person who clings to vanity.

―そして、虚栄に縋る愚かしき人の性（さがを。

Though this body is same as a foolish person the origin.

―この身も元は愚かしき者共と同じであるが。

I will part in the evolving to ‘’Exgod’’ thing sooner or later.

―何れは神上（しんじょう）へと進化する事で決別してみせよう。

Thing that it should do for me.

―それが我の為すべき事。

Therefore, I will show it to thine now.

―その為に、今は汝らに見せよう。

'Glory' that thine built up.
How it is very foolish 'Virtual image'.

―汝らが築き上げた『栄光』。それが如何に愚かしき『虚像』であるかを。

'Capital of virtual image'.

―『虚像の都』。

鎖鎌のエルデが自在に操る魔術の1つで、彼女が知り得た人の浅はかさを示す詠唱に因って発動する。

あらゆる世界で人の虚栄を見続けた彼女の人への嘲弄の念が露になっている。

この結界内では術者以外の人間は術者の意のままに第六感を操られ、上下左右前後を逆転された状態での戦いを余儀無くされる。

心象風景はエルデの頭上に逆さの栄光に満ちた都が、足元に多くの人の屍が並ぶ死んだ都が映る世界。

専用装備

『オロチ』：鎖鎌型の聖霊デバイス。金色の鎖部分と銀色の鎌部分、そして漆黒の分銅の3つのパーツで構成されている。形状はベーシックな鎖鎌だが、エルデの持つ膨大な魔力故にその強度と殺傷力は圧倒的。

『アキレス』：緑に金の装飾の為された身の丈程の棍型アームドデバイス。エルデが作成したデバイスで、ダイヤモンドすら凌ぐ硬度とアルミニウムすら凌ぐ軽さを誇る魔導金属『オリハルコン』を素材に使っており、そこから振り下ろされる一撃は鎧ごと兵士を粉砕する。

特殊能力

真言削り（スペルカット）：ありとあらゆる魔術に必要な詠唱を文字通り『カット』する技能。これに因ってどんな大魔術もたったの一言で発動出来る。

『聖ルキの瞳』：睨んだ罪人の影を消し罪人を絶命させたとされる聖ルキの伝承を模した、睨んだ相手の『不安』を具現化する能力。具現化された『不安』（睨まれた人間を黒一色にした姿で、本人を罵倒しながら襲い掛かる）は打たれ弱いが、幾らでも具現化出来る。

『元素制御（エレメントコントロール）』：体内に埋め込んだ古代遺物（ロストロギア）『コア・エレメンタル』の特性に因って勝ち得た技能。自然に満ちる魔力素を限定的ながら直接操る事と敵の展開した魔力障壁を『透過』する事が出来る様になる。

エルデの場合、埋め込んだのは『土』の『コア・エレメンタル』。故に『土』を行使したありとあらゆる術技を行使出来る。

概要：ベルカ聖王正教最暗部の組織『王佐の刃』の1人で、本名はクル＝クレール。第95管理世界「カリグス」の出身で、鎖鎌型の聖霊デバイス『オロチ』と棍型の非人格アームドデバイス『アキレス』を扱う。名の通り『土』を操る事が出来、高い戦闘能力を誇っている。長母音を伸ばすかったるそうな喋り方が特徴。腕利きのベルカ騎士で、その実力から『竜殺しのC・C』の2つ名を持っている。

その目的は《更なる進化》。『人は更に《進化》しなければ滅亡する』と言う思想の持ち主で、『王佐の刃』に協力しているのも『管理局を叩き潰せばより多くの戦争が起き、それに生き残った一握り

の人間が《進化》出来る様になる』から。

口調

「バカなヤツめ。私にこんな物が通じるとでも思ったのかー？」

「あー構わんさ。ココで滅びる様な弱い種族に世界を支える資格は無いのだからなー」

「外面をどんなに取り繕った所で、人の本質も世の真理も誤魔化せはしない。それをたっぷりと世界に叩き込んでやらんとなー」

千剣のバウム（バウム＝ドイツ語で『木』）

ＣＶ：櫻井孝宏

容姿：爽やかな印象を与えるスポーツマン風の線の細い黒髪の青年（身長は１８０ｃｍ程）。茶系統のフォーマルなスーツを着て、首には茶色の剣十字を掛けている。

年齢：２０１９才（外見年齢：１９才）

出身地：第１５管理世界『コリアス』

騎士甲冑：頭部に金の十字架を思わせる装束の付いた白い甲冑。

技

我式無鞘術壱式（がしきむそうじゅついちしき）『獅子歌歌（ししそんそん）』：斬る事に特化した技で、その切れ味は鉄をも斬り裂く。居合と言うだけあり、その太刀筋は電光石火

である。見切る事はおろか刀の閃きすら見る事は出来ない。　居合と言う特性上１対１の戦いで使い、相手の呼吸に合わせて繰り出す。

我式無鞘術弐式『飛翔』：『アニヒレイト』を振るって己の間合いにある物全てを斬り刻む技。刃の暴風はバウムの３６０度全方位を死角無く覆い尽くす。

我式無鞘術参式『三十六煩悩鳳』：アニヒレイトを持った左腕を右手で支える様にして構えてから、一気に刀を振り抜く事で前方に螺旋状に回転する真空波を飛ばす技。

「眼・耳・鼻・舌・身・意……、人の六根に好・悪・平！　また各々に浄と染……！　一世三十六煩悩」

我式無鞘術肆式『革命舞曲ボンナバン』：相手に物凄い勢いで突進してから繰り出す突き。

我式無鞘術裏壱式『夜明歌・クー・ドロア』：突きを繰り出す事で、その目標に触れなくても直線上に銃で撃った様な穴を開けてしまうと言う強力な一撃。

我式無鞘術裏六式『不倶戴天』：相手を地上３００ｍの高さに放り投げ、相手の体勢が整う前に数百の斬撃を浴びせる技。

ヴェノムバレット：魔力形質「毒」の特性を持った魔力弾。触れた物を溶解してしまう上に、連射も可能。

イロードサージ：魔力形質「毒」の特性を持った魔力を纏わせての斬撃。建物を軽く溶断する。

プワゾンフォール：毒の激流を生み出して相手を叩き潰す。毒を耐え凌げても水圧で叩き潰される。

雨虎自在の術：自身の魔力素に因って雨を降らせる術。この雨に触れた物はバウムに因って感知されてしまう事になる。術者が解除するまで雨は降り続く。

砂漠の宝刀（デザート・スパーダ）：一直線に地を這う砂の刃を飛ばして攻撃する。地面を割る程の威力がある。

砂漠の金剛宝刀（デザート・ラ・スパーダ）：砂漠の宝刀の強化版。

T（トリフィード）・ウィップ：大樹の根を操り、敵陣を蛇行させる術。

詠唱：『目覚めよ、大いなる息吹！古の封印は解き放った、根にて汝が敵を討て！』

暗闇の花粉：意思持つ毒草・飛竜花を生み出し使わせる技。敵の視神経を冒す。

錯乱の花粉：意思持つ毒草・飛竜花を生み出し使わせる技。敵の脳を冒し錯乱させる。

呪縛の花粉：意思持つ毒草・飛竜花を生み出し使わせる技。敵の筋肉の動きを弱らせ麻痺させる。

猛毒の花粉：意思持つ毒草・飛竜花を生み出し使わせる技。強い毒性を以って敵を冒す。

眠りの花：強烈な催眠効果を有する『眠りの花』を呼び出してそ

の花弁をバラ撒く技。

ブランチスピア：鋭く尖った枝を大量に発射する技。１本１本がダイヤモンドを貫通する威力がある。

木遁秘術・樹界降誕：魔力素を生命の源に、大樹を降誕させる。その成長スピードは瓦屋根に勢い良く根を張り、土の壁を楽々と突き破る程で、あっと言う間に大樹に成長する。また枝や根の末端で敵を攻撃、拘束する事も出来る。

水遁・大瀑布の術：広範囲に亘り、数十ｍと言う高さまでうねり上げた水を巨大な滝の如く一気に地面へと流れ落とす。その威力は地面が抉れ、まるで自然災害の様である。

木偶舞（でくまい）：木で創られた大量の人形を展開させて攻撃をする術。木の人形は斬られても再びくっついて動く事が出来る程生命力が強い。

生体生成系咒式第二階位『蔦葛縛（タック）』：アニヒレイトの先端より捻り合いながら絡み合う緑の蔦を生成して敵の体へと突き刺し、拘束する。

生体生成系咒式第二階位『酉兜髑（ギャフト）』：アコニチンの半数致死量を遙かに超える体重１ｋｇ辺り０．３ｍｇのアルカロイド系の猛毒を生み出し、敵の神経系を致命的なまでに侵食して毒殺する。

生体生成系咒式第四階位『死屍色鬼櫻（アムプス）』：魔力植物を生み出し、敵に絡みつかせて体液を全て吸い尽くさせる。吸い尽くした植物の蕾からは花が咲く。

生体生成系咒式第六階位『荊棘封縛緑獄檻（アムドゥシャ）』：巨大な荊（蔓に薔

薇科の植物が持つ青酸配糖体のアミグダリンやプルナシンとその加水分解酵素を高濃度で大量に含む）を生成して敵の動きを完全に封鎖した上で、荊の棘からそれを注入して化学反応に因り青酸を血中に遊離させる。そうして作り出された遊離青酸はミトコンドリアの呼吸酵素であるシトクロムオキシダーゼを失活させる事で生体活動の根源、アデノシン三燐酸の生産を阻害して死に至らしめる。荊に因る強制停止・数百に上る棘・そこからの猛毒と言う三段構えであらゆる生物を死滅させる必殺の術式。

武具融合（ウェポン・バルカ）：自身の持つ武具の本当の姿を解放する魔術。バウムの場合は聖霊デバイス『アニヒレイト』と双剣型アームドデバイス『冷徹なる王―クライムルキングス』を融合させる事で、『斬天の銀腕―（クラウ＝ソラス）』を現す。

『斬天の銀腕―（クラウ＝ソラス）』：バウムの扱う武具の本当の姿。『アニヒレイト』とは異なりシンプルな形状の上に全長も３．５ｍに縮む。その特性は『相手の取った回避行動を無かった事にする』＝『直撃させる』と言う限定的な『因果操作』であり、この宝具の前で『回避能力の高さ』は意味を為さない。

専用装備

『アニヒレイト』：大剣型の聖霊デバイス。デバイスであるにも拘らず全長４．５ｍ・重量７５０ｋｇと巨大かつ超重量で、力自慢の１０人の騎士がフルに身体強化を行って漸く動かせるレベルの怪物デバイス。バウムはこれを片腕で軽々と振り回す。鉄塊と呼ぶに相応しいサイズに加えて刃の厚みや角度に微妙な調節が施されており、使い方に因って斬・裂・刻・断・削の全ての攻撃方法を行う事が出来る。

『冷徹なる王―クライムルキングス』：漆黒の刀身を持つ双剣型のアームドデバイス。本来は初代聖王の所有していたデバイスであるために圧倒的な頑丈さを誇っており、人間には破壊不可能とされる。

特殊能力

『聖人』：聖王家の縁者及び子孫たる人間を指す。生まれつき強大（『最低でも』魔力ランクＳＳ＋）を有しており、素の身体能力もズバ抜けて高い。反面弱点もあり、『銃撃に因る肉体を貫通する攻撃』に非常に弱い（初代聖王『エレオノーレ＝ゼーゲブレヒト』は、銃撃で戦死したため）。

『聖母エリノアの加護』：初代聖王『エレオノーレ＝ゼーゲブレヒト』を産んだ『聖母エリノア』の加護を得る事で、自身が不利益を被り得るあらゆる『罰則・制約』を無力化する。

『元素制御（エレメントコントロール）』：体内に埋め込んだ古代遺物（ロストロギア）『コア・エレメンタル』の特性に因って勝ち得た技能。自然に満ちる魔力素を限定的ながら直接操る事と敵の展開した魔力障壁を『透過』する事が出来る様になる。

バウムの場合、埋め込んだのは『木』の『コア・エレメンタル』。故に『木』とそれに関係する『土』と『水』を行使したありとあらゆる術技を行使出来る。

概要：ベルカ聖王正教最暗部の組織『王佐の刃』の１人で、本名はカイト＝ゼーゲブレヒト。大剣型の聖霊デバイス『アニヒレイト』と聖王の所持していたとされる双剣型アームドデバイス『冷徹なる王―クライムルキングス』を扱う。名の通り『木』とそれを媒介と

為す『土』と『水』を操る事が出来る上に『聖人』。また初代聖王の従兄に当たる為に、その力は２０人の全聖人でも最強の部類に入る実力者。口調は基本的には丁寧で、『王佐の刃』でも穏和な部類に入る。

しかし戦闘に於いては一切の容赦が無く、老人や幼子であっても躊躇無く手に掛ける残忍な面も併せ持つ。

その目的は、『世界の真の調律』。『弱者の掲げる偽りの秩序』を破壊する事を強く望んでいる。

口調

「問題はありません。どの道コレで世界は変容します」

「戦いに必要なのは信念ではありません。相手を圧する力、只それだけです」

「分かっていますか？　アナタ方に出来る事など、何１つ無いと」

刀のフラメ（フラメ＝ドイツ語で『火』）

ＣＶ：小清水亜美

容姿：肩に掛かる位の赤毛に水色の瞳をした高校生位の少女（イメージとしてはコードギアスの紅月カレン）。赤いレザージャケットと赤いジーンズを着て、首から赤い剣十字のロザリオを下げている。

年齢：２０１８才（外見年齢：１８才）

出身地：第１５管理世界「コリアス」

騎士甲冑：背に『零』と書かれた赤い羽織と白い鉢巻

技

剣戟『梅の木』：周囲に枝の如く広がる無数の衝撃波を飛ばして攻撃を行う技。

櫻花（おうか）：２本の刀を超高速で振るって『梅の木』の１０倍の速度を誇る攻撃をする。その様はあたかも億万の花が吉野の山に散るかの如く。

虚空：『櫻花（おうか）』の１０倍の速度を誇る必殺。名前の由来は、この技の後には塵１つ残らない事から。

「虚しさだけが、我が前を過る」

剣戟―無量：地面に２本の刀を突き刺す事で巨大な刀を展開させ、その巨大な刀に因る無数の斬撃を繰り出す。速度＆質量に因る強力な攻撃。

破道の三十一「赤火砲」：敵に向けて赤熱する火球を放つ。追尾性能は無いが弾速が速く、連射も可能。加えて暗闇ではライト代わりに使用する事も可能。

詠唱：「君臨者よ　血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ　焦熱と争乱　海隔て逆巻き南へと歩を進めよ」

破道の五十四「廃炎」：前方に楕円状の焔を飛ばして攻撃する。

破道の九十六「一刀火葬」：建物の数十倍のサイズがある超巨大な刀の形をした火炎を噴出させる技。焼いた我が身を触媒としてのみ発動可能な禁術。

炎熱地獄：周囲に大量の巨大な火柱を発生させる技。広範囲ゆえに敵味方問わず巻き込む恐れがあるので、使用するにはあらかじめ準備が必要。

始解：もう1つの武器である斬魄刀の第一段階解放の事。基本的に「しろ、（斬魄刀の銘）」の解号でそれぞれの形状に変形する。

フラメの場合は、解号が「天を薙げ『鴇羽』」。解放すると刀身が白く輝き、先端が三ヶ月の様な形状に湾曲した刀に変化する。この状態になると全身に炎を纏って戦闘能力を上げる事が可能になる。

卍解：斬魄刀の能力を最大限に引き出す術。単に斬魄刀の声を聴き刀と意志を交わすだけではなく、刀を己の力量に因って従える事が必須となる。卍解すれば斬魄刀の性能は大幅に上がるが、その霊圧に比例した巨大さが弱点となってしまう場合がある。その巨大さ故にその動きの全てを完全に把握する為には、卍解を会得してから更に十余年の鍛錬を必要とする。

また、斬魄刀の銘と形状も変わる。フラメの場合は『鴇羽・劫火翼（ときは・ごうかよく）』と言う銘になり、背中から炎の双翼が噴き出す。

火吹の小槌：斬魄刀「鴇羽（トキハ）」を振りかぶって、強大な爆炎を巻き起こして攻撃する。

返し刃・双龍閃：刀を振り上げると共に斜め上に巨大な火柱を噴出

させる技。

七之太刀・天馬：すれ違いざまに相手へ刀を振り下ろして一閃する技。

魔粧・煉獄：広範囲を紅蓮の炎で焼き払う技

詠唱：「我が手に集え魔界の黒狼、抗う者を焼き尽くせ！　喰らえ、魔粧・煉獄！！！」

魔界粧・轟炎（まかいしょう・ごうえん）：ヒノカグツチと鴉羽を使って空中に魔法陣（大きな円の内側に高速回転する5つの小さな円が浮かぶ物）を描き、そこから地獄の火炎を呼び出す魔術。

詠唱：「巻き起これ、焼き払え。全てを赤く染め上げろ、魔界粧・轟炎！」

鳳凰天駆：炎の気を体に纏い、上昇してから斜め下に下降しつつ飛び蹴りを浴びせる技。

火遁・煙幕烈風：竜巻の様な勢いを持つ炎を吐き、あらゆる物を紙屑の様に焼き尽くす術。

火遁・霞炎舞の術：印を組み、口から吐き出す霧の様な物をロウソク等の火元に噴射する事で一気に火力を倍増させ辺りを炎の海に変えてしまう術。

火遁・火龍炎弾：火龍の吐き出す炎の様に物凄い勢いの熱と炎を吐き出す術。

火遁・豪火球の術：口から巨大な火炎球を吐き出す術。使用法は印を組み体内で魔力素を火炎に変化させてから口腔から胸の辺りで一度止め、その後一気に口から吐き出すと言った手順。

火遁・鳳仙火の術：口から同時に何発も火炎の球を吐き出す。それらを魔力素で統制して命中率を上げたり炎の中に武器を隠したり、使い方は色々ある。

火遁・龍火の術：竜が炎を吐いたが如き物凄い量の炎で敵を燃やす。そのスピードは一流の騎士が技の発動に気付いても避ける事が出来ない程速い。

火遁・豪龍火の術：印を組んでから体内で魔力素を圧縮、口から龍の頭部の形をした炎弾を飛ばして攻撃する火遁忍術。その熱は積乱雲を生み出させる程高熱。ちなみに連続発射も可能。

燃える天空（ウーラニア・フロゴシース）：巨大な飛行船をも呑み込むくらいのサイズの大規模な超高温火炎をおこす広範囲焚焼殲滅魔法。高等な呪文だが、多少難易度は低い。ちなみに下記の詠唱は古代ギリシア語となっている。

詠唱：「契約に従い　我に従え　炎の覇王（ト・シュンポライオン　デイアーコネート・モイ　ホ・テユラネ・フロゴス））来れ（エピゲネーテートー）浄化の炎燃え盛る大剣（フロクス・カタルセオ中ス・ファイア・フロギネー）逆れよ　ソドムを焼きし（レウサントーン　ピユール・カイ・テイオン）火と硫黄　罪あり し者を　死の塵に（ハ・エペフレゴン・ソドマ　ハマルトートウス　エイス・クーン・タナトウ）」

炎剣：ルーン魔術の１つ。文字通りの３０００℃の炎の剣を作り出し、振るう魔術。また２本同時に作り出す事も出来、交差させる事で火山の奔流にも等しい爆発力を生み出す。ある程度形状を変化さ

せる事も出来、これで斬りつけた物は白い灰か黒い炭と化す。

詠唱：「炎よ　巨人に苦痛の贈り物を（Ｋｅｎａｚ　ＰｕｒｉＳａｚＮａＰｉｚＧｅｂｏ）」

２本目の炎剣の詠唱：「灰は灰に　塵は塵に　吸血殺しの紅十字（ＡｓｈＴｏＡＳｈ　ＤｕｓｔＴｏＤｕｓｔ　ＳｑｕｅａｍｉｓｈＢｌｏｏｄｙ　Ｒｏｏｄ）」

魔女狩りの王（イノケンティウス）：ルーンを刻んだ紙を周囲に張り巡らせ、摂氏３００００℃の炎を操る強力な魔術。目標を自動追尾し、ルーンの加護がある限り永遠に燃え続ける炎の巨人を繰り出す。形状は人型で、真紅に燃え盛る炎の中に重油の様な黒くドロドロした人間のカタチをしたモノが芯になっている。紙の枚数の多少に因って攻撃力・持続力が増減する上に紙の設置個所の近辺でないと展開出来ないため、拠点防衛・攻略・籠城戦以外では真価を発揮出来ない。またこの術式の使用者は代償として運動能力の著しい低下や、身体年齢の老化を招く。

詠唱：「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ（ＭＴＷＯＴＦＦＴＯＩＩＧＯＩＩＯＦ）。それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり（ＩＩＢＯＬＡＩＩＡＯＥ）。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり（ＩＩＭＨＡＩＩＢＯＤ）。その名は炎、その役は剣（ＩＩＮＦＩＩＭＳ）。顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ（ＩＣＲＭＭＢＧＰ）」

赤ノ式：陰陽術の魔術。最初に紙吹雪を使い穢れを祓い、「亀」・「虎」・「鳥」・「龍」を象った折紙を設置してから呪を紡ぐ事に因り超長距離砲撃の魔術を放って範囲状の物体を吹き飛ばす。長射

程で威力も高いが、準備に手間が掛かる欠点がある。

詠唱：「――場ヲ区切ル事。紙吹雪ヲ用イ現世ノ穢レヲ祓エ清メ禊ヲ通シ場ヲ選定。――界ヲ結ブ事。四方ヲ固メ四封ヲ配シ至宝ヲ得ン。――折紙ヲ重ネ降リ紙トシ式ノ寄ル辺ト為ス。――四獣ニ命ヲ。北ノ黒式、西ノ白式、南ノ赤式、東ノ青式。――式打ツ場ヲ進呈。――凶ツ式ヲ招キ喚ヲ場ニ安置。――丑ノ刻ニテ釘打ツ凶巫女、其ニ使役スル類ノ式ヲ。――人形ニ代ワリテ此ノ界ヲ。――釘ニ代ワリテ式神ヲ打チ。――槌ニ代ワリテ我ノ拳ヲ打タン（それではみなさん。タネもシカケもあるマジックをごたんのうあれ。ほんじつのステージはこちら。まずはメンドクセエしたごしらえから。それではわがマジックいちざのナカマをしょうかい。はたらけバカども。げんぶ・びゃっこ・すざく・せいりゅう。ピストルはかんせいした。つづいてダンガンをそうてんする。ダンガンにはとびっきりきょうぼうな、ふざけたぐらいのものを。ピストルにはけっかいを。ダンガンにはシキガミを。トリガーにはテメエのてを）」

邪王炎殺煉獄焦：拳に炎を纏わせ、その拳で乱打する技。魔界の黒炎を使って使用する。

邪王炎殺剣：自らの持つ霊圧と炎をドッキングさせて炎の剣を作り出す技。

邪王炎殺黒龍波：邪王炎殺拳最大奥義。巨大な黒い炎（魔界の炎）の龍を飛ばして攻撃する。この炎で攻撃を目的にする訳でなく、どちらかと言えばこの龍を自分に放ってパワーアップさせるための材料として使われる。物凄い威力の技だが、術者が未熟だと己の身体を傷つけてしまう恐れがある。また使用後は体力&霊圧を回復するため暫くの間冬眠しないといけないと言う弱点が存在するが、術者のレベルが高ければ一発撃った程度ではすぐに冬眠しなくても大丈

夫となる。

八竜：とある忍者一族の長に継承される力。その正体は無念の内に果てた『炎術士』と呼ばれる存在の魂が火竜へと姿を変えた物。本来はそれぞれが強い自我を持っているが、フラメが扱うのはその魂の型を模した物である為に自我は無い。因みに特定の法則に従う事で合成も可能（「焔群」＋「砕羽」で炎の鎖鎌、「虚空」＋「崩」でレーザーの同時発射など）。

竜ノ炎壱式「砕羽」（りゅうのえんいちしき「さいは」）：腕から炎の刃を出す。

竜ノ炎弐式「崩」（りゅうのえんにしき「なだれ」）：手から無数の火炎の弾丸を飛ばす。特大の火球に切り替える事も可能。

竜ノ炎参式「焔群」（りゅうのえんさんしき「ほむら」）：鞭の様な形状の炎を出す。腕に巻き付けてパンチ力の強化を行う事も可能。

竜ノ炎肆式「刹那」（りゅうのえんししき「せつな」）：火竜「刹那」を呼び出し、「刹那」の目を見た者の全てを「瞬炎」で一瞬にして焼き払う。刹那は人間の時に盲目であったためか視覚以外の五感が非常に鋭敏で、幻術の類が通用しない。

竜ノ炎伍式「円」（りゅうのえんごしき「まどか」）：複数の火球で「面」を作り、それを障壁とする。「面」の強度は非常に高いが、構成している「点」を為す火球を消されると「面」自体が小さくなり中の人間が潰れてしまう欠点がある。竜ノ炎陸式「畧」（りゅうのえんろくしき「るい」）：術者の念じた通りの姿の幻影を生み出す幻炎。但し飽くまでも「真似る」だけなので、予想外の行動には対応出来ない弱点がある。

竜ノ炎漆式「虚空」（りゅうのえんしちしき「こくう」）：火竜「虚空」を呼び出し、その口から強力なレーザーの如き火炎を放射する。単発でも圧倒的な火力を誇る一方でチャージにやや時間が掛かるが、「崩」と組み合わせる事で1度に複数発の発射が可能。

竜ノ炎捌式「裂神」（りゅうのえんはちしき「れっしん」）：火竜「裂神」以外の全ての火竜を呼び出す事で行使可能。その特性は人の魂を炎へと変える「不死鳥」の特性を持つ。

武具融合（ウェポン・バルカ）：自身の持つ武具の本当の姿を解放する魔術。フラメの場合は聖霊デバイス『ヒノカグツチ』と斬魄刀『鴇羽』の卍解形態である『鴇羽・劫火翼』を融合させる事で、『雲払う神護の刃（クサナギノツルギ）』を現す。

『雲払う神護の刃（クサナギノツルギ）』：フラメの扱う武具の本当の姿。刀身が極めて透明で、光の角度に因って刀身が消えて見える。その特性は陽光の下での自身の強化と使用者への近接攻撃以外の攻撃の無力化。但し体力を極度に消耗する為に、長時間の使用は不可能。

専用装備

『ヒノカグツチ』：日本刀型の聖霊デバイス。赤と金で彩られた刀身を持つ片刃の太刀。フラメの力を示すかの如く展開中は常に赤々と燃える炎を纏っている。

斬魄刀『鴇羽』：フラメの持つ斬魄刀。解放前は真紅の鞘に納められた普通の刀。『本当の炎熱系最強最古』の斬魄刀であり、その力は並の斬魄刀など一蹴する程強力。実体化も可能。

鴇羽（実体化）：斬魄刀『鴇羽』が実体化した姿。黒い袈裟を纏い顔の右半分に卒塔婆を着けた黒髪の青年の姿をしている。短気で好戦的な一方、フラメを『己の同志』と考えてその目的のためなら全てを捧げる覚悟を有している。

特殊能力

『聖人』：聖王家の分家の血を引く人間を指す。生まれつき強大（『最低でも』魔力ランクSS＋）を有しており、素の身体能力もズバ抜けて高い。反面弱点もあり、『銃撃に因る肉体を貫通する攻撃』に非常に弱い（初代聖王『エレオノーレ＝ゼーゲブレヒト』は、銃撃で戦死したため）。

『聖エルミナの瞳』：生涯唯の1度も傷を負わなかった剣豪・聖エルミナの伝説を再現しており、透視・近未来『予測』・ずば抜けた感知能力の3つを1度に行使出来る。大変強力だが負担が大きく、体力を消耗する欠点がある。

『元素制御（エレメントコントロール）』：体内に埋め込んだ古代遺物（ロストロギア）『コア・エレメンタル』の特性に因って勝ち得た技能。自然に満ちる魔力素を限定的ながら直接操る事と敵の展開した魔力障壁を『透過』する事が出来る様になる。

フラメの場合、埋め込んだのは『火』の『コア・エレメンタル』。故に『火』を行使したありとあらゆる術技を行使出来る。

概要：ベルカ聖王正教最暗部の組織『王佐の刃』の1人で、本名はカレン＝ロット。『王佐の刃』でも上位に入る実力者で、リーダーである『鎧のシュヴァルツ』との付き合いも長く信頼も厚い。日本刀型の聖霊デバイス『ヒノカグツチ』と斬魄刀『鴇羽（トキハ）』を扱う。名

の通り『火』を操る事が出来、高い戦闘能力を誇っている。
表情の変化が非常に乏しく、丁寧な口調の倒置法で話すクセがある。
が、その態度は全て他者を自らの目的の為に利用する際の演技。
本性は苛烈にして攻撃的で、英語の入り混じった独特の口調。聖王家の分家『ロット家』の長女にして（２代目聖王の）王位の継承権すら持っていたが、その残虐かつ好戦的な性格故に国を追放された過去を持つ。
その目的は自分達の長である『鎧のシュヴァルツ』と同じく『果て無き戦争』。

口調（芝居）

「お任せ下さい、雑魚の始末はこの私に」

「困った物です、真実を知らぬ無知な輩には」

「１つだけ叶えて差し上げましょう、アナタの願いを」

口調（本性）

「Ｗｈａｔｓ　ｕｐ？（訳：よう）　最期の晩餐は楽しんだ？」

「Ｃｏｍｅ　ｏｎ！　Ｉｔ，ｓ　ｎｏｔ　ｏｖｅｒ　ｙｅｔ！（訳：来いよ！　まだ終わってないぞ！）」

「Ｈｕ、雑魚かと思ったら存外やるじゃないか」

「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？　Ｌｅｔ’ｓ　ｋｉｌｌ　ｔｈｅｍ　ａｌｌ！（訳：用意は良いか？　皆殺しにするぞ！）　Ｙａ－ｈａ！」

「Ｉ’ｍ　ｔｈｅ　ｏｎｅ－ｗｉｎｇｅｄ　ｐｈｅｏｎｉｘ！（訳：私は……片翼の不死鳥だ！）」

あえてツッコミを――長え！（笑）

刀のフラメで心が折れてテスタメントのライフはもう限界よっ！（笑）

うん何が言いたいかと言うと、刀のフラメから編集が……（汗）

き、気にしちゃダメさっ！（笑）

て、てな訳で魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　禁断の刃　からでした～～♪

魔法少女リリカルなのはＡ’ｓ　新たなる夜天の騎士（作者、ほっぱー）

八神　新

２５歳

ー所属ー

時空間管理局地上本部

首都防衛隊及び質量兵器専門特務対策課

二等空尉

魔力値ＳＳ

ーデバイスー
『ウルスラグナ』
ＡＩ非搭載型アームドデバイス
形状は両手足を覆う黒い手甲と具足
ーバリアジャケットー
黒いコートとワインレッドのマフラー
それ以外のバリアジャケット部分は管理局の制服

ー備考ー
八神はやての兄
多少落ち着いたものの口の悪さと手の早さは相変わらず
管理局の為ではなく『家族と己が守るモノの為に闘う』事を信念に、はやての傍にいる為に管理局に属している
故に昇進に興味がなく、昇進は他のヴォルケンズに任せている為階級は長い間二等空尉から変わっていない
家族の事は変わらず溺愛しており、休日は皆で出掛けるなど仲がいい
最近部下を持たされ、中々休みが取れないのが悩みのタネ
本来ならはやてと同じ捜査官志望だったのだが採用されず、その不

満をよく同僚であるシグナムに漏らしている

とある理由から質量兵器対策課には出向という名目で駆り出される事が多く、さらに休日が削られている

ーバトルスタイルー

クロスレンジで無類の強さを誇るものの、遠距離攻撃の手段が牽制程度の威力しかない魔力弾のみであり機動力と遠距離攻撃を併せ持つ相手は苦手としている

魔力場を使用した高速移動はさらに洗礼され、フェイトに匹敵するスピードを誇る

多対一も苦手ではないものの一対一の戦闘でこそ真価を発揮するタイプ。

ふ、ふふ……。さぁ、どんどん行こうぜ。魔法少女リリカルなのはA's 新たなる夜天の騎士からでした〜〜♪

魔法少女リリカルなのは Ｂｒａｖｅ（作者、ｍｅｂｉｕｓ）

日比野未来

２２歳

１１歳の時に両親を亡くしており、その事がトラウマになっていて親しい者の死に敏感になっている。その為、仲間を守る為なら自分の命さえ惜しくないという考えを持っている。事実、１４歳の時に巻き込まれたある事件では仲間を自身を犠牲にしてまで守り、八年間次元の狭間を漂う事となった。

かなりの鈍感で彼に好意を寄せる女性達の気持ちには全く気づいていない。ただ、戦闘に関しては鋭い。

幼いころは父親から剣術を中心に格闘術と槍術を習っていて、特に剣術の腕は一級品。
使用するデバイスはメビウスリング、カリバーン。
メビウスリング
未来の母が製作したベルカ式のインテリジェントデバイス。待機形態は青い腕輪で左腕に着けている。剣型のブレードフォーム、手甲型のナックルフォーム、三つ叉の槍型のトライデントフォームがある。未来が一番使うのはブレードフォーム。
カリバーン
古代ベルカよりも昔に製作されたと思われるロストロギアデバイス。管制人格はルナ。基本形態は銀色の両刃剣であるが、様々な機能を搭載している。デバイスに融合させる事で強化できる『デバイス付加』という機能を持つ。

相原のぞみ
２２歳
未来の幼馴染。肩まである茶髪をポニーテールにしている。未来に好意を寄せているが、素直になれずについ手が出てしまう。内心では自身を犠牲にしてまで他者を守ろうとする未来の事を心配している。
未来と一緒に未来の父から格闘術を習っており、格闘術ならば未来の剣術と互角の腕前を持つ。
ノア
未来の母がのぞみの為に製作したベルカ式のインテリジェントデバイス。メビウスリングと同じく三つの形態を持っている。その形態は手甲型のガントレットフォーム、片刃剣型のソードフォーム、手甲から三つの爪が伸びたクローフォームの三つで、のぞみはガントレットフォームをよく使う。

ヴェル・ウィルレイン

２５歳
管理外世界出身であり、その世界の王族。次期王位継承者であったが、１６歳の時に起こった大規模次元震により世界を失った。その後は弟妹達と共に次元世界を転々としていて、１７歳の時に地球で未来達と出会った。
五人兄妹の長男で、弟妹思いの良い兄である。
武に秀でており、『武神』の別名を持っている。基本的に武器はなんでも扱えるが、もっとも得意とする得物は刀。エース級の実力を持つ弟妹達の師匠でもあり、その実力は未知数。
使用デバイスはツルギだが、その他にもロストロギア指定の固有武装を幾つか保有している。
稀少技能『存在変換』
物質を分解、その性質を変え全く別の物質へと変換する稀少技能。元となる物質が必要だが、空気中の物質や魔力を変換する事もできるので基本的にはどこでも使える。また、その性質上魔力に変換する事もできる為、ほぼ無尽蔵の魔力を持つ。
ツルギ
ベルカ式のインテリジェントデバイス。ヴェルが両親から渡されたデバイスで、形見でもある。鍔のない片刃の剣型の１ｓｔフォーム、刀身が２ｍはある大太刀型の２ｎｄフォームがある。

ふふ、三万文字越えなんて久しぶり♪（虚ろな目）
魔法少女リリカルなのは　Ｂｒａｖｅからでした～～。
魔法少女リリカルなのは　Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ　Ｏｆ　Ｓｗｏｒｄ　Ｅｍｐｅｒｏｒ（作者、樟葉櫂）

名前：レン・Ｔ・ハラオウン（Ｒｅｎｎｅ　Ｔ．　Ｈａｒｌａｏｗ

n）
年齢：２５歳（外見年齢）
脳内ＣＶ：緑川光さん
性格：基本的に面倒臭がり。だが、何だかんだで面倒見は良い方。
外見：金髪のロングヘアーに紅色の瞳。髪型はストレートか、ＳｔＳのフェイトと同じように先端付近をリボンで纏めたもの。
服装：普段から軽装を好んでおり、スラックスにシャツと言うラフな格好で旅を続けている。
魔力変換資質：電気、氷結

原作設定

“剣帝”の二つ名を持つ凄腕の魔導騎士で、フェイトの実兄。
神々の名と力をその身体に宿すが、現在ではまともに力を行使する事すら出来ない。
時空管理局で数々の功績を上げた現在でも、十年前と変わらない執務官長の椅子に腰を据えている。
過去に様々な薬物を投与されて身体をおかしくされた挙句、駒のように使い倒した母親……プレシア・テスタロッサを嫌悪している。
家族や仲間との絆を大切にしており、家族や仲間の為なら死すらも恐れない。
プロジェクトＦの遺産として扱われる事を嫌っており、そう言った事を口にした輩は容赦なく叩き潰す。

自分の実力が一番効率良く発揮出来る多対一の戦闘を好き好んでおり、一対一の戦闘は相応の実力者が相手で無い限りはまず受けない。
次の世代を立派に育てる事を自分の使命としている。故に、普段から積極的に後輩達へ自分の技や知識を伝授している。

クロスリレー設定。

とある魔導師によって、サクラに掛けられた目覚めぬ呪いを解く為に、サクラと共に当ての無い旅を続けていた。
旅を続けて遂に呪いを解いたが、サクラが目覚める前に行方をくらます。
その後は色々な時代を彷徨い続けていたが、とある出来事をきっかけに放浪に終止符を打つ事になる。

戦闘スタイル

ミッドと古代ベルカの双方の術式と希少技能を行使した、不規則な攻撃パターンで相手を手玉に取るのが得意。
大抵の相手は本気を出さずに相手をする事が多いが、それ相応の実力者に対しては自分の全力を持って相手をする。
デバイスを合計で六個所持しているが、通常の戦闘（今回のクロスリレー）で使用するのはバルディッシュ・アサルトシュラウド、ラグナロク、エルシウスのみ。

デバイス

ラグナロク　剣型

レンが最も古くから相棒として使う、ベルカ式アームドデバイス。
非常に高性能であり、ユニゾンデバイスで無いのにも関わらず、ちゃんとした言語を話せる。
普段はレンの首からぶら下がっていて、助言やら余計なアドバイスやらをする。
ベルカ式カートリッジシステムを採用しており、一回における最大リロード可能数は驚異の十三。
カートリッジは六発装填のオートマティックタイプで、ロード途中

での新たな薬莢の補充も可能。
レン本人曰く、ラグナロクは“本当の最後の切り札”であるらしいが、真意は不明。
また、バルディッシュ・アサルトシュラウドと共に、機体の詳細データは謎に包まれている。
待機状態は剣の型をしたペンダント形状。

バルディッシュ・ＡＳ（アサルトシュラウド）　槍型

ラグナロクと同時期より、レンと共に戦うミッド式インテリジェントデバイス。通称、シュラウド。
フェイトのバルディッシュの元となったデバイスであり、通常形態以外の殆どがバルディッシュと同一。
しかし、中身はレンの高度且つ大規模な魔力運用に耐えられるよう、頑丈に作られている。
カートリッジは、十五発装填のオートマティックリボルバータイプ。
レンが一番信頼を置いている機体であるが、現在は後述の“エルシウス”をメインで使う事が多い。
ラグナロクと同様に、機体の詳細データについては一切謎に包まれている。
待機状態は、バルディッシュと同じで金色で三角形のバッジ形状。

エルシウス　杖型

カートリッジシステムを搭載した、ミッド・ベルカの両方に対応したインテリジェントデバイス。
レンが所持するデバイスの中では一番新しく、性能も最新鋭の機体と遜色ない。
アルタイルのベースとなった機体でもあり、アルタイルとは実質的な姉妹機でもある。

詳細データは謎に包まれているが、アルタイルとほぼモード形態等は同一と言う噂が存在。
待機形態は銀色の翼の形をした指輪。

名前：サクラ・Ｔ・ハラオウン（Ｓａｋｕｒａ　Ｔ．　Ｈａｒｌａｏｗｎ）
年齢：１７歳（外見年齢）
脳内ＣＶ：茅原実里さん
性格：明るいが、少し腹黒くて面倒臭がり。
外見：黒髪のツインテールに紺色が若干混じった黒色の瞳。髪型はほぼツインテールで固定。
服装：黒いマントの下に、黒色のシャツとスカート。ハイソックスを履いているが、ブーツで殆ど隠れている為あまり目立たない。
魔力変換資質：電気

原作設定

レンとフェイトの妹で、ハラオウン家の末っ子。“剣皇”の二つ名を持つ。
兄譲りの剣技と魔法を操り、出世街道を突き進む航空隊の中でも注目度ダントツ一位の新星。
階級に関係なく、自分はあくまでも一兵卒と言う考えを持っており、階級だけでエリートと扱われる事を嫌っている。
故に階級関係なく仕事が出来る六課や、今の所属部隊をとても好き好んでいる。
多対一から一対一まで何でもこなせる為、自ら進んで所属する部隊内での便利屋ポジションを引き受けている。

常日頃から自身の腕を高める為の鍛錬だけは怠らず、いつの日か兄を倒すと言う目標に向かって日々前進中。

クロスリレー設定

レンと共に世界を旅している途中で、とある魔導師に解かない限りは永遠に目覚めない呪いを掛けられる。
しかし、呪いが解けて見知らぬ街で目覚めた時には、一緒に旅をしていた筈のレンの姿は無かった。
兄を探して様々な時代を渡り歩く中で、現代ミッドチルダ時代に辿り着く。
その後は姉であるフェイト達と共に行動する事になったが、その最中で別れたレンと再会する……。

戦闘スタイル

兄と同じくミッドと古代ベルカの双方を扱う事が出来るが、完全にマスターしているのは古代ベルカの方のみ。
複数人数での戦闘では後方支援から前線の切り込み隊長まで何でもこなし、単独でもストライカー級の相手と互角に戦う程の実力を持つ。
デバイスは専用機“アルタイル”のみで、複数のデバイスを持ちかえて戦うレンと比べて隙は格段に少ない。

デバイス

アルタイル　杖型

シュラウドとラグナロクで培った技術でレンが完成させた、サクラ専用機。

レンが先駆けて完成させたエルシウスとは、実質的な姉妹機でもある。
二つの異なる魔法を一つのデバイスで扱えるようにした為、構造はとても複雑。
サクラの脳波を受信し、瞬時にモードを切り替える特殊なシステムを搭載している。
その為、サクラ以外では波長がほぼ同じであるレンとフェイトにしか扱えない代物。
片手剣、双剣、大剣に変化させる事が出来るが、双剣と大剣はフルドライブを使わないと変化させる事が出来ない。
カートリッジは十二発装填のオートマティックタイプ。
待機形態は複数あり、普段は金色の龍の牙を形取ったペンダント。
それ以外にもう一つ、ハヤブサを形取った水色のブレスレットにもなる。

ミッド式魔法の行使に比重を置いた、モード１ｓｔ『アヴィオール』
ベルカ式魔法の行使に比重を置いた、モード２ｎｄ『アルファルド』。
そして、ミッド式とベルカ式の同時使用を前提とした、モード３ｒｄ『アルクトゥルス』。
更にミッド・ベルカの双方のフルドライブ専用のモード４ｔｈ『カノープス』。

この四つのモードに加えて各モードの下には、武器形状を示す三つのナンバーがある。

アヴィオール：Ｎｏ．１、ヴァジュラ（杖）　Ｎｏ．２、プリムスラーヴ（杖）　Ｎｏ．３、ベテルギウス（杖）
アルファルド：Ｎｏ．１、オルクス（片手剣）　Ｎｏ．２、ラーグルフ（両手剣）　Ｎｏ．３、クリーヴァ（両刃剣）

アルクトゥルス：Ｎｏ．１、クトネシリカ（杖）　Ｎｏ．２、ミツルギ（両手剣）　Ｎｏ．３、ファイアブランド（両刃剣）
カノープス：Ｎｏ．１、エッケ・ザックス（大剣）　Ｎｏ．２、アシュケロン（双剣）　Ｎｏ．３、フィア・ライオット（双両刃剣）

基本的にモード１ｓｔと２ｎｄのみ使い、３ｒｄと４ｔｈは滅多な事が無い限りは使わない。
武器形状によって使える魔法に差異は無く、ミッド式とベルカ式のみで分類されている。

ここで一つ問題が。こって一部、四万文字以内では無かったけ……？

とりあえず、やってみよう！

魔法少女リリカルなのは　Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ　Ｏｆ　Ｓｗｏｒｄ　Ｅｍｐｅｒｏｒからでした～～♪

リリカルなのは　スクライア（作者、あああああああああ！）

名前：セロ・スクライア
性別：男
魔力ランク：ＡＡ
年齢：１６歳
身長：１６８
性格：基本的に言えば年相応の少年でツッコミではある。細かい作業が苦手で言動がスクライアらしくない事が多い。一方では女性への免疫はあまり無く情調は小学生並み。また、ヴィヴィオなどは子供と認識しているため対象外。ユーノ繋がりでなのは達とも顔見知りである。ただし、なのは達は、強くて怖い人と認識している。
容姿：同じスクライアであるため髪や目の色や容姿はユーノに近い

が目つきは悪い。
デバイス・インテリジェントデバイス・”ブレイブハート”インテリジェントデバイス・”ルシファー”

デバイス
ブレイブハート：リリース時は緑の宝石で起動時は短刀。性格はやや皮肉屋では、マスターであるセロの事は大事に思っており、彼のいう事には忠実である。バリアジャケットは構成してない。

ルシファー：黒い刀で柄に？と書かれておりリリースモードはない。古代ベルカ製のデバイスである。性格は偉そうでマスターであるセロを基本小僧呼ばわり。また、騎士甲冑の構成はこちらが担当している。その時は蝙蝠をイメージにした青い鎧で兜で素顔がわからないようになっている。

名前：ザラック
性別：ＡＩ状は男
魔力ランク：ＡＡ＋
性格：正々堂々とした戦いを好み武人としての生きざまを望みんでいる。
容姿：緑を基調とした強大な蠍（さそり）型と人型の二つの形態を持ったアルハザード制のロボット。武装はほぼ近接用となっているが、尾の部分に遠距離用の武装もある。

クロスリレー設定

現代では、破壊されており、壊れた未来時代にて、修復され、マザーコンピューター「Ｆａｔｅ」の命のもとに、他のロボット達と同様に人類を抹殺を開始している。

名前：デミル・オズマ
性別：男
魔力ランク：Ｓ
年齢：１７
身長：１７０
性格：真面目で、大人しく、物腰が柔らかい性格ではあるが、一度一つの集中すると、まわりが見えなくなる。また、若干天然入っている部分もあり、本人には他意もなく、面と向かって褒め言葉や皮肉を言う。小さなころから、よく女性と間違えらていたため、トラウマになっているためタブー。現在は、ルネの後任で、ティアナの補佐官をやっている。
容姿：首のあたりまで伸びた銀髪に、緑と淡いピンク色のオッドアイ。比較的に整った中性的な顔立ちに、体つきをしているため、一見女性に見間違えられる。
デバイス：ストレージデバイス・”ＭＳ００６”

デバイス
ＭＳ００６：ストレージデバイスのためＡＩは積んでおらず、リリースモード時は腕輪、起動時は、ザクのヒートホークに似た斧の形をしている。

よっし、後もうちょい♪
リリカルなのは　スクライアからでした～～♪

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔ（作者、月兎）

シノブ・ユキタカ（忍・雪鷹）
性別：男
年齢：２４歳

髪：光沢のある白
階級：空曹長（実際は一等空尉）
所属：機動六課ロングアーチ（ 情報部情報一課より出向
役職：特務部隊『志乃火』隊長
コールサイン：ロングアーチ１３（機動六課）アイス・ダガァ（情報一課）
魔力変換資質：氷結
術式：ミッドチルダ式
魔導師ランク：空戦Ａ＋

その他
地球出身の母（非魔力）と管理局の魔導師との間に生まれた私生児。幼少の頃を地球で過ごし、魔力を持っていたため母親と一緒にミッドチルダに強制的に移住させられる。以後、色々あって訓練校に入校する。高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウンと訓練校時代の同期で一対一の模擬戦では負けなし。二対一でも勝率は五分五分だった。訓練校卒業後、情報部に配属され、諜報員として養成される。純魔力攻撃が極めて苦手なので砲撃・射撃魔法は使えません。魔力変換した氷を撃ち出す物質加速型の射撃魔法だけ使えます。

よーしよし、さぁ、もうすぐゴールだぜ！
魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　Ｂｌａｄｅ　Ｈｅａｒｔからでした～～♪

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｃａｌｉｖｅｒ＆ａｍｐ；Ｐｈａｎｔｏｍ（作者、二階堂）

神藤昶
年齢：２２歳（クロス時は紆余曲折あって１７歳当時の体となる）

イメージＣＶ：神谷浩史
性格：明るくノリのいい性格で、周囲への気配りも欠かさないがたまにどこか抜けている。さらに、周囲の恋愛事情には鋭いが自分の恋愛事情には妙に疎い。騎士として、自分が守りたいと思った人や物は全力で守り抜くという信念を持っている。
魔力変換資質：風、炎熱

――――原作設定――――
なのは達の地球での後輩であり、シグナムの弟子。ＳｔＳから六年後、『シャドウ』と呼ばれる異生物との戦いの最中、ティアナ達ＦＷメンバーと出会い、機動六課でなのは達三人と再会。目的が同じことを知り、嘱託魔導師となって共に戦うことを決意する。
彼がシャドウと戦う理由は幼馴染みの女性、赤羽千華が奪われた記憶と感情を取り戻すことであったが、取り戻した後も機動六課の一員として事件解決の為に戦うことを決める。そして、古代ベルカ時代から続く陰謀を止める為に戦うことになっていく。

――――クロス設定――――
タタリ編終了後、何らかの原因によって古代ベルカ時代に飛ばされ、肉体年齢が１７歳まで若返ってしまう。タイムパラドックスが起こり、千華が消えかけたことを経て、時を渡り戦い抜く決意を固める。

――――戦闘スタイル――――
シグナムの弟子ということもあり、戦闘スタイルはもちろん剣技。宝具内臓型インテリジェントデバイス『エクスカリバー』の担い手であり、特殊ユニゾンデバイス『アルトリア』のマスターでもある

が、最初に古代ベルカに飛ばされた時以来アルトリアとは離ればなれになってしまっている。
主に希少技能による投影と、戦いの中自身で編み出した剣技で戦うが、弓も扱うことができる。

名前：赤羽千華
年齢：２２歳（こちらも１７歳当時の体に戻っている）
イメージＣＶ：キタエリ
性格：いつも強気で多少横暴だが、実はかなり優しく臆病でもある。
感情表現が豊かで、表情がいつもくるくる変わる。

――――原作設定――――
昶の幼馴染みで、同じくなのは達の後輩。五年前、シャドウに襲われたことで記憶と感情を封印されたが、紆余曲折あって、最後は昶の手によって封印が解かれた。

その後、シャマルの検査によりリンカーコアがあり、魔導師となれることが判明。昶を支え、彼の助けとなるべく戦うことを決意する。彼女自身、ある秘密を抱えているらしいが、その秘密は謎に包まれている。

――――クロス設定――――
タタリ編終了後、昶と共に古代ベルカ時代に飛ばされ、タイムパラドックスにより、一度存在の消滅の危機に陥ってしまう。
タイムパラドックス修正後、存在を取り戻した彼女はあるイベント後に仲間となる。

――――戦闘スタイル――――

基本はもともと持っている高い運動能力を駆使した近接戦闘タイプ。形状記憶可変型インテリジェントデバイス『ファンタズムーン』と特殊ユニゾンデバイス『アルクェイド』を所持するが、アルクェイドとは最初の時間移動時に離れてしまい、ファンタズムーンだけで戦う。
ファンタズムーンの形態の一つに砲撃用もあるため、遠距離からの砲撃もこなすが、ミドルレンジの攻撃手段を持たない。

名前：シン・ルークス
年齢：２１歳
イメージＣＶ：宮野真守
性格：冷静沈着だが、その胸には熱い心を秘めている。
魔力変換資質：雷

――――原作設定――――
機動六課の新たな分隊、ブレイズ分隊に追加要員として入った魔導師。その正体はスカリエッティがなのは、フェイト、はやてのＤＮＡデータによって生み出した戦闘機人で、ある事件から他の戦闘機人を恨んでいた。

昶との決闘を経て戦闘機人を憎む気持ちが薄れ、それ以降はスバル達やＮ２Ｒとの関係も良好になる。しかし、彼はまだ知らない。自分がこれから何と戦わなければならないのかを。

――――クロス設定――――
タタリ編終了後、一人だけ未来のミッドチルダに飛ばされ、洗脳されて敵となってしまう。

――――戦闘スタイル――――

なのは達三人の魔法を駆使する、マルチレンジで戦える魔導師。彼のインテリジェントデバイス『フェクトゥス』はレイジングハート・エクセリオン、バルディッシュ・アサルト、シュベルトクロイツに酷似した三つの形態を有する。

あ、後四千……四千文字……。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｃａｌｉｖｅｒ＆ａｍｐ；Ｐｈａｎｔｏｍからでした～～♪

魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　ｓｙｏ　～守りたいモノ～（作者、夕）

・浅儀　翔

年齢：　１９歳

魔力光：　蒼

術式：　アウラ式

階級：　三等空尉

魔導師ランク：　Ｓ

デバイス：　計八種類

ユニゾンデバイス『レイン』

ロストデバイス　『デュランダル』

簡易アームドデバイス『アート』

Ｎｏ．１　短剣

Ｎｏ．２　短剣

Ｎｏ．３　西洋剣

Ｎｏ．４　刀

Ｎｏ．５　ナイフ

Ｎｏ．６　大剣

容姿：　男性にしては少し長い黒髪に黒い瞳。童顔で身長が低い（なのはに少し負けている）事が少々コンプレックス。髪は寝癖やくせっ毛で跳ね返っている事が多い。変装すれば確実に女性と間違えられる。

首には黒いチョーカーを付けており、中心部に付いた赤い宝石が『デュランダル』。

本当の瞳の色は朱色（あか）で強力過ぎる魔眼の為、普段は封印中。

性格：温厚で親しみやすいのだが、うじうじしたりヘタレたり怖がりだったりと情けない所が目立つ。結構初な性格で恥ずかしがったり照れたりしてテンパる事も数知れず。しかし主人公の性なのか鈍感スキルＡ＋と乙女ブレイカーという強力な対女性用スキルを兼ね備えている。

特技は変装でとある理由から変装は女性の姿が多い。
ちなみに勉強が大の苦手、というか嫌い。デスクワークもかなり出来ない。
そんな感じの情けない男なのだが決める時には決めてくれる！……はず。

使用魔法：

・身体強化魔法

剏が扱う特殊術式の一つ。
外にからの強化ではなく、内からの強化方法。
本来魔力を持つものは少なからず体内で流れているが、個人差があるといえど極少量である。それを流す量を意図的に増幅させ、筋肉や骨を魔力コーティング施し、身体強化を謀る魔法。
この術式を一般の魔導師が使用すると内側から魔力が暴走を起こしたり、体内の器官や骨、筋肉などに支障を来たす。
なのでこの術式を扱うには年月をかけさせて慣れるか、特別な術式と併用させる、または先天的に平気な者に限られる。
しかし、個人差はあるが誰しも限界というものがあり、その限界を越えると平気な者とて重傷を負う事がある。

・ソードスフィア

剏の操る魔力弾。
剣の形を成している事から付けられた名。

剏は最大七つの魔力弾を同時展開でき、魔力の籠める量や編み方によって大きさ、形を変えることが出来る。

・ソードサモナー

ソードスフィアの応用。レインとユニゾンした状態でしか使用出来ない。レインの魔力変換資質によりソードスフィアを凍らせて凍剣を作り出す。剏はこの凍剣を好んで良く使う。

・手中転移

アートに付けられた唯一と言ってもいい特殊魔法。
魔力に届く範囲なら剏の元へと戻る魔法。
現在公表されている制約は魔力の大量消費、転移させるアートの位置の特定のみ。

神煉流

魔法と言うより魔力を用いた技術と言った方がしっくりくるモノ。
神煉流とは剣技を軸とした流派だが、剣技だけでなく他の武器などにも精通している。

壱式　蒼閃

剣に魔力を纏わせ、斬撃として放つ。
魔力の多少により斬撃の大きさを調整出来る。
応用が効く扱いやすい。

参式　狼牙

簡単に言えばもの凄い突き。魔力放出により強化された身体を剣に乗せ突貫する技。技の出が速く、発動時には自身が放った魔力が防壁となり脆弱な攻撃は弾き飛ばすうえ、ＡＡランク並の防壁破壊の付加効力もある凡庸性の高い技。
しかしそれもより強力な攻撃カウンターや軌道をずらされる回避方には滅法弱いという弱点を持ち、剏も基本的に同じ相手に二度使わない。

肆式　旋風（つむじ）

壱式と同じように魔力を纏わせるのだが膨大な魔力を風に見立て纏わせ、鋭い斬撃ではなく、小さな竜巻となり、敵を飲み込む。

伍式　砕覇

拳に魔力を練り込み、敵へ放つ技。元々、敵の攻撃を防ぐ、防御用の技だったが、次第に攻撃にも使われるようになった。

※現在作中で使われたのは上の技のみ。このほかにも登場予定は勿論ある。

技能

魔力放出

本来視覚出来ない魔力が目に見える程の濃度として身体の回りに溢れ出す。
魔力を大量に放出している分、消費は激しいが走攻守など、あらゆるモノが向上する。

魔眼：　流転の魔眼

魔力の流れを知覚する瞳。
人体の中にあるリンカーコアは勿論、空気中に存在する見えない魔力をも見ることが出来る。

魔力の流れを視るが出来る為に魔力が付加された攻撃には凄まじい反応速度を見せるアドバンテージが得られる。

本来はそれほど効力の強くない魔眼だが剏の魔眼は強力過ぎ、魔法の綻びを視ることが出来、その切れ目に関与する事で分解させる事が出来る。この行動は相手の技術にもよるが魔法に集中しないと綻びを視れないので辺りの注意が散漫になる危険がある。

強力過ぎる魔眼はタイムリミット３０分と決められており、それを越えると頭痛、無視して使いつづけるからと短期の失明に陥る。そのタイムリミットさえ、魔眼の使い方によって更に短くなる。

備考：　ロストデバイス『デュランダル』は地球の伝承に登場する聖剣、デュランダルのオリジナル。持ち主を自身で選定するこの剣が主と認めなければ触れる事も出来ない。現在の主が何故かレインの為剏はユニゾン状態でないと扱う事が出来ず、デュランダルから

は『仮の主』と認識され、嫌われている（？）

『アート』は六つで一つのデバイス。一つの特色機能を除いて、搭載された機能を殆ど省き、武器としての性能と少々高めの耐久性を備えた簡易アームドデバイス。待機状態は全て指輪でズボンに引っ掛けている。

『レイン』はサキからデュランダルと共に受け継いだデバイス。剏とユニゾンすると髪や瞳の色は変わらないが髪が長髪になり、見た目が完全に女性となる為レインはこれを『女の子モード』と呼んでいる。変装などもこの姿から変身魔法などを使う事が多い。

術式説明：　アウラ式

剏、レイン、サキなどが使う術式。魔法陣は六芒星の形をしている。古代ベルカ式と同様、時代の波に消えていった術式だが、管理外世界では使う術者もそれなりに存在する。

アウラ式は“超対人戦特化術式”と呼ばれており、近接を好む者が多いが遠距離型もきちんと存在し、ミッド式は遠距離、ベルカ式は近距離、というような考え方は当て嵌まらない。

超対人戦特化術式と呼ばれるが、それが有名なだけで巨大な獣や異業の化け物と闘う為の術式も存在している。

私小説での設定：　地球の地図にも載っていない一族の村の生まれで唯一の生き残り。村が襲撃された際にサキ・クルスに助けられ、共に行動する事となり、彼女を師として鍛えられていく。
１１の時にサキを自分のミスで死なせてしまい自暴自棄になり、ある組織に騙され用心棒として活動を開始する。その折に執務官の任

務として組織を捕まえに来たフェイト・T・ハラオウンと出会い、フェイトの補佐として行動する事を決める。それ以来はハラオウン家で居候生活。

17の時にフェイトの補佐を辞め、2年間単独任務に出て機動六課に入隊すると同時に帰ってきた。

・レイン（ユニゾンデバイス）

正式名???

年齢：　???

魔力光：　蒼

魔力変質：　氷

術式：　アウラ式

階級：　局員として登録していないので無し

単体でのランク：　???

容姿：　蒼い長髪に翡翠色の瞳。身長がリインと同じで手の平サイズなのだがリインよりも少し大人っぽい。

使用魔法：

単体での戦闘を行っていないので詳しくはわからないが、補助タイプなら幾らか使用している。

変身魔法　身体を大きくしたり、髪の色を変えたりとするのが主な使い道だがそれなりの高いレベルで姿を変える事が可能。

魔力変質持ちなのだが単体で攻撃に使えるほど能力は高くない。

性格：

面白い物好きで自分に正直に生きる性格をしている。性能としてはかなり優秀で基本的に剏の書類仕事や生活管理などは大半彼女が担っている。

剏を子供の頃から知っており、剏のお姉さん的存在でもある。

元々は剏を育ててくれた女性がマスターだったのだが剏へとマスター権が移動された。剏の事を剏ちゃんと呼ぶようになった経緯もいろいろとあるようだ。剏に対してツンデレな行動を示したりすることもあるが本人は認めない。性格の根っこの部分は恥ずかしがり屋。戦闘などでは剏の方針に従うようにしており、助言はするがあまり口を出さない。

彼女の中には大きなブラックボックスがあり、その中身を知る人物は今のところいない。

レイン自身、剏にも秘密にしている事が多少なりともあるようだが剏はそれを知ろうとは思わないようだ。

その秘密の一端として威圧感を放つ高圧的な口調をとる事もある。

備考：

本人談では単体でも戦闘が出来るみたいだが、剏にその姿を現段階で見せる気はないようだ。

・サキ・クルス

年齢：　２４の時に死亡。なので正確な年齢は不明

魔力光：　白

術式：　アウラ式

階級：　局員から指名手配を受けていたので剥奪された。（元一等空尉）

魔導師ランク：　局員当時、ＳＳ＋

デバイス：　計七種

ロストデバイス　『オートクレール』

簡易アームドデバイス

アインデバイス……鎌（黒色）

ツヴァイデバイス……銃（白色）

ドライデバイス……銃（黒色）

フィアデバイス……刀（白色）

フュンフデバイス……グローブ（黒色）

ゼクスデバイス……槍（白色）

容姿：　黒の長髪に瞳、胸には二つのメロンを備えた大和撫子さん。

性格：　黙っていれば美人さんなのだが、自由奔放、傍若無人な性格をしている為によく剏の反応を見て楽しんでいた。普段はこんな感じなのだが冷静沈着で思慮深く、自身が信じる信念に基づいて行動する。

彼女はいわゆる天才型で殆どなんでも一人でこなして仕舞う。

使用魔法壱式　白閃

剏の蒼閃と名前が違うだけの同じ技。自身の魔力光と同じ、白い斬撃を飛ばす。

サキの場合、剣だけでなく、鎌などでも使用する。

参式遠ノ型、虎爪

神煉流の遠距離攻撃の一つ。銃身に自身の魔力を溜め込み砲撃を放つ技。

※剏が扱う神煉流の技は基本、サキなら使用可能。しかし現在作中で使用した技は上のものだけ。このほかにも登場予定は勿論ある。

特殊技能：

魔力放出

本来視覚出来ない魔力が目に見える程の濃度として身体の回りに溢

れ出す。
魔力を大量に放出している分、消費は激しいが走攻守など、あらゆるモノが向上する。サキが扱う特殊術式の一つ。
外にからの強化ではなく、内からの強化方法。
本来魔力を持つものは少なからず体内で流れているが、個人差があるといえど極少量である。それを流す量を意図的に増幅させ、筋肉や骨を魔力コーティング施し、身体強化を謀る魔法。
この術式を一般の魔導師が使用すると内側から魔力が暴走を起こしたり、体内の器官や骨、筋肉などに支障を来たす。
なのでこの術式を扱うには年月をかけさせて慣れるか、特別な術式と併用させる、または先天的に平気な者に限られる。
しかし、個人差はあるが誰しも限界というものがあり、その限界を越えると平気な者とて重傷を負う事がある。

サキはこれを努力の末に身につけたが、剏ほど効率よく扱う事は出来ない。

神煉流

魔法と言うより魔力を用いた技術と言った方がしっくりくるモノ。
神煉流とは剣技を軸とした流派だが、剣技だけでなく他の武器などにも精通している。

ちなみにサキは師範代クラス。
作中での設定：　サキは作中八年前に剏を庇い死亡している。現在は人造魔導師として活動し、スカリエッティ陣営に組している。
しかし、完全にスカリエッティに協力している訳ではなくむしろスカリエッティの事は嫌いで自身の目的の為に互いに利用しあう存在。
現在の所その理由は不明。

ふ……もう、限界のようだぜ……。
魔法少女リリカルなのはＳｔＳ　ｓｙｏ　～守りたいモノ～からでした～～♪

魔法少女リリカルなのは　ｓｈａｄｏｗ．ｔｈｅ．ｓｔｏｒｙ（作者、クロック）

レン・クロフィール（某作品の主人公と被るのでクロスではフィールで統一ください）

年齢：１９歳（１７歳）
階級、一等空尉
身長：１７９．５ｃｍ（１７７．３ｃｍ）
魔導士ランク、空戦ＳＳ－
魔力変換資質：凍結
希少技能：有
デバイス：シャドウ・ライト　トライデント
備考：無表情で非常に眼つきが悪く見える青年。本来は科学技術部所属の技官である。かなりの知識を持っており知能指数に直すとＩＱ２００を超えるレベルである。が、その思考回路は良い意味では変わり者、悪い意味では変人と取れるほど、常軌を逸したボケをかましてしまう事がある。（基本はツッコミです）

本編設定：科学技術部所属の技官で第三科学技術部の失踪した室長の代理をしていた青年。元上官でいろんなところで顔が利くバルトがはやてに彼を紹介した事で、機動六課に所属し様々な出来事に巻き込まれるようになった。　基本面倒見がいい方だが、基本はその眼つきが原因で畏怖の対象で見られる事があるが、思いのほか本人は気にしている。　ちなみにバルトとは地上本部の特殊部隊所属時の小隊長と副官という関係であった。

一人称は、初対面の相手や目上の相手には『私』、それ以外には『俺』となっています。相手を呼ぶときは基本『さん』とつける事が多い。（一応バルトにも、さん付けをしております）

クロス設定：ミッドチルダ建国記念祭の前から、すこし長めの休暇を取り。次元旅行をしながら各地の図書館で色々な書物を読みあさる生活を送っていた。（これで過去の歴史等にも詳しくなっている設定）

過去の世界に飛ばされた影響の所為か、何故か１７歳の頃の身長まで縮んでいることが悲しくなっている。

戦闘設定；基本本編と同じで、銃を用いての中距離戦から近距離戦を主だって使うスタイルを取る。しかし、自分以外の人物が危険に晒された際には、積極的に剣を手に取る事がある。

バルト・シェルト

年齢：２６歳前後
階級：一等陸佐
身長：１８３．２ｃｍ
魔導士ランク：不明（ただし、フィールよりは強い）
魔力変換資質；無
希少技能：有
デバイス：六式（朱、蒼、黄、緑、黒、白）という、六本のストレージデバイス。

備考：禿だの老けてるだの、本編中では色々な奴に馬鹿にされる事が多いが、決して禿げてはいないし禿げる兆候もない。これだけは言っておく、この人は意外と真面目な人です。

本編設定：時空管理局に所属する優秀な指揮官……と昔呼ばれていた人。いま現在はその成りを八割以上どこかへ無くしてしまった、とまで言われるほど適当で中途半端な人間を演じている。がしかし、あくまで演じているだけの人間であり、本質はフィール以上にドライである。

クロス設定：休暇中のフィールに用事が出来た為有休を取って彼を探しに出るが、行く先々ですでにいなくなっており、結局見つけられなかった所で過去の世界に飛ばされる。（フィールとはそこで合流）

戦闘設定：六本の杖にそれぞれ固有の魔法が記録された杖を使って戦ったりするんですが、分かり辛いので最初のうちは逃げ回らせておいてください。

ら、ラストー！（笑）

魔法少女リリカルなのは　ｓｈａｄｏｗ．ｔｈｅ．ｓｔｏｒｙからでした～～♪

リリカルなのは　信頼と真実、その行く末（作者、イクス・スタンス）

東誠（とうせい）　流時（りゅうじ）

槍、または長刀を使う担い手である。性格はやや大雑把ながらも、表情には出さないが、結構義理堅い。非常勤教師で、科目の担当は古典、歴史、尚且つ教師の中では恐怖の最凶一角、。おまけで、魔法抜きでクロノをノックアウトしていますのであしからず。基本は瞬足を使っての移動を得意とする高速戦闘型。まず魔法はあまり使

わないと思います。
魔方陣：古代（エンシェント）ベルカ式、色・・藍錆色、変換資質・・・雷、極寒（氷の上）、火。　ランク：S以上ありますが、詳しいことはまた伝えます。
技
・境界断層（リキッド・サルベージ）
　物質（建物など）を液体に変化させる（生物であれば、死亡）。元に戻すことも可。＊魔力そのものも液体に変化することが出来る。追記で吸収ができます。

次のキャラ
河海（かわみ）　川（りお）・・・右利き
性格は明るく、少し恥ずかしがりあである。今はラルクと結婚しているとのこと。尚、空手五段所持。猫好き

ラルク・コライド
基本無表情で格闘能力高ランク。クロノを魔力抜きでノックアウトしています。問題が起きると彼も“話し合いのお話”及び“間接外し”を使っていきます。ただし、川を苦手としている。また、基本呆れることが多く、仕方ないという行動が度々。彼は多重人格の傾向があり、多分、今のところは“ヘイムダル”が主に出てきます。あと姿が変わりますので確認を。彼の武器で“アダトの銃”“アイギスの盾（ビット数１２、実体剣装備…スト○イク○リー○ムの羽とＯＯの実体剣の融合したもので想像を…）”、“エアの剣　二刀”で基本は出さず、念じていくつか出します。
ラルクについては、料理が凄腕で翠屋の桃子公認。それから、腕にワイヤーとコンバットナイフ（虚数空間並みの力を持つ）を常備しています。東誠同様に瞬足を使っていきます。素手で砲撃類をたたき伏せたり方向を変えます。建物も破壊可。他は必要かどうかは任せますが、医師免許、調理師免許、保育士免許を持っています。

また、リニスのときに出た人格は感情的で、災厄技で重刻撃を使う。これについては…字数が危ないのでまた伝えます。他、空間魔法（空間そのものを操る）を使う。

以上！　ふぅー、ふぅー、俺はやり遂げたぜ……！

えー、テスタメントの想像以上の文字数と相成りましたが、これでキャラがどんな奴らなのか分かっていただければ幸いです♪

ではでは～～♪

時の引き金、クロスオリキャラ説明♪（後書き）

ふ、ふふ……テスタメントは燃え尽きたぜ……。
と、とりあえずオリキャラはこんな所で。
……原作キャラの説明は流石に省きます。

ではでは～～。

第一話　ヴィヴィオのもとへ！（前書き）

第2走者、（あなたのもとに回ってくるをモットーにする）回覧板！

ギャクとか戦闘とか、苦手なものを程よく混ぜてお送りしますにゃー。

第一話　ヴィヴィオのもとへ！

混迷の闇が波動のようにカナンを包みこんでいた。
そこは上も下も右も左も不明瞭で立つことさえ出来ているのか分からないところだった。

「うおお！　ヴィヴィオー！」

そんな中で懸命に溺れるような犬かきをするカナン、その姿は可愛いそのものだが、本人は必死だ。

【マスター！　しっかり見ろ！　混乱するだけ迷うぞ！】
「つってもどっちに行きゃいいかなんて分かんねぇぞ！」
【主、ヴィヴィオさんのことを思ってください。たとえどこにいても関係だけは絶つことは出来ないはずですから！】
「ヴィヴィオか！　ヴィヴィオを考えればいいのか！？」

ということで、カナンはヴィヴィオの持っていたペンダントを握りしめてヴィヴィオのことを考える。

ヴィヴィオ、ヴィヴィオ、ヴィヴィオ、ヴィヴィオ、ヴィヴィオ、ヴィヴィオ
――――！

頭の中にはっきりとヴィヴィオの顔が浮かんでくると同時にカナンは地に足をつけたような心地を味わう。
よし、これなら、いける！　――――と踏ん張ったまではいいが、思考にノイズが走り、瞬く間に思考を塗り替える。

空想上で、追っているカナンをジトッとした目で見たヴィヴィオ

は言う。

「カナン君のえっち」

「ちょ！　俺はなんて妄想を！？」

【マスター！　思考を乱すな！】

【間に合いません！　主！　私達が引き剥がされないようにしっかり捕まえていてください！】

「わ、わかった！」

カナンはメイデンとレナスをひっつかんで自分の胸に抱く。

あぁでも、女なんだなぁ、と再確認したカナン。

【主！　これ以上雑念を入れないでください！】

「はぃぃぃ！？　何も考えてませんよ！？」

【主！／マスター！】

そのまま三人は流れに流されるまま、どこに繋がっているかもわからない穴の中へと落ちていくのであった。

やれやれ、これくらいのサービスはいつも受けているのに、いつまでたっても慣れないようだ。

「受けてねぇよ！」

【主／マスター！】

「うおおおお！」

カナンの体はぐるぐるとタケコプターのように回転しながら上か下か右か左か、落ちているのだからおそらく下に落ちていく。

穴の終着点が見えた。

【マスター！　あそこだ！】
「お、おう！」
【後ちょっと……よし！】

穴にたどりついた三人は、最後に一層激しく回転させられながら穴から外へと入っていった。

▽　▲　▽　▲　▽　▲　▽　▲　▽　▲

とある山の中腹付近。周りを気で囲まれた一種の秘密空間がある。子ども達が楽しく遊ぶための空間に切れ目が出来る。やがて切れ目は円状に広がり、大きな穴を作り上げた。

「うわあああああ！」

中から情けない声が響いている。
と、一際強く開いた後、穴からカナンが飛び出してきた！

ゴンッと鈍い音が響き、地面に大の字にねっころがる。
その胸には二つの膨らみがある。

「いてて……ここどこだよ……」

起き上がったカナンは鬱蒼と生い茂る木々を見渡して声を漏らした。

ミッドチルダのことはよく分からないが、ここはミッドチルダではないと直感が告げている。

「ヴィヴィオ……そうだ！　ヴィヴィオは！？」

跳ね上がるようにして立ち上がったカナンは木々の隙間を抜けて出た。

するとそこに！

「う〝ぉ？」

丸い物体を華麗に蹴って、素晴らしいリフティングを二体で繋げているオークがそこにいた。

オークは頭で丸い物体を繋げながらカナンに向く。

「勘違いするでねぇど」

「別に遊んでるわけじゃねぇど」

ポンポンとリフティングを止めようとしない二体のオーク。

そのまるでツッコミを待っているかのようなお茶目過ぎる一面を前にしてカナンはゆっくりと呼吸を整える。

待て待て！　おかしすぎるだろ！？　オークがリフティングとかするわけねぇじゃん！？

え？　まさかのツッコミ待ち、ツッコミ待ちなのか！？　オークにツッコめと！？　どんな自殺願望だよ！？

その前になんでこんなとこにオークがいるんだよ！　蹴ってる丸い物体とか明らかに同族じゃねぇか！　い、イジメか？　イジメなのか！？　教育委員会か！？

だらだらと嫌な汗をかき始めるカナン。
深呼吸しても収まりそうもない。
カナンの中の、ツッコミをするという魂がツッコミを望んで――
――
「ねぇよ！」
「ねぇど？」
「ねぇど？」
「うるせー！」
人は時として運命と書いてツッコミと呼ぶことがあるのだ。
「ないよ！？　本気と書いてマジと呼ぶくらいないよね！？」
「ねぇど」
「ねぇど」
「お前らに聞いてねぇぇぇ！！」
「寂じいど」
「オメェ面白いど」
カナンはゆっくりと深呼吸する。
落ち着け、落ち着け！　冷静になれ。
オーク二体に勝てるか？　いや、この二体ならいける気がしない

でもないが、こっちも負傷する。
それだとヴィヴィオを探しにいけねぇ！
……はっ！　そうだ！　ヴィヴィオだ！
「お前らに構ってる暇はない！　そこでリフティングでもしてろ！」
「待つんだど」
オークは丸い物体をヘディングで上げ続けるのを止めて手に持つ。
そして、誰もが予想だにしない言葉を発するのだ。
「待つんだど、そこの女」
時間が凍る。
正しくはどうしようもないくらいに聞き流せない言葉を反芻する時間が、止まっているように感じたのでそう感じる。
カナンは頭の中でその言葉を繰り返し発音し、それから確認の為に聞く。
「女って、俺のことか？」
若干上擦った声だ。
しかしオークは躊躇いなく現実を突きつける。
「胸があるがら女じゃねぇのが？」
「オメェ女っぽいど。一緒にあぞばねぇが？」
「おれは……」
「気分悪いのが？」

「おで達女にはやざじいど」
「俺は男だぁぁああ！！」
カナンは半分泣いている目を隠しながら、オークの間をすり抜けて山を下っていくのだった。
残ったオークはポカンと口を開けて、情けなく棒立ちになっている。

「胸があっても男らしいど」
「胸は女の象徴じゃねぇのが？」
「……胸があるから男じゃねぇのが？」
「そうがもじんねぇ」

納得したオーク達は奇怪な笑い声を上げてから、丸い物体を再び蹴りでつなぎ合わせる。
この認識が後々大変な事を招くとは露ほども知らないで。

山を超高速で下ったカナンはぜぇはぁと息を切らして、道端の手頃な岩に腰を下ろした。
改めてみると確かに二つの胸が体前面に大きく張り出している。
触ろうと思えば触れるが、触ったらこれを現実として認めなくてはならない。
しかし！　男（ヘタレ）にはやらねばならない時が存在するのだ！
意を決して自分の胸に手を当ててみる。

「……あれ？　コロナやアインハルトみたいにもにゅっとしない……むしろ固い」

一部呪い殺されても文句が言えないようなセリフを吐いたカナンは、そのまま手を服の中に滑らせる。

そこにいたのは。

【カニー、カニー、もうたべれませぇん】

【なんて白くてまぁるい白身……じゅるり】

……カナンは胸に戻して、両頬を叩いて気合いを入れ直す。

「さぁ、ヴィヴィオを探すか！」

立ち上がったカナン。もう十分な休憩も取ったので、しばらくは走り続けることが出来るだろう。

それに遠くに煙が上がっているのが見える、町が近い証拠だ。

「よし」

気合いを入れて走る。

最初の一歩は小さく、次も小さく。前が完全に前のめりになったら次を大きく出て最高速へ。

そのまま最高速を維持して走り抜ける。

景色が後ろへ後ろへと流れるのを感じながら更に力を込める。

最高速から自己新記録へ。

カナンの挑戦が始まった！

結果は火を見るより明らかなことだ。
「ぜぇぜぇ、……やっと着いた」
大きく肩を揺らして、膝に手をおいた中腰でカナンは息を整える。
ヒッヒッフー、ヒッヒッフー。
「そんな呼吸しねぇよ！？」
空に向かって雄叫びを上げるカナンを町民は奇異な目で見ている。
あ、子供は家の中にいれられた。
それを見ないフリしたカナンは当初の目的を遂行する。
「早くヴィヴィオを探さねぇと……」
とりあえずまずは人捜しの基本から。
「ヴィヴィオーー！！　ヴィヴィオーー！！」
叫んで呼んでみる。
返事はない。
「そこのおなごや」
「男です！」
「……そこの男」
村の村長らしき人物が納得いっていなさそうな顔をしながら言う。

「ヴィヴィオと言う者はこの町にはおらんぞ？」

「最近この町にきた人はいませんか！？」

「おったかのお……、そういえばオリヴィエ様がお見えになられたかの。いつにも増して若々しいお姿じゃった」

カナンは一瞬自分の耳を疑った。

――――オリヴィエ様、確かにそう村長は呼んだ。

心辺りは一つだけ。

オリヴィエ、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。

聖王家を背負い、“最後のゆりかごの聖王女”と言われた女性。

そして、――――ヴィヴィオの中にある遺伝子のオリジナルにして、ベルカ諸王のたった時代の人。

カナンの中に一つの簡単な答えが見つかる。

「まさか、過去なのか？」

いやまさか、と思っても否定しきれない。

とにかく今はヴィヴィオの行方として有力な手がかりだ、逃す訳にはいかない。

「そのオリヴィエ様はどこに？」

「クラウス様のお屋敷にお戻りなさったぞ？　嫌がっているように見えたが、何かあったのだろうか」

「そのお屋敷は！？」

カナンの気迫に圧されたのか、村長はビクッとしながら答える。

「あの山の上じゃ。でも儂らのような庶民を簡単に中へはいれてくれんぞ？」

「なら力ずくで通る！」

「まぁ待ちなされ、お若いの。儂に良い案がある」

村長は自信たっぷりに親指を突き立てた拳をカナンに向ける。

これは期待出来そうだ！　と思ったカナンだが、それは間違いだと後になって気づくことになるのだが、今はまだ何もしらない。

ガチャっと村長の家の扉からカナンが出てきた。ついでに女性達も出てくる。

「もう婿にいけない……」

そのまま壁に向かってぶつぶつと呟き始めたカナンの姿は、それはそれは――――美しいドレス姿だった。

「やれやれ、手のやける子だね、私たちから逃げようとするなんて」

「おほほ♪　奥様の手から逃げられませんよ♪」

「あなたの羽交い締めもなかなかのものでしたわよ♪」

おほほほほほ、と笑い合う女性達の肌はつるりとすべすべのご様

子。
中で何があったかは聞きたくても聞けない。
奥様の力侮るべからず、女の力の八割は秘密で守られているのだ。
それからようやく落ち着きを取り戻したカナンは壁から離れ、村長のところへ向かう。
村長はそんなカナンに親指を突き立てたあのポーズを向ける。
「似合っておるぞ！」
「うるせぇ！　さっさと良い案というのを言いやがれ！」
半ば以上やけになった声で言うと、老人は自信満々に言う。
「オリヴィエ様とお友達になった者ですと言えばよいのじゃ！」
「……女装した意味は？」
「えっとじゃな……油断させるためかの？」
「させたかっただけかよ！！」
「そうじゃよ！　冥土の土産にさせてくれ！」
クワッと皆目した村長は前後左右からカナンを舐めるように見てから、グフッと二百のダメージを受けた。
このジジィ、絶対長生きする。
カナンはこめかみをピクピクとさせながら、拳を握って我慢する。
ひとしきりダメージを受け終わった老人は最後にカナンに少ないがお金を渡す。

「鑑賞料じゃ」

「ありがたくねぇ……」

とりあえず受け取っておいたカナンはヴィヴィオがいるかもしれないクラウスの屋敷へ行くために足を出し、――――ドレスの端を踏んで転んだ。

盛大に鼻を打ったカナンは苦悶の表情を浮かべる。

慌てて駆け寄ってきた村長は叫ぶように言う。

「儂のドレスがぁぁああ！？」

「爺さんの！？　孫とかじゃなくて！？」

「正真正銘儂のじゃ」

「……気を取り直して行くか……」

カナンは今度はドレスの端を持ち上げて、走れるように裾を上げる。

それにしても腰以下の布地だけで相当な重さだな。

「ちょっと走ったらメイデン起こしてバリアジャケットに着替えるか……」

あの町には二度と行きたくない、と心底思いながら、ヴィヴィオ探しのための移動は再開された。

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

時は現代、新型次元転送装置の発表を取りやめ、原因究明のために研究室にシャリオが籠もってから大体三時間が経過しようとしている。

ティアナはアトラクションとしつの警護から、事件調査のための人員として警護に変わっていた。

簡単な仕事が、新型次元転送装置を目当てにきたお客さんに当たり障りのないことを言って追い返すことだ。

その為、周りに人がいては仕方ないので、祐希奈達には祭の見学をしてくるように言ったのだ。

「けどまあ……」

目の前の建物の影、人がごそごそとしているのが分かる。

こんな状況で遊べるような性格をしている子供じゃないのだ。

「気持ちはわからなくもないけど……」

ティアナは先ほどから通信を飛ばしている通信が繋がらないことに苛立ちを感じていた。

もう、あのバカシオン！　まさか遊び回ってるんじゃないでしょうね！

あながち間違いではない、時間逆行という若干過ぎた遊びなのだが。

そんなことは知らないティアナは苛立ちを隠さないままに、突っ立つだけだ。
その姿を見て、何人かのお客さんは回れ右と駆け足で離れているのはいうまでもない。

だいたいあいつはどうでも良いときにはいないくせに、肝心な時にいないんだから！

それから前髪をくるくると弄って拗ねたような顔になる。

でも真っ先に駆けつけてくるのもあいつなのよね……、そこがいいとこなんだけど……、って、何考えてるのよ、私！　はぁ……。

百面相のごとく表情が変わるティアナ、それでも仕事はし続けるのだから大したものだ。
そこになのは、フェイト、はやての三人が到着する。
彼女達はたまたま近くにいたから早くかけつけられたのだ。

「ティアナ！」
「なのはさん！　それにフェイトさんとはやてさんも！」
「それで、どうしたん？」
「カナンが消えたって聞いたけど……」
「えっと……」

ティアナが口の前に手を当てて隠し事をするようにする。
そこに三人が耳を近づけていく、まさにその時！

「出来ましたーー！！」
「「「「きゃあ！」」」」

シャリオが何か小さな物体を掲げるようにして、走って駆け寄ってきた。
同時に建物の影から祐希奈達も飛び出してくる！
それにはなのは達もびっくりしたようだ、三人とも仰け反るような格好になる。
そこからいち早く復帰したはやては、シャリオの持っている得体の知れない物体をじろじろと見る。

「それはなんや？」
「ふふふ、よくぞ聞いてくれました！」

シャリオは自分の開発した品を力強く掲げて、エッヘンという背景が出そうなくらい胸を張る。

「なんとこれはさっきの現象のデータを調べ上げて新しく作ってみたのです！」
「……っで？」
「きっとこれがあれば、ヴィヴィオちゃんやカナン君と同じところに行けるはずです！」
「おー！」
「どういう意味？」

祐希奈達は拍手でシャリオを讃えるが、なのは達はきたばっかりで何がなんだからわからない。
そこでなのは達に説明してする。

「そうか、突然な～……」
「そんなことがあったんだ……」
「もしかして……シオンも……」

みんなが驚いた表情をする。
はやてはニヤッと笑って、
「あはは♪　そんな訳ないやん♪　シオンやったらシルバーポイント貰った後すぐに私らをおいて遊びに行ったわ♪」
「そうなんだー、よかったー♪」

嘘から出た真という言葉を彼女達はのちのち知る事になるだろう。
それはさておき、カナン達が消えてしまった新型次元転送装置の前までやってきた一同、残念ながらティアナだけは入口に立って仕事を続ける事になっている。
シャリオはあんまり近づかないようにして、みんなに発明品の説明を始める。

「これはカナン君達が消えた時のデータをもとにして作り出しましたのです♪　これを使えばヴィヴィオちゃんやカナン君のいるところまでつながるのです！」
「じゃあ早く行くわよ！」
「ですが……出力が絶対的に足りないのですよ、なのでなのはさんフェイトさんはやてさんには魔力で出力を出して欲しいんです。おそらくそれでも転移できる人数は、多くて三人。次戻ってくる時にはもっと性能あげて、人数を増やせるようにします♪」
「じゃあ誰がいく？」
「私がいくわよ！」

真っ先に名乗りをあげたのは祐希奈だ、すでにバリアジャケットをきて準備万端だ。
シャリオは開発品を祐希奈に渡す。
「後二人やね、誰が行く？」

「それでは私が行ってもよろしいですか？」

次に名乗りをあげたのはアインハルト、彼女は武装形態になって、祐希奈の隣に並ぶ。

三人目は誰にしようかというところで、誰も出れない状況になる。

さてどうしたものかと思っていると、

「こんなことやったら咲夜さんとお兄ちゃんも連れてきたらよかったわ～……」

「呼びましたか、はやてさん！」

「咲夜君！？　遊びに行ったんと違うん！？」

「何を言ってるんですか！　はやてさんが困っていたら天国だろうと地獄だろうと、虚数空間の果てまでもレッツインザダイブですよ！」

それはもう怒濤の迫力で咲夜がどこからともなく、実際には飛ぶようにして上空から降ってきて祐希奈達に並ぶ。

でもよくよく考えるとはやてとはすぐに別れることになるのだが、気付いていなさそうなのでそのままにしておく事にする。

とりあえず行くメンバーが決まったので、なのは、フェイト、はやては魔力をこめ始める。

すると、祐希奈の持つシャリオの発明品からミッドチルダのものによく似た魔法陣が展開され、直後、ヴィヴィオとカナンを吸い込んだ穴が祐希奈達の前に開かれる。

「それじゃあ行くわよ！」

「はい。行ってまいります！」

「はやてさん！　行って来ます！」

みんなに見送られるようにして祐希奈達は穴へと入る。

穴が完全にしまると、そこに三人の姿は無かった。

混迷の闇が包み込む空間を三人は歩いていた。
否、――――歩いていた、という表現は的確ではない、三人はただ立っているだけだったが、空間はどんどん後ろに流れているような感じがするのだ。
その奇妙な感覚にたちまち目眩を起こしそうになるのを堪えて、出口を待つ。
するとすぐに出口は見えてきた。
混迷の闇の向こうに光のある穴が――――、三人はそこから外へと吐き出されてしまった。

「ん……」

目を開けた祐希奈は視界を奪うように垂れた銀髪を手でかきあげて、体を起こす。
そこは森だった。来た事もないような森。
周りを見るとアインハルトが転がっているだけで、咲夜の姿は見えない。
とりあえず気にしても仕方のないことなので、近くにいるアインハルトを起こして移動しようという結論に収まった。

「ん……祐希奈……さん？」
「お、おはよう」

手を伸ばして起こそうと思った矢先、まるで気配でも感じ取って

脳が働いたのか、アインハルトは目を覚ました。
眠っていても油断しない、なんて武人だ！　俺の後ろに立つな、とか言う某暗殺者のようだ！

「なにか今もの凄い言われようをされた気がします……」
「どうしたの？」
「なんでもありません。……ここはどこですか？」
「さぁ？　覚悟はしてたけど、やっぱり知らない場所に飛ばされたみたい」
「咲夜さんは？」
「知らない。起きたらもういなかったし」

若干不機嫌そうに祐希奈は言って立ち上がる。
そうですか、と返事をしたアインハルトも立ち上がり、木に囲まれた空間を出る為に歩きだし、そして出たところで、奴らに会った。

「まだひどが来たど」
「ほんどだ、こんどは、二人だど」

丸い物体を蹴るようにして二体のオークがいた。
オーク達は祐希奈とアインハルトに気が付くと、蹴って繋げることから頭で繋げることに変えて華麗なリフティングを魅せてくる。
しばらく言葉を失った、祐希奈とアインハルトだが、どことなく愛嬌があって、別に敵意を向けているでもないオーク達を無視しようとする。

――――その筈だった。
次にオーク達から発せられる言葉を聞くまでは。

「男が二人こんなとこでなにしてんだど？」

ピシッと場の空気が凍った。
しかしそれは火傷をする域にまで下がったようなもの。
次の瞬間には一気に燃え広がった！

「「私達は女だ／です！！」」

無言で起動したアシェルを手に、祐希奈は矢を引き絞る！
燃えさかる炎の矢をアインハルトに向けて穿つ！
それをアインハルトが手に添えるようにして、受け流し、オーク達に向けて投げ放つ！

「「覇王断罪拳！」」

ー撃！・爆！ー

激しい轟音が木霊し、大地からもくもくと爆煙が舞い上がったという。

「あ、起きたのか……って、この惨状は……」

遠くを見て帰ってきた咲夜は、ぜぇはぁと肩で息をする祐希奈とアインハルトを見つけて、その前にあるクレーターに身震いをしたのはいうまでもなかった。

第一話　ヴィヴィオのもとへ！（後書き）

時間移動。

風間カナン、現代→ベルカ時代

一之瀬祐希奈、現代→ベルカ時代

アインハルト、現代→ベルカ時代

東条咲夜、現代→ベルカ時代

～～～

第二話　陰謀（ふおん）（前書き）

リレー参加者の中で最低レベルの駄作製造機・ムーギネーターがお送りします。

酷い駄文ですが、宜しければ感想・指摘をお願いします！

第二話　陰謀（ふおん）

シオン達が古代ベルカ時代に転移した頃、現代ミッドチルダ――――

「クッ……！」

華やかな祭が催されている表通りから離れた森の中を、1人の赤髪の少年が走っていた。その息は荒く、彼がかなりの距離を走って来た事を伺わせた。

彼の名はルミオ＝デュアリス。時空管理局の嘱託魔導師である彼は、今現在訳も分からず――――

“自分を殺さんと襲って来る管理局員から逃走していた”

「何がどうなってるんだよ……！」

暗く湿気に満ちた路をあちこち駆けながら、ルミオは吐き捨てた。ミッドチルダ建国四百年祭を堪能し、時間を見て帰ろうと歩いていた際の急な襲撃。何の落ち度も無い自分に向けられた反撃すら許されない理不尽な攻撃に対するイライラを発散するかの様に吐き出されたそれは、鬱蒼とした森の中に充満する陰気な空気を切り裂きながら消えて行った。

「いたぞ！」

「撃て！　力のある連中は敵だ！　全部殺せ！」

「ッ！！！」

後方から聞こえた怒号に唇を噛み締めながら、ルミオは更に走る。後方からはそんな彼を穿つべく複数の殺傷設定の直射弾が飛来して

来たが、ルミオは逃げながら必死で回避行動を取る事で着弾を防いでいた。

（誰かに操られてるのか……一体誰の仕業だ！）

回避行動の最中に確認した局員の眼は、赤一色に染まっていた。血よりも鮮やかなそれらを備えた顔のまま攻撃をして来る様はまるで獣。そんな哀れな存在へと彼らを変えた元凶に強い怒りを覚えながら、同時に彼らを人混みから出来るだけ引き剥がすべく走ろうとし――――

と。

「な……ッ！？」

不意に彼の正面の風景が歪み、オーロラの様な幕が姿を現した。その向こうに荒廃した風景を映すそれは虚を突かれたルミオへとスライドし――――

“彼を森から消し去りつつ、何処かへと消え去った”

後には突然我に返って混乱する数名の局員だけが残されていた。

～～～

派手なパレードが練り歩き、喧しくさえある音楽がそこかしこに奏でられている中で1人の少女が不満そうに唸った。

「確かに寝坊したのは我が悪かった……。だが仕方無いだろう、楽しみ過ぎて寝られなかったのだから！　それなのに主と来たら……！」

「咲（サキ）くんにそんな甲斐性期待するのが間違ってるわよ。彼がはやてちゃん好き病なのは知ってるでしょう？　あの子に会う事とアナタを起こす事を天秤に掛けたら間違い無くアナタをスルーするわよ」

「ひ、酷いではないか！　我の見た目ははやてと殆んど同じなのに！　何が違うのだ！？　納得の行く説明を要求する！」

「そればっかりは咲（サキ）くん本人に聞かないとねぇ……私には分からないもの」

やり場の無い不満を爆発させる碧銀色の髪にオッドアイの少女――東条咲夜のユニゾンデバイスであるレフィリアの相手を『適当に』しながら、肩に当たる位にまで伸ばした焔の様に紅い髪と黒目が特徴的な少女――ミオ＝レッドフィールドははやてへと連絡を取るべく通信を繋いだ。

「あ、はやてちゃん？　ちょっと咲くんに繋いで……」

＜その……それに関してちょお話とかなあかん事があるから来て貰えます？＞

「……？　分かったわ、レフィリアを連れてすぐに行くから」

＜ありがとうございます。それじゃあシャーリーの研究室で待ってます＞

「オッケー。……レフィリア、咲くんに緊急事態みたいよ。すぐにシャーリーの研究室に来てく……」

はやてからの言葉に軽い相槌を打ちつつ通信を切り、レフィリア

に目的地を告げるや否や――――

「あぁぁぁるじぃぃぃぃぃぃぃッ！！！　今我が助けに行くぞォォォォォッ！！！」

主馬鹿（レフィリア）は凄まじく気合の籠った雄叫びと共に、これまた凄まじい速度でドコかへと爆走して行った。

「しまった……。まあ、いっか。地図を持ってるなら研究室への道を間違えるハズは無いし」

自分のミスを上手い具合に解釈して無かった事にすると同時、ミオが目的地へ向かおうとして――――

“自分の正面の視界に悠々と闊歩する恐竜の姿を映したオーロラを捉えた”

「え！？　何、コ……」

状況がまるで把握出来ず混乱するミオを嘲笑うかの様にオーロラは彼女に迫り、飲み込んでから消え去った。

――――ククク……、『焔の魔導騎士』様は恐竜とでも遊んでな

誰もいなくなった裏路地に、そんな声が響いた。

～～～

「な、何だ貴様！　け、警備員は何をしている！」

警戒厳重で、それ故に静寂のみが相応しいハズのその場所に怒号が響く。

怒鳴っているのは１人の男。苛立ちが油汚れの様にこびり付いた顔と埃１つ付いていない黒のスーツの特徴的なその人物のそれに対し、怒鳴られた人物は血の付着した刀を真紅の鞘に納めながら涼しい顔でこう返した。

「刀のフラメと言います、私は。宜しかったでしょうか、アナタがアゥグス大統領で」

感情を感じさせない『無』表情な瞳で男―――ミッドチルダ政府のトップである大統領を射抜きつつ特徴的な口調で話したのは１人の少女。

１７０の中盤位はありそうな、女性にしては長身でスタイルの良い高校生位の少女だった。肩に掛かる位の炎の様に赤い髪と水色の瞳を持つその顔は、表情の無さを差っ引いてもかなり美人の顔立ちをしている。

更に特徴的なのはその格好。赤いレザージャケットと赤いジーンズを着ると言う『赤』一色の格好をしているのだ。恐らく１度目にすれば、その強烈な印象故に忘れる事は無いであろう。

「フラメ……『炎』だと！？　貴様、ふざけているのか！　おい、警備員！」

「無駄ですよ、呼んでも。眠っていますから、彼らは全員。邪魔ですからね、アナタと話をする時に」

怒鳴りながら非常回線で警備員を呼ぼうとするミッドチルダ政府

の長―――アゥグス大統領に対し、フラメは淡々と言い放った。相変わらずその瞳には感情そのものが見受けられず、彼女が放つ無機質さと異様さから彼はそれが虚言でない事を察した。

「……要求はなんだ。政府の権限の委譲か？　それとも管理局に敵対的な私の退陣か？　言っておくが私は命を奪われようともあんな連中に頭は下げんぞ」

先程より落ち着きを取り戻した口調で、アゥグスはフラメに告げた。そこには確たる意志が見受けられ、本当にその言葉の通りにして見せると言う気迫が感じられた。

だが。

「致しませんよ、その様な下劣な真似は。その逆です、寧ろ私達がしたいのは」

「何……？」

僅かに口元に微笑を浮かべながら告げられた言葉に対し、アゥグスは怪訝な顔をした。フラメはそれを気にする事も無く近くの椅子に勝手に座って話を続けた。

「アナタに是非協力をしたいのです、私は……いえ私『達』『王佐の刃』は。在るべき姿に戻す為に、この腐敗した世界を。そして支えたいのです、その世界を導くべき高潔な指導者であるアナタを」

「王佐の刃？　聞いた事が無いな。そんな得体の知れん連中を信じろと？」

「難しいでしょうね、確かに。ですが御理解なさっているハズです、私の力がそんじょそこらの虚仮脅しでない事は」

「う、うむ……」

フラメの言葉に言い返す事が出来ず、彼は口を噤む。現にココ大統領官邸の警備員は全員魔導師ランクＡＡＡ以上の逸材ばかり。彼女はそれと交戦しながら息１つ乱れていないのだから、如何に圧倒的なのかは言うまでも無いだろう。

そんな彼の様子を見て口元に笑みを浮かべると、フラメはジーンズのポケットから何かを取り出した。

「本心からですよ、私達がアナタに協力したいと言う言葉は。贈り物もあるのですから、その証左に」

「贈り物……？」

「ええ、『ヒノカグツチ』」

フラメの言葉に呼応して、彼女の持つ日本刀型のデバイスがアゥグスの携帯している情報端末にデータを送る。アゥグスはそれを最初から最後まで確りと見て、驚愕の声を上げた。

「オーバーＳランクの魔導師数名に聖王のクローンの小娘が行方不明だと！？」

「ええ。間違い無いでしょう、一部の局員が今騒いでいる様ですし」

「ふむ……」

「更にもう１つ。２人いるんです、この消失事件の直前直後に不審な行動を取りつつ消息を絶った人物が」

「それは……」

アゥグスの問いに対し、フラメは口元を歪めて告げつつ２人の画像を送った。

「風間カナンとルミオ＝デュアリス……。切り札の２つですよ、時空管理局が対アナタ方を想定して極秘裏に隠し持っていた……ね」

「何！？」
「長年アナタ方を疎んでいたんです、時空管理局と言う組織もアナタ方と同様に。裏でアナタ方の喉笛を噛み切る為の獣を飼い慣らしていたのです、表で偽りの笑顔を浮かべつつ。しかし……」
「御し切れずその連中が誘拐事件を引き起こした、と言う訳か……」
「そう言う事です」

御名答とでも言わんばかりの相槌を打ちつつ、フラメは待機状態の自身のデバイスである真っ赤な剣十字のロザリオを首に掛けた。そして席を立つと、そのままドアへと向かって出ようとした。

と。

「待て……、お前を信じよう。その上で頼む、我々ミッドチルダ政府の長きに亘る大願を叶える為に協力してくれ」
「承知致しました。では後日またこちらに窺います、準備を整えて」

嬉しそうな声色でそう言うとフラメは彼に一礼してから退室した。

（ククク……馬鹿が……。私がバラ撒いた『悪魔の涙（デモンズ・ラクリマ）』の虜になった獣共と精々ド派手なＰａｒｔｙを起こせよ）

――その心の中で、悪魔の本性を剥き出しにしながら。

～～～

水面下で何が起こっているかも全く知らず、見事に道に迷っていた。

「おかしい……ちゃんと持っている地図通りに歩いて来たと言うのに。何故着かぬのだ？」

因みに彼女は地図を上下逆に読んでいた。流石のクオリティである。

第二話　陰謀（ふおん）（後書き）

ルミオ・デュアリス：現代ミッドチルダ→？？？

ミオ＝レッドフィールド：現代ミッドチルダ→原始時代

刀のフラメ：現代ミッドチルダ

とんでもない駄文に……本当に済みません！

次は……

白河シンジさんにお願いします！

それでは！

第三話　意外な真実（前書き）

第四走者、本編の更新ほったらかしの白河シンジです♪（ヲイ
クロスするならとことんやってやんよを心の片隅に置いて突っ走りたいと思います。

次の人は恐らく……ククク。

では第三話参ります！！

第三話　意外な真実

目の前に突如現れた歪み。
止まることも引き返すこともできず、そのままその歪んだオーロラの様な幕になす術無く突っ込んだ。
そこまでは覚えていたが、その後の事ははっきりと覚えていない。
次元航行している時の空間とはまた違う感覚の中を彷徨ったことくらいしか記憶に残っていない。
次に気づいた時は既に歪んだ空間から抜け見たことのない場所へと辿り着いた。

【オイ、ルミオ聞こえるか】

「……う」

ルミオ・デュアリスとその愛機（パートナー）であるライデン。
ルミオはまだはっきりとしない意識の中、ライデンの呼びかけに答える。

【大丈夫か？】

「な、何とかな。お前こそ大丈夫なのか？」

【大事ない。お前が肌身離さず持っていてくれたからな】

そうか。とルミオは答え、体を起こす。心なしか体の所々が痛む。
恐らく、急に襲ってきた管理局員からの攻撃で何発か被弾したのだろ。
それにここに辿り着いた際、少し落下した感覚があったからその為と思われる。

「くそっ、何だったんだあの管理局員たちは」

【確実に“正常”ではなかったな。それに仮に罪人を追っていたとしても抵抗でもしない限り殺傷設定の攻撃を管理局が行うとも思えん】

「どう考えても人じゃないあんなの」

獲物を追う獣と言っても過言ではない状態となっていた局員。
人としての生気がまるで感じられなかった。

(外傷が無かったところからすれば魔法か何かで操られていたか……)

ルミオはふと思った。
人を操る魔法なんてそうそうある訳ではない。
ましてや、人の制御を奪うような魔法は存在しているとは言え、禁忌に近い代物である。
襲ってきた管理局員の事も気になるが、今一番気にしないといけないことにようやく口を割った。

「てか、ここどこだ？」

【建物の中の様だが、先ほどからジャミングが酷いのか外部情報が全く入ってこない】

「ジャミング？　確かに……携帯端末の情報が表示されてない」

ルミオは辺りを見渡すがあまり目にしない機械の部品やら崩れた壁の破片等、どこかの廃墟になった工場に思えた。

ただ、引っかかることが一つあった。

妙に息苦しい。

天井を見る限り大きくはないが窓がある。全て閉じている訳でもなく所々で開いている。

密室だと酸素が薄くなり息苦しくなるのは当たり前だが、窓があり、開いている時点で空気の入れ替えは少なからずとも行われているはず。

「とりあえず、外に出てみるか」

【そうだな。まずはここがどこなのか情報を集めないとな】

ルミオは待機状態のライデンをズボンのチェーンに掛け、入り口を探す。

建物で良く見かける「ＥＸＩＴ」と書かれた標識が目に入り、その先に扉があった。

だがその扉、よく見るとノブなのどの取っ手がついていない。つまり自動ドア。
しかもこの扉、アースラ等の航行艦等に備えられているセラミック製の頑丈なものだ。
はぁ、とため息を吐いたルミオは手で抉じ開けるべく扉に近づいた。
その時。

ウィーン！！

扉がルミオの手に反応して開いたのだ。

「うぉ！？」

予想外のでき事に思わず驚きの声を上げる。
だがこの驚きの声の後にルミオは言葉を失う。

「な、何だよこれ……」

追い打ちを掛けるように予想外の光景がルミオの目の前に広がった。
一瞬見ただけではただの荒野が広がっているように思えるが、荒野にしては荒れすぎている。
よく見れば、かつて建物“だった”瓦礫や鉄骨が霧散していた。
それに、薄暗かったため時間的に夜か明け方かと思っていたが、わずかであるがところどころで日の光が差し込んできている。ただ、

ほとんどが分厚い雲のような淀んだ膜に遮られていた。
ある程度納得がいった。この空を遮っている膜によって空気そのものも遮断されている。
外でこの状況なら屋内は空気が薄くて当たり前だ。

（どこかの管理もしくは管理外世界……？　いや、こんな世界があるなら管理局員が動いてるはず）

ルミオは言葉を失ったまま辺りを見渡す。
見渡す限り荒野と瓦礫。人の姿はどこを探しても見当たらず、虫のような小さな生物だけしか見当たらない。
元の場所に戻ろうと思っても自分が通ってきた空間は無い。仮に戻れたとしてもまたあの局員たちに追われるだけと、どこに居ても結局似たような状況に陥る。
周りを見る限り自分が今居る場所並みの建物は無い。
ただ少し距離はあるが、かろうじで原型を留めているドーム状の建物を見つけたためそこを目指そうとした時だった。

「オイッ、ライデン！！」

【どうした？】

「人……女の子だ、それに……ガジェットに追われてる」

誰も居なかった場所に突如少女とそれを追うガジェットが目の前に飛び出してきた。

ルミオは急いでライデンを手に取り、いつものようにライデンを待機モードからデバイスモードへと切り替える。
だがその時、手に違和感があった。
ライデンをデバイスモードに展開できていないわけではない、ただ、今自分が握っているのが普段握り慣れたものではなく、ごく希に握る“グリップ”であった。

ライデン・ガンフォルム。

可変式であるライデンのフォルムの内の一つ。
中～遠距離攻撃に特化したフォルム。しかし、使用者本人の射撃センスによって攻撃力や、攻撃のバリエーションが異なる。
もちろん、ルミオはほとんど使用していないフォルムであるがため、攻撃のバリエーションなど皆無に等しい。

「何で、ガンフォルムなんだよ！？」

【わからん。どういう訳か、今はそれでしか展開が行えない】

「どう考えても……って、んなこと言ってる暇があったら、あの子助けに行かないと」

ライデンの形態に関しては今は気にしていられない。むしろガンフォルムで正解だったのかもしれない。
ルミオの能力「神速」があるとはいえ、相手との距離がソードフォルムの射程に入らない。
だが、ガンフォルムならどうだ。
ルミオの射撃センスから直撃は難しくても、相手に対しての牽制

射撃にはなる。
急いで銃口に魔力を集束させ、ガジェットに対して放つ。
案の定、直撃はしなかったものの
少女とガジェットの間にうまく入り込み着弾し雷撃が迸(ほとばし)る。

「結果オーライってとこか？」

【そうだな、それより急ぐぞ】

「あぁ」

神速で一気に少女とガジェットに近づく。
ガジェットが割り込んだルミオの攻撃に対し、反応を見せる。

《ニンゲン……ホカク……スル》

おい、喋らなかったかこいつ。
聞き間違いかと思ったが、聞き間違いでないことがすぐに分かった。

《シンニュウシャ……ハ……マッサツ……スル》

今、自分の目の前に居るガジェットは、はっきりと聞き取れる発言で言葉を発した。

抹殺すると。

次の瞬間、ガジェットからエネルギー弾が放たれる。

「ちっ、こんなところでくたばれるかっ！！」

ルミオは慣れないガンフォルムで応戦に入る。

普段ならソードフォルムで一気に近接戦に持ち込み対象を斬る。

この流れで一件落着だが今はそうもいかない。

銃なだけあり、ある程度の距離を置かなければ出力を誤って、誤射する可能性があるからだ。

通常時でも使用できるエアーグリップを駆使してできるだけガジェットの死角を突くように移動する。

【ガジェットとはいえ、機動力はあるようだな】

「一撃で仕留める」

移動を繰り返しながら集束させた魔力に、魔力変換資質である「雷（いかづち）」を付与させる。

ルミオの、いやガルドの闘士が行える技能、魔力転換で魔力そのものを雷へと変化させる。

概ね良好。

久々のガンフォルムでの集束技。一か八かの賭けに出た。

「受けろ、雷撃！！」

銃口に集束しきった雷をガジェット目掛けトリガーを引いた。
放たれた雷撃はそのままガジェットに向け直進する。途中ガジェットが放った攻撃とぶつかり合うが全て打消し、威力を落とさずガジェットへと到達する。

―撃！―

直撃と同時に雷撃はガジェットの内部で散弾する。
ガンフォルムの範囲攻撃、クラスターショット。
元来は魔力弾を散弾させ、魔力ダメージを拡散する攻撃であるが、ルミオの場合は魔力転換により物理的なダメージを直接与えることができる。
ガジェット特有のＡＭＦ（アンチ・マギリング・フィールド）により魔力を無効化されるはずであるが、物理ダメージのため仮にＡＭＦを保有していたとしても無視できる。

《クドウブハソン……コウドウフカ……コレヨリジバクシマス》

駆動部を破損させることに成功した。
ただ一撃で仕留められなかったことが悔やまれる。如何せん、このガジェット動けないからと言って最後の手段、“自爆”を宣言した。

「冗談じゃねぇ！！」

ルミオが叫んだ時には既にカウントダウンが行われていたようで、ガジェットからは今にも爆発しそうな光が溢れてきている。

―煌！―

―爆！―

まばゆい光がルミオたちを包み込む。
同時にガジェットはその場で小爆発を起こす。
小爆発とはいえ、至近距離での爆風は想像以上の威力を発揮した。

「きゃぁぁ！！」

「くぅぅっ！！」

ルミオは爆風から少女を守るようにして、しっかりと胸に抱き地面を転がる。
どれだけ飛ばされただろうか、そしてどれだけ転がっただろうか。
目を瞑りながら自然に自分の体が止まるのを待った。
ようやく地面を転がっている感覚が終わった。

「オ、オイ、大丈夫か？」

「……うん」

少女の反応にホッと安堵の溜息を吐く。
衣服は継ぎ接ぎだらけで、体の至る部分に生傷があったが、今ので怪我した訳ではなさそうだった。

「お兄ちゃんこそ……大丈夫？」

「あぁ、大丈……痛ぅぅ」

大丈夫だと言おうとした瞬間だった。
腕に何かが刺さるような痛みが走り、思わず顔をしかめる。
爆風で飛ばされた時に地面に強打した肘辺りが急に痛み出した。

「大変……血が出てる、急いで手当しないと」

少女はルミオの傷ついた腕を見てワタワタと慌てだした。
ルミオは慌てる少女に大丈夫だから落ち着けと制するが、少女は今にも泣きそうな表情で「ごめんなさい、ごめんなさい」と謝りだした。
このままじゃ埒が明かないと判断し、とりあえず今はさっきのガジェットがまだ他にも居ると判断し、どこか身を隠せるところは無

いか問う。
少し先に自分の仲間たちが居るドームがあるからそこまで連れて行ってもらうこととなった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

半ば強制的にドレス姿へと着替えさせられた“少年”、風間カナン。
彼はそのままの姿でヴィヴィオが行ったと思われるクラウスの屋敷がある山の麓（ふもと）へと辿りつ。
だが、そこでまず難関に差し掛かった。

「おいおい、まさかと思うけど、この山自体がクラウスの領地とか言うんじゃないだろうな」

目の前には検問のような入口が山道を塞いでいた。
もちろんその検問にはどこかはやてやシグナムが身に付けているような騎士甲冑を纏った門兵が立っていた。

「あの騎士をぶっ飛ばすか……いや、こんなところで騒ぎは起こせない。けどこんなところでモタモタしてられない……あぁぁぁ！！
どうすりゃ良いんだよ」

「誰だっ！？」

（やっべぇ、何叫んでんだ俺っ）

カナンの無駄な叫びが門兵の耳に届き、腰に携えた騎士剣を抜きこちらに近づいてくる。
やはりここは強行突破しかないか、と思った矢先、自分が隠れていたところとは反対側でカサカサと物音がした。

「そっちか！！」

門兵は物音がする方へと方向を変え、警戒しながら草むらへと向かう。
次の瞬間、草むらから一匹の獣が飛び出してきた。
何だ、ただの野兎じゃねぇかと思ったが、門兵の反応が異常であった。

「くぅ、こんなところに何故“魔獣”が……これ以上は行かせんっ！！」

問答無用に野兎に向かって騎士剣を一気に振り下ろす。

（へっ？　野兎相手に何やってんだあの門兵）

門兵が野兎と対峙している隙を狙って検問を潜ろうと、門兵と野兎のやり取りを横目で気にしつつ移動を始めたが、ここでまた足を止めることになる。
門兵によって振り下ろされた剣はあのままの勢いだったら野兎を

切り裂いて居たはず。
だが、その当たり前の光景は一瞬にして覆された。
振り下ろされたのその剣は野兎に直撃する前に別の何かによって攻撃を受け止められていた。

「えぇっ！？」

思わず声を上げてしまった。しかしこの声には誰も気づいていない。
むしろそんな余裕は、今の門兵にはなかった。
野兎、もとい野兎の姿をした魔獣と呼ばれた生物は障壁を展開していた。
そして次に門兵が動く前に魔獣が門兵に対して攻撃を仕掛けたのだ。

―撃！―

これにも驚きだった。
魔獣は門兵に対し、魔力弾を放った。それに追い打ちを掛けるように本来行うであると想定していた蹴りなどいわゆる肉弾戦を仕掛け、門兵を襲う。

「どうなってんだよ、てか魔獣って何だよ、魔法使ってんじゃんよ」

急な出来事にパニくるカナン。
あの門兵を助けるべきか、否か。それを考えようとしていたがカナンの性格上、思考よりも先に体が動いていた。
格好なんてどうでもいい、カナンは剣を抜き門兵と魔獣の間に割り込む。

「おっさん、大丈夫か？」

「き、君は一体」

「通りすがりの……」

「“女の子”がこんなところに居たら危険だ！！　下がるんだ」

―ペカッ！―

「今はこんな形してる。けどな……けどな……」

不運再来。
どうして俺はバカ正直にドレスでこんなところまでノコノコやってきたんだと数十分後に気づくことになる。

「俺は……俺は……」

カナンの魔力値が上がる。
急激な変化に魔獣も野性的感が働いたのか守りの体制に入った。
が、既に遅かった。

「男だバッカ野郎ぉぉぉ！！！！」

十八番である抜刀剣術を見事に無視して斬撃を放つ。
適当に放っているように思えたが全て魔獣に向けて放たれていた。
魔獣は障壁や自らの攻撃で斬撃を防ぐも、急所を直撃した斬撃が致命傷となり消滅する。
ちなみに、一部斬撃は門兵に向けて放たれていたのはここだけの話。

「はぁー、はぁー」

カナンは怒りのあまり肩で息をしながら呼吸を整える。
気が付けば門兵までを吹っ飛ばしていた。
厄介ごとだけは起こさないようにと心掛けていたが、結局なところ初っ端に思いついた門兵をぶっ飛ばすを行ってしまったのだ。

「俺は、何もしていない。ただこの門兵が俺の攻撃に割り込んできて巻き添えを喰らっただけだ。うん、そうだ！！」

誰に対してなのか、一人ぶつぶつと愚痴を漏らしながら検問を抜

け山の中へと進み始めた。

◇

山道を歩き始めて5分くらいで、胸元がムズムズする感覚に襲われる。
今更ながら、自分が胸元に相棒である二人を収納していたことに気付く。

「こいつらのこと忘れてた……」

カナンは急いでメイデンとレナスを胸元から取り出す。

「メイデン、起きたか？」

【ほえぁ？】

眠気眼のメイデンが目をこすりながらカナンの問いかけに答えるが、不完全な反応となり、お兄さんの心をわしづかみにするような声で返事をする。
まだ目覚めが不完全なメイデンであったが、カナンの姿を見て一気に目を覚ます。

【うぉっ！？　カ、カナメがどうしてここに】

「振り返れば、そこに～……な訳ねぇぇ！！　俺だ、カナンだ」

【マスター、何故にドレス？　まさか、ついにその路線に走り出したのか！？】

「んな訳あるか！！　不可抗力だよ、不可抗力」

【で、何故その様な格好を？】

「実は、かくかくしかじか」

【ほれほれうまうま……と】

小説って便利♪

カナンはとりあえずメイデンに村であったことの一部始終を説明し、何故今自分がドレス姿でこんな山の中を突き進んでいるのかを話した。

一応、うむと納得をしたような反応を見せるが何か引っかかるような表情も浮かべていた。

そんな話をしている中、ようやくもう一人が目を覚ます。

【ふにゅ、ふにゅ。メイデン？　主？　今何時でしょうか？】

【姉さん、ようやく起きたみたいだ】

「起きて早々二人には悪いんだけど、確認させてほしいことがある」

急に真剣な表情でカナンが話しかけてきたからなのか、メイデンとレナスは予想外の展開に一瞬だけ固まる。
ただ、カナンが真剣なだけに二人もすぐに話を聞く体制に入る。

【マスター、確認したいこととは一体？】

「クラウスって、古代ベルカの覇王って呼ばれた男の人だよな？」

【そうですけど、それが何か？】

「いや、さっき居た村でオリヴィエだのクラウスだの名前が挙がってたから」

【珍しいこともあるのものですね、この時代でも聖王と覇王の名を出す村が……って待って下さい】

レナスはカナンの発言に食いつく。
いくら古代ベルカ時代の王家の名前が有名だからと言って普段の会話で出てくるようなものではない。
それに、今の時代となってはベルカ自治区の人か、もしくは歴史に詳しい人くらいしか知らないと言っても良い程の情報である。

「やっぱりおかしいのか？」

【おかしいと言うのは失礼かもしれませんが、確かに今の時代から考えれば不自然ではあります】

【なるほど、そういうことだったか】

「どうした、メイデン？」

ん～と考え込んでいたメイデンがカナンとレナスの会話を聞いて、うむと一人納得するようにうなずく。

目覚めてからずっと引っかかっていたことがどうやら解決したようだ。

【実は、目覚める前に変な夢を見たのだ】

【夢？】

【あぁ。マスター、その村で“オリヴィエ様が村に来ていた”と言う会話をしていなかったか？】

「してた。だから今ここに居るって話だよ。それより二人とも、俺の見解なんだけどさ」

【何だ／何でしょう？】

「今俺らが居るのって……」

カナンが発言しようとしたその時、見たことのない生物が飛び出してきた。

―撃！―

「メイデンッ！！　レナスッ！！」

カナンは咄嗟の判断でエクスカリバーを使用せず、そのまま拳で飛び出してきた生物を殴る。
思った以上に頑丈だったのか、骨が軋む音がした。
痛みを堪えながら、殴りつけた拳を振り切る。
その一撃が効いたのか、生物は逃げるかのように山奥へと走り去っていった。

「痛ぅぅ、何だったんだ今の」

【大丈夫かマスター！？】

「何とかな。それよりお前らは？」

【主に助けて頂いたので問題ないです】

「そうか、なら良かった」

【あの種の生物は人を襲うようなことはしない筈なのですが】

「レナス、さっきの知ってるのか？」

レナスは、はい。と答え説明を始める。
先ほどの生物は、ピクシーキャットと呼ばれる古代ベルカ時代に生息していた魔法生物である。
やや姿は異なるものの、猫科に属しているらしくピクシー（小悪魔）と名がつけられているが、レナスが言うように人間を襲うようなことはしない、大人しい種類である。
恐らく、小さい姿である私たちを狙っての行動だろうとメイデンがカナンに伝える。

【これで確証が持てたな】

「あぁ、嫌な予感はしてたけどまさか的中するなんてな」

古代ベルカ時代。
王家、帝家、皇家のベルカ御三家（実質は三王家、四帝家、四皇家と複数ある）が世界を統べる時代。
そして一番争いが激しく止まない乱世の時代でもある。

そんな時代にカナン、そしてヴィヴィオは飛ばされた。
そして、そのヴィヴィオは確証はないが、複製母体（オリジナル）であるオリヴィエと間違えられ、戦友であると言われていたクラウスと共に屋敷（恐らくイングヴァルト家の屋敷）へと戻ったとのこと。
急がないとまたとんでもないことが起こるかもしれない。
そう感じ取ったカナンはメイデン、レナスと共に山道を突き進む。

「ここか……」

【みたいですね】

【下手な行動をしないようにしないとな】

「だな」

道中、山道からけもの道のような場所を歩き回り、ようやく目的地であるクラウスの屋敷へと辿り着いた。

飛行魔法を使えば苦労せず到着できると言うことに気付くのはこの後すぐの事だった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ガジェットに襲われていた少女に連れられ、原型を留めているドーム状の建物へとやってきたルミオ。

先ほど自分が居た工場跡のようなところよりは幾分かましで、まだライフラインは死んでいなかった。

建物に入ったルミオは思わず「えっ？」と声を上げる。

人が居た。

数えられる程度の人数しか居なかったが確かに自分と少女以外の人がそこには居た。

「ステラっ！」

「お母さん……ごめんなさい」

ステラと呼ばれた少女は駆けつけてきた母親に抱き寄せられた。
母親はなぜ外に出てしまったのかと言うことを咎めていたが、そんなことよりも無事に戻ってきたことがうれしかったのか涙を流していた。
ステラはごめんなさいと謝りながら継ぎ接ぎだらけの鞄から缶詰を取り出しそれを母親に渡す。
どうやら食料を取りに行っていたようだ。
女の子一人であんな危険なことをしていたのかと、この世界の現状をルミオは突き付けられた。
そうもしないと食料が手に入らない世界……。
管理局は何をやっているんだ。

「あのお兄ちゃんがロボットから私を助けてくれた」

『えっ？』

ステラの発言にその場に居た皆が愕きの声を上げる。
ところどころで聞こえてくる声。

あのロボットを倒せる人間？
しかも一人で？

何がそんなに驚くことなのか全くわからない。
ルミオはステラに問い掛ける。

「ステラ、だったか？」

「何？」

「何でみんな驚いてるんだ？」

「何でって……」

ステラが言葉を続けようとした時、別のところから男の声が響いた。

「レジスタンスか？」

咄嗟の発言でうまく聞こえなかったためか、思わず「はっ？」と聞き返してしまう。

「レジスタンスなのかって聞いてるんだよ！！」

レジスタンス？　何の話だ。

自分はただ次元の歪みに飲み込まれて辿り着いた、いわば放浪者。

そんな訳のわからない組織には入った覚えはない。

「違う、俺はただの人間だ」

「ただの？　ただの人間があのロボット……ガジェットを倒せるわ

けないだろ、それにお前がその腰にぶら下げてるやつ、デバイスって言われる武器なんだろ？」

「確かにこれはデバイスだけど、そんなにデバイスが珍しいのか？」

「武器はレジスタンスしか持っていない。俺たちのような朽ち果てそうなところには助けに来てくれない組織だ」

男はどうやらレジスタンスを嫌っているようだった。

ステラの母親がルミオにレジスタンスについての話をしてくれた。

レジスタンス。

この世界で唯一、外を徘徊しているロボットたちに抵抗できる組織。

数は多くないが、人間が生き残っているところ（主に人が多く集まり、戦力強化等が行える地域）の救援を行っているが、貧富の差が激しく利用価値の少ない箇所に関しては後回し後回しにしている節がある。

唯一の救いは無償で戦ってくれるところであるが、その代償かレジスタンス式の規則などを強要してくることもある組織とのこと。

「管理局みたいなところだな……」

ルミオは自分が所属する管理局の事を思い出す。

管理局もここのレジスタンスに似たようなところが全てではないがところどころ見受けられる。

どこの世界も人を守る組織何て大抵似たようなものなのだなと改

めて感じた。
だがこの時、ステラの母親が思いがけないことを口にした。

「管理局……昔にそういった組織があったみたいだけど、レジスタンスはその残った人員で組まれているっていうのも聞いたことがあるわ」

「昔あったってどういうことですか？」

「私も詳しいことは知らないけど、私の曾祖母が務めていたと祖母から聞かされたことがあるだけですけど、昔は管理局が色んな世界を管理していたとか」

（どういうことなんだ……。ここは管理世界じゃないのか）

何かがおかしい。
この世界に来た時から何かおかしいと思っていたが、ステラの母親から話を聞いて尚更おかしいことが浮上してきた。

荒れ果てた世界。生気を失いつつある人たち。人々を襲うロボット。それに対抗するレジスタンス。
そしてかつて“管理局”と呼ばれた組織があったと言うこと。
こんな世界を時空管理局が管理しているとしたら管理不行き届き過ぎる。しかも、管理局があったと言うこと、それにステラの母親の曾祖母が務めていたことから、管理局がこの世界を破棄したことになるため尚更矛盾が生じる。
それに仮に管理外世界だったとしても、ロボットの存在やデバイス使うレジスタンスの存在がある時点で矛盾する。

ここで疑問がルミオの中に生じた。
もし仮に、この世界にあった管理局が何かの事象により無くなったとしたと想定した場合、いつ無くなったのか。
それはステラの母親が言った通り、曾祖母が務めていたと言うことを祖母が伝えている時点で祖母の時代では既に管理局は無くなっていることになる。

今新歴何年だ？　そしてこの世界の名前は？

「すみません。変なことを聞くかもしれませんが……。ここって“ミッドチルダ”ですか？　それに今新歴何年ですか？」

ルミオの問いに対して、ステラの母親からの答えにルミオは驚かされることになる。
ステラも一緒にその話を聞いていたが疑問符を浮かべている。
恐らくルミオが何を聞いているのかが全く分からない状態だと言うことがわかる。

「ミッドチルダ……、そんな名前だったような？　もう場所の名前なんて昔に比べたらほとんどなくなってるから正確な名前は知らないわ。何年……、何年だったかしら？」

ステラの母親からの回答が出る前に、先ほどルミオに食いついて

きた男が代わりに答えを告げた。

「新歴１０８１年だ」

言葉が出なかった。
信じたくはないが、これが現実。
新歴と言う単語が通じたことから自ずとこの世界がミッドチルダであることを物語っている。
そして男の答えから、ここが１０００年後の未来だと言うこともわかった。

崩壊したミッドチルダ……。
世界を崩壊させた理由をルミオは調べるため移動を始める。
それにレジスタンスの動向も気になるところである。

そして、ルミオは今まで以上の惨劇を目の当たりにすることになるとはこの時、まだ知らない……。

第三話　意外な真実（後書き）

ルミオ：？？？→崩壊したミッドチルダ

カナン：クラウスの屋敷前（古代ベルカ時代）

◇

まずは投稿期限ギリギリの更新になってしまい申し訳ございません。
特に読者の方、お待たせして申し訳ないです。

さて、今回二人しか動かしていません。
何故なら、他を今動かしても中途半端になると判断し、動かした方が良いかなと思われた自分の未来と長ったらしくなりそうな古代ベルカのカナンを無駄に長くなりましたが書かせて頂きました。
とりあえずは１５人一周すれば他も動かしやすくなっていることでしょう。

さて次のバトンですが。
もはや裏で回してると言っても……ゲフンゲフン
現状の流れを考えて、古代ベルカをどんどん進めて頂きましょう。
よろしくです、ヨシュアさん！！
ではまた会いましょう★

第四話　仲間と共に（前書き）

はい、今回のランナーとなりましたヨシュアというものですー。
うーむ、わかってはいたもののやはりクロスは難しい……。
とりあえず……ボン太郎さん！　テスタメントの兄貴！　ごめんなさい！
では、どうぞ！

第四話　仲間と共に

▼▼▼

―撃！―

瞬間、祐希奈の拳がキラキラと輝いていた咲夜の顔面に叩き込まれた。

拳を握り締めた体勢のまま鼻血を噴出した咲夜は仰向けに倒れ、苦痛に呻く。

「聞きなさいよ？」

「ごめんなさい……」

そんな咲夜を祐希奈が気遣うこともなく、至って平然としながら腕組みをする祐希奈。彼女からすれば、当たり前の行動だったのだから。

言うことを聞かなければ即鉄拳。無視をするなど論外だ。

相手が年上だろうと、階級が上の人間でも関係ない。気に入らなければ殴るだけ。

それが、祐希奈という少女だ。

ちなみに、先の一撃はとある少年達に放つものよりは数段弱かったりする。

これには祐希奈の優しさが滲みでている。

「優しさ！？　これ優し――」

―撃！―

「うっさい♪」

「ごめんなさい……」

どこか虚空に向けてツッコミをいれた咲夜を軽くジャブで黙らせ――

――アインハルトはどう反応したらいいのかがわからず右往左往していたが。
改めて質問を行うことにした。
「さっき飛ぼうとした時、ダメってアンタはいったわよね？　目が本気だったらから仕方なく今まで歩いてきたけど、そろそろ理由を話してくれない？」
「あ、それは私も気になってはいました。歩いていても、体力の浪費だと思うのですが……？」
そう、三人が歩いていたのは、他でもない、はやコンこと咲夜が飛ぶなと止めたからであった。
二人から求められ、咲夜は上空を見上げて、安全の確認、「ここならいいか」と、一人で頷く。
その行動時代に、祐希奈とアインハルトは疑問を抱く。
明らかに、咲夜は上空を警戒しているのだから。
「今、ここに来ているのは、俺達とカナン君、そして、ヴィヴィオちゃん、だけの筈だ。実験に参加していたのはこれだけだからな。でも、違う。よく集中しないとわからないが、他にも魔力の反応が感じられる」
咲夜の言葉に、祐希奈とアインハルトは顔を見合わせた後、瞳を閉じて精神を集中、魔力反応のみに意識を巡らせ。
「あるわね……。しかも、一つじゃない……」
「はい。複数感じます……」
「ここからは遠いけど、戦闘を行っているところもあるみたいだ。逆に、それだけ遠くてここまで伝わってくるってことは」

ようやく咲夜の言っていることを二人は理解した。
反応を感じ取れた場所からは遠く離れている。
逆に言えば、それだけ離れているにも関わらず、感じるのだ。
必然、それは、その対象が強力な個体という意味で。

「相手のことがわからないうちから目立つなということですね？」
「そういうこと」

事の次第を理解したのか、アインハルトは少しの緊張を含んだ表情で頷く。
しかし、祐希奈は腕組みをしながら微妙な表情を浮かべていた。
理解はした。理由もわかる。だが、納得が出来ない。

「こういうの、コソコソするみたいで嫌いね」
「気持ちはわからないでもない、な」
【女性問題が無ければ真っ先にマスターが突っ込むだろうし、なぁ？】
「凪、ちょっと黙れ」

またしてもはやてのことに突っ込まれ、コメカミを痙攣させながら、若干の“良い笑顔”を浮かべながら相棒を黙らせる。
はやて分が切れてきているため、冷静さを欠いてきているのだ。

「何だよはやて分って！」

虚空にツッコミを入れる咲夜をいぶかしみながらも、祐希奈は溜め息を一つ。

「まぁ、それが最善ならそうするだけよ」

祐希奈が維持を張らずに歩いて先へ進んでいくことに二人は少し驚いた。
出会ったばかりの二人からしても、譲る、などといった行為には縁が遠そうだと思っていたから。　その見解は間違ってはいない。
それでも、仲間の危機に通すべき我が儘などはない。
そのくらいは、祐希奈とて理解していた。
出来る限り急いで、会話もなく、無言のまま進んでいく。
集中からの無言であったのなら、どんなに良かったか。
特に、祐希奈はそれが顕著であった。
速く、もっと速く、されど、人間の足で山道を歩く速さには限界がある。
こうして歩いている今にも二人が危険な目にあっているような気がして、その焦りが彼女の思考を満たしていく。
彼女の頭の中にあるのは、一刻も早くカナンと合流し、ヴィヴィオを見つけるということだけ。

「危ない！」
「え……？」
【祐希奈！】

普段の祐希奈なら、こんなことはなかったのだろう。
だが、先に進むという目的が先行しすぎたために、注意力が散漫してしまった。
アインハルトの叫びを聞いて、ようやく我に返った祐希奈の頭上に影が射し、ダン、とその脳天に光弾が直撃し、悲鳴も上げずに祐希奈が倒れる。

「祐希奈さん！」

《ケケケケケケ！》

倒れた祐希奈に走り寄るアインハルト。
それを楽しむような鳴き声、否、笑い声が咲夜の耳に届く。
声のした方向に振り向くと、そこにいるのは鳥の群れだった。
見つけたものは幸運を呼ぶといわれる青い鳥。今、咲夜が目にしている鳥は確かに青い。だが、開いた口には牙が並び、ニヤついているとすら取れるその表情は、とても幸運を呼ぶとは思えない。
いくら急いでいたとはいえ、明らかに悪意の感じられるその鳥の接近を感じられなかった悔しさに咲夜は舌打ちを一つ地に落として。

「凪！」
【許せねぇよなぁ！】
「いきなり女の子を狙うような奴は……」
「【叩っ、斬る！！】」

出来るならば先の理由から魔法は使いたくはなかったが、飛行能力を持つ鳥を相手に逃げ切れるほど、人間の足は速くはなれない。
それに、女の子に手をだしたそれらを許す気など咲夜には毛頭無く、バリアジャケットを展開し、腰溜めに凪を構えて飛翔する。
咲夜の視線が鳥の群れを捉える。数は把握、７羽。

『ケケー！』
「邪魔だ！」

―閃！―

先陣を切って咲夜に向けて飛翔した鳥に向けて凪を一気に振り上げる。
一筋の閃光は全く勢いを落とさないまま、縦一文字に鳥の身体を貫く。

鳥にもし高度な知能があったのなら、疑問に思ったことだろう。
突撃したはずの自分が何故、激突もせずに敵を素通りしているのか、と。
そして、気づくだろう。
自らの身体が咲夜によってすでに寸断されている、という事実に。
真っ二つに切り裂かれた鳥に見向きもせずに、咲夜は群れの中心で上昇を止めた。

「止まってていいのか？」

鳥が言葉を理解しているかはわからない。
だが、咲夜は静かに鳥達に言った。
少しでも、恐怖を与えるために。
咲夜の左手が光り輝く。それは、咲夜のガントレット型アームドデバイス、ソーディアンが起動した証でもあった。
狙うは一点、固まっている群れの中心！

「せっ！」

―穿！―

『グギャ！』

咲夜が鋭く息を吹き出し、左腕を霞ませたかと思うと、一匹の鳥から悲鳴があがり、血飛沫が空に華を咲かせる。
その顔に深く突き刺さるのは短刀。投擲用につくられたダガーだ。
ソーディアンに備わる力は魔力を込めることにより多種多様な刀剣を創ることが出来る。こちらに目が行き安いが、もう一つ、備わった力がある。
創造された刀剣の爆破。それがもう一つの力。

今を持って、咲夜はパチリと指を弾き、ソレを発動させた。
鳥に突き立っていたダガーが光を放つ。危険を感じたのか、周囲にいた鳥達が離れようとして。

―煌！―

それは叶わなかった。
突き立ったダガーが炸裂し、爆風は鳥の身体と同時に４羽の命の灯火もろとも吹き飛ばす。
かろうじで逃れたのはたったの２羽。
体勢を立て直すも、すでに遅い。
群れのリーダーとなるべき存在が最初からいない時点で、勝負は決まっていたようなものだ。否、咲夜からすれば勝負ですらなく、駆除というほうが正確か。

【油断はするな。片付けるぞ！】
「おう！」

相棒の凪に指摘をされ、再度きを引き締める。
戦いの中では少しの油断が命取りになるためだ。
鋭い声に後押しされて、咲夜は仕上げとばかりに気合を入れなおす。

『『ケェー！！』』

―煌―

「あれは……」
【？　あぁ、魔力弾だな】

様子の変わった2羽に咲夜は眼光を鋭くする。
2羽の口内に輝いている光。その光にはよく見覚えがあった。
ここで咲夜は思い出した。
祐希奈を打ったのは、なんだったのか、と。
その答えがこれだ。
魔力弾、ただの鳥かと思っていたがそうではないことが発覚。
つまり、この鳥達は魔法が使えることになり、リンカーコア、もしくは、それに代わる何かを有している、ということになる。
そして、この魔法は、非殺傷設定などありはしない。攻撃のためだけに生まれた魔法。

―弾―

傷つける力を持った力は口内から弾け飛ぶように発射され、瞬く間に宙を駆ける。
向かう先には、咲夜。
一直線に進んだ光弾は、咲夜の頭を正確に狙って。

―閃！―

横一閃に振抜かれた凪の一撃によってあっさり砕け散る。
当たり前だ。例え、魔法の力を持っていたとしても、人を傷つけられるだけの力があったとしても、それは咲夜の脅威となり得ない。
「所詮はたかが‘スフィア’だろ？」
そう、鳥が放ってるのはたかだかスフィア1発。2羽になったところで2発。
咲夜は知っている。頭が真っ白になるほどのスフィアを巧みに操り、それすら囮に使い、スフィアなどとは比べ物にならない威力を

誇る、‘砲撃’を放つ魔導師を。
そんな人間と、戦ってきたのだ。祐希奈のような不意打ちなどでなければ、スフィア2発程度で咲夜の戦況が傾くなどありえない。

「覇王……」

―煌！―

振り上げられた凪から放たれる碧銀。
刀身を覆い隠すほどの光は、鳥の放ったソレよりも遥かに魔力密度が高く、これが本当の魔法だと言わんばかりに存在を知らしめる。
至極当然、構えた刃は惑い無く、咲夜が振るうは王者が刃！

「一、閃ッッ！！！」

気迫と共に放たれる怒声、凪が袈裟懸けから一気に振り下ろされる！
その場で振り抜かれた凪の軌跡を延長するかのように碧銀の光は三日月を描き――。

―閃―

あまりの輝きに動くことを忘れていたのか、その場に停止したままで飛んでいた2羽の身体を貫通、それでも勢いは止まらずに三日月はその身に持つ魔力が拡散するまで飛翔を続け、やがて魔力粒子として宙に散らばった。
同時、鳥の身体が死したことを理解したのか、呆けた表情を浮かべたまま落下、黒い塵となって霧散する。
残心を行い、残った敵がいないかを確認。咲夜はゆっくりと凪を収める。

そのまま周囲を見渡し、何も異常がないことを判断。
戦闘を行ったことにより、少なからず魔法を使った。その反応を察知して更なる危険が来ないか危惧していた咲夜だが、どうやら取り越し苦労ですんだらしい。ホッと胸を撫で下ろす。

「アインハ――」

祐希奈の容態はどうかと、地上にいるアインハルトに尋ねようとして、驚愕に瞳を見開いた。次いで、まるで悪い夢だとでもいわんばかりに、苦虫を噛み潰したような表情となる咲夜。
メキメキと木々がへし折れていく、否、折られていく。

『ルゥァァァァァァァァァァ』
「っぁ」

―轟！―

鼓膜が破れるかと思うほどの咆哮が、咲夜の頭を揺らす。
咆哮に驚いた鳥達が木々からバサバサと羽ばたき飛び去っていく。
更なる危険は来ていなかった。
‘空には’
地上にソレを見つけてしまう。鳥などとは比べ物にならない、脅威を。
咲夜の視線の先にいたのは、巨人、だった。
大きさにして5メートル近い、得物はただの木だろうが、根元から引き抜いた丸々一本を手に持っていることからその力は人間などを遥かに上回ることが容易に想像できる。
アインハルトは祐希奈を守ろうと、武装形態で迎撃体勢をとっていた。
念話を送ってくれれば、そんなことも思った咲夜だが、アインハ

ルトは祐希奈の応急処置に集中していたのだろう。
そして咲夜は空での戦闘中。全ては悪運が立て続けに重なっただけ。
魔法を使った影響は確実に来ていたのだ。
ただ、その影響の矛先が向いたのは、咲夜ではなく、地上にいる、彼女だった。それだけの話だ。
とにかく後悔は後に置く。今優先すべきは、彼女らの救出。
出来うる限りの最高速で咲夜は一直線に降下する。
高度はそれほど高くはない。咲夜の速度なら秒針が動くまでに地上へと到達するだろう。
それでも、遅い。自分はこんなにも遅かったのかと歯を食い縛るほどに。

「間に合えぇぇぇ！」

祈りを込めても速さが増すはずもない。
巨人の腕はすでに高々と天に伸び、振り下ろされようとしていた。
アインハルトは祐希奈が背後にいるために、避けられない。美しいその顔が、悔しさに歪んでいく。
咲夜は、間に合わない。

―砕！―

もう少し、もう少しだけ時間があったなら、間に合ったのに……。
絶望に染まっていくアインハルトと咲夜の前で無情にも巨人の槌は振り下ろされ、地響きを発生させながら地面を叩き割った……。

▼▼▼

は疑問を抱く。
死の恐怖のあまり、無意識で閉じてしまっていた瞳を開いていく。
アインハルトの前に、人影があった。咲夜が間に合ったのかとも思ったが、違う。咲夜にしては身長が低く、しかも細い。
最大の違いは髪の色だ。その人物の髪は、銀。

「なーに終わったーみたいな顔してんのよ？　勝負は最後まで投げない。そしたら、チャンスなんていくらでもくるもんよ？」
「う……そ……」
「無茶苦茶だなおい……」

目が点になるとは正にこのことだろう。
アインハルトどころか、救援に入ろうとしていた咲夜ですら、止まってしまっている。
意識を取り戻した祐希奈に、そして、振り下ろされた巨木の一撃を片腕一本で支えている祐希奈に。
呆然とするアインハルトに向けて、ニッと笑った祐希奈は、改めて前を、友達を傷つけようとした巨人を、ただ、見る。

『オオォォォォォォオオオオオオ！！！』
「うっさいわね……。受け止められたのがそんなに不満なわけ？こんなの誰でもできるわよバーカ」
【いえ、誰でもは無理だと思いますが……】
「は？　アインハルトとかはやコンは出来ないの？」
「「前！　前！」」

地を震わせる咆哮を至近で受けようと、やかましさに眉を顰めただけで、祐希奈が怖気づくことはない。
それどころか、アシェルと会話をし、キョトンとした表情でアイ

ンハルトと咲夜を交互に見比べながら巨人を無視する始末。
焦りに焦るアインハルトと咲夜に指を指されてようやく前を向いた祐希奈は溜息を一つ。

『ルゥゥアアアアアァァァーー！！！』
「チッ……」

そんな祐希奈に巨人は腹を立てたのか、同じ動作でもう一度巨木を振り上げ、しかし、確かに変化をもたらす。
ボコリと音を立てて膨れ上がる巨人の右腕。それは、筋肉以外の何者でもない。
つまり、先刻の一撃は巨人の全力ではなかったということだ。全力状態ではなくとも地面を叩き割るほどの威力だ。
全身全霊に加えて、怒りの力もプラスされた今、その膂力は先とは比べるまでもなく、強力になっていることだろう。
怒り、猛る巨人に、祐希奈は舌打ちを一つ残し、右手を握る。

「烈破！」

―轟！―

炎熱変換、それは祐希奈が持っている資質。魔力を燃やす。師匠であるシグナムに最初に教えてもらったことを、実行する！
握りこまれた拳に炎熱が生まれ、祐希奈の腕を舐める。その熱を心地よいとすら感じながら、右腕をいっぱいに引き絞る。
祐希奈は逃げることは嫌いだ。正面から叩き潰す。例え、相手が自分よりも巨大だろうと、そのスタンスを変えるつもりは毛頭ない！
祐希奈の手首を覆っていた手甲がスライド、空薬莢を一発弾き飛ばす。
たった一発。だが、‘この程度’の相手には十分。

『オオオオオオオオォォォォォォォォ！！！』
「爆砕拳ッ！」

―撃！―

振り下ろされた巨木と、振り上げられた炎拳。
結果は火を見るより明らかだった。
巨木に比べれば祐希奈の拳など、小さなものだ。見た目から勝利を確信していた巨人だったが、その期待は大きく裏切られることとなる。
勝負にすらならないと思われた小さな拳は、一瞬にして巨木を叩き折る。
拮抗すら許さない。触れた瞬間に拳の威力に耐え切れずに折れたのだ。
それだけには終わらない。
巨木が折れた、ということ祐希奈の前に障害物はもう存在しない。
巨木を折られ、固まっていた巨人。その遅れは致命的。

「パワーで私に勝とうなんてねぇ……」

踏み込んだ足から地面を蹴って飛び上がり、少女は巨人の眼前へ。
光に煌く銀の髪を躍らせて、優雅さすら感じさせた祐希奈は身体を回転させながら捻っていく。
その遠心力が到達する先は彼女の右足。幾度も罪なき少年達を闇へと葬ってきた、伝家の宝刀。オマケとばかりに身体強化も巡らせて！

「1兆年早いのよ！！！」

―破！―

『グガァァ！？』

祐希奈の回し蹴りが巨人の頭に炸裂すると、ゴキャリ、と、なんとも嫌な音を立てて、巨人の首が１６０度程左に回った。

そしてそれは、戻らない。

何が起こったかなど、説明するのは簡単だ。

巨人の首の骨が、折れた、もしくは砕けたのだ。

人外といえど、そんな状態で平衡感覚を保っていられるはずがない。

５メートル近い巨体は２、３歩よろめいたかと思うと、木々をなぎ倒しながら、背中から大の字に倒れ付す。

「ま、こんなとこね」

乱れた髪を手串で直し、余裕綽々で戻ってくる祐希奈に、咲夜とアインハルトは若干の引きつった笑みを浮かべていたという。

▼▼▼

時間は少し遡り、魔法を解禁したことで、カナン達を探そうとサーチャーを使おうとしていた咲夜を止めた祐希奈は、「あっちよ」と自信満々に言い放った。

「向こうからバカナンの魔力が感じられた。だからあっちよ」

何故そんなことがわかるのか、疑問に思った咲夜だが、それを察したのか、こともなげに祐希奈は答える。

その姿に迷いといったものは存在しない。絶対の自信を持って、祐希奈が言っているのだと、経験から咲夜はわかった。

魔力の質だけで現在位置がわかる。そこに、祐希奈とカナンの絆を感じたから。

「仲がよろしいんですね。祐希奈さんとカナン君は」

アインハルトにそういわれて、照れたようにプイっと顔そむけて、祐希奈は踵を返す。

返ってきた。答えは。

「別に……ただの腐れ縁よ」

やはりあれは照れ隠しだったのだと、アインハルトと咲夜は悟る。

本当は、心配で、心配で、たまらない。

その心が滲み出すかのように、祐希奈がまた一段と速度を上げる。

アインハルトを抱えているため、思うように速度がだせない咲夜は慌てて加速。

「……あそこね」

「あれ、は……イングヴァルトの……」

「もしかしたら、とは、思っていましたが……」

祐希奈に続き、眼下に広がる景色を、アインハルトと共に、見た。巨大な屋敷がそこにはあった。
広い庭、吹き出る噴水、入り口の門から長々と続く道。
いかにもな雰囲気をかもし出す、見るからに古風な造り、しかし、材質には新しさを感じさせる。出来上がってまだそれほど年月が経っていないであろうというのは見てわかった。
そんな屋敷を見て、咲夜とアインハルトの表情が鋭いものに変わっていく。
初めて来る世界。そんなはずはないのに、どこか懐かしさを感じていた二人。
長年帰っていなかった実家に帰ってきた、そんな気持ちに似ている。
咲夜の中の、アインハルトの中の、覇王の記憶が身体が肯定した。
そう、ここは。

「「古代、ベルカ……」」
「は？」

一人話についていけない祐希奈はキョトンとする。
無理も無いだろう。
いきなりここは滅びたはずの古代ベルカですと言われて事情を飲み込め。というのが無理というものだ。
あっけにとられている祐希奈に、咲夜はロストロギア『王の一族』といわれるものの適合者で、覇王の遺伝子を持っていること、アインハルトは覇王、イングヴァルト直系の子孫であること、断片的ではあるが記憶を伝承していることを話す。
「違和感は感じていたのですが、あの城を見て確信しました。ここは、古代ベルカ、そして、あの城は王家、覇王、イングヴァルトが

住んでいた城です」
「ふむふむ……」

ことの次第を理解したのか、うんうんと頷く祐希奈だったが、イマイチ危機感が感じられない。
古代ベルカといえば、戦乱の世。
いつどこで戦いが巻き起こるかわからない。
にも関わらず、祐希奈は首を傾げる。

「で？」
「でっ、て……」

これにはアインハルトも言葉に詰まる。
どう説明すれば、ここが危険だということがわかってもらえるのか、伝えようと懸命に考えて。

「ここが古代ベルカだったら、私達がやることは変わるわけ？　ここがどこだろうが、私はアイツらを助けるまでここにいるし、どこにも行かない。邪魔するってんなら誰だって相手するし、叩き潰してでも前に進む。それだけよ」

何の迷いもなく、祐希奈は言い放ち、城へと降下していく。
あまりにも当たり前に言った祐希奈にアインハルトは思考が追いつかず、固まる。
ポン、と咲夜に肩を叩かれて、ようやく我に返る。
アインハルトの隣、苦笑する咲夜が、そこにはいた。

「咲夜さん……」
「ここがどれだけ危険か、なんて、あの子もわかってるんだろうけど、止まらないさ。俺がはやてさんのことになると止まれないよう

に、あの子も、友達のことになると止まれないんだ」
【マスターのはやコンは病気だがな】
「せっかく人が決めてるんだから黙れ凪」
【事実をいっただけだろう？】
「空気読めっつうんだよ！」

ぎゃあぎゃあと言い争いを始めた咲夜と凪にアインハルトは薄く笑う。
一人、心配していた自分が馬鹿らしくなった。
そうだ。ここがどこだろうが、やることは変わらない。

「アインハルトにも笑われたじゃねぇか！」
「え、あの――」
【何を今更！　普段からはやてさんはやてさん言っている時点で笑われていると気づけ！】
「な、お前！　はやてさんをバカにすんなよ！？」
【馬鹿になどしていない！　少しは日本語を理解しろ！　はやコンめ！】
「えっと、静かにしないと――」

―撃！―

「うっさい♪」
「祐希奈さんが来てますよ？　あ……」
「アインハルト、ちょい、遅、い……」

鳩尾に叩きこまれた拳にＨＰを全て削り取られた咲夜は意識を手放し、あわれ、この世に帰らぬ人と。

「なってねぇし！　はやてさんがいる限り俺は死なん！」

「最早、尊敬通り越して変態の領域ね……」
「でも、妙に、説得力がありますね……」

東条咲夜、１７歳。
拳を握りながら神へ向けて、不屈のはやて魂を叫んでいるその姿を年下二人に見せつけ、めでたく、変態、と認識されたという。
▼▼▼

潰す……。

相手が王家であり、そして、覇王と呼ばれていようが、友達をそんなことに利用する輩は例外なく叩き潰す。

そこに逃げるという選択肢はなく、戦うという選択しかなかった。

感情のままに動き、行動を縛ることが出来ない少年、それがカナンだから。

一瞬も油断をしないまま、カナンは重い扉を開け放つ。

豪華な装飾、真紅のカーペッド、3方向に分かれている階段。

外装もすごかったが、内装も負けず劣らずすごかった。

インテリアなど、そういったものには拘らないカナンが、数秒とはいえ、思わず動きを止めてしまうほどに。

地球でとある豪邸で執事体験をするなどして、耐性が出来ていなければ、カナンは雰囲気に飲まれてしまっていたかもしれない。

「貴様、何者だ!?　どこから入った!?」

いきなり抜剣かよ……

そんな怒声がカナンを現実に引き戻す。

警備兵だろうか、鈍く輝く鎧に身を包んだ男達が一斉に扉の方へと視線を向ける。

呆気にとられ、警備兵達は一瞬固まってはいたが、そこは訓練された兵士。重いであろう鎧を着込んでいるにも関わらず、すばやく陣形を整えてカナンを取り囲む。

隊長と思わしき人物が剣を抜き、切っ先をカナンに向ける。

あまりな対応に、流石は戦乱の世だなと、時代の違いを再確認する。

「ここに女の子が来てると思うんですけど、合わせてもらえませんか？」
「質問に答えろ！　答えぬというのなら！」
正眼に構えた隊長の姿を見て、他の警備兵達も銀色に輝く剣を抜き放つ。
空間把握を発動したカナンは周囲の状況を即座に把握、物陰に隠れている人間も含めて、１２人程。その全員が標的をカナンに絞っていた。
了承もなしにいきなり現れたカナンにも問題はあるとしても、殺気立ち過ぎている。
先程物騒なことを考えていたカナンですら、そう思ってしまうほどに。

「あー、勝手に入ったことは謝ります。でも、こっちにもここに用があって……」
「隊長！　門番が何者かに倒されています！」
「何！？　やはり、貴様か！！」

まさにジャストタイミングという感じに、外の様子を確認してきたのか、警備兵の一人が叫んだ瞬間、カナンは終わった、と思う。
大広間に満ちていく殺気。
今から魔獣の経緯などの事情を説明したところで、頭に血が上った人間に、何が伝わるというのか。何も伝わるはずがない。
この状況をカナンはただ、面倒、と思う。
どうしたものかと、人差し指で額を掻いて、瞳を閉じる。

「お待ちなさい」

凛とした声が大広間に響く。

右側の階段の最上段にあった木製の扉がゆっくり開き、ドレス姿の金髪の女性が現れる。その瞳は真紅と翡翠。
見慣れたオッドアイに、カナンは驚きに目を見開き、思考を止めた。ヴィヴィオかと、そう思ったが、あまりにも普段と雰囲気がかけ離れていて、戸惑いを隠せない。
一方、騎士達は寸分の狂いもない動作で膝を突き、頭を垂れる。

「その方は私がお呼びしたのです。通してあげてください」
「この、小童が――失礼しました！」

女性の言葉に隊長は疑問を抱き、カナンをいぶかしむも、女性の失礼にあたると思ったのか、再び頭を下げた。
その様子に女性は優しく微笑んで、「待っています」とカナンに一言いった後、気品を感じさせる足取りで去っていく。
シンと静まりかえっていた大広間だが、ハッとしたかのように警備兵達が左右に割れ、最上段までの道を作り、敬礼をする。
隊長のみが、カナンの前に現れ、何故か自身の剣をカナンに持たせて。

「姫様のご友人とは知らず、とんだご無礼をいたしてしまいました。この場の隊長はこの私。全ては私の罪です。足りないかもしれませんが、私の首を捧げます。ですので、どうか、他の者は助けていただきたい……」

頭を垂れる隊長に、カナンは盛大に溜め息をつく。
歴史などに出てくる人間は、どうしてこうもバカが多いのかと、そう思う。
手にした剣を振り上げて、断罪を待つ隊長の真横に突き立てる。

―撃！―

その鼻っ面をカナンは思い切り蹴り上げた。
頭を下げたままで、不意打ちにも等しいその一撃を避けられるはずもなく、隊長は仰向けに吹き飛び、受身もとれずに転がった。

「な、何を……？」

鼻血をダクダクと流しながら、予想外の痛みに悶絶している隊長をカナンは無視。
死にたがりの変人の話を聞く耳など、持ってはいない。

「人の命がどんだけ重いもんかわかんねぇような奴が、捧げるとか、足りないとか、軽々しく言うな！　生き恥さらしてでも生き残れ！
散って飾るような美徳があると思ってんなら、死んだ時の自分の家族の顔想像してみろ！　悲しみの先にある美なんて、あるわきゃねぇだろうが阿呆が！　俺の言葉の意味がわかんねぇなら今すぐ死ね！　俺からはそんだけだ！」

静まりかえる空間を切り裂いて、カナンは階段を駆け上っていく。
嫌いだった。
自分を犠牲にしてなにかを助けようとするのは。
かつて、他でもない自分がそうしてしまったから。
周囲の人間を絶望させて、悲しみの海に叩き落してしまったから。
忌まわしき記憶を振り払うように、カナンは階段をかけていく。
扉の前にいきつくと同時に乱暴に扉をあけて、入室。
中にいた女性は少し驚いたようだったが、入ってきたのがカナンとわかると微笑みを浮かべた。
その微笑みを見て、苛立っていた心が嘘のように落ち着いていく。

「どうしたの？　カナン君、怖い顔してる。大丈夫？」

「おう。ヴィヴィオの顔みたら落ち着いた。　サンキュ」
「ふぇ？　どうしたしまして？　で、いいのかな？」

あまりにもいつも通りな‘ヴィヴィオ’に、カナンは苦笑する。
あれだけ心配したのに。
だが、この誤算は嬉しい誤算だ。
古代ベルカ、という時代に飛ばされたという事実は変わらないものの、こうしてヴィヴィオに会うことは出来たし、あとは帰るだけだ。

「つか、その服は何かお尋ねしてよろしいでしょうか？　ヴィヴィオ姫？　最初雰囲気違いすぎてわかんなかったじゃねぇか」
「あはは。ごめんなさい。えっとね、ここが古代ベルカだってことは、察しがついてると思うんだけどね？」
「ああ」

ペコリと謝りつつ、ヴィヴィオはことのいきさつを話し出す。
まず、飛ばされた先がカナンと同じ森であり、そこでイングヴァルト家の人間に発見され、この時代のオリヴィエ・ゼーゲブレヒトと勘違いされ、行方がわからなくなっていた姫として連れてこられた、ということだった。

「他人の空似なのに、迷惑な話だ」
「他人じゃ、ないよ……。オリヴィエさんは、私の――っ？」

オリジナルだから。
そう繋げようとしたヴィヴィオの口をカナンが塞ぐ。

「他人だ」
「カナン君……」

ヴィヴィオに言い聞かせるように、真っ直ぐ見て、そう言った。
ニコリと笑ったヴィヴィオに、照れくさそうに視線をそらす。きらびやかな衣装もあいまって、いつも以上に破壊力がある笑みに、危険すら感じたからだ。
しばらくして、こんなことをしている場合ではないと思い出し、質問を続ける。
ヴィヴィオがオリヴィエとしてここにいるのなら、本人はどこにいるのかと。
オリヴィエが戻ってこない限り、ヴィヴィオがオリヴィエとして存在しなくてはならず、連れて行くことができないためだ。
まぁ、有無を言わさず強引に連れ去る、という手もあるが、ヴィヴィオが望んでいないことは明確なため、カナンの中では最終手段として置かれている。

「本人は、まだ見つかってない……。このまま行くと、私がオリヴィエさんってことになって、捜査は打ち切りに――……え？」
「なッ！？」

そこまで紡いだところで、ヴィヴィオの言葉が止まる。
カナンも、驚きと戸惑いで動きが止まっていた。
それだけのことが、ヴィヴィオの身体には起きていたのだ。

「なに、これ……」

カナンの瞳から見えるのは、ヴィヴィオと、その奥にある壁。
人を透視して、奥の壁が見えるなど、普通ならありえない。
それが異常であるという証拠。
無論、カナンの瞳がおかしくなったわけではない。
ヴィヴィオの身体が透けているのだ。

切れかけの電球のように、明滅するその姿は、だんだんと薄くなっていく。

「やだ。これ、怖い……。怖いよ。カナン君！」

「ヴィヴィオ！」

泣き出しそうになるヴィヴィオが存在を確かめるために、カナンに抱きつこうと、そして、カナンも抱きしめようと、互いの姿を近づけて。

触れた瞬間に光の粒子となって、ヴィヴィオの姿が砕け散る。

愕然とするカナンの手に残るのは、ヴィヴィオだった、光。

その光さえ、やがては消えて、もう何も残ってはいなかった……。

比喩でもなんでもなく、高町ヴィヴィオの存在が、消え去ってしまった。

「なん、で……」

やっと、見つけたと思ったのに、また、自分の前から少女は消えて。

しかも、次は、どこかへ飛ばされた、などではなく、粒子となって、消えてしまった。

探そうにも、手がかりも何もない。

ただ、力なく、カナンは佇むしかなかった。

そんなカナンの背後に三つの人影が立つ。

「まだ、諦めるには早いですよ。カナン君」

「アイン、ハルト……？」

はい、と笑って頷くアインハルト。

「立て。まずはそっからだ」
「咲夜さん……」
おう、と返事を返す咲夜。
「行くわよ。取り返しに」
「祐希奈……」
ん、と短く祐希奈。
自分を追って、危険を顧みずに追ってきてくれた仲間達を、そして、友達が、立てと言っている。これで立たなくて、いつ立てというのか。
自分が知らない何かを、三人は掴んでいる。なら、もうそれに賭ける他にない。
何をすればいいのか、もうそんなことは尋ねない。
しっかり立って、前を見て、今、精一杯自分に出来ることを。
ごめん、ヴィヴィオ、もう少し、待ってくれ。絶対、助けるから！
強く、強く、もう折れないように、縛り付けるくらいの意気込みで、少年はもう一度立ち上がる。
行こう。仲間と、共に！
次回に続く

第四話　仲間と共に（後書き）

いやぁ、咲夜があんまりうまくかけませんでしたので前書きにて謝罪させていただきました。
で、テスタメントさん、合流まではいけたのですが、僕の力不足で例の部分が・・・！　改めてごめんなさい！
というわけで次のランナーは我らがドＳの兄貴、テスタメントさんいリバースパスです♪　ぐはっ……

第五話　ヴィヴィオを取り戻せ！　オリヴィエ奪還戦！（前編）（前書き）

ども～～♪　テスタメントであります♪
第五話、”前編”であります。ええ、”前編”……いや、すんません（汗）
序盤大トリな場面なんで、前後編にしてみました。主に文字数的な意味で（汗）
後編もすぐにお届けします♪　よろしくです♪

第五話　ヴィヴィオを取り戻せ！　オリヴィエ奪還戦！（前編）

シュトゥラ、覇王の城で再会したカナンと裕希奈、咲夜、アインハルトはとりあえず、お互いの情報を交換する所から始めた。
ここが、古代ベルカ時代であり、自分達はおそらくタイムスリップした事。
ここが、覇王領シュトゥラであり。今いるのが覇王の城である事。
辺りには、魔物と呼ばれる魔法を使う化け物が徘徊している事。
この時代のオリヴィエが行方不明であり、ヴィヴィオが彼女に間違われてここに連れられていた事。

……そして、ヴィヴィオが今、目の前で消えてしまった事――。

話しが終わると、一同は難しい顔となる。タイムスリップした原因は転移装置の暴走が原因だろうが、ヴィヴィオが消えてしまった事については、全く分からないのだ。

何が起こったと言うのか、それが分からなければ話しにならない。

「ちょっと、城の連中に話しを聞いてみるか……。この時代の、オリヴィエが行方不明ってのも気になるしな」
「ああ……」

咲夜の言葉に、カナンを始めとして一同頷く。まずは情報収集だ。幸い、先ほどの騒動でカナンはオリヴィエの友人と言う事になっている。その連れである祐希奈達も問題無いだろう。

頷き合い、一同散開しようとして――。

「ちょっといいかい？」

突如、一同に声が掛けられる。

あまりに唐突だったために、少々面食らったほどだ。

立ち止まり、声に振り向く――と、アインハルトと咲夜が一斉に息を飲んだ。

声を掛けて来た少年を、見て。

「君達か、彼女の友人というのは――」

「何よ、あんた。ヴィ――じゃなかった、オリヴィエの知り合い？」

「ああ、済まない。自己紹介が遅れたね」

”碧銀の髪に、右が紫で左が青の虹彩異色の瞳”――アインハルトと同じ髪と目を持つ少年は、裕希奈の台詞にくすりと笑い、自らの名前を明かす。

アインハルトと咲夜にとって、重要な意味を持つ名前を。

「クラウス。クラウス・G・S・イングヴァルト。よろしく」

そう、名乗ったのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「クラウスって、確か……」

「裕希奈！」

思わず、アインハルトと咲夜に視線を向けそうになった裕希奈に

カナンから小さく声が飛ぶ。
だが、時既に遅く。クラウスは、二人に。特にアインハルトに視線を移していた。
自らと同じ髪と光彩異色の瞳を持つ少女に、クラウスは少しだけ驚きながら、それでも笑いを浮かべて手を差し出して来る。
「奇遇だね。その髪と瞳の色、てっきりイングヴァルト特有の体質だと思ったんだが……」
「……いえ、よく言われます」
何かを言いたそうに――でも必死に言葉を堪えてアインハルトは、それだけを彼に告げる。
ここは過去の世界なのだ。万が一にも、アインハルトが子孫である事など、悟られてはならない。
そんな二人にヒヤヒヤする一同を知ってか知らずか、クラウスは全員に握手をしていく。
ただの挨拶のつもりなのだろうが、後に伝説にもなった王に握手されるというのは、その場に居る者達にとって妙な気分であった。
やがて握手を終えると、クラウスは唐突に爆弾を一同に投下した。
――言葉の、爆弾を。
「ところで、”君達の友達のほうのオリヴィエ”なんだが――。彼女は、オリヴィエじゃないだろう？」
『『っ――――――！？』』
全員揃って、驚愕に目を見張る。その反応に、やはりかとクラウスは納得したように頷いた。苦笑しながら、さらに続ける。

「オリヴィエと似てはいるが、流石に本人と間違えるほど付き合いは短くないつもりだよ。ああ、そんなに身構えなくて大丈夫。むしろ謝りたいくらいだ。……彼女は否定していたのに、無理矢理連れて来たのは、僕達だからね」
「……なんで分かっていたのに、ヴィヴィオを連れて来たの？」
「彼女の名は、ヴィヴィオと言うのか。部下が森で見付けて来てね。……僕以外には、見分けがついていなかったし、聖王家特有の光彩異色を持ち出されてはね……否定して上げる事も出来なかった」

何より、城に入れてしまったのが致命的だったらしい。
ここでヴィヴィオがオリヴィエとは別人だとしてしまっても、彼女に待つのは良くて牢獄行き、悪くて死罪であっただろう。
それが、こちらの間違えであろうとだ。王家の城と言うのは、そう言うものらしい。
これに裕希奈とカナンは大いに憤慨したが、クラウスを責めても仕方がないと理解して黙る。

そんな二人に、クラウスは小さく礼を述べると話しを続けた。
「……実は、オリヴィエは誘拐されてしまってね……」
「誘拐！？」

その物騒な単語に、カナンが驚きの声を上げる。
同時に、咲夜が後ろで苦虫を噛み締めたように顔を歪めた。

それに気付いてか、気付かずか――クラウスは頷く。
「……昨日から、オリヴィエは行方不明になっていたんだ。そして、朝に彼女、ヴィヴィオを見付けて捜索は打ち切りになったんだが――個人的な友人が、その少し後に知らせを寄越してくれたんだ。『

オリヴィエが魔物にさらわれて、監禁されている』と。ちょうど、その時だよ。君達が来たのは」

……何となく、話しが見えて来た。

つまり、オリヴィエが魔物に誘拐されたのだが、直後にヴィヴィオが彼女の代わりとして見付かってしまった事により、捜索は打ち切り。そのままオリヴィエ救出に向かう事もなく、今に至ると言う訳である。

城の者からすれば、もう見付かっているのに捜索隊を出す必要は無いのだから。

だが、それでは助けられなかったオリヴィエはどうなってしまうのか――と、そこで引っ掛かるものを感じて、カナンは眉を潜める。裕希奈や、アインハルトも同様だ。

こんな事を言いたくは無いが、ヴィヴィオはオリヴィエの複製体（クローン）である。

”聖王、オリヴィエの”だ。しかし、ここでオリヴィエが助けられなければ、ヴィヴィオの存在はどうなってしまうのだ。

《……タイムパラドックス、だ》

『『へ？』』

突如として咲夜から来た念話と、その内容に三人は同時に疑問符を浮かべる。

クラウスがそんな三人に不思議そうな顔をするが、構わない。

その意味を理解したのか――メイデンや、レナスが沈痛な面持ちで咲夜に続けるようにして、念話で説明してくれる。

《……主、もし――もしもです。ここでオリヴィエが殺されたとし

たら、どうなると思いますか？》
《どうなるって――いや、分からねぇ。どうなるんだ？》
《マスター、おそらくは、だが。ヴィヴィオが消滅する》

な、に……？

告げられた念話に、カナンは目を見張る。裕希奈やアインハルトもだ。

思い出すのは、先程のヴィヴィオの消滅である。無関係な筈がない。

咲夜も交えて、説明は続く――。

《ヴィヴィオは、正確にはオリヴィエの子孫とは言えないが、近い存在と言える。オリヴィエが”聖王になったから”。聖王教は出来たし、聖王の聖遺物も遺されたんだからな》
《しかし、ここでオリヴィエが殺されると、彼女が聖王になったと言う過去は存在しなくなるのです。……ひいては、彼女の複製体も存在しなくなると言う事に――》
《ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　じゃあ、ヴィヴィオが居た事実が無くなるって言うの！？　私達は覚えているのに？　そんな事があるわけないじゃない》
《”まだ”覚えているだけかも知れないな》

さっと、その意味を理解して裕希奈が青ざめた。
いつ自分達の記憶からヴィヴィオと言う存在が消えるか分からない――そう言う意味であったから。
カナンもアインハルトも唇を噛んでワナワナと震える。まさか、そんな事になるとは思わなかったのだ。

タイムスリップの危険性。それを理解して、三人は絶句する。
もし、自分達がここで何かをしたら――あるいは、ここでクラウスと話している事すら、後にどうなるか分かったものでは無い。
しん、と皆が静まり返る。……だが、カナンは違った。
意を決するように一人頷くと。皆に視線を送る。
決意に満ちた瞳を。
《……オリヴィエを俺達で助けだそう》
『『……っ』』
弾かれたように、皆が顔を上げる。それがどう言う意味を持つか――。
咲夜達は反論しようとして、でもその前にカナンは続ける。
《タイムパラドックスがどうとか、ここで何かしたら未来でどうなるか分からないとか。……いろいろ考えたけどさ、やっぱり俺はヴィヴィオを助けたいんだよ。ヴィヴィオがいなきゃ嫌だ》
《……カナン》
《だから、オリヴィエを助け出す。そしたらヴィヴィオも取り戻せる。そんで、ヴィヴィオを助けたら、速攻で現代に戻る！》
《言うほど、それは簡単じゃないぞ。分かってるのか？》
《いや、全然分かってない。でも、ヴィヴィオを助けるって事は間

違ってないと思う。その為にオリヴィエを助ける事も。その為にここまで来たんだ》

きっぱりと告げられるカナンの念話に、一同絶句。

しかし、すぐに皆苦笑した。カナンが言っている事は確かに身も蓋も無い事である。けど、そもそも自分達はヴィヴィオを助ける為にこの時代に来たのだ。

今怖じけづいてどうすると言うのか。

《……そうね、私もヴィヴィオが消えるなんて我慢ならないし、絶対嫌だしね。付き合ってやろーじゃない》

《私も、裕希奈さんと同じ気持ちです。……それに個人的にも、オリヴィエ殿下をこのままにしてはおけません》

《やれやれ……》

ぐっと決意を固める三人に、咲夜は溜め息混じりの苦笑を続ける。

それは呆れを含んでいながらも、少し楽しげな苦笑であった。

メイデンやレナスをちらりと見ると、彼女達も自分と同じような苦笑を浮かべていた。

やがて、咲夜も頷く。

《オリヴィエを助ける。他は一切余計な真似をしない。……それでいいか？》

《はい！》

力強く頷くカナンに咲夜も頷き返す。……方針は決まった。なら、後は――。

「……クラウスさん」
「何かな？」
カナンの呼び掛けに、クラウスが頷く。彼等が念話で話している最中も、ずっと待っててくれたのだ。
それだけでも、クラウスの人柄が良く出ていると言うものである。
……そして、恐らくは今から言う事も彼は察しているだろう。半ば確信に近い予感を覚えながら、カナンは言うべき事と聞くべき事を彼に告げた。
「オリヴィエさんは、俺達が助けに行きます」
「……」
「だから、彼女が監禁されている場所を教えて下さい」
あまりに一方的な要求である。確かに、今オリヴィエ――ヴィヴィオのことだ――が、見付かっている以上、兵は出せないだろうが、それでも機密情報に違いないものを教えろと言うのは、些か行き過ぎであろう。
普通ならば、絶対に許されないし、有り得ない事である。
……だが。
「ああ、いいよ」
クラウスは、あっさりと頷いてくれた。
こちらが訳ありと踏んだのか、理由すら聞かないでくれる。
カナン達はしばし硬直。しかし、すぐに頭を下げた。

「ありがとうございます！」
「いや、礼はいらないよ。けど、場所を教える代わりに一つ条件がある」
「条件……？」

訝し気に、アインハルトが聞き返す。子孫の、そんな反応にクラウスは頷きを一つだけ返し、ただそれだけを彼等に告げた。

オリヴィエの監禁場所を教える、条件を。

「僕も連れて行って欲しい」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……ここだよ」
「教会……？」

クラウスに案内されたのは、町はずれの教会であった。
ちなみに、カナンがドレスを着せられた町である。
また、あのじぃさまがカナンを美しくドレスアップしよーとしていたが、少年の鉄拳により老人は地面に沈んだ。……正直、ギャグをやっている場合じゃないのである。マジに。

中々に豪勢な教会だが、どこか澱んだ空気が微かに流れている。
……後に、それが瘴気（しょうき）と呼ばれる魔物を生み出す原因の毒気だと聞かされるのであるが、今はそれもどうでもいい。
町はずれとは言え、まさかこんな近くに魔物の拠点があるとは。
クラウスも険しい顔をしながら、教会を睨みつける。

「この教会は、由緒正しいものなんだ。シュトゥラにある教会では一番大きく、古いものでもある。……まさか、魔物に占拠されているなんて思わなかったけどね」
「シスターや、神父は……？」
「……絶望的、だろうね」

魔物がわざわざ生かしておく理由が無い。
それに、恐らくは変身魔法でそれぞれシスターと神父に化けていると思われるのだ。尚更だろう。
つまり、それはオリヴィエも危険な状況に置かれていると言う事である。

一同も、ぐっと息を飲み込んだ。

「それじゃあ、行こう」
「「……」」

そう告げて、先頭を歩くクラウスを、咲夜とアインハルトが複雑そうな顔で見る。
彼が告げた条件――自分を連れて行けと言うそれに、流石に咲夜もアインハルトも嫌がった。
当然である。彼がここで死ぬような事があれば、後に何が起きるか分かったものでは無いし、そもそも二人――特に、直系純血であるアインハルトなぞ、確実に消滅する事は間違いない。

しばらく口論を重ねたが、クラウスの意志は固かった。……と言うより、本来なら一人で行くつもりだったらしい。
オリヴィエの事を調べてくれた友人とやらと合流して、助け出すつもりだったのだとか。

……この王子、見掛けや礼儀正しい態度と違って、実はやんちゃなのかも知れない。ともあれ、最終的には裕希奈の「そんなに心配なら、私達が守ればいいのよ！」と言う鶴の一言により（また、イライラが溜まったことで起動されたアシェルにより）、クラウスの同行が決定されたのであった。

閑話休題。

ぎぃ、と重く開く扉。そこからは当たり前だが、礼拝堂が広がっていた。

教会の大きさに比例して、広い礼拝堂に幾人ものシスターが祈りを捧げている。

彼女達が魔物と言うのか――？　一見すれば、普通の女性達である。カナン達は不安になって来た。

もし、彼女達が魔物でなければどうすればいいのか。

「おお、ようこそクラウス殿下！　このような場所に貴方様にお出で頂けるとは……！」

「いえ、そんな事はありませんよ」

神父だろう、初老の男性が腰を低くして近寄って来る。

クラウスは微笑みながらも頷き――しかしその実、すっと腰を落とした事に皆が気付いた。

いつでも動けるように――つまり、クラウスは神父の動きに警戒している！

「いえいえ、本当にここまで来て頂いて恐縮です――」

こんな一見普通に見える老人が、本当に魔物なのか。カナン達は

それさえも疑いかけ。
「わざわざ殺されに来るなんてねぇっ！」
『『っ――！』』
次の瞬間、神父が縦に引き裂かれ。そこから”中身が現れる”！
それは、女の上半身に蛇の下半身を持つ魔物であった。
ラーミア――蛇の魔物！
―撃！―
「ぎゃう！」
だが、警戒していたクラウスは襲い掛かって来たラーミアの顔面に冷静に拳を叩き込む。
たまらずラーミアは吹き飛ぶ――同時に、しゃがみ込んで祈りを捧げていたシスター達が一斉に立ち上がった。
彼女達も、縦に割れてそこからラーミアが現れる。
「――魔物は、人間の死体の皮を被って擬態出来るんだ」
出来れば聞きたく無かったし、見たくなかった情報である。とんでもなくグロい。
裕希奈やアインハルトなどは、露骨に顔を歪めていた。
しかし、魔物達がこちらの心情を気に掛ける筈も無い。一斉に牙を剥いて襲い掛かって来た。
「来るぞ！」

叫びながら、カナンはエクスカリバーをセットアップ。裕希奈もアシェルを、アインハルトも武装形態になる。
大人になったアインハルトに、クラウスはちょっと驚いたようだが、すぐに気を取り直した。
最後に咲夜がソーディアンを起動し様にラーミアを斬り伏せ、戦いは始まった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「はぁぁぁ！」
「しゃあぁぁあ！」

―閃―

エクスカリバーが振るわれ、一体のラーミアを斬り裂く！
だが、浅かったのかラーミアは鮮血を撒き散らしながらも後退。
同時に、視線に魔力が篭った。

これは――。

【させない！】

すると、ユニゾンしているメイデンがカナンの内で複雑な術式を描いた。
一見するなり、模倣が叶わないほどの精緻な術式である。だが、その意味は見て取れた。――解術（ディスペル）！
同時、ラーミアの目から放たれた何かは、しかし。メイデンによ

り解術されてしまった。その隙を逃さず空間突破でラーミアの背後を取るカナン！

鞘に納められたエクスカリバーの輝きが瞬く――！

―斬―

「壱式抜刀剣術、暗夜一閃」

技の名は、遅れて響いた。

直後に、重たいものが落ちる音が響く。それは、カナンの一刀により上半身と下半身を分断されたラーミアの音であった。

カナンは荒い息で、一体を仕留めた事に安堵する。

「やばかった……。悪い、メイデン。助かった」

【礼はいらないぞ。当然の事をしたまでだ】

素っ気ない――だが、柔らかな声にカナンは微笑。

気を取り直し、視線を移す。……裕希奈達と戦うラーミアへと。

一体は仕留めた。だが、まだ一体のみ。カナンは再びエクスカリバーを納刀すると、空間突破で戦場の真ん中へと跳躍した。

このラーミア。中級程度の魔物であるのだが、戦って見て分かった事がいくつかある。

まず、外見に反して異常に打たれ強く、また生命力も半端ではない。カナンの一撃に、あっさり耐えた程だ。これでプロテクションやシールドまで使ってくるのだから、たまったものではない。

それだけならいざ知らず、ただ斬っただけでは死なないのだ。確実に殺すためには、首を落とすより無いと言う有様である。

更に厄介なのが――。

ギン、と一体のラーミアの目に魔力が篭められた。

その視線は真っ直ぐに裕希奈を射抜き、少女の顔が歪められる。

「こ……の……！」

それでも何とか放たれたる一撃！　しかし、それはあまりに力の入ってない一撃であった。明らかに力が抜けている。

当然、ラーミアがそれを見逃す筈も無く。あっさりとブレードを弾いて裕希奈を喰らわんと大口を開け――。

「させませんっ」

―撃！―

突如、横合いから現れたアインハルトの拳が、綺麗な軌跡を描いてラーミアへと叩き込まれた。これには流石のラーミアも吹き飛び、同時に裕希奈に力が戻る。

ラーミアにされた事がひどく釈に触ったのか、怒りに顔を赤らめ、吹き飛ぶラーミアに一足飛びで追い付く。

今度こそは、ブレードをラーミアの腹に打ち込み――ブレードが紅色に染まった。炎が溢れ出る！

「ぶっ飛べぇ――――！」

―爆！―

身も蓋も無い叫び声と共に、ブレードが盛大に爆発する！
一瞬にして、その爆風はラーミアを内側から弾けさせ、更に炎が肉片すらも焼き尽くした。

ブレードエクスプロージョン。裕希奈必殺の防御殺しの技である。
さしものラーミアも、この一撃を前にしては、どうしようもなく屠られる他無かった。

「ごめん、アインハルト助かったわ！」
「いえ、お互い様です」

裕希奈の礼に、こくりと頷くアインハルト。裕希奈も頷きだけを返し、しかしその顔には明確な苛立ちが募る。

ラーミアから受けた、視線が原因だ。あれこそがラーミアを相手にするのに最も厄介な能力であった。

魅了（チャーム）の魔眼。

所謂（いわゆる）、魔女術の一種である。それをラーミアは使えるのだ。
そして、この魔眼。ただ魅了されるだけと侮る事なかれ、この魅了の正体とは精神距離の接近にある。
つまりは、あの魔眼で見つめられるだけで対象との関係が変わってしまうのだ。……先ほどの裕希奈がブレードを一瞬打ち込めなくなったのが、その原因だ。
あれは、裕希奈との精神距離をヴィヴィオ級にした為に、攻撃に躊躇いを生み出してしまったのである。頭で分かっていても、感情はそうではないと言う事だ。
戦闘中にそれをされてしまうのである。厄介に厄介な魔法であった。元より、現代の魔法術式は精神作用系防御が薄いと言うのもあ

るのだから。
それにも増して、自分の感情を利用されると言うのには、裕希奈の性格上我慢出来ない所であろう。先の怒りも当然の事であろう。
一体を倒したにも関わらず、更に二人に襲い来るラーミア達。それを前に、裕希奈とアインハルトは臆さず迎撃に向かう。
一方、咲夜はと言うと一体のラーミアと戦いながら、内心舌を巻いていた。
自分の横、クラウスの戦いを見てだ。彼は、そんな視線を気にもせずに牙を剥くラーミアの懐に入る。
「――断空」
ぽつりと呟かれながら放たれる掌打が、ポンとラーミアを打つ。
軽く触れるような、それだけの動作である。すれ違い様にタッチしていると言えば分かりやすいか。
それだけ、それだけの動作なのに。次の瞬間、ラーミアは内部から爆砕した。
「っ――、き」
恐らく内臓を丸ごと潰されたラーミアは、しかし、なんとそれでも生きていた。
クラウスに憎悪に満ちた瞳を向け――。
―閃―
その視線が固定される前に、足刀――蹴りによる斬撃が、あっさりとラーミアの首を落としていた。

ここまで鮮やかな技は、滅多にお目に掛かれるものではない。……成る程、一人で来ようとする筈である。
それだけの技量を、クラウスは有していた。
……こっちも、負けてらんねぇな。
「ふぅ！」
―斬！―
気合いの息吹と共に、放たる轟撃の刃が真上からラーミアに振り落とされる！
ラーミアはその一撃を何とか防ごうと、防御を固めるが、”その程度”で止まる一撃では無い。
何故なら、この一撃はクラウスと同じ技の名を冠す技であったから。
足元から練り上げた力を拳速――咲夜の場合は、剣速に乗せて撃ち出す技法。
曰く、断空。空を断つと名付けられた轟撃は、防御しようと張られた障壁ごと、交差した両腕を叩き斬る！
それこそ、まるで空間ごと薙ぎ斬られた両腕は粉々に砕け散らされた。
腕を失ったラーミアが悲鳴を上げようとして、それすらも咲夜は許さない。
ソーディアンを翻し、返しの断空！　――今度は、上半身が両腕と同じ末路を辿る事になった。
蛇の下半身が、力無く倒れる。
「ふぅ……」
「やるね。……それに今の技――」

「今は、ツッコミ禁止って事で勘弁して貰えませんか？」

咲夜の断空に感じる入る所でもあったのか、クラウスは感心したような声に、疑問を混ぜる。しかし、咲夜の言葉に苦笑して頷くだけに留めておいてくれた。

いい人――を飛び越えて、お人良しである。

だから助かったとは言え、胸中複雑な気分となりながら咲夜も苦笑した。

これが後に災いにならなけりゃいいがな――。

そう思いながら、クラウスと共に振り向くと、ちょうど最後の一体をカナンが仕留め終わっている所であった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ふぅ、こんなもんか……」

最後のラーミアを斬り伏せ、カナンが息を深く吐く。周りに漂う血の臭いに顔をしかめながらも息を整えた。

「まったく……手こずらせてくれたわ」

「裕希奈、アインハルト。怪我とかは無いか？」

「大丈夫です、カナン君」

そうしてると、裕希奈、アインハルトも向こう側から歩いて来る。

二人の背後にあるラーミアの死体も、相当な数となっていた。

咲夜、クラウスもラーミアの掃討を終わらせたのか合流する。

「しっかし、血塗れの礼拝堂ってのは……」

「不気味ですね」

十数匹ものラーミアの死骸は、当然えらい量の血を周りに飛び散らせていた。

机もパイプオルガンも、絨毯も十字架も真っ赤である。相当不気味だった。

これには、流石にクラウスも弱々しく苦笑する。

歴史ある教会と言っていたので、掃除には大変苦労する事であろう。……そう考えると、ちょっと申し訳ない。

しかし、彼等にはそれを心配する暇は無かった。こうしている間にも、オリヴィエが危ないのだ。先に進まなければならない。

「……で、ここからどうするんですか？」

周りを見渡して、カナンがクラウスへと問う。オリヴィエが居るとすれば、恐らく奥だろう。しかし、礼拝堂はどこにも奥に行く場所が無かったのである。

この質問には、クラウスも困ったと言う顔をした。

「おかしいな……。彼が、見つけ出してると言う話しだったんだけどね」

「？　彼って……？」

その台詞に、カナンは訝しむような顔となり――刹那、ぞくりと言う感覚を得た。

同時、石造りの床がびきりと音を立てる。これは――！

「みんな、飛べ！」

『『ッ！？』』

―轟―

カナンの叫び声と、それが起きたのは、全くの同時であった。

いきなり床の一部が盛り上がり、吹き飛んだのである。そこから現れたのは、ラーミア――それも、一際巨大なラーミアだった。

腕だけで、カナンや裕希奈の胴回りくらいはありそうな大きさである。それが、床をぶち破って現れたのだ。

恐らく、床を掘り進んで来たのであろう。いきなりの床からの奇襲に、しかし一同は何とか逃れる事に成功していた。

カナンのおかげである。空間把握により直前に奇襲を察知した事で、難を逃れた訳だ。

しかし、奇襲に失敗しても、まだラーミアの攻撃は続く。その視線には既に魔力が篭っていた――魅了の魔眼！

その範囲に、全員が入っていた。

「しま……っ！」

【【くっ！】】

カナンが愕然と、メイデンとレナスが解術を試みるが、もう遅い。回避も解術も今からでは、間に合いそうになかった。そして、魅了の魔眼が発動し――次の瞬間。

―裂―

ラーミアの両目に突如として、飛来した大ぶりのナイフが突き刺さった。

「ぎぃいいいい――！」

「な……」

奇声を上げて、のたうつラーミアに呆然とする一同。

一体何が起こったのか――それを疑問に思う前に踊り出る影があった。

影は、前に出るなりラーミアへと襲い掛かる！　その手に握る一振りの刀が、やけに目に焼き付いた。

―閃―

――振るわれた一閃が、暴れ回るラーミアの首を静謐に落とす。

恐ろしく速く、また恐ろしく静かな一刀であった。

何せ、いつ放たれたのかを悟らせない程である。

首を落とされたラーミアは、一瞬だけびくりと震え。そして、自身が破った床へと沈んだ。

「まったく、ここは戦場だぜ？　最後まで気ぃ抜くなよ、お前ら」

「あ、あんた……」

ラーミアを斬り捨てた影は、シスターの格好をしていた。

銀の長髪を一本に纏めて三つ編みにしており、修道服の上からでも分かる、スタイルの良さ――特に、胸だ。がえらい目立っていた。

そして何より、こちらを見る紅い瞳。それら全てが、彼女の正体を物語っていた。そう、彼女は――。

『『しーちゃん！？』』

「シオンだシオン！　わざとだろ、てめーら！」

出て来て早々、一同にツッコミを入れるシスター姿のしーちゃん――もとい、神庭シオン。彼が、そこに居たのであった。

（後編に続く）

第五話　ヴィヴィオを取り戻せ！　オリヴィエ奪還戦！（前編）（後書き）

てな訳で、前編終了です。

現在の状況は。

古代ベルカ時代。

カナン（メイデン、レナス）、咲夜、裕希奈、アインハルト、クラウス。オリヴィエ救出の為に教会に。

→シスターしーちゃん（神庭シオン合流）と、相成っております（笑）

何故、シオンがしーちゃん化しているかについては、後編をお楽しみに～～♪

ではでは♪

第五話　ヴィヴィオを取り戻せ！　オリヴィエ奪還戦！（後編）（前書き）

どもー、引き続きテスタメントであります？　ふぅー、ふぅー、長かったぜ……！　文字数的な意味でもな！（笑）

では、早速第五話（後編）どうぞ～～♪

第五話　ヴィヴィオを取り戻せ！　オリヴィエ奪還戦！（後編）

「まったく……！　誰がしーちゃんか、誰が」
「いや、今のお前を見たら、十人中十人がしーちゃんって呼ぶだろ」
「んな事実は存在しねぇ！」

どこまでも現実を認めようとしない、シスターしーちゃん――もとい神庭シオンは腰に手を当てて憤慨していたが、カナンや咲夜からすれば、とっても理不尽な謂れである。
何故なら、修道服を身に纏うシオンはどう見ても女性であったからだ。これでしーちゃんじゃないと言われても説得力は皆無であろう。

ともあれ、しーちゃん（呼び名確定）は深々とため息を吐くと、修道服を一気に脱ぎ捨てる。
その下には、彼のバリアジャケット――バトル・フォームの姿があった。
身体のラインが浮き出る服の為、妙に艶かしい……特に、やけに膨らんだ胸とか、動くオッパイとか、形のよい乳とか。

「全部胸じゃねぇかよ！？」

そんな事実は存在しません。

「嘘つけぇ！　ああもう、とっと変身魔法解除して……！」
「待つんだしーちゃん！」

これ以上、何かを言われるのが我慢ならないのか変身魔法を解除

しようとすると、クラウスが立ちはだかる！
怪訝な顔となるしーちゃんに、彼は肩をポンと叩いた。
「そなたは美しい……！　ここでやめるなんて勿体なぶぐふぅ！」
「黙れ変態。解除！」
もの〇け姫的な事をほざくクラウスを一撃で沈めると、即座にしーちゃんは変身魔法を解除。
「ああ！？」と叫ぶ一同を無視して、しーちゃんは男の姿に戻った。
「だから、しーちゃんはいらんゆーのに」
「そこまで嫌なら、なんでまたしーちゃんなんかになったのよ？」
「……もーいいや、決まってんだろ？　ここに侵入する為だよ」
裕希奈の問いに、シオンは色んなものを諦めながら答えた。
どうやら、ここに侵入する為に変身していたらしい。
しかし、何故それがシスターなのか？　シオンはもう一度ため息を吐きながら答えてくれる。
「……俺は嫌だったんだが――シュトゥラの城のメイドが、『やるなら徹底的に！』って、変身魔法を、な……」
「城のメイドって、イングヴァルトの？」
「そ。まぁ、神父は元々無理だろーから、シスターになったって訳だ」
「いや、そー言う意味じゃなくて、あんた――」
「ん？　ああ、そっちの意味か……」
質問の意味をちょっと勘違いしていたらしい事に、シオンは気付いて苦笑。

言葉を念話に変えて、一同に正しい質問の意味を答えてくれた。

つまりは――。

《俺は今現在、イングヴァルトに厄介になってる。……クラウスとオリヴィエのごくごく私的な騎士としてな》

そう、答えたのであった――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

シオンが古代ベルカに流れついたのは、一週間ほど前らしい。

そこで、彼はオリヴィエ・ゼーゲブレヒトに拾われ、イングヴァルトの城へと招かれたのである――そんな事を、シオンはクラウスにカナン達と友人である事と共に説明してくれた。ちなみに、何故かすぐにクラウスは納得していたりする。……シオンの人望が良いのか、それともただ単にクラウスの人が良すぎるのかは定かでは無い――が、今は都合が良い。

《……そっからまぁ、紆余曲折ありながら二人のボディーガード――つまり、近衛騎士みたいなもんになってな》

「さって、んじゃ奥に行きますか」

「行き方は分かるのかい？」

「任せろよ、伊達にあんな格好してまで潜入してた訳じゃねーよ」

念話では自分の古代ベルカに来てからの経緯（いきさつ）を。

言葉ではクラウスに教会の奥に行く方法について説明をする。……念話での会話と通常会話の使い分けは、割と基本的なものではあるが改めて見ると器用この上ない。

《んで、昨日オリヴィエが行方不明になってな……。俺はその捜索で出てたんだ》
《それで、俺とは行き違いになったのか……》

どうりで、一週間前に来たと言うのに自分達や何よりヴィヴィオとは顔を合わせ無かったはずである。
カナン達がイングヴァルトの城に来た時には既に教会に居た訳だ。

しかし、何故にシオンは古代ベルカに来る羽目になったのか……？　聞いてみると、彼はとても微妙な顔となった。

《……ゴンザレス君の腹ん中に入ったら、ここに飛ばされたんだけどな……》
《なんでまた、そんな所に？》
《頼む。聞いてくれるな》

まさか、手を滑らせたとは流石に言えなかった。あんまりにもアレ過ぎる理由である。
ともあれ、シオンはクラウスと会話しながら、今度はこちらへと質問を投げかけて来た。

「この、パイプオルガンで特定の音を鳴らすと奥の道が開く仕組みなんだよ」
《……んで？　今度はこっちが聞くけど、何でお前らがここに居るんだ？》
《それが――》

血塗れとなった、パイプオルガンを微妙に嫌そーな顔で開きながら、シオンは尋ねる。

それに、カナン達は頷き合い、これまでの事情を全て話す事にした。

シャーリーが作った新型の次元転送装置が暴走してしまった事。ヴィヴィオがそれにより、古代ベルカに飛ばされてしまった事。カナンが追いかけて、古代ベルカに来た事。裕希奈や咲夜、アインハルトも後から追いかけて来た事。

……そして、オリヴィエの身代わりに図らずもなってしまっていたヴィヴィオがカナンの目の前で消えてしまった事――。

シオンはパイプオルガンを弾きながら、ぐっと口の端に力を込めた。

《成る程な……。ヴィヴィオにまで、事は及んじまったのか……》

《ああ、タイムパラドックスの一種だと思うんだけど、シオン。お前の意見を聞きたいぜ。……どう思う？　ヴィヴィオが消えたんなら、オリヴィエも――》

《いや、まだ大丈夫だと思う。少なくとも、俺達がヴィヴィオの事を覚えてる限りはな。咲夜、お前は？》

《俺も同意見だな。ヴィヴィオが消えたのは、歴史の修正作用の警告みたいなもんだろ》

カナンの問いに答えながら、咲夜に聞くと彼もまた同意見であった。

同じ結論に達した事にシオンは頷きながら、カナン達に少し解説してやる。

《ヴィヴィオが消えたのは、あいつがオリヴィエの代わりになっちまったから、オリヴィエの救出隊が無くなっちまった事にある。……だからヴィヴィオは消えちまったように見えたんだ》

《……つまり、ヴィヴィオを消す事で、またオリヴィエを助け出せるように細工したって事？　そんな事、誰がするのよ？》
《決まってんだろ。世界――神様でもなんでもいいや。そんなやつだよ》

結局の所、そう言う訳だ。世界は、あるがままを保とうとする作用がある。
今回の件も、後に多大な影響となるであろう、聖王女オリヴィエをここで消す訳にはいかない為に起きたと見るのが妥当であった。

それを聞いて、やはり気にくわないとばかりに憮然とするのはカナンと裕希奈である。アインハルトも無表情ながら、面白くなさそうな顔をしていた。
そんな三人にシオンは咲夜と一緒に肩を竦める。

《ま、いちいち気にしても仕方ねーだろ？　とりあえずは――》

最後の鍵盤を押すと、突如として奥の壁が開いた。隠し扉だったのだろう。本来なら立て篭もる為のものなのだろうが、それが魔物に占拠されて前線基地扱いされていると言うのは、何とも皮肉なものであった。

「――オリヴィエを助け出しゃいいんだ。それで万事解決ってな。……行くぜ」

一同にシオンは笑い掛けながら、そう言い。刀とアルトスを手に取って、いち早く奥の部屋へと踏み入れたのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「今回は俺がＦＷをやる。指揮は咲夜よろしく頼むわ」
「……いや、いいけど。お前、どっちかと言うとＧＷのタイプじゃないのか？」

奥の部屋に踏み込んですぐにシオンから出された提案に、咲夜は不思議そうな顔をする。
どちらかと言えば、ＦＷは裕希奈やアインハルト、クラウス向きのポジションであろう。シオンやカナンはＧＷ向きのポジションである。
実際、自分のポジションを奪われた形となった裕希奈が不機嫌そうな顔となった。
だが、シオンはふんと笑うと右手に持つノーマルフォルムのアルトス――片刃の大剣形態だ――を肩に担いだ。
同時に、左手に握る刀をだらりとぶら下げる。

「いいから、ＦＷは俺に任せとけ。敵が”魔物なら”裕希奈達より俺のが向いてる」
「魔物なら……？　あ、そっか。お前の術式は――」
「おしゃべりはここまで。団体さんが来たぜ」

そう笑いながらシオンが見る先に、多数の生き物が蠢く気配があった。確認するまでも無い、魔物――その集団である。
薄暗闇から出て来る魔物達は、それこそ数えるのが嫌になる程に居た。ラーミアや、新顔の巨人まで居る。大きさは、約３ｍ程か。
「スプリガンか、またでっかい輩を……。んじゃ、おっ先！」
「て、こらシオン！　お前一人で――」

言うやいなや、シオンは矢の如く弾けた。一気に魔物の集団に突っ込む！

そんなシオンに対して、魔物達はとても分かりやすい迎撃を行った。ラーミアが、前に出るとその瞳が輝く。

魅了の魔眼だ。これを受けた対象は、精神距離を弄られ攻撃もままならなくなる――筈、であった。

カラバ式――”対魔力持ちのシオンでさえなければ”。

ばちっと、シオンの眼前で何かが弾けて消える。魅了の魔眼の効果であるそれは、ただそれだけで終わってしまった。シオンはにやりと笑いながら、前に出たラーミアの懐に潜り込む。

―斬―

下から、静謐に跳ね上がった刀が一閃する。その軌跡をなぞるかのように、ラーミアの首が数体分遅れて落ちた。だが、シオンはそこで止まらない。空中に足場を展開すると、それを足掛かりに飛び上がる。

そこには、今にも青年の胴体ほどもある巨腕を振り下ろさんとした、スプリガンがいた。

「うっらぁっ！」

叫びと共に振り下ろされるのは、右のアルトス！

スプリガンの巨腕より速く放たれたその一撃は、あっさりと巨人を頭から股間まで唐竹割りにしてしまった。

そして、シオンはまだ止まらない！　途中で足場を形成するなり、滑るように魔物の群れのど真ん中に踏み込み――刀と大剣が弾けた。

実際には弾けたように見えただが、そう見える程にシオンは刀とアルトスを振りまくる！

当然、そこには魔物達が居た。

斬る、斬る、斬る斬る斬る

され、直接打撃は放たれることさえ許されず、その前に首を落とす始末である。

たった一人で魔物の群れを惨殺していくシオンに、カナン達は思わず呆然としてしまった。

「なんであいつあんなに……？」

「いや、あいつの術式カラバ式だろ？」

「カラバ式……？　あ、そっか」

裕希奈の問いに、咲夜が苦笑しながら答えた事で、ようやくカナン達もシオンの意図に感づく。

シオンの使用術式はカラバ式――巨大生物等に、接近戦を挑む事を前提とされた術式であった。魔物との相性はすこぶる良いだろう。RPG風に言うと、クリティカル連発と言った所か。加えて忘れがちではあるが、シオンはアビリティー・スキル。対魔力：AAの持ち主であった。あれでは、並大抵の魔眼や魔力弾程度ではかすり傷一つ付けられまい。

あの手の魔物相手ならば、シオンはまさしく水を得た魚であろう。

は～～と納得するカナンやアインハルト達とは対照に、裕希奈がふんと口を尖らせた。

「あんくらい私だって出来るわよ」

「まぁ、そうなんだろうけど、餅は餅屋ってな。それに、お前の術式じゃあ精神介入系攻撃は微妙に相性悪いだろ？」

「……ふん」

先程のラーミア戦でも思い出したか、裕希奈はそっぽを向いてしまった。

彼女の使用術式は近代ベルカ式である。これはミッド式と同じく精神系防御が割と薄いと言う特徴があった。元々が対人が前提の術式なので、精神介入系能力の対処は考えられていないのである。

……それでも、裕希奈はレア・スキルのリフレクションフェザーを使えば無効化どころか跳ね返して相手にその効果を押し付ける事が出来るので、ある意味対魔力よりタチが悪いのであるが――今は、速度優先である。いちいち立ち止まって、リフレクションフェザーを展開する暇を考えれば、やはりシオンが先行するのが正しいと言えるだろう。

「まぁ、けど」
「うん」
「ああ」
「ええ」
「そうだねぇ」

カナンの台詞に皆が皆、頷く。……つまり、現在まったく戦闘をしてない者達――有り体に言えば、シオン以外の全員であるが。

彼達は、一人魔物の群れと戦うシオンを改めて見て再度頷いた――とても、とても爽やかに。

ざしゅざしゅと、魔物を斬る音をバックにふっと笑い、そして――。

『『とっても楽だなぁ／よねぇ／ですねぇ』』
「て、お前らも戦わんかいっ！」

いや、だってお前一人で行けるじゃん。……などと、一同が思ったかどうかは定かでは無かったと言う。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

結局、カナン達からの手助けを貰い。ようやく教会の奥に一同は辿り着いた。
ここまでで倒して来た魔物の数は、それこそ十や二十ではきかないだろう――もっとも、最初っから数えてなどいないが。

「ようやく、ここまで来れたか……」
「ったく、どんくらい居るってーのよ。まったく……」

流石にカナンや裕希奈も疲労を隠せないのか、吐くため息は少し重い。かく言うシオンも流石に少しばかり疲れてしまったいた。
だが、ここで止まる訳にはいかない。ようやく、ここまで来れたのだから。

「……咲夜、サーチャーだと後はここしかないんだよな？」
「ああ、他の部屋は虱潰しに探してる。後はここしかない」

シオンが確認を取ると、咲夜は即座に頷いてくれた。
それに頷き返し、シオンはアルトスの起動を解除、小人型形態で呼び出す。

「んじゃ、アルトス。悪いけど鍵の解除頼む。……罠とか仕掛けられてるかもだし」
【……やれやれ、仕方ないな。メイデン、レナス。手伝ってくれるか】
【ああ、もちろん】
【承知しました】

肩を竦めて頷くアルトスに、メイデンとレナスも続く。
小人形態のユニゾンデバイス（正確には、アルトスはユニゾンデバイスとは微妙に違う）が並んでいる姿は、奇妙な安らぎを一同に齎した。……こう、癒しと言うか。

そんな一同に構わず、三騎は魔法陣を展開。解錠を進める。

【一層、二層解除、トラップ確認。毒霧、爆弾、落とし穴に、吊り天井――やけに、物騒な仕掛けばかりだな】

【毒霧、爆弾は私が解除した。姉さん】

【落とし穴、吊り天井解除。これで、トラップは全て解除出来た筈です。アルトス、後はよろしくお願いします】

【心得た。こちらも六層、七層――突破。よし、解錠完了だ。シオン】

「了ー解、てな訳で裕希奈さん、どぞー」

「裂破爆砕拳！」

―爆！―

さっ、と三騎がその場から退くのと裕希奈が炎に燃える拳を扉に叩き付けるのは全くの同時であった。
炎は一気に扉に伝播、真っ赤に染まった扉は膨れ上がり爆砕する！

直後に、シオンとカナン――瞬発力に優れた二人が部屋の中に押し入った。そこで見たものは、魔法的な仕掛けで拘束された、金の

髪の少女――オリヴィエにナイフを突き立てんとする、初老の男の姿！

「シオン！　お前はオリヴィエを、俺はあいつを！」
「おうさっ！」

二人は頷き合う事もせずに、直ぐさま空間突破と瞬動を発動。一気に、それぞれの目標へと駆ける！
老人はシオン達に気付いたか、構わずオリヴィエにナイフを突き立てんとして、しかし、阻むようにカナンが現れる。

「壱式抜刀剣術――暗夜一閃！」

―閃―

出現と共に放たれた一閃は、ナイフを動かす暇すら与えずに断ち切る。そのまま、刃は老人に吸い込まれるように走った――が、老人は見た目に反した機敏さでその場から飛び退き、刃を躱した。
舌打ちするカナン、やはり人間では無いらしい。カナンの暗夜一閃は、それこそ尋常の速度では無い。それを、ナイフを優先したとは言え、あっさり躱したのである。並の反射神経では無い。

だが、これでオリヴィエと老人とを引き離す事には成功した。その隙に追い付いて来たシオンが、オリヴィエを抱えて後ろに下がり、遅れて部屋に入って来た一同と合流する。

「よ……。待たせたな」
「怪我はありませんか？　オリヴィエ」
「シオン！　それにクラウス。貴方まで……！」

シオンはともかく、クラウスまで来たのがよほど意外だったのか、オリヴィエは大きな目を見開いて、呆然とする。
クラウスはそんな彼女に苦笑、拘束を解き始めた。

老人はそれを忌ま忌まし気に見るも、ちょうどそれを遮るように立ち塞がるカナン、そして裕希奈、アインハルト、咲夜によって手が出せず悔しげな声を漏らす。

「ぐぶぶぶ……！　小僧どもめ、よくも……！」
「終わりだな、御大（おんたい）」

にやりと笑う咲夜が刀型アームドデバイス、凪を老人に突き付ける。
となりで、カナンがエクスカリバーを納刀し、裕希奈もアシェルを。アインハルトは拳を構えた。
そして――オリヴィエの拘束を解き終えたシオンが立ち上がる。左手に刀をぶら下げて。

「クラウス、オリヴィエを連れて外に出てろ」
「な……！　そんな訳にはいかないだろう？　僕も――」
「クラウス！」

遮るようにして放たれた叫びに、クラウスが一瞬だけ震えた。シオンはそちらを見ないままで続ける。

「……何をどうしようと、お前は王族なんだよ。こんな所で死なれたら困るんだ。オリヴィエもな」
「……だが――」
「それでも、てんなら城に戻って騎士団の応援を連れて来てくれ。どっちしろ、お前をここで戦わせるのは却下だ。……オリヴィエも、

そのままにはしておけねぇだろ？」

結局、その最後が決め手となったか。クラウスは悔しげに唇を噛み――しかし、オリヴィエを抱えて、部屋の外へと歩き出してくれた。

シオンは少しだけ苦笑し――、そんな彼の背中に声が投げ掛けられた。

「シオン、ご武運を……」

「おう」

オリヴィエの、そんな言葉を残して二人は部屋の外へと出て行った。後は、数十分程で騎士団が駆け付けてくれるであろう。

――もっとも、シオン達はもとより向こうも、それを待つ程お人よしで無かったが。

「――さて、散々好き放題してくれやがったなテメェ……覚悟は出来てんだろうな」

「ぐぶぶぶぶ……！　それが我が使命であるが故に……」

「ンな事ぁ、知ったこっちゃねぇが――」

刀をゆっくりと持ち上げる――それは、ただそれだけであったが、隣の咲夜ならば、気付いたかもしれない。ただ、それだけが構えであったと。

そして――。

「オリヴィエにしてくれた事の借りは返すぜ、ジジィ！」

「ほざけ小僧どもがぁあああああああああ――――！」

次の瞬間、老人の身体は内側から弾け、その正体を現した。――この教会に於いての、最後の戦いが始まる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

老人の皮を破り捨てて、現れたのは酷く醜悪な姿の魔物であった。

いも虫とだんご虫を足して、2で割ったらこんな虫が出来るのかも知れない――そう、その魔物は明らかな虫型であったのだ。背中から尾まで届く外殻に内側で蠢く無数の節足が、生理的な嫌悪感を一同に与える。

「ふしゅるるるる――、我が名はヤックラ……！　この名を胸に刻んで死ぬがいい！」

「そいつは、二流の台詞だぜ！」

叫ぶなり、カナンが空間突破でヤックラの前へと跳躍する！　同時に放たれるのは、暗夜一閃！

鞘より解き放たれた刃は、視認すら許さぬ速度で走り――そして、軽い金属音と共にあっさりと止められた。刃を止めたのは、節足の内の一つ！

「な……！」

【主、いけない！】

「ぶるぅあぁぁあああああああっ！」

―轟！―

奇声が上がり、カナンが吹き飛ぶ！　その身体には、無数の打撃跡があった。あの一瞬で、節足を打ち込んだのであろう。
ユニゾンしている、メイデンの防御が無ければ、あるいは――。
ぐっと呻くカナンの隣を摺り抜け、今度はシオンと咲夜が左右から刃を振るう！

しかし、それさえも何とヤックラは対応してのけた。
どのような原理かは不明だが、節足を伸ばして斬撃を迎撃したのである。もちろん、一本では無い。それこそ、数十本もの節足――と言うよりは触手が、シオンの刀を弾き、咲夜の刀をも跳ね退ける。
しまいには、二人が押され出す始末だ。ヤックラとか言ったか――確かに、言うだけはある！

だが、まだこちらには最大の攻撃力を誇る少女が居た。シオンと咲夜は後ろに下がり――そして、裕希奈がヤックラへと弓を構えていた。その狙いは、当然ヤックラに他ならない！

手に構える魔弓、レイザーフォーテルが魔力を吹き上げた。

「ヴォルテック！」
「ぬぅ！？」

裕希奈の動きに気付いたか、ヤックラが触手の一本を凄まじい速度で伸ばした。
裕希奈を貫かんと走る触手。しかし、その前に彼女の前に出る少女の姿があった。アインハルトである。彼女は右の拳を構えると、放たれた触手にぶち込む！　男達の斬撃を防いだような触手である、当然これだけでは破壊もされなかったが、狙いを逸らす事は出来た。
触手は、見当違いの方向へと飛んで行き――そして、裕希奈が矢

を放つ！

「アロォ――――！」

―煌！―

その瞬間、確かに音が消えた事を一同は自覚する。

放たれた矢が、ヤックラへと吸い込まれ――その身体が、まるで本物のだんご虫の如く、丸まってしまうまで。矢は当然止まる事無く、丸くなったヤックラの外殻にこつんと当たり――そしてこれも当然だが、大爆発を起こした。

―爆！―

膨れ上がった炎と爆裂の衝撃が、皆の身体を貫く！　いっそ、教会そのものが潰れたのかとも錯覚してしまう爆発であった。

やがて炎は消え――そこには、無茶苦茶になってしまった部屋と”空中に浮かんだヤックラ”の姿があった――多少の焦げ目があるが、何と無傷である。

それを見て、げほっと咳をしながらカナンが呆れたように声を上げた。

「あれ喰らって、防ぐかよ！？」

「頑丈にも程があんぞ！」

「ぐぶぶぶぶ……！」

続くシオンの声に、ヤックラは楽しげな笑い（？）を漏らした。

それを聞いて、咲夜も舌打ちする。

「まともな方法じゃあ、ダメージは通らねぇか……」

「あーもう、喰らったんなら大人しくやられときなさいよね！」
かなり無茶な事を裕希奈が吠えるが、シオン達としては全くの同意見であった。裕希奈のヴォルテックアローは、それこそSランクを軽くオーバーするのである。それを喰らって、ノーダメージと言うのは流石に反則だろう。
ともあれ、あの防御を何とかしなければならない。カナン達は再び各々の武器を構えた、が。
「今度は、こちらの番であろう？」
ヤックラがそう言った時には、既に魔物は動き始めていた。丸まったままで、突撃を敢行。その速度は、音速を軽く超えていた。教会中を跳ね回り、一同に襲い掛かる！

―轟！―

「ぐぅ……！」
「ちぃ、厄介な！」

単純極まりない――ようは、ただの体当たりなのだから――攻撃。しかし、それ故にその攻撃は強力であった。何せ、裕希奈のヴォルテックアローを防ぐ程の外殻が音速超過で襲い掛かって来るのである。その攻撃力は、それこそSランクを超えるであろう。加えて、スーパーボールを思わせるような動きが、迎撃を許さない。
一同はろくな回避も許されず、防御を固めるのみで蹂躙されて行く。いくら何でも、これはヤバ過ぎた。防御もいつまでも持たない。このままでは――と、そこで何を思ったかアインハルトが、前に出た。何をしようと言うのか。

彼女は目を閉じ、腰溜めに拳を構える。それを見て、一同は彼女の考えを悟った。彼女は、打撃でヤックラを迎撃するつもりなのだ。
だがヤックラの外殻を、打撃でどう打ち貫くつもりだと言うのか。それこそ、とある異母兄が得意とする防御を無視して内部に衝撃を叩き込む浸透勁ぐらいしか手は無い筈――。

て、浸透勁……？

シオンが思わず、疑問を声に出しかけた瞬間。アインハルトはかっと目を開けて動き出した。

始めは脱力状態からインパクトに向けて、鋭く加速しながら放たれる打法。
それを極めたならば、零距離からでも足腰の連動のみで放てると言う。
シールドも、プロテクションも、フィールドも意味を成さないとまで言われる打法。当然、それは物理的な防御も含まれる。

アンチェイン・ナックル――「繋がれぬ拳」また、とある異母兄曰く「崩しの拳」

全ての打撃の、最たる基礎にして奥義とも言える拳が、アインハルトより放たれる――！

―撃！―

「ぶるぐぁあああああああああああああっ！？」

次の瞬間、ヤックラが苦しげな声を上げて床に転がる。
外殻の隙間から青い体液を零しながら、のたうち回っていた。そ

れはつまり、ヤックラにダメージが透った事を意味する。
　しばし、それを見て呆然とする一同。だが、すぐに笑い出した。
――これで、ヤックラの防御は決して無敵では無いと証明されたのだから！

「お前――アインハルトって言ったか？」
「あ……。すみません、自己紹介がまだでした。アインハルト・ストラトスと申します」
「いや、いい。ヴィヴィオから名前は聞いてたしな」
　笑いを苦笑に変えて、割と天然な事を言うアインハルトにシオンは頷く。
　隣に立つと、頭をぽんぽんと叩いてやった。そのまま続ける。
「お前が、攻撃の中心になれ。俺達がサポートする」
「ですが……」
「構わねぇさ。それでいいか、咲夜？」
「異論無し。隙があったら、ばんばんかましてやれ。――その状況は、俺達が作る」
　咲夜が頷くと、カナン達も頷いてくれる。これで作戦は決まった。後は――実行するのみ！
「ヤックラ――決着付けようかぁ！」
「ぐぶるぐぅ……！　調子に、乗るなぁ！」
　シオンの叫びと共に、弾かれたように一同はヤックラへと襲い掛かり、ヤックラもまた吠える！
　決着の時が訪れようとしていた――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『『おおっ！』』
「しゃぁあああ！」

突っ込んで来た、シオン、咲夜――そして、空間突破で現れたカナンに、ヤックラは鋭く奇声を上げる。
そして、一同が放つ剣撃をこれまた同様に触手で迎撃し始めた。

「ふしゅるるるる……。先と同じか……！　大言を吐きおったな……！」
「さーて、本当にさっきと同じかな？」
「何……！」

そこでヤックラは、はっと気付く。さっきの打撃を警戒して、アインハルトの動きには注意していたが、もう一人――裕希奈の姿を見失ってしまった事を。
彼女は、ヤックラの真上へと飛び上がっていた。その手にはブレードが、展開され紅く燃え上がっている。　そこから放たれるのは当然、防御破壊の一撃！

「ブレードエクスプロージョン！」
「ぬぉう……！」

裕希奈に気付いたヤックラは、その一撃を受けまいと後方に下がる。だが、それこそが狙いであった。
後ろに下がったヤックラは無防備となる――それは、隙となるのだから。

そして、それを見逃すシオン達では無い！

「神覇・伍ノ太刀、剣魔――」

「零式抜刀剣術、金剛閃牙――」

「覇王、炎刃一閃――」

「ぬぁ……！」

三人から吹き出る魔力に、ヤックラはようやく気付く。三人は、それぞれ最大級規模の攻撃を全く同時に放たんとしていたのである。

これをまともに受ければ、撃滅は必死。故に、ヤックラはすぐに丸まって、防御体制を取った。これならば、耐えられる――そう、”アインハルトがいなければ”。

裕希奈の攻撃に、そして三人の吹き出す魔力に、彼女の事をヤックラは失念してしまったのである。

そして、この期を狙っていたアインハルトは、迷い無く拳を放つ！

「覇王、空破断！」

―撃！―

「がばぁああ！？」

ミドルレンジから放たれ、駆け抜けた打撃――覇王空破断が、ヤックラを貫く！　無形の衝撃波に打たれて、悲鳴を上げるヤックラが防御体制を解除された。

同時、三人が魔法を解放する！　それは、防御を解除されたヤックラへと問答無用に叩き付けられた。

『『合体奥義！　剣覇烈震！！』』
「――――――！」

―轟―

―破―

ヤックラの悲鳴は、光に呑まれて消え――三人が、それぞれ魔物の身体を突き抜けた後、それは炸裂した。

―爆！―

ヤックラの身体から魔力光が溢れ、弾け、爆裂する！　それは一気に身体を粉々にして消滅させ――後には、ただボロボロとなった教会のみが残る。

ヤックラ撃破――それを確信して、一同はガッツポーズを取ったのであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ヤックラを倒した――が、それで事態が終わったかと言うと、そうでは無かった。

そう、ヴィヴィオの件である。オリヴィエが助かったのならば、彼女も元に戻る筈であった。

そんな訳で、一同は疲れた切った身体に鞭打ち城まで飛行魔法で飛んで行く。

イングヴァルトの城に到着したのは、すぐであった。

突如として現れたカナン達に衛兵達は警戒するも、すぐにシオンが出て場を収める。

「クラウス殿下、オリヴィエ殿下直轄自由騎士。シオン・カンバだ。彼等は友人であり、仲間だ。――通せ」

『『は、は！』』

すぐに頷いて、衛兵達は退く。それを尻目にカナン達は城へと駆けた。

門を抜け、城の中へと入る――と、エントランスに一同は入った。ヴィヴィオが消えた場所である。

そこに、光が集まっていた。光はゆっくりと収束し、人の形へと成して行く――。カナンは、全力で叫んだ。彼女の、名を。

「ヴィヴィオ――――――！」

――次の瞬間、叫びに応えたように一人の少女が場にポツンと現れる。

それは、見慣れぬドレスを着た少女。でも、見慣れた少女の姿でもあった。カナンは思う、長かったと。

少女は――高町ヴィヴィオは、ゆっくりと目を開け、ぽつりと呟く。目の前に居る、少年の名を。

「カナン、君……？」

「っ――――――」

もう、言葉はいらなかった。カナンは、ヴィヴィオに駆け寄ると

その身体を抱きしめる。
慌てたのはヴィヴィオである。顔を真っ赤にして、あわたたと慌て始めた。

「か、カナン君……！？　え、えと……！」
「よかった……！」
「え？」
「心配かけさせやがって……！　本当に、よかった……！」

ひょっとしたら、カナンは泣いていたのかも知れない。それは、ヴィヴィオにも後ろに居る裕希奈達にも分からない事だ。
自分が、そんなに心配をかけてしまった事に気付いて、ヴィヴィオは優しい面持ちになるとカナンを抱きしめ返した。

「ごめんね、カナン君。心配かけちゃって……」
「いい、お前が助かったんなら。それで……」

しばらく二人がそうしてるのを、一同は眺め――やがて、場を収めるように裕希奈が二人に近付いた。
ヴィヴィオが彼女に、そして後ろの一同に気付いて、驚きに目を丸くする。

「裕希ちゃん！　それに、アインハルトさんも、咲夜さんも……。あ、シオン君も！？」
「てな訳で助けに来たわよ、ヴィヴィオ。……全く、心配かけてくれちゃって」
「あう、痛い！　痛いよ、裕希ちゃん！」

みにょーんと、頬っぺたを伸ばす裕希奈に、ヴィヴィオが悲鳴を上げる。

それに、抱き着いたままカナンが吹き出すと一斉に笑いが起きた。
あまりにも、いつも通り過ぎるやり取りだった為である。裕希奈の手に掛かれば、感動の場面も台なしであった。

「ほら、あんたもいつまでもヴィヴィオに抱き着いてんじゃないわよ！　それは、私の役目！」

一撃一

「あだっ！　お前、蹴んなよ！？」

「ゆ、裕希ちゃん！？」

「ヴィヴィオ、よく無事だったわ……。とか言いながら頬擦りしてみたり」

「あう、こちょばいよー」

「んー、まさしくヴィヴィオの感触だわ。ほらほら、羨ましい？」

「……いや、別に」

「あー、その、お前ら？　仲が良いのはよーく分かったから。とりあえずストップ」

どこまでも際限無く盛り上がろうとする一同に、シオンから制止が掛かり。ようやく、そのやり取りは止まった。
ちょっと恥ずかしいのか、カナンとヴィヴィオが顔を真っ赤にしているのに、シオンは苦笑。あえて触れずに話す事にした。

「さって、これでヴィヴィオも取り戻したし――これからどうするんだ？」
「決まってるだろ、現代に戻る。これ以上、この時代に居たらどんな影響が出るか分からねぇし、それに――」
「それに？」
「この世界には、はやてさんが居ないからな！　はやてさん分を、そろそろ補充しなければ……！」
『『……』』

そんな事をマジな顔で言う咲夜に一同沈黙。と、言うかはやてさん分とは何なのか――聞いては負けである。そう思おう。
てな訳で、後半部分は聞いてないフリをしてシオンは頷いた。

「と、とりあえず現代に戻るんだな？」
「おう、そうなるな。当然、お前も来るだろ？　シオン」
「いや、俺は――」

何故か、咲夜の提案に迷うような仕種をするシオン。
それに訝しむように眉をカナンは寄せ――次の瞬間、その疑念は全てどこかへと行ってしまった。

いきなり謁見の間に繋がる扉が開いたかと思うと、クラウスとオリヴィエが飛び出て来たからである。何があったと言うのか――。

「シオン！　それに皆、無事でよかった――」
「ああ、何とかな。でも、クラウス。そんないきなり飛び出て来なくても」
「それよりシオン、大変な事が起きたんだ！」

こちらの言葉が、まるで聞こえていないかのようにクラウスは叫

ぶ。
動揺しているのが、手に取れる程である。本当に何が起こったと言うのか。
クラウスは一度だけ、空気を吸い込み。そして、起きた事実を簡潔に一同へと叫んだ。……そう、決して聞き逃せない、その言葉を。
「槍皇イースハルト・ガーンヴァイン陛下が崩御なされた……！やったのは、”魔王”だ！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

時間は少しだけ遡る――。
覇王領シュトゥラより遥か東にある国、レシテートと呼ばれる国がある。
絶対なる四皇家の内の一家、槍皇ガーンヴァインが統べる国だ。
そこは今、炎に包まれている。国中全てがだ。
逃げ惑う群衆の悲鳴が絶え間無く響き渡っていた。
その城下町を見下ろす場所――すなわち、城に一対の影がある。
一人は銀の鎧を纏い、豪奢なマントを羽織る大男。その名を、イースハルト・ガーンヴァイン。
槍皇。すなわち、この国の王であった。
対して前に立つのは、黒だ。
黒――純粋なる黒。他の何一点も許さぬ黒である。

黒の男――彼は、イースハルトにこう名乗っていた。

我が名は、魔王と――。

イースハルトは荒い息で歯噛みし、吠える！　今、この国をたった一人で滅ぼした化け物に。

「貴様は……！　一体何者だ！　何のためにこんな真似をする！　何が目的だ……！」

「――答える義務はどこにも無い」

返事はどこまでも素っ気ないものであった。まるで感情を交えない声。それはつまり、一切のコミュニケーションを断つと言う意味合いでもある。

イースハルトはぐっと息を飲み込み、自らの武装である大槍を構えた。だが、それを見ても魔王は冷たい瞳で見下ろすだけ。

「おぉおおおおおおお――――――！」

吠え、イースハルトが大槍を放つ！　それは真っ直ぐに魔王へと突き進み――しかし、次の瞬間、その姿は消失する。

それと同時に、拳がイースハルトの胴体に打ち込まれていた――そして。

―撃！―

イースハルトの身体が、地面へと崩れる。口から血が溢れ出し、それ以上動く事を許さなかった。

もし、アインハルトが今の一撃を見たならば驚愕していたのかも知れない。

それは覇王空破断――つまり、アンチェイン・ナックルの完成形であったから。
一切の無駄を排除した最小の動きによって、最大の衝撃を伝えることを真髄とする打法――全ての拳の技に通じる最たる基礎であり、かつ究極とも言える奥義――。
無拍子と浸透勁の打法を組み合わせる事によって、ようやくこの拳撃は完成する。……そう言った技であったから。

究極とも言える打法を無造作に放った黒の男はしかし、何の事は無いとばかりにイースハルトを見下ろしていた。

「つまらんな、この程度か」
「ぐ、う……！」

呻くイースハルト。しかし、既にそちらには興味が無いとばかりに、魔王は別の方向に視線を向けた。そこには、一人の青年の姿がある――血まみれの。
青年は、かはっと血を吐き出しながら魔王を睨みつけた。

「……なんで、だ……」
「……とるに足らない理由だ、昶。説明する必要を感じない」

青年を――現代ミッドチルダから、やはり飛ばされて来た青年、神藤昶を呼び捨てにして魔王は答える。

――ああ、分かっていた。正面からやりあって、この人には勝てない事は。

「……なんで、だ……」

――何故ならそれは、自分が知る内の中で紛れも無く最強の存在であったから。

友人の異母兄であり、最強の拳の担い手であり、そして『ＥＸ』――事象概念を屠る神殺し。

「……なんで、あんたがここに居る……！　こんな所で何をしてるんだ……！」

究極の戦闘者、致命的戦闘技能者、戦闘芸術品、魔王、６６６――様々な二つ名が頭を過ぎる。そして、最後に浮かんだのは、たった一つの名であった。

彼の、本名。友人の兄たる名前――。

「伊織、タカトォ――――――！」

魔王、伊織タカト。

古代ベルカに”存在しない筈の”王は、それを聞いて。

しかし、無表情でその場にただ立っていたのであった――。

（第六話に続く）

第五話　ヴィヴィオを取り戻せ！　オリヴィエ奪還戦！（後編）（後書き）

神藤昶（現代ミッドチルダ→古代ベルカ。槍皇領、レシテート）

伊織タカト（現代ミッドチルダ→古代ベルカ。槍皇領、レシテート）

はい♪　ようやく出たぜ、我等が兄貴（笑）

タカト、推参です♪　……敵として（笑）

どうなってしまうのやら、次回お楽しみにです♪

てな訳で、次回のバトンを二階堂さんにお渡しします♪　よろしく〜〜♪

ではでは♪

技解説。

今回の技解説は、神庭シオンの神覇ノ太刀について。

現在、出た技のみ解説していきます。

神覇・壱ノ太刀、絶影。

威力：ＡＡ（ＡＡＡ）

速度：Ｓ＋（ＳＳＳ）

範囲：一名。

概要。

神覇ノ太刀、高速斬撃魔法。剣と刀で劇的に威力と速度が変わる

技でもある。（）で囲んだ方が刀バージョン。抜刀術の応用では無く、無形の構えから繰り出す技でもあるので、無拍子の概念に近い技でもある。シオンが最も信頼し、かつ使用回数が多い魔法でもある。

神覇・伍ノ太刀、剣魔。

威力：Ｓ＋（Ｓ）
速度：ＡＡＡ（ＳＳ）
範囲：一～十名。

概念。

神覇ノ太刀、突貫型剣撃魔法。こちらも、剣と刀で威力と速度が劇的に変わる。吹き出した魔力を纏い、敵へと突貫する豪快な技。突きと面への打ち下ろしと実はバリエーションがあったりする技であるが、技の実態は変わらない。敵陣突貫などに好んで使われる。

合体奥義、剣覇烈震。

威力：ＳＳＳ＋。
速度：Ｓ。
範囲：一名。

概要。
剣魔、金剛閃牙、覇王炎刃一閃を三方向から同時に叩き込むことで成立する合体奥義。Ｓオーバーランクの斬撃を交差するように叩き込むこの攻撃は、威力もさる事ながら、回避も難しいと言う長所を合わせ持つ。ただし、失敗すると互いが衝突してダメージを喰らう恐れが実はある。だが、それに見合う威力は備えており威力ラン

クは堂々のＳＳＳ＋。ちなみに、破壊力だけならば、立派な惑星破壊規模である。これを個人に叩きつけるのだから、結果は押してしるべし。しかし、ヤックラはこれに耐えられるとあったが……。本当に耐えられるのか、ヤックラよ（笑）

今回はこんな所で♪　ではでは～～♪

第六話　騎士王×剣帝×魔王（前書き）

七番手二階堂です♪期限ギリギリでしたけど、なんとか完成できましたw

それでは第六話、始まります。

第六話　騎士王×剣帝×魔王

時間はオリヴィエ誘拐事件の終結から遡ること二日前。

神藤昶はレシテートにある槍皇城の牢に閉じ込められていることにも気付かず、ぐっすりと眠りこけていた。強い意志の焔が宿る両の目は緩く閉じられ、冷たく固い牢の寝床でも何事もなかったかのように眠り続け、

「出せやゴラァ！」

やけに野太い声が彼の耳に届き。一瞬で目が覚めた。

「うっせぇなぁ……誰だよ、こんな時間に」

小さく欠伸をして、昶はゆっくりと寝床から体を起こす。髪は乱れ、着ている六課の制服はしわくちゃになっていた、が。それ以上に起こされたことで彼は不機嫌だった。

『もう昼時ですが』

「昼ぅ？じゃあなんでこんな暗……どういう状況？」

『強制スリープモードから解除されたのはつい先程のことですので、私にも何が何やら。ただ現在の状況から推測すると、どうやら我々は捕らわれているようですね』

「……ぶった斬るか？」

『馬鹿なことは止めてください。彼女に言いつけますよ？』

いきなり物騒を飛び越して突拍子もないことを言い出した主に、彼の首にかかっているネックレスのトップ、その中心に埋め込まれている翡翠色の宝石が何度か点滅し、女性型の電子音声が冷静に言い放つ。

「じ、冗談だって。……つか、なんで俺、牢屋になんか……」

若干たじろいだ昶だったが、すぐに持ち直して、自分が今この状況に置かれた原因を考える。案外早く原因は分かった。

確か俺はカリムさんに頼まれて、千華とシンとロストロギアの回収任務に出たんだ。回収までは問題はなかった。だけど、いざ帰るってときに封印したはずのロストロギアが暴走を始めやがった。

暴走したロストロギアは空間を歪め、何もなかったはずの場所に小さなブラックホールのような謎の穴が現れた。そして次の瞬間、とんでもない吸引力で俺達を飲み込もうとして……今に至るってわけか。巻き込まれたのは俺達三人だったはずなのに、どうして俺しかいないんだ。

「エクス、千華とシンの魔力反応は？」

『……駄目ですね、私のサーチ範囲にはいません……マスター、魔力反応一つ、この部屋に接近しています』

「ああ。お前はスリープモードで待機してくれ。お前をここで奪われるわけにはいかねぇし」

『了解』

一度点滅し、それ以降首から提げられた彼の相棒は何も言わずにしばらく眠りについた。

残された昶は未だずっと騒ぎ続けている男は無視して、外から来る魔力反応を警戒し、全身に己の魔力を巡らせる。騒ぎ続けている男の仲間であれば、愛しの誰かさんがいない八つ当たりさせていただくつもりで。

「失礼しまーす……」

しかし、聞こえてきた声は若い女性のそれであり、昶はわずかに困惑した。あの男の仲間であれ、牢屋番であれ、てっきりゴツい男が降りて来ると思っていたのだが、降りてきたのは少し小柄な女性だった。髪や目の色はこのほぼ真っ暗な牢屋では分からないが、どうやら肩辺りのショートヘアらしいシルエットだけは見てとれた。

女の子？まさか、こんな子が牢屋番なのか？……いや、逆にこれはチャンスかもしれない。ちゃんと説明すればなんで捕まってんのか分からないけど、冤罪だって分かってもらえるはずだ。

わずか数秒で作戦を考えついた昶は数回深呼吸し、気持ちを落ち着かせたと同時に行動に移ろうとして、

「く、くくく……槍皇領の姫様自ら来るとはなぁ……命知ラズモイイトコダナァ！」

男の雰囲気が変わったのを感じた。この感覚によく似た感覚、それを知っている昶は底知れない不安を抱き。

「オォォォォォッ！」

男の顔の皮が真っ二つに裂け、全身を黒い毛で覆われた熊のようなが魔物が現れた瞬間、それは現実のものとなった。

「化け物……！？そこのあんた、さっさと逃げろ！」

鉄格子に両手で何度も揺らし、昶は魔物を目の当たりにした少女に大声で叫ぶ。見ず知らずとはいえ、人が襲われるのを黙って見過ごせるような性格ではないのだ。

「……っ」

しかし、少女は完全に腰を抜かしてしまっており、逃げることができなくなっていた。それを見た魔物は醜悪に口の端を歪め、その巨大な腕を振り上げた。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ！！」

その光景が視界に入った瞬間、直感的に口から放たれた詠唱。同時に昶の右手に黄金に輝く魔力が一つのカタチをとるように収束されていく。

それは橙色の刀身を持つ一振りの剣。あるモノを破壊するために作られた十戒の一つ。爆発の力を宿したテンコマンドメンツ！

「エクスプロージョン！！！」

全力全開で叩き込まれた一撃は爆風、爆炎とともに鉄格子を粉々に

破壊し、爆煙を切り裂くように銀の風が疾る！

「……！？」

醜悪な笑みを浮かべていた魔物は突如吹き飛んだ鉄格子に視線を向け――瞬きの間に振り上げた巨腕が血飛沫を撒き散らしながら地面に落ちた。

「オレサマノ腕ガァァァァ！？」

絶叫し、痛みに顔を歪めた魔物は深紅の眼を限界ギリギリまで開き、己の腕を切り落とした何者かと目の前から消えた獲物を探そうと周囲を見渡す。

「おいおい、どこ見てんだよ？鈍すぎて呆れるっつーの」

声が聞こえてきたのは魔物の真後ろ。即座に振り返ると、そこには……

「俺の目の前で人を殺そうとするなんざ百年早ぇんだよ。雑魚が」

「ふぇ？え？え？」

魔物の眼前に魔力刃を展開した機械剣を突き付け、獲物にされた少女を左手一本で抱える、昶の姿があった。

「大丈夫か？怪我とか、ないか？」

「あ、はい……あの……」

「いろいろ聞きたいことあるだろうし、こっちも聞きたいことがあるけど……今はこっちのほうが先。ちょっと下がってな？一瞬でカタつけるからさ」

側に引き寄せた少女に顔を向け、彼女が話す間もなく自分の後ろに下がらせ、昶は魔物を強く睨む。

「一瞬、ダト！？嘗メンジャネェヨクソガキィィィ！」

「嘗めてねぇよ。俺はただ――」

魔物の異変は突如起こった。昶だけを見ていた視界が、“上下にずれた”。そしてずれた視界のまま魔物は昶に襲いかかろうとして、自身の体が動かないことに気付く。そう、遅かった。全てが遅すぎたのだ。

「事実を述べただけだ、って、もう聞こえてないか」

崩れ落ちていく巨体。牢屋の壁に鮮血を撒き散らし、魔物は二度と動かなくなった。

「待たせたな、お姫さ……」

「姫様！ご無事ですか！？」

くるりと振り返り、呆然としている少女に向き合ったその時、数人の騎士が牢屋に転がり込んできた。魔物の絶叫と爆発音を聞き、駆けつけた騎士達は各々の武器を魔物の死体の前に立つ昶へと向ける。

「物騒なモン向けてくれんじゃねぇか……」

この時点で昶はかなりキレ気味であった。騎士達の後ろに連れていかれた姫に話しかけようとして、二度も邪魔をされた。いつもならそれだけでここまで怒りはしないのだが、周囲を取り囲んだ騎士達は眠っていた自分を投獄した疑いがある。我慢する必要などないと完全に結論付けてしまったのだ。

「貴様、何が目的だ！？」

「その牢はなんだ！脱獄しようとしたのか！」

「話も聞かずに投獄したテメェらがそれを言うか。いい度胸だな、よっぽどボコられてぇんだな？」

騎士達の言葉が最後のきっかけとなり、ヒートアップしてしまった昶はもう止まらない。両手に魔力を収束し、瞬く間に双剣を投影すると、騎士の一人に右手に収まった剣を突き付けた。

「待ってくださいっ！」

正に一触即発の空気を変えたのは、騎士達に無理矢理後ろに下がらされた少女から発せられた声であった。

「その方は私の友人です！無礼は許しません！」

屈強な騎士達を押し退け、少女は昶の目の前に躍り出る。そして彼に振り返り、柔らかな微笑みを浮かべた。

「しかし、こやつは謎の黒い穴から現れたのですぞ！姫様の御友人

のはずは……」

「このイルナリア・ガーンヴァインが嘘をついている、そう言いたいのですか？」

少女、イルナリアのその一言が決め手となり、昶を取り囲んでいた騎士達は己の武器を収めた。

「彼は私自らが部屋へと連れて行きます。あなた達も自らの持ち場に戻ってください」

「姫様、そのようなことは我々が……」

「いいえ。私が友人である彼にしてさしあげたいのです」

頑としてそこは譲らないイルナリアに騎士達は遂に折れた。「了解」と答え、――去り際にこれでもかと言うくらい昶を睨み付けて――彼らは牢屋を出て行った。

「……ふぅ」

騎士達の姿が完全に消えたと判断した瞬間、イルナリアはぺたりと床に座り込み、安堵のため息を吐く。

「えと、大丈夫でしたか？」

「それはこっちの台詞なんだけど……立てる？」

「は、はい、大丈夫です」

昶が差し伸べた手を掴み、イルナリアはようやく立ち上がる。そこ

でようやく、二人は互いの顔をまじまじと見つめ合うこととなった。そうして見つめ合うこと数秒、顔を真っ赤にして、どちらが早いというよりむしろ同時に離れた。

「あー、その……いい加減、ここ出ようか？」

「そ、そうですね。では、私に着いてきてくださいね？」

「お、おう」

なんだか妙にぎこちない会話をしつつ、昶はイルナリアの言う通りについていく。一緒にいなくてはならない、何故か、そんな気がしていた。

「え……今、なんて……？」

「ベルカ槍皇家の姫、と言ったのですが……どうかしました？」

昶はイルナリアに連れられ、彼女の自室へと招かれた。そこで始まったのは互いの自己紹介であり、名前、年齢――何故か肉体年齢が17歳になっているなどのハプニングはあったが――などを語り、なんとか昶の自己紹介は終わった。首にかけられたままスリープモード中の相棒は放置して。

そして次はイルナリアの番だったのだが、開口一番に言われた一言に思考が停止した。彼女曰く、彼女はベルカにある槍皇領を収める槍皇の娘、つまりは姫らしいのだ。

“昔に滅びたと言われていて、実際に滅んでいるはずの”あのベルカの。

どういうことだ？まさか、タイムトラベル？いや有り得ない。魔法の大前提だ、死人は甦らない。過去には戻れない。どんな術式を使っても、その２つだけは覆せない……はずだ。

『……やはり、そういうことですか』

昶がどういうことか悩んでいると、彼の胸元から女性の電子音声が聞こえた。その声は間違いなく昶の相棒の声だ。

「えっ、ど、どなたですか！？」

「エクス、お前、いつ起きて……」

『すみません、マスター。気になることがあったのでスリープモードとなり、蓄積情報を探っていました』

「気になること？それって……」

タイムトラベルかどうかってことか？

『ここはベルカです、間違いなく』

「……」

何も言えなかった。いとも簡単に大前提は覆されたのだ。しかし、同時にどこか納得もしている自分もいることも感じていた。有り得るかもしれない。古代遺物、ロストロギアならば。

「昶さん、どうかしましたか？」

「……あ、ごめん。なんでもない。紹介するよ、俺の相棒の――」

名を呼ばれ、思考の海からようやく帰ってきた昶はイルナリアに謝罪し。胸元で輝く相棒を紹介しようとして、

「姫様、少しよろしいかしら？」

木製の扉を叩く音と凛とした女性の声がそれを遮った。

「フィリアさん？どうかしました？」

「姫様の友人という男、一目見たいと思ってね。入っても？」

「昶さん、いいですか？」

「ああ、俺はゲストだし、決定権は部屋主のあんたにあるんじゃね？」

「じゃあ、入って来てください、フィリアさん」

許可が出てすぐに木製の扉が開き、

「はろー」

長髪の銀髪のメイド服を着た女性が部屋の中に入ってきた。頭にフリル付きのカチューシャはない、ここが大事。

「ほうほう、そこの彼が姫様の友人？」

「神藤昶っす」

「フィリア・ランカスターよ。よろしく」

軽く握手を交わすとフィリアと名乗った女性は昶の顔を見て、くすりと笑った。

「え、ちょ、いきなりなんなんすか」

「ん？なんでもないわ」

多くは語らない、謎の多い女性なのだろうと心の中で結論付けて、昶は一度深く嘆息する。正直、こういったタイプは苦手なのだ。掴み所がないというか、なんというか。

「あいつとはまるで正反対だな……」

基本ビビリのくせにそれごまかして、言いたいことははっきり言って、んで大事なときだけはまたビビリに戻る。俺の大切な女性。あくまで名前を出さないのは、正直言うと恥ずかしいから。大切だ、愛してる、だなんて、あいつの目の前で言えるわけないし。

「フィリアさん、お茶をお願いできますか？」

「ええ、すぐに持ってくるわ」

昶がまた思考の海へダイビングしている中、イルナリアはフィリアにお茶――おそらく紅茶――を持ってくるよう頼み、彼女は頷いて

部屋を出て行った。

「昶さん、昶さーん？」

「……んあ？ああ、姫様、どうかしたか？」

「えと、昶さんの話を聞かせていただけないかと……」

「あー……うん。何が聞きたい？」

昶はもうこうなったらごまかし続けるしかないと思った。口から出任せではどこからボロが出るか分からないので、一応どんな返しをするか考えながら。

「昶さんはどこから来たんですか？」

「あー……それはだな」

いきなり核心を突かれた。さすがに未来から来たなど口を滑らせるわけにはいかず、数秒考えた後にとりあえずごまかせるであろう案を思い付いた。

「遠いところだよ。普通の手段じゃどうやっても行けない、すっげー遠いところ」

「遠いところ、ですか？では何故、そんなところからこのレシテートへ？」

「事故。ちょっとヤバめの魔法に巻き込まれちまって……気がついたら牢屋の中だったわけ。てか、ここレシテートって言うのか」

嘘は言っていない。事故には巻き込まれたし、ロストロギアが謎の空間をこじ開けたのも魔力によるものだ。ただ少し事実をぼかしまくっただけなのだし。

「それでは故郷には帰れないのですか？」

「故郷とはちょっと違うけど、まあそうなるかな……」

自分のことのように心配してくるイルナリアにそう答え、昶は再び沈黙する。何せ今回の現象はタイムトラベルなのだ。そんな簡単に帰れたら世界はタイムトラベラーまみれになっているだろう。

だいたい、タイムトラベルは俺が適任じゃないだろ。なのは先輩かシンだろ、今の時期的に。

「つまり、壮大な迷子ね」

「あー、要するにそういうことっすね。全く、この歳で迷子なんてついてないっすよ……っていつの間に」

余りに自然に話に入ってきたフィリアはテーブルにストレートティーを置き、空いている椅子に腰をかける。

「で、どうするの？」

「何がっすか？」

「この後の事よ。帰る方法が見つかるまでどこで生活するつもり？」

「それは野宿とか……」

「ダメです！今町の外は魔物の巣窟で、とても野宿なんて出来ませんよ！」

野宿案はイルナリアによって却下。城下町に泊まるだけのお金もない。八方塞がりで途方にくれるしかなくなった昶に、救いの手は差し伸べられた。

「なら、ここに住む？」

「は？」

「この城はやたら広くてね、客間もかなりあるわけ。姫様の友人で、家を無くしたと言えば、槍皇様は貸してくれるはずよ」

いきなりとんでもない提案を出したフィリアに呆然とする昶だったが、イルナリアが急に立ち上がったことで意識はそちらへと完全に向いた。「それはダメです」と言ってくれるだろうと期待していたが、

「すごくいい案です！早速お父様に伝えて来ます！」

満面の笑みを浮かべて部屋を飛び出して行った。

「あー、姫様、すっげーいい笑顔で……」

「波乱の予感ね、面白いからいいけど」

二日後のこと。

結論言うぞ、姫様――イルって呼べって言われたな――イルはやってのけた。マジで父親である槍皇、イースハルトさんを説得して、俺はこの城に住まわせていただけることになった。

「はぁぁぁぁぁっ！」

で、やることもないので騎士の皆さんの鍛練に混ぜさせてもらってるわけで。それなりに楽しく過ごさせてもらっている。今は屋外にある訓練場で手合わせ、ってわけだ。

「んじゃ、今度はこっちの番っすよ！」

昶は両手に持つ鍛練用の木刀を構え、数歩で対峙している男の懐に入り、一瞬のうちに逆手に持ち替えた左の木刀をアッパーの要領が振り抜く！しかし、伊達に槍皇の城で騎士をやっているわけではない彼はそれを顎に掠る程度で躱し、逆に昶の顎に直撃するよう薙刀に近いような木製の槍を突き出した。

「ちっ！」

それをなんとか残った右手の木刀で弾き上げると、小さな舌打ちが自然と口を飛び出した。先程の攻撃、あれは入ると踏んでいたが、結果はギリギリとはいえ躱されたのだ。やはり強い、ここにいる騎士達は！

「ならこっからは――」

地面を踏み抜くのではないかと思うほど強く蹴り、後ろに跳躍する。

その際に左手に持っていた木刀を牽制がてら騎士に向かって投げ、

「本気で行く！」

着地と同時に再び地面を蹴り、弾丸のように一直線に飛び出す！突然の奇襲に驚いた騎士だったが、一直線に突っ込んで来る銀色の閃光を打ち返さんと槍を構え、

「そこっ！」

姿を捉えた昶の真正面に穂先を突き出す。これで昶は自ら槍に突っ込んで倒れる、そのはずだった。

しかし、騎士は見た。昶の口元に浮かぶ、不敵な笑みを。

「……」

気付けば、自分が放った一撃は目の前の銀髪の男をすり抜け、首筋に木刀を当てられていた。これが実戦ならば、確実に首を落とされていただろう。つまり、この騎士は負けたのだ。

「私の負けか」

すっ、と首筋から木刀を引き、腰に巻いた布に木刀を差し込んだ昶は騎士の男に握手を求めるべく右手を差し出す。

「後１マイクロ秒、気付くのが遅れてたら負けてたのは俺のほうでした。手合わせ、感謝します」

「いや、こちらこそ手合わせ感謝する。強いな、君は。君の故郷に

は君のような強者が多くいるのか？」

「俺なんかまだまだです。尊敬する先輩方、俺の師匠には全然敵いませんよ」

握手を交わしながら話す昶の言葉に騎士は苦笑する。それが謙遜だと思っているからである。

「昶ー！みなさーん！」

そうした会話を続けていると、訓練場に少女の声が響き。バスケットを抱えたイルナリアが駆け寄ってきた。彼女が昶を呼び捨てで呼んでいるのは彼に頼まれたのだ。イルと呼ぶから自分のことも呼び捨てで呼んでくれ、と。

「よ、イル。どうかしたか？」

「フィリアさんにこれを渡すよう頼まれたので、持ってきたんです。昶もみなさんもずっと訓練しているので、小休止を取ったらいかがですか？」

「そだな、俺も疲れたし……先に上がっていいすか？」

「ああ、構わないぞ。私達もそろそろ休憩時間なのでな」

ありがとうございます、と昶は頭を下げ、イルナリアを連れて訓練場の隅の木陰に腰を下ろした。

「お、サンドイッチじゃん！」

「昶にはこれを渡すように、と言われました。カツサンドというものらしいのですが」

「え？」

確かにカツサンドは好きなメニューだ。理由は……よくはやて先輩が作ってくれたから。だけど、俺、フィリアさんに好物だって言ったかな……

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもないよ。カツサンドとか食うのすっげぇ久しぶりだ！いっただきます！」

大きく口を開けてカツサンドにかぶり付き、次の瞬間、昶はあまりの美味しさに目を見開いた。肉が柔らかいとか、衣がすごくカリカリになっているとか、恐らく自家製であろうソースがよく合っているとか、美味しさを表現する言葉がいくらでも出てきそうな味。これを作ったフィリアはやはりすごいと感心し、

「そんなに美味しいのですか？」

「ああ、すっげぇ美味い。フィリアさんに後でレシピ教えてもらいたいもんだ……」

べた褒めの昶を見て何を思ったのか、イルナリアは昶がかぶりついたカツサンドに自らかぶりついた。いきなりそんなことをされれば慌てるのは当然であり、予想通り昶も容易くパニックに陥る。

「い、イル！？いきなり何を！？てか間接……！」

「これは……美味しいです、すごく！」

顔を真っ赤にして慌てている昶とは対照的に、イルナリアは初めて食べたカツサンドの味に感動しているようで。自分が何をしたか気付いていないようでもあった。

「はぁ……こうやって俺もあいつら慌てさせて来たわけか。鈍感だ、唐変木だ言われても否定できないな、これじゃあ……」

今までの自分の行動を省みて反省し、軽い自己嫌悪を覚えた昶だったが、隣に座るイルナリアが急に怪訝そうな表情を浮かべ、ある一点を見つめ始めたことが気になり、

「昶、あれはなんでしょう？」

「あれ、は――！？」

彼らの視線の先にあったのは小さな黒い点。普通ならばあまり気にしない異変だったが、昶はこれと同じモノを見ているため、驚愕を隠せなかった。

「みんな！ここを早く離れろ！イルは絶対に手を離すなよ！」

自分がこの時代に来ることになった原因。ロストロギア暴走によって開かれた円形の空間、それがこの場に現れたのだ。

「昶！何が起こっているのですか！？」

「俺がここに来た原因だ、なんだってまたここに……！」

昶が引きずり込まれたときはとてつもなく強い吸引力を発揮し、抵抗空しく吸い込まれてしまったのだが、今回出現したそれは吸引力など欠片にも見せなかった。

「……ぁぁぁぁぁ」

それどころか円形空間の中から誰かの悲鳴が聞こえるという現象までついてきていた。

「あれ、なんでか分からないけどすげぇ嫌な予感がする」

「昶？」

「イル、今すぐここを……」

離れよう、と言おうとした瞬間、円形空間から聞こえていた声が大きくなった。近い、声の主はもうまもなく飛び出してくる。ここまで近付いていて、昶はようやく聞き覚えのある声だと気が付いた。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

「ぐっはぁぁぁぁぁ！」

しかし、時既に遅し。円形空間から声を、というか悲鳴を上げていた人物はけっこうな勢いで昶に突っ込み、それをまともに受けた昶は派手に3メートルほどぶっ飛んだ。

「いたた……急にぶつかってごめんなさい……」

「いや、事故なんだから仕方ない……」

そう言葉を交わして、円形空間から飛び出した黒髪ツインテールの少女と昶は同時に顔を上げ、

「えっ、昶！？なんでいるの！？」

「そりゃこっちのセリフだ、サクラ！どうしてお前が……！」

次代の剣帝と今代の騎士王は、こうして再会を果たした。

サクラと思わぬ出会いを果たした昶は、彼女がこの時代に来てしまった理由を念話で聞いた。

要約すると、兄であるレン・T・ハラオウンを探し、様々な世界を巡って転々としているうちにこの時代に来た。というわけらしかった。

「あのレンさんが行方を眩ますなんて……何か理由があるのか？」

「さっぱりわかんない。で、昶も二人とはぐれてるんだよね？」

「ああ。シンは一人でもなんとかやっていってそうだけど、問題は俺の千華のほうで……」

昶があまりにさらっと言うものだから、危うく聞き流すところだった爆弾発言に気付いたサクラは「ストーップ！」と彼がこれ以上言葉を紡ぐのを止めさせる。それだけは聞き逃してはいけない、あの唐変木、神藤昶が口走っていたとんでもないセリフだけは。

「昶、今「俺の千華」って言ったよね？どーゆーこと？」

「何言ってんだよ、サクラ。付き合い始めたって少し前に言ったじゃん、忘れたのか？」

続いて爆弾投下。あまりに話が飛躍していて一瞬サクラの頭がフリーズするような事態に陥ったが、そこはさすが剣帝。すぐに立ち直った。

「ま、まあ、それは後で聞くとして。初めまして、お姫様。昶の友達のサクラ・T・ハラオウンです」

「イルナリア・ガーンヴァインと申します。よろしくお願いします、サクラさん」

それからサクラとイルナリアは談笑を始め、昶はそれをぼーっと眺める。そうして何分経っただろうか。休憩していた騎士達が立ち上がり、武器を掴み始めた。訓練が再開されるのだろう。

「そんじゃ、俺も行くか……」

昶は立ち上がり、腰に差していた二本の木刀を抜いて歩き出そうとして、

――まさか、“お前達もこの時代にいる”とはな――

頭に響く、聞き覚えのある声に立ち止まった。

「昶、この声って――」

同じく声を、ある男からの念話を聞いたサクラが驚愕に目を見開く
昶に話しかけようとして、
城下町から鼓膜を破るような巨大な爆発音が聞こえた。
「ッ！」
その轟音が耳に響いた瞬間、反射的に体が動いていた。サクラとイルナリアの手を取り、城下町を見下ろせる場所へと走り出す。
「そんな……！」
「これって……」
「……何してんだよ、あの人は！」
城下町は地獄絵図と化していた。逃げ惑う人々の悲鳴や建物が崩れ落ちる音がぐちゃぐちゃに混ざり合い、それはまるで見えない巨大な獣の雄叫びのようにも聞こえる。
「ここにいたら危険だよ！昶、早く中に！」
「ああ、分かってる……くそっ！」
様々な感情が混ざり、自分の心に生まれた苛立ちを吐き捨てる。今、彼の目につく場所にいるのは危険を通り越して愚行でしかない。それは分かっていたが、この惨状から目をそらし、城に戻る自分が許せなかった。
「あんなひどいことを誰が……」

「……それは」

悲痛な表情で唇を噛み締めるイルナリアを目の当たりにして、昶は自分の予想を彼女に話すべきか迷う。確かにあれをやるような人間を、たった一人で世界一つを殺せるような規格外を知っている。だが、実際にやっているところを見なければ確証が持てない。そして、何より信じたかったのだ。友人の、異母兄を。

「貴様、何者だ！」

そのまま走り続け、城門を横切ろうとしたとき、城門の外に数人の騎士と一人の男の姿が見え、昶とサクラは立ち止まった。黒いフードをすっぽりと被り、全身を黒一色で覆い尽くす男から視線を動かすことができない。まるでそれを見ろ、と何かに命令されているように。

数人の騎士に囲まれて尚、平然としている青年。それは虚勢ではなく、完全な余裕の表れであり。そして、圧倒的な実力差を理解できない男達に向けた哀れみでもある。

そうして数十秒黙り続けた青年はやがてゆっくりと口を開き、

「我が名は、魔王」

その名を告げた瞬間、彼に最も近付いていた一人の騎士の首から上の部分が音もなく消し飛んだ。悲鳴を上げる暇も、痛みを感じる暇もない。たった一瞬で、あったはずの騎士の頭は跡形すらなくなったのだから。

「かかれぇぇぇぇぇぇ！！」

その号令を皮切りに魔王を囲んでいた騎士達が一斉に襲いかかる。普通、数の暴力というのは脅威である。しかし、今回は相手が悪かった。

「天破紅蓮」

ぽつりと呟かれた言葉。同時に振り上げられる右脚。

「「プロテクション！！」」

広範囲を覆う二色の障壁が瞬時に展開し、立ち上った爆炎の余波が障壁にぶち当たる！ただの余波ですら障壁が軋み、悲鳴を上げるレベルなのだから、直撃してしまえば生命すら危うい。しかし、彼に迫っていた騎士達はその直撃をまともに受けてしまった。

その結果、悲鳴を上げる間すら与えられずに迎撃部隊は壊滅。炎が掻き消えると同時に障壁も粉々に砕け散る。

「サクラ！」

「分かってるよ！」

障壁が砕けた瞬間、二人は瞬時にデバイスをセットアップし、倒れ伏す男達を無表情、無感情な瞳で見下ろす男に突撃する。

「エクス！カートリッジロード！」

『了解。Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．』

聖剣の刀身の根本にある装飾部から吐き出される空薬莢。内包されていた魔力が刀身に纏われ、それは瞬時に研ぎ澄まされた風となる。

「風王！一閃ッ！」

全力で叩き込む斬撃！風を纏い、切れ味を格段に増したそれを魔王は右腕だけで防ぐ。まるで金属に叩きつけたような衝撃が腕に走り、

「まだだ！」

左手に一振りの剣を投影。魔王の脇腹目掛け振り、それは彼の左腕に防がれる。しかし、昶はそれを見て驚愕することもなく、焦ることもなく、ただ笑った。

「サクラァッ！」

「アルタイル！カートリッジロード！」

『Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』

頭上から落ちてくる声。魔王が空を見上げると、そこには太陽を背にして、大上段に魔力刃を掲げて急降下してくるサクラの姿があった。

「ブルクラッシュ！」

「甘い」

山吹色の魔力刃を振り下ろさんとするサクラを見上げ、魔王は腕に

力を込めて叩きつけられていた剣を弾き。その衝撃で一瞬がら空きになった昶の足を払い、宙に浮いた昶をサクラに向かって蹴り飛ばす！

「うあっ！」

「がはっ……！」

避ける間もなく直撃を受けたサクラ。咄嗟に障壁を展開し、衝撃は軽減することはできた。しかし、吹き飛ばされた勢いは全く衰えることなく、城壁に二人まとめて叩きつけられ、壁面に巨大なクレーターが出来た。

「昶！サクラさん！」

イルナリアの悲痛な叫びに一瞬失った意識を覚醒させ、昶は自分の分の衝撃もまとめて受けてしまったサクラを見る。

「サクラ！しっかりしろ、サクラ！」

俯き、何も言葉を発しないサクラを揺らし、なんとか意識を取り戻させようとする。

「おいサクラ！」

「うる……さいなぁ……」

気だるそうに顔を上げたサクラだったが、頭から血が流れ、それが顔に一筋の赤い線を引いていた。

「サクラ、大丈夫か！？」

「昶が退いてくれたら……大丈夫……」

「あ、悪い……サクラ。お前、まだ飛べるか」

「お兄ちゃんにしごかれてるんだよ……？これくらい、傷のうちに入らないって」

なら、と昶は真剣な表情で続ける。無謀とも思える新たな作戦を。

「なら、お前はイルを連れて逃げろ。あの人は俺が食い止めるから」

「昶、それ本気で言ってるの！？」

「ああ、本気だ。なんだか分からねぇんだけど、イルだけは守らないといけない、そんな気がするんだよ」

「だとしても、二人で軽くあしらわれた相手だよ！一人になったら足止めになるかどうかすら……」

「フルドライブ、宝具、あの人に対抗できるような手ならまだある。だから、頼む」

頭を下げてまで頼み込む。そうまでしてイルナリアを生き延びさせなくてはならないと感じる何かがあったのだ。

「……分かった。その代わり、足止めだからね。絶対に戻ってくること。そうしてもらわないと、千華がかわいそうだもん」

「ああ、絶対に戻る」

そう約束を交わし、二人は下で無表情を貫いている魔王を睨む。それに気付いたか気付かなかったは定かではないが、魔王はゆっくりとイルナリアへと近付いていく。

「サクラ！乗れ！」

「うん！」

投影した刃幅の広い剣の腹にサクラが踵を乗せ、昶が渾身の力で彼女ごと剣を振るう。当然それによって加速を得たサクラは自分の限界速度に到達する時間は短くなり、必然的にイルナリアに届く時間も縮む！

「イルナリア！逃げるよ！」

「サクラさん！？ですが、昶が……！」

「そうやって逃がすと思ったか？」

イルナリアをお姫様抱っこのように抱え、飛び去ろうとしたサクラの真横に魔王が現れる。このままでは二人まとめてやられてしまう。しかし、彼女は慌てなかった。

「させるかぁぁぁぁぁぁ！」

魔王の後ろから凄まじい速度で昶が迫り、刀身から柄まで黒で塗り潰されたような刀の峰で魔王を殴り飛ばす！

「……天鎖斬月の身体強化。それに、雪片弐型を投影したことで『

瞬間加速』を得たか」

しかし、魔王も軽い身のこなしですぐに態勢を整え、昶がやってのけた行動の分析を瞬時に行う。

「たった一太刀でそこまで分析するか……やっぱあんた、バケモノ染みてるっつーの」

「だが、速度で俺に勝つことが無謀だと理解していながら、何故挑む？」

「仲間や友達助けるのに、無謀とか無理とか思ったことはねぇんだよ。それに、あんた、そんな余裕でいいのか」

雪片弐型の刀身が開き、展開された部分から空色の魔力刃が展開されるのと天鎖斬月が漆黒の魔力を纏うのは、ほぼ同時だった。

「月牙天衝！零落白夜！」

片や魔力結合どころか魔力そのものを無効化する単一技能。片や魔力を食らい斬撃を巨大化させて放つ技。両者を同時に解放し、一気に魔王へ畳み掛ける！

「……くっ」

直撃。確認するまでもない、腕に感じた感触を知っている。幾度となく戦ってきた経験がそう告げていた。

「これで少しは……」

――トリガー・セット――

空間に響く声。その声に昶の背筋が凍りつく。直撃したはず、いくらあの男でも、魔力を完全に零とする零落白夜を受ければ少しは怯むはず。そう思っていたのだ。それが甘かったことに今、気付かされた。そう、気付くのが今この瞬間では遅かった。

「天破疾風」

風が何かを切り裂く音は遅れてやって来た。さらに遅れて痛みが、そして傷がやって来た。気付くのが今この瞬間では、既に決着は着いていたのだ。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

全身を鋭い風に切り刻まれ、血飛沫を撒き散らしてきりもみ回転で城壁にぶち当たり、それだけでは勢いは殺せずいくつもの城壁をぶち抜いて数百メートル先にある城下町を見下ろせる場所まで吹き飛ばされた。

「がはっ！げほっ！ごほっ！」

『マスター！大丈夫ですか！？』

「大丈夫……だ……」

「昶！どうしたんだ！」

地面に倒れた昶に驚いた表情で駆け寄ったのはこの城の主、槍皇イースハルト・ガーンヴァインその人であった。

「イースハルトさん……逃げて、くれ」

「貴様が槍皇ガーンヴァインか」

重傷を負った昶とイースハルトの目の前に立つ黒の魔王。槍皇の本能が叫んでいた。この男は危険であると。

「貴様……！何者だ！」

「我が名は、魔王」

そう答えた魔王、伊織タカトの顔を強く睨み、対峙する槍皇は己の槍を構えた。

そして、タカトは昶とイースハルトを叩き潰した。

「タカトさん……！取るに足らない理由ってなんなんだ……納得いかねぇよ……！」

全身に走る熱を伴った痛みを我慢して、昶は叫ぶ。納得なんてしたところで意味はない。そんなことは分かっている。それでも、友達の兄を信じたいと思う気持ちはこんなずたぼろにされた今でも変わっていない。

「お前が納得する説明をする義務はどこにもない。しかし、邪魔をされるわけにはいかんからな」

しかし、当のタカトはとりつく島もなく、昶にゆっくりと近付いて

くる。感情を感じることのない冷めきった瞳に射抜かれるだけで心拍数が緊張によって跳ね上がった。

「おっと、そこまでよ。伊織タカト」

「……誰だ」

昶を冷めた瞳で見つめていたタカトは突如現れ、自分の本名を口に出した女性へと視線を移し、名を問う。しかし、メイド服に身を包んだ彼女はそんなタカトの問いを無視してくすくすと笑い声を上げた。

「さあ、誰でしょう。いや、誰だって構わないでしょう？伊織タカト、いや、それとも６６６と呼んだほうがいいかしら？もしくは……」

現れた女性、フィリア・ランカスターが口をイ行の発音の形に変えた瞬間、昶に近付いていたタカトは姿を消し、フィリアに正拳の一撃を繰り出さんと迫る！

「フィリアさん……あんた、なんで……」

この時代に魔王の真の名どころか呼ばれ慣れたであろう呼び名、さらには伊織タカトの真なる名を知る人間など存在しない。するはずがないのだ、タカトは生まれてすらいないのだから。

「昶。姫様とあの娘と生き延びなさい。あなたが感じた思いのままに」

タカトの拳をどこからか取り出したモップで防ぎ、そう言って微笑

んだフィリアが指をパチン、と鳴らす。

それを合図に相変わらず立ち上がることのできない昶の下に魔法陣が浮かび上がる。そこから読み取れる術式は転移。どこかに飛ばされるかは分からないが、このまま飛ばされるのは納得できなかった。

「待てよ、待ってくれ！フィリアさん！俺はタカトさんに聞かなきゃ……」

「今話す必要はないわ。生き延びればいずれ、話す機会も出てくるでしょう。今は逃げなさい」

一層輝く魔法陣。もう目も開けられないほどの光に包まれ、昶は視界の一面を白で埋め尽くされて――

「昶……？」

「……サクラ、か」

先に逃げていたサクラのイルナリアの目の前に飛ばされていた。

「酷い傷……タカトさん、本気で昶を……」

「昶、気をしっかり保ってください！」

サクラとイルナリアが心配するところから分かる通り、昶は衣服全体から血が滲むほど出血しており、危険な状態になりつつあった。イルナリアがずっと彼の体を揺らして意識を失わないように呼び掛けているが、それもいつまで意識を繋ぎ止められるか分からない状態である。

「サクラ……」

「……何？後を任せるとか、面倒だから嫌だよ。だから絶対……」

「話を聞け、馬鹿……頼みがある。魔力……Ｓランク一発分、分けてくれないか……」

「秘策でもあるの？」

「切り札中の切り札……使えば、しばらく魔法は使えなくなる……」

「……分かった。Ｓランク一発分ね」

サクラは首から提げられた竜の牙のネックレス、待機状態のアルタイルを右手で握りしめ、彼女から放たれた山吹色の光が昶の体の中へと溶け込んでいく。

魔力が体に溶け込むのを感じた昶は閉じていた目をゆっくりと開き、右腕を空に掲げた。

「マスターコードＳＡＢＥＲ。アヴァロン、駆動」

全身が激しく発光し、咄嗟にイルナリアとサクラは目を閉じる。そして瞼で遮っても分かるような強い光が消え、彼女達が目を開くと、

「……ふぅ、リンカーコア休止確認っと」

立ち上がり、腕を回して調子を確認する昶がいた。顔にまで及んでいた傷口はもともとなかったかのように治っており、血が滲んで大

変なことになってる六課の制服以外は何事もなかったかのようになっている。

「サクラ、逃走中に何かあったか？」

「大丈夫、何もないよ。それよりも……これからどこに行けばいいの？」

「俺に聞かないでくれよ。土地勘なんてねぇんだから」

そう、タイムトラベルしてきた二人にベルカの土地勘などあるはずもない。ここにずっといるわけにもいかず、かといってどこに行けばいいかも分からない。いきなり八方塞がりの状況に、昶とサクラは唸って考えて込む。そんな中、彼らに進みべき道を教えたのはイルナリアだった。

「ここから近いのは地帝様の領土です。……魔王が来ることを知らせなければ」

「確かに、教えておけば民間人が避難する時間も確保できるかもな」

「そうだね。それじゃ、目的地はその地帝様のお城！張り切っていこう！」

そう言って、サクラは飛行魔法を発動させようとして。昶は彼女の手を握ってそれを止めた。

「むやみに魔法を使ったら、誰かに勘づかれる可能性がある。トラベラーは俺達以外にまだまだいるかもしれないだろ？」

「え、ちょ、まさか……」

飛行魔法を使えないのならば、この時代で実行できる移動手段などだいたい絞られる。馬車などを使うにはまず馬がいなくてはいけないし、実行は難しい。……そうなると取れる手段はたった一つ。

「なぁ、イル、ここから地帝領まで歩いてどれくらいかかる？」

「えっと、7日間くらいかと」

「一週間か。イル、ここから一番近い町までは？」

「一番近い町……えっと、イクトナという町ですね。そこまでなら半日歩けば到着しますよ」

「は、半日ぃ！？」

一人驚くサクラは無視し、昶を思考を巡らせる。現在進行形で無一文な自分達が町に行ったとして、食料などを買えなければ意味がない。さて、いっそのこと賞金稼ぎでも始めてやろうか。

「昶、どうしたの？」

「現在進行形で無一文な俺達がどうすりゃいいか悩んでんだよ。賞金首とかいりゃ楽なんだけどな」

「あの、昶。お金なら少し持っていますよ？」

「女神はここにいたか！」

イルナリアは裾が破け、ワイルド路線を地で行くようなドレスの腰につけられたポーチから布袋を取り出し、昶に渡す。じゃらじゃらと硬貨が音を立てている袋を開き、

「イルナリア様万歳！」

中身を見て、両手を勢い良く空に上げる。今の昶は本当にイルナリアが女神ではないかと思っていた。

「昶、私にも見せてよ」

「ああ、もちろんだ」

昶は持っていた布袋をサクラに手渡し、サクラもその中身を覗き込む。

そこにあったのは光であった。黄金が放つリッチな輝き。つまり、布袋には金貨がこれでもかと言うほど詰められていた。

「「イルナリア様、ばんざーい！」」

一気に金銭面の不安が解消された瞬間。昶とサクラは本気でイルナリアが女神に見えた。……もっとも、感謝されている側のイルナリアは恥ずかしそうにはにかんでいたが。

「よし、これで状況クリア！これよりブレイズ……じゃなかった。俺達はイクトナで食料などを買った後、地帝領にある地帝の居城へと向かう。目的は魔王の襲来を告げ、民間人を避難させることだ」

「了解、って言いたいとこだけど、なんで昶がリーダーなの？」

「じゃあサクラがリーダーやるか？」

「やだよめんどい」

「ちょ、めんどいって……なら俺がリーダーだ、異論は？」

「別にないよ」

「私もないですよ」

「異論なしな。じゃあ早速出発するか」

昶はイルナリアに布袋を渡し、先陣を切って歩き始める。

「徒歩かぁ……足痛くなっちゃいそうだよ……」

その後ろを、この後の足の疲れを憂いながらサクラが続き、

「まあまあ、半日の辛抱ですよ、サクラ」

そんなサクラを励ますように、笑顔で彼女に話しかけるイルナリアが続く。

こうして三人の旅は始まった。この旅の行く末はまだ誰にも分からない。終わりが来る、その時までは。

第六話　騎士王×剣帝×魔王（後書き）

いかがだったでしょうか？

それでは次は樟葉櫂さん、よろしくお願いします♪

それではっ☆

第七話　予想外のトランプ（前編）（前書き）

えー、二階堂さんからバトンパスを受けた樟葉櫂です。
第七話の“前編”をお届けします。……えぇ、“前編”なのです。
自分でもまさか、前編後編の二本立てになるとは思っていませんでした……。
やはり、書きたい事を全部書くとあまりよろしくないですね（笑）
それでも、物語のターニングポイントなので文字数を減らす訳にはいかず……。
結果として、前後編に分けての連載と相成りました。ご了承下さい（汗）

では、前置きが長くなりましたがお楽しみ下さい。どうぞ！

第七話　予想外のトランプ（前編）

昶の姿は、光の粒子に包まれて完全に消え去った。それを確認してから、フィリアはゆっくりと視線をタカトへ向ける。

「余計な事を……」

「貴方にとっては余計な事でも、私にとっては大切な事よ？」

殺気の籠った視線をさらりと受け流すフィリア。右手にモップを持ちながら、それでも意識だけはタカトへと向け続ける。

自分の攻撃をモップだけで受け止め、更に常人には耐えられぬ殺気を当てても何ともない。

フィリア・ランカスター。タカトは徐々にではあるが、彼女に既視感を覚え始めた。……“初めて出会った筈であるのに、どこかで見たような感じ”を。

「そもそも、どうして槍皇様を狙ったわけ？　何か理由でもあるのかしら？」

「……何度も言うが、説明をする義務はどこにも無い」

「あらそう。なら、私が貴方を知っている事を説明する義務も無いわね」

意地と意地の張り合い。どこまでも交わらない線と線。フィリアとタカトのやり取りは、まさにそのような感じである。

やがて、いつまで経っても話が通じないと悟ったタカトは、戦闘体勢へ。それと同時に、フィリアもモップを構える。……お前、い

つまでそれで戦うんだと言うツッコミは無しで。

先に動いたのは――――伊織タカト。フィリアの視界から姿を消し、コンマ数秒後には既にフィリアの眼前へと迫り……。

右の拳――アンチェイン・ナックル――をフィリアの胴体目掛けて撃ち込む！

「……っ！」

ここで初めてフィリアの表情から、笑顔が消えた。咄嗟にモップでタカトの右拳を防いだが、モップはあっけなく折れてしまう。

してやったり、とばかりにタカトは同じ位置へと逆の拳を突き出す――――！

――撃！

「む……？」

しかし、撃ち込んだ所でタカトは違和感を感じる。“何かに当たった感触”はしたのだが、胴体に当たった手応えが無い。

それもそのはず。フィリアは、タカトの拳を剣で受け止めていたのだから。透き通った蒼色――恐らく魔力で生成された物だろう――の細身の刃。

形からしてファルシオンであろうか。刀身の根本の直ぐ下には、銀色の装飾がある。

「スラッシュ」

『Ｅｘｐｌｏｄｅ！』

フィリアがぽつりと呟いた直後だった。デバイスと思われる剣から発せられた機械音声と同時に、刃に魔力が集中し――――爆発。
しかし、フィリアはその一瞬前に剣と共に、少し離れた城壁の上へと離脱。乱れた髪を左手で払い、煙で包まれている数瞬前まで自分が居た場所を見つめ……。

――豪炎！

突如、飛んで来た炎――正確にはタカトが放った天破紅蓮――を上空へと飛ぶ事で回避。回避すると同時に繰り出されたタカトの回し蹴りを、今度は剣で受け流そうと試みるフィリア。
が、完全には受け流せなかったらしく。フィリアは衝撃で、城壁に叩き付けられてしまう。……叩き付けられた瞬間は苦痛の表情を浮かべたが、それも一瞬だけ。
直ぐに城壁から離脱し、ボロボロになったメイド服を少し気にかけつつ、タカトへと言葉を投げた。

「けほっ……アンチェイン・ナックルだったかしら？　物騒な技を普通に繰り出さないで欲しいわね……」

「あの一撃で即座に気付くか……。本当に貴様は何者なのだ？」

「さぁ、どうなんでしょうかね～？」

タカトの問いにも、相変わらずの答えしか返さないフィリア。……しばらくお互いの間に沈黙が流れる。が、それも少しの間だけ。
不意に二人の姿が消え去った……否、“消えたように見えた”。しかし、それは二人が視認出来ない程の速さで動いていただけ。
次の瞬間には、空中で拳と剣を交えるタカトとフィリアの姿があった。

――撃！　閃！

拳と剣がぶつかり合う度に空気が震える！

二度、三度ではない。数秒に一度のペースで、拳と剣が交差しては鈍い音を紡ぐ。タカトが繰り出す拳――決して遅い訳では無い――に合わせて、剣で防ぐフィリア。

決して自分から仕掛ける事はしない。相手の攻撃を見切り、その軌道上に上手く剣を持ってきている。

自分の攻撃をここまで防ぎ続けるフィリアに、タカトは少し驚きながらも一向に埒が明かない事を悟った。

「中々だな。だが、これならどうだ？」

どこからともなく百――いや、千に近い数の糸がフィリアの視界を覆い尽くす。……よくよく見ると糸の一本一本は水で出来ており、太陽の光を受けて輝いている。

――――天破水迅。

広範囲に渡って攻撃可能な精密攻撃であり、本来ならば対多人数用の技。それをタカトは惜しげも無く、フィリアに向けて放った。左手を動かしたと同時に、糸はたちまちフィリアへと繊細な動きで襲い掛かる！

「っ！」

フィリアは後方へと退いて、空中へジャンプする事で一旦は回避。だが、糸は尚も執拗にフィリアを追いかけ続ける。

振り切れないと悟ると、魔法で更に上空へと上昇して剣を上段に

構えた。

「カートリッジ！」

『Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』

機械音声と同時に、剣の装飾部分から空薬莢が二発ほど放出され。

……魔力刃の輝きが一層増したように、タカトには見えた。

糸が数十本ほどまとめて、魔力刃に絡みつこうとした瞬間――――。

――閃！

上段に構えていた剣は一思いに振り降ろされた。絡みつこうとしていた糸を全て断ち切り、更に落下速度を利用して刃は威力を増す。

タカトが続けて糸を伸ばすも、それらをフィリアは全て回避してタカトへ迫る――――！

「はあああああっ！」

『Ｂｕｌｌ　ｃｒａｓｈ！』

剣が届く範囲まで近づいた瞬間、フィリアは更に刃に魔力を込めて振るった！タカトはつい先程のサクラの攻撃と同じように、弾いて吹き飛ばそうと腕を振るう！

――撃、閃！

振り降ろされた剣と弾き飛ばそうとする腕は、両者のちょうど中心で交錯。何度も斬り結んだ先程とは違い、今度は力と力の正面か

らの真っ向勝負。
　両者とも一歩も引かずに膠着状態がしばらく続いたが、やがて魔力刃に一筋の亀裂が生じた。それを見たタカトは、振るう腕に力を更に込めて押しきろうとする！
「ロード……カートリッジ……ッ！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！！』
　負けじと、フィリアはカートリッジをロード。生じた亀裂は元に戻り、魔力刃は更に輝きを増して行く！
　同時に周囲の魔力の素が徐々に、魔力刃へと集中していくではないか。遠くから見ても分かるほどに輝きを放ちだした刃を見て、途切れ途切れとなりながらもフィリアは戦いに終止符を打つ技の名前を呟く！
「スラッシュ……エクスプロード……！」
――閃光！　――煌、爆！
　刃に流れた大量の魔力は、刃の形を維持し続けられずに爆発。同時に巻き起こった白煙と閃光で、二人の視界は覆われてしまう。
　……しばらくして煙が晴れた時、フィリアの姿はタカトの視界には無かった。
「消えた……？　いや、自ら離脱しただけか」
　その場に残った魔力反応から、フィリアが自分から撤退した事を悟るタカト。あれだけ苦しそうにしていながらも、逃げる余力があった事に内心では驚いたが、既に後の祭りだ。

そう割り切り、タカトは黒煙が立ち込める市街へとゆっくり歩みを進めて行く。

……レシテート壊滅とイースハルト死去の情報が、シュトゥラに伝わるのはこの数時間後となる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

――――同時刻、レシテートより少し離れた平原にて。

「あれ……？」

風に靡く髪を抑えながら、サクラ・T・ハラオウンは後を振り返った。

既に結構な距離があるにも関わらず、自分達が先程まで居た城はしっかりと確認出来る。……今は既に魔王――伊織タカト――によって、廃墟となってしまっているが。

「サクラ？」

「どうかしました？」

「……ごめん、何でもない。多分、気のせいだと思う」

昶とイルから問いかけられたが、サクラは気のせいだと割り切って二人へと返事を返した。二人が少し離れた所で、サクラは改めて廃墟となった城へと視線を向ける。

――――そうだよね。お兄ちゃんの魔力をこんな所で感じる訳ない

よね。きっと疲れてるんだ。

一瞬だが、確かに感じた兄の魔力。だが、それを疲れによる幻と捉えて、サクラは二人の後を追って歩き出す。

兄がここに居るはずがない。居たとしたら、ここに来た時にもう魔力を感じていたはず。“だから、ありえない”。そう、サクラは認識していたのだ。

『Ｓｏｍｅｔｈｉｎｇ ｗｒｏｎｇ, ｍａｓｔｅｒ？』

「いや何でもないよ。……て言うか、いつまで言語機能をごまかしてるつもり？　いい加減にしなさいって」

アルタイルの問いかけに、サクラは呆れた口調で言葉を投げかけた。その行動に昶とイルナリアは首を傾げたが、直ぐに行動の意味を知る事になる。

『……はぁ、分かりました。私としてはこのまま隠し通す方が良かったのですけどね』

突然、サクラの首からぶら下がる竜の牙が喋り出したのだ。しかも、“電子音声”で。これには流石の昶も驚いた。何せ、タカトとの戦闘では片言しか音声を発していなかったのだから。

「は！？　アルタイル、お前……喋れたのか？」

『一応は。私の言語能力はあくまでおまけのような物ですから』

「喋るデバイスですか……。珍しいのですね」

昶の問いに淡々と答えるアルタイル。そんなアルタイルを興味津々と言った表情で見つめるイルナリア。
彼女からすれば自由に喋るデバイス……と言うより、インテリジェントデバイスそのものが珍しいのだろう。この時代のベルカの主流デバイスは、最低限しか言葉を発さないアームドデバイスなのだから。

「あーあ、こんな時にインフェルノがあればなぁ……」

『何を寝惚けているのですか、マスター……。インフェルノはマイスターのデバイスでしょう？』

歩きたくない、と言う思考で脳内が埋め尽くされているサクラの妄言にツッコミを入れるアルタイル。
確かにインフェルノ――レンが持つバイク型デバイス――があれば、移動はかなり楽になっているであろう。
だがしかし、無い物は無いのだ。デバイス作成技術をサクラは習得しているならまだしも、習得していないのでほぼ無理だ。……真面目な時は真面目だが、不真面目な時はとことん不真面目。それが、サクラの本性である。

『マスター、前方に魔力反応が……合計で十五。恐らく、魔物かと』

だが、緩みきった表情はアルタイルの一言で一気に引き締まった。アルタイルの言葉通り、前方からは合計で十五。自分達以外の魔力反応を感じる。
サクラは首からぶら下がる竜の牙――待機状態のアルタイル――を首から外し、昶に指示を飛ばす。

「……昶はイルナリアを守って。私が何とかする」

「分かった。無茶はすんなよ？」

「大丈夫だって。モード２ｎｄ、オルクス！」

魔力が枯渇して戦う事が出来ない昶に、イルナリアを任せ。サクラは二人の前に立つと、首から外した竜の牙のペンダントをぎゅっと握りしめる。

竜の牙のペンダントは、サクラの手の中で淡い輝きを放つと、山吹色の魔力刃を持つ片手剣に変化。それと同時に、サクラ達の目の前に全身灰色で目が赤い犬――いや、狼か――が現れた。

アルタイルの言葉通りに強い魔力反応を持つ事から、恐らく野生の狼が魔力を吸収して変異した魔物であろう。

「行くよ、アルタイル！」

『了解。ロードカートリッジ！』

サクラの手が握っている少しの上の部分から、空薬莢が宙へと放出された。同時に地面を蹴り、魔力で加速を付けながらサクラは狼の集団へと剣を振りかぶる。

奇声を上げながら突進してきた狼――二匹ほどだが――をステップを踏むような動作で回避。それと同時に、攻撃の最中で隙だらけな狼の首元を狙って、アルタイルを撃ち込む！

――閃！

一瞬にて、狼の首は血飛沫を上げながら胴体と永遠の別れを告げた。地面に落ちるのを確認する暇も無く、サクラは残りの十三匹に向かって更に加速。

上段に構えた剣を身体と平行にすると、すぅぅぅと息を吐いてからステップを踏むように剣を振るう！

――烈、断、閃、斬！

最初の何匹かは単純に荒々しく狼の首を叩き斬り、途中からは美しく流れるように狼の身体を連続で斬り刻む！

演舞で舞っても遜色が無い程の見事な美しい剣舞だが、これはあくまで本命の前に行う連続攻撃の一つ。

最後に残った一体――集団の中でも一番大きいリーダー格――に本命をぶち込むべく、サクラは大きくアルタイルを振りかぶる！

「グルアッ！」

「っ！」

――閃！

振りかぶった瞬間に飛んで来た、かなり速い一撃をアルタイルで何とか弾き。崩した体勢を立て直すべく、昶達の所まで一旦下がってから再びアルタイルを構え直す。

「カートリッジ！」

『ロードカートリッジ！』

止めを刺すべく、一気にカートリッジを三発ロード。中に込められていた魔力を使い、刃の威力を極限まで高めたサクラ。

――――相手の出方を窺い、一瞬の隙を見て再び地面を蹴る！

先程よりも格段に速く狼に近付いたサクラは、その手前で両足に魔

力を込めて一気に上空へ跳躍。

それを追いかけようと狼も足に力を込めたのだが、そこで自分の両手両足が自由に動かない事に気付く。狼の四本の手足は山吹色の鎖――サクラが仕掛けたバインド――が、がっちりと固定しており。

既に、狼がその場から動く事は叶わなくなっていた。

「はあああああああああっ！」

アルタイルを上段に構え、重力に従って地面へと落ちてくるサクラ。刃に更に集中する魔力と落下する反動で、徐々に放とうとしている技の威力は増して行く……！

狼はアルタイルに集中する魔力を感じ取ったのか、バインドから逃げようと必死にもがく。だが、一般の魔導師でも抜け出すのに時間がかかるバインド。魔物如きが、逃げられるはずが無かった。

「ベアクラッシュ！！」

――煌、閃！

サクラが放った渾身の一撃は、狼の首を直撃！　意外とさっくり首と胴体を分離させ、首は派手に血飛沫を飛ばしながら二メートルほど吹っ飛んだ。

それを見届けたサクラは、レシテートからずっと着ていたバリアジャケットを解除。白いシャツとチェック柄のパーカーにグレー色のスカートと言う、普段の私服へと服装を変えた。

「ふぅ……。まぁ、ざっとこんなものでしょ」

血がこびり付いたアルタイルを待機形態に戻し、呟いたサクラ。

それと同時に、後方でサクラの戦いを見守っていた昶とイルナリアが近づいてくる。

「やっぱりサクラは強いな。レンさん譲りの技は伊達じゃないって事か」

「私はまだまだだよ。剣帝の二つ名を貰えるくらいになるまで、強くならないと」

褒める昶に、サクラは照れ隠し――――ではなく素の表情でそう答える。その表情の裏に何かを感じ取ったのか、昶はそうかと呟いてからは何も触れる事は無かった。

「この森を抜ければ、イクトナの街までは直ぐだと思います。もう少しの辛抱ですよ」

「やった！　イクトナに着いたら、まずは服屋に行かないとね！」

そんな二人を見かねてイルナリアが告げると、サクラが待ち望んでいたとばかりに歓喜の声を上げる。が、サクラの口から飛び出た発言に昶は疑問を抱き、問いかけた。

「なぁサクラ、何で一番最初が服屋なんだ？」

「まずはイルナリアの服を買わないと。だって、あの格好じゃあ……」

「あの格好でって……。――――っ！」

呆れた表情で見るサクラを尻目に、昶は視線をイルナリアへと向

け――――。イルナリアの色々と際どい服装を見てから、慌てて視線をそらした。
しかし、イルナリアは何も分かっていないような表情で首を傾げている。天然娘、恐ろしや……。

「……あきらぁ？　今、絶対に変な事考えてたでしょ」

「か、考えてません！　決してやましい事なんて考えてないって！」

怪訝な表情で問いかけたサクラに、慌てた昶はしどろもどろに返事を返す。
それでも尚、じーーーーーっと昶を見つめていたサクラだったが、やがて諦めたように視線を前へと向けた。ここで言い争いをしていても始まらない。今は、イクトナの町を目指す方が先決である。

「じゃあ、そろそろ行こう。イルナリア。道案内、お願いね？」

「お任せ下さい！」

土地勘のあるイルナリアを先頭にして、サクラ達は森へと入って行く。その後も何度か魔物が襲い掛かってきたが、サクラの剣術で乗り切ってどうにか森を抜ける。
森を抜けてからしばらく歩き、空が茜色に染まり始めた頃に昶達三人はようやくの事で、イクトナの町に辿り着いたのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「それじゃ、私達は服屋に行ってるね～」

「あ、サクラさん。引っ張らないで――――」

着くや否や、サクラはイルナリアと共に町の中心部にあるモールへと消えてしまった。

途方に暮れかけた昶だが、ポケットをまさぐると金貨が三枚ほど入っていたではないか。つまり、この三枚でサクラ達が買い物を終えるまでは暇を潰せ、と言う事なのだろう。

「……とりあえず、適当に見て回るか」

呟き、昶もまたモールの方へ向かって歩き出した。イクトナの町はレシテートから一番近い事もあってか、普通の町に比べれば規模はかなり大きい。

故に町の中心部に位置するモールも、地方の町のソレとは比べ物にならないくらい大きかった。更に金貨三枚となると、ホテルに泊まって尚且つ一週間ぐらい遊んでも、十分にお釣りが来る量である。

昶はとりあえず目に付いた飲み物と菓子パンを買って、品物に目を通しながら歩き出す。

「エクス、サクラ達の魔力反応ってどの辺りから感じるか？」

『少々お待ち下さい。……ありました、モールを抜けた先にある服屋ですね』

「了解っと」

エクスからサクラ達の居場所を聞いた昶は、人混みをかき分けてモールの奥へと進む。食べ物から日常で使う品々。更には珍しそうな掘り出し物と、様々な物が店の店頭に並んでいる。

ゆっくり見てみたい衝動を抑えて、更に奥へと進んで行く昶。…

…やがて昶の視界に、モールの出口と一際目立つ一軒の大きな店が映った。
外観と店頭に並ぶ数々の服からして、恐らくここがエクスの言っていた店であろう。

「へー、男性用の服も置いてあるのか」

中へ入ってみると女性物の服が中心ではあるが、男性物もそこそこ置いてある。また、それだけではなく幅広い客層に対応した色々な服があり、見本市のような様相だ。
いつの時代にも、ユニ〇ロやし〇むらのような店は存在しているらしい。

「そういや、俺も服を買わなきゃならないな……。流石にいつまでもこの格好だと不気味に思われそうだ」

呟き、視線を自分が着ている六課の制服へと落とした昶。茶色をベースとした機動六課の制服は、タカトとの戦闘で血まみれとなっていた。
身体の傷は塞がっていても、着ている服がこれではあまりにもよろしくない。昶からしても、自分の血にまみれた生乾きの服をこれ以上着続けるのも無理だろう、と思っていた所だ。

この服屋が女性物だけを扱う店だったら、それはもう色々と残念な視線を向けられていた事だろう。……因みに、モールですれ違う人々からは奇異な視線を向けられていたとかそうでないとか。
男物の商品を眺め、気に入った何着かを持って試着室に入ろうとしたその時――――。

「きゃあああああああああっ！？」

隣の試着室から、甲高い――恐らく女性の物だろう――が聞こえた。それを聞いた昶は、すかさず隣の試着室へと駆け寄る。
……もし、普通の人ならばここで声をかけるだけに留めただろう。

だがしかし、若干は改善されたとは言っても昶は元々が天然で鈍感で唐変木なのだ。故に、一寸の迷いも無く昶は試着室の閉ざされたカーテンを開け放ってしまう。
開けた瞬間に目に入ったのは、こちらへ向かって飛んでくる茶色い生命体――――!?

「いっ!?」

何と、地球出身の昶には見慣れた“台所によく出現する一級危険生命体G”っぽい生物が飛んで来たではないか!
顔面直撃コースで飛んで来るGっぽい生物を身体を右に捻る事で、何とか回避……した所までは良かった。回避した後に試着室の中を見た瞬間。昶は、数瞬前の自分の行動を激しく後悔する事になる。

「え……?」

「あき……ら……?」

そこには、着替え途中のサクラとイルナリアの姿があった。イルナリアは下着姿だったからまだ良かった。……問題はサクラの方。
――――“上半身に何も身に着けていなかった”のである。いや、下はきちんと身に着けてますよ?
勿論、サクラとイルナリアは昶がこんな所に入ってくるなど、想定してすらいない。つまり、今回は悲鳴を聞いただけで突入した昶が全て悪いのでした。めでたしめでたし。

「いやいやいや、めでたくねーよ！？」

「あ、あ、あ、あ、あ……」

地の文にツッコミを入れてはいけません。と、サクラが口をあの字に開けて昶を震えながら指差したではないか。

首を傾げながら自分を指差した昶だが、次の瞬間――――。

「昶のばかあああああああああああああああっ！」

「ぐほっ！？」

――煌、閃！

サクラの回し蹴りが昶の脇腹を一閃！　当然、防御体勢など取っていなかった昶は直撃をくらう羽目になり。

見事に試着室から飛ばされて、撃沈しましたとさ。南無。因みにその後、サクラに色々と法外な口止め料を請求されて、昶が涙目になったのは余談である。

――――――――――――――――――――

槍皇、イースハルト・カーンヴァインの死去。クラウスが告げた事実に、カナン達一同は驚きを隠しきれないでいた。

……いや、正確に言えばそちらではない。“イースハルトを殺した”のが“魔王”だと言う方に驚いていたのだ。

「クラウスさん、冗談ですよね……？」

「僕も冗談だと信じたい。……だが、これは本当の事だ」

カナンの問いかけに、クラウスは苦い表情でそう答える。それっきり、カナンは口を閉ざした。祐希奈、ヴィヴィオ、咲夜、アイハンルトも黙ったままだ。

「……」

一方のシオンも、“魔王”と言う言葉を聞いた直後から黙り込んだまま。顎に手を当て、何かを考えているような表情をしている。

カナン達が声をかけようとしても、シオンが放つオーラは話しかけられるような物では無かった。

「おい、シオン――――」

……と、沈黙を破ってカナンが話しかけようとしたその時。失礼致します、と言う声と共に部屋の入口から一人の兵士が入って来た。

シオンを除く全員が兵士に目を向けると、兵士は頭を下げて告げる。

「クラウス殿下、オリヴィエ殿下、シオン殿。お客様がお見えになっています」

「僕とオリヴィエは分かるが……。シオンにも？」

兵士の言葉に首を傾げるクラウス。シオンも考える事をやめて、兵士の方を見て耳を傾けた。

「御三方に加えて、シオン殿のご友人達にも“魔王”についての話があると……」

“魔王”と言う単語が兵士の口から出た。恐らく来客が兵士に告げたであろう、その言葉。
つまり、来客は“魔王”について何かを知っているかもしれない……。クラウスとオリヴィエは目配せをしながら頷き合い、最終的にオリヴィエが答えを告げた。

「……分かりました。この部屋へお通しして下さい」

「はっ！」

オリヴィエの言葉に頭を下げ、兵士は部屋から出て行き。しばらくして、兵士と入れ違いに一人の人物が部屋へとやってきた。
――――クラウスとオリヴィエを除く面々がよく知る人物が。

「……ほぅ。シオンが居る事は分かってたが、まさかお前等も居るとはな」

一同を見渡したその人物は、意外そうな表情をしてそう呟いた。パッと見ると女性にも見えてしまう長い金髪に、紅色の瞳。
黒いラインの入った白色の外套に黒色のシャツとズボンが、容姿と相まってとある人物との繋がりを連想させる。……この特徴を持つ人物をカナン達は、知り合いの中では一人しか知らない。

『レンさん！？』

「おいおい、全員揃って同じ反応すんなって」

サクラとフェイトの兄にして、“剣帝”の二つ名を取る魔導騎士。
――――レン・T・ハラオウンの姿が、そこにはあった。

（第七話後編へと続く）

第七話　予想外のトランプ（前編）（後書き）

以上で前編終了です。現在の状況は……

古代ベルカ

レシテート→イクトナ：昶、サクラ、イルナリア。

シュトゥラ：カナン（メイデン、レナス）、祐希奈、ヴィヴィオ、シオン、咲夜、アインハルト、クラウス、オリヴィエ。

で、シュトゥラの面々にレンが合流と言う形になっています。

レンが何故ここに居るのかと、フィリアの正体は後編でお届けしたいと思います。

勘の良い方は、何となく察しがついているかもしれませんが……（汗）

後編の方は、なるべく早く投稿するように心がけます。

ではでは！

第七話　予想外のトランプ（後編）（前書き）

どうも、樟葉櫂です。
当初の予定より四日ほど遅れましたが、第七話の後編をお届けしたいと思います。
まず最初に謝罪を。自分の力量不足で全てのキャラを上手に動かせてません……。
本当にすみません……。
それでは、気を取り直して。どうぞ！

第七話　予想外のトランプ（後編）

オリヴィエ誘拐事件の終結と、魔王……伊織タカトの槍皇領襲撃事件から更に遡ること二ヶ月。古代ベルカ、槍皇統治領レシテート近郊の深い森の奥にて。

少しだけ開けた広場に、全身黒色をした無数の異形の集団が並び。その異形の集団の中心には、取り囲まれるように一人の青年が立っていた。

「ったく、俺を包囲した程度で勝った気になってんのかね、コイツ等は」

長く伸びた金髪を肩の辺りでリボンで纏めており、白い外套の下には黒一色の上下。威圧感を持つ紅色の瞳に中性的な顔立ち。と、ここまで来れば美女と評してもおかしくは無い。

しかし、胸の部分は見事に百八十度――――――この場合はまな板と表現した方が良いだろうか？――――――であった。これが青年を青年と呼ばせる唯一の特徴であり、無ければ女性と言われてもおかしくないほど青年は女性のような容姿をしている。

……レン・T・ハラオウン。それが女性のような容姿をした青年の名前だ。

レンの周囲を囲む異形の軍団は、じりじりと無言で迫っていく。対するレンは全く臆する事も無く、ただ異形の集団が動くのを見つめるのみ。

何のリアクションも起こさないレンに、異形の軍団は待ち切れないかのように一斉に襲い掛かる！

……だが、レンは自身へ襲い掛かる集団を見つめ、逆に笑みを浮

かべた。――――そう。囲まれた時からずっと、レンはこのタイミングを待ち望んでいたのだ。

「アクシムランサー」

――閃光！

眩い閃光。同時に、異形の集団を目掛けて空から黄金色の槍が降り注ぐ！

槍は脳と胸を的確に貫き、異形の集団のほぼ全てを一撃で絶命させた。周囲を見渡し、異形の集団が動かない事を確認してからレンは大きく息を吐く。

今日だけでもう六度目。この世界に来てからであると、五十は余裕で超えるだろうか。

それほどまで、先程のような異形の集団から青年は攻撃を受けていた。

「“この世界”から異分子としてマークされてんのかねぇ……」

ま、それは絶対に有り得ないけどな、と吐き捨て。両足に魔力を込めると、一気に星が輝く空へと跳躍。

そのまま飛行魔法で宙に浮き続けながら、街を探して視線を左右へ向ける。

幸いにも街――それもかなり大きいもの――は直ぐに見つかった。それを視認すると、レンは一気に勢いを付けて加速。

街の少し手前で地面に降り立った所で、レンはしまったと言う表情を浮かべる。

「流石にここまで来て、この姿を維持するのはまずい。まずは……」

そう呟いた直後。光の粒子がレンを包み込んで、容姿を変えていく。……身体的特徴だけではなく、纏う服装と声と喋り方まで変えて。

――――光が晴れた時、そこに居たのは“レンでは無かった”。

何も結んでいない長い銀髪に、青色の瞳。服装こそあまり変わらないものの、その容姿は先程までではと違って、完璧な女性である。

何度か咳払いをしてから、自らの声を確認するように女性……レンはゆっくりと顔を上げた。

「さてと。まずはこの国に潜入しないとね……。名前はフィリア・ランカスター。うん、これで行きましょうか」

声色も低いテノールボイスから、やや高めのアルトボイスに変わっている。先程の変化の瞬間を見ていなければ、レン＝女性だと言う事は誰も気付かないだろう。

何せ、容姿も声も口調も服装も。全てがレンとは異なっているのだから。

周囲に誰も人が居ないのを確認してから、ほっと一息ついて街に向かって歩き出そうとした所で……。

「きゃあああああああああああああああ！！」

――――突如、悲鳴が聞こえた。

フィリアは素早く辺りを見回すと、少し離れた所で芋虫のような魔物に囲まれている一人の少女を発見。しかも、少女は地面に座り込んだまま動こうとしない。このままだとどうなるのかは、安易に想像出来た。

舌打ちをしてからフィリアは直ぐに地面を蹴り、首からぶら下がるペンダントについた銀色の指輪をギュッと握りしめる。

「パラサイトワームか……。エルシウス、ブレードスタイル！」

『Ｙｅｓ　ｍｙ　ｌｏｒｄ．Ｂｌａｄｅ　ｓｔｙｌｅ，Ｉｇｎｉｔｉｏｎ！　Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ！』

瞬間。指輪――待機形態のエルシウス――は蒼色の魔力刃を持つ剣へと変形。更に機械音声と同時に、根本の装飾部分から空薬莢を二発放出した。

それを確認すると、パラサイトワームの集団に向けてフィリアは一気に加速していく。

……ある程度の距離まで近づいたその時。フィリアはエルシウスを下段に構え、魔物を目掛けて一心に振るう！

「剣風閃！」

――閃、風！

右下から左上へ。そして、左下から右上へ。二回振るわれたエルシウスから生まれた魔力刃と同じ色の無数の衝撃波が、凄まじい速度で地を這う！

衝撃波がワーム達の間を駆け抜けると同時に、ワーム達は一斉にフィリアの方向を見つめた――――が、既に遅かった。

ワームの身体に一筋の切れ目が走った直後に、動作を停止。数秒の後、切れ目を境に上半身が重力に従って、地面にどさりと落ちた。

だが、落ちたのは集団の内の約半分。残りは細かい傷は負っているが、まだ致命傷は与えていない。

「ソードスタイル！　ツインエディション！」

『ＯＫ！　Ｓｗｏｒｄ　ｓｔｙｌｅ，ｔｗｉｎ　ｓｗｏｒｄｓ　ｄｒｉｖｅ！』

一度、後方へ下がってフィリアはエルシウスを変形。一本の片手剣から、対となる小ぶりな双剣へと姿を変えた。

双剣と言うより、今まで使っていた片手剣のサイズを小さくし、二振りにしたような物である。形が全く同一の二振りの剣を構えて、フィリアは残ったワーム達に向かって突っ込む！

――閃、断！

右手の剣が美しく流れるようにワームの皮膚を斬り刻み。左手の剣は単純に荒々しくワームの胴体を叩き斬っていく！

少女までの道を塞ぐ敵を撃破し、そのまま少女を抱えてフィリアは跳躍。魔物達から少し離れた所に着地すると、優しく少女に問いかけた。

「大丈夫？　怪我は無い？」

「あ、はい。大丈夫です」

「なら良かった……。片付けちゃうから、もうちょっと待っててね」

言葉と表情から大丈夫そうだと悟ったフィリアは、少女を守るように少女の前に立ち。同時に、いつの間にか数を増やしていたワームを一瞥して、溜息をついた。

「親玉が出張って来た、って訳ね……」

ワームの集団の中に一匹だけ、他の個体よりも明らかに大きい個体が居る。恐らくはこのワームの集団を統率している、親玉であろう。

周囲の小さい個体を気に掛けつつ、フィリアは狙いを親玉一匹に絞った。

「ブレードスタイル、ツインエッジ。……一気に決めるわよ」

『Ｙｅｓ　ｍｙ　ｌｏｒｄ！』

空薬莢の放出と同時に双剣は再び片手剣へと戻り、更に両刃剣へと変化する。同時に、左右からワーム達が飛びかかるように襲い掛かって来た……！

フィリアは左右へと視線を向け、ギリギリまで引き付けてから後方へ飛ぶ事で回避。

――振、斬！

そしてそのまま、再度加速してワーム二匹の中心へ突貫。すれ違いざまに二匹を一撃で斬り倒し、延長線上に居た親玉を範囲内に捉えた。

行く手を邪魔する物は何も無い。首元へ目掛けて、ただ一撃を撃ち込むのみ！

――閃！

「……っ！？」

親玉に向けて一撃を撃ち込んだ所で、顔をしかめる。先程までの感触とは、明らかに違う感触。攻撃が通った時の鋭い感触では無く、鈍い感触。

――――攻撃が通ってない……？

感触からそう判断したフィリアは、一旦飛び退いてエルシウスを待機形態へと戻した。

魔力刃のエルシウスでは攻撃が通らなかった。ならば、実剣のラグナロクならどうか……？

そう思い立ち、首から下げていた剣型のペンダントを手に取ったフィリア。

「エルシウスじゃ無理そうね……。ラグナロク、行ける？」

『お任せ下さい！　……ぷぷっ』

「笑うのやめなさいよ！　……後で分解して、パーツを川に投げ捨てようか？」

『すみませんでした！　ロードカートリッジ！』

フィリアは剣型のペンダント――待機形態のラグナロク――と少しだけ漫才を交わし。待機形態から片手剣へと変化させると、そのまま正眼に構える。

じりじりと詰め寄るワーム達。それを見つめながら、微動だにしないフィリア。だが、フィリアはその間に少しずつ、攻撃の準備を整えていた。

そして、ワームがこちらへ向かってくると同時に、地面を蹴る！

フィリアの右手に握られているラグナロクが纏うのは――――雷！

『雷雲剣！』

――斬、断！

向かって来たワームに振り下ろされたラグナロクは、ワームを一刀両断。続けて右から来たもう一匹は、後方へ一度下がってから同じように一撃で仕留めた。

フィリアの行動に恐怖心を覚えたのか、ワーム達は動きを一旦止める。

それをチャンスと捉えたフィリアは地面を蹴り、ワーム達の視界から姿を消す。視界から消えたフィリアに驚き、辺りを見回すワーム達。……だが、次の瞬間。

――閃！

一体のワームが、空気を斬るような鋭い音と共に真っ二つに。そして近くに居たもう一体のワームは、ミンチが如くバラバラに斬り刻まれる。

たじろぐワーム達だったが、数秒毎に同じように二匹ずつ倒されて行き。遂には親玉のみを残す状況となったのだが、フィリアは未だに姿を消したままだ。

「……残念。既にチェックメイトよ？」

瞬間、フィリアの声が響く。しかし、当の本人は姿を現す気配はない。

響いた声にワームの親玉は辺りを見回すが、フィリアの姿が見える事はなかった。

――閃。

ワームの親玉の身体に、何処からともなく剣閃が叩き込まれた。直ぐに剣閃が来た方向を振り向いたワームの親玉だが、そこには誰も居ない。

……見せてしまった一瞬の隙。これを見逃してくれるほど、フィリアは甘くは無かった。

――閃、閃、閃、閃、閃！

無防備の背後から、今度は短時間の間に連続して無数の剣閃がワームの親玉を襲う！

……マルチウェイ。常人にはまず捉えきれない程の速さで、相手を斬る剣技。単独の敵から複数の敵まで、どんな状況にも対応する事が出来る技だ。

フィリアが動きを止めてワーム達を見据えた時には、既にワームの親玉の息の根が止まった後だった。

それを見た少女は、周囲をちらりと見渡しながら小走りにフィリアの元へ駆け寄って来る。

「助けて頂いてありがとうございました。私はイルナリア・ガーンヴァインと申します。貴方は……？」

少女、イルナリアに名前を問われ。フィリアはしばらく考え込んでから、返事を返した。

「私は……フィリア。フィリア・ランカスターよ」

これがイルナリア・ガーンヴァインとフィリア・ランカスター……。もとい、レン・T・ハラオウンの最初の出会いだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆

【……って事があってだな。しばらく、槍皇さんの所に世話になってたんだ】

クラウスとオリヴィエへの自己紹介をまず最初に終え。その後に、レンは念話でシオン達に今に至るまでの経歴をざっくりと説明した。

【でも、レンさん。それだとまさか――――】

【……言ってくれるな。あれはあくまで潜入の為だ】

カナンの問いかけをレンは途中で遮り、これ以上は聞くなと言った口調で念を押した。

……よっぽど聞かれたくなかったのだろう。と言うより、色々な意味でからかわれるのを恐れたか。

ごほん、と咳払いをしてから。本題に入るぞー、と一言呟いてからレンはゆっくりと口を開く。

「クラウス殿下とオリヴィエ殿下は知らないかもしれないが……。恐らくお前達は全員、魔王を知ってるはずだ」

「え？　それはどういう……？」

“お前達は全員、魔王を知っている”。その言葉に、咲夜は首を傾げた。――――ここは古代ベルカ。新暦に生きる自分達は当然で

あるが、生まれていない時代。
つまり、この時代に自分達の知り合いなど居る訳が無いのだ。……クラウスやオリヴィエ等は除くが。

「レンさん。魔王の正体はやっぱり……あの人なんですか？」

「……シオンは気付いていたか。――――“伊織タカト”。奴が魔王の正体だ」

“伊織タカト”。……最強の拳士であり、ここに居る神庭シオンの異母兄。嘗ては敵として幾度となく対峙したが、今はもう既に味方であるはずのタカト。
まさか、レンの口からその名前が出る事は、シオン以外の誰もが想像出来ていなかったらしく。

「え……！？」

「嘘でしょ……！？」

「まさか……！」

「そんな……！」

ヴィヴィオが。祐希奈が。カナンが。咲夜が。目を丸くし、言葉を失くした。
その中でシオンはやはりか……と言う表情をしており、アインハルトは理解出来ずに首を傾げたまま。
驚き、本当だと信じていない一同を一瞥すると、首からぶら下がるエルシウスを外して一同へ声をかける。

「本当だ。……エルシウス、映像を出してくれ」

『ＯＫ』

待機形態となっていたエルシウスが、大きなモニターを一同の前に出現させた。一同がじっと見つめる中、始めは砂嵐ばかり映し出されていた画面が徐々に鮮明になってくる。

――――煙が立ち込め、城壁は至る所に亀裂が走っており。地面には、幾人もの死体が血を流しながら倒れている。

これには流石のクラウスとオリヴィエも言葉を失う。……それだけ、自分達の知るレシテートと映像があまりにもかけ離れていたのだ。

そして、その中心に立っていたのは……。全身黒の青年――――伊織タカトその人であった。映像を見たカナン達は、嫌でもレンが言っていた事――タカトが魔王である事――を認めざるを得なかった。

「俺は城の重臣達を逃がすので手一杯だった。イルナリア姫はそこに偶然居た奴等に任せたんだが、俺が行った時にはイースハルト陛下は……」

「……既に魔王にやられた後だった、と？」

オリヴィエの問いにしばし間を置き、それからゆっくりと苦々しい表情でレンは頷く。誰もが押し黙り、しばらくの間ではあるがその場に沈黙が訪れる。

……しばらくして、周囲にちらりと視線を向けていたレンが沈黙を打ち破り、クラウス達に問いかける。

「殿下達。すまないが、少しだけ席を外して貰えないだろうか？少し、重要な話をしたいものでね」

「分かった。玉座の間で待っているから、終わったら来てくれ」

頷き、クラウスはオリヴィエを伴って部屋を退室して行った。それを見届けたレンは、ふぅと一息ついてからカナン達の方を向いて口を開く。

「さてと、これからの事について話し合うぞ」

「……これからと言っても、どうするのでしょうか？」

問いかけたアインハルトの言葉にカナン達も頷いた。これから……とは言ったものの、そもそもまずどうやって元の時代へ帰るのか？そこからであるはずなのに、レンは何もかもを飛ばしてこれからの事について話そうとしている。

「恐らく、そろそろ元の時代――――新暦に戻れるはずだ。ミッドチルダへ戻った方が良いと思う」

「え……！？」

またしても、レンの口から飛び出た意外な言葉。

“元の時代へ戻れる”。何を根拠にそんな事を言い出すのか、とレンを除く全員が思った事だろう。だが、その疑問は次にレンが言い放った一言で解決する。

「俺は自分の意志で色々な時代を飛び回ってるからな。時空の歪みとかは、ある程度なら分かる」

「と言う事はここに来たのはレンさん自身の……？」
「まぁ、そういう事だ。最も、自分の意志で飛ぶ事は出来ても場合によっては、行きたい時代に行けない時もあるが」
咲夜の問いにそう答えたレン。実際、彼はベルカの時代に来るまでに様々な時代を渡り歩いていた。
行く先々で色々と苦労もしていたのだが、これはまた機会があれば話そう。
「でもどうして、俺達にミッドへ戻れって言うんですか？」
「ミッドチルダの政府がどうも怪しい動きをしてたからな……。嫌な予感がするんだ」
「政府？　ミッドチルダって管理局が管轄してる都市じゃないの？」
「あ、それは俺も思いました。俺、向こう生まれですけど湾岸地区以外はあまり知らないんで」
レンの言葉に祐希奈が問いかけ、それにカナンも続いた。
確かにミッドチルダは管理局のお膝元、と言う印象が強い。地上本部があるのもそのせいだろう。地球出身の祐希奈と、ミッド出身であるものの湾岸地区以外を知らないカナン。
これまで、あまりミッドチルダの事を知る機会が無かった二人にとって、“政府”と言うのは聞き慣れない単語だった。
「違うよ祐希ちゃん、カナン君。ミッドチルダは管理局の管轄じゃなくて、ちゃんと独立した一つの国だよ」

「まぁ、地上本部が有名だったからなー。管理局があそこを統治してると思われても仕方ないさ」

「ですが、政府が保有する固有戦力もあります。他の国に比べれば、恐らくかなり強い方かと」

「日本で言う自衛隊みたいなもんだ。最も、ミッドチルダのソレは自衛隊とは比べ物にならないがな」

まず最初に答えたのはヴィヴィオと咲夜。それに続いて、アインハルトとシオンが答えた。元々、ミッドチルダとは管理局の地上本部があった為に管理局が管轄してると思われがちだが、実際には一つの国だ。

きちんと政府も存在し、他の国が侵攻してきた場合の防衛戦力も所持している。……単純な戦力では、管理局には遥かに及ばないが。

「そういう事だ。お前達にはなるべく戻って貰いたいんだが……。シオン、お前はどうするんだ？」

レンの問いかけに、シオンは黙ったまま。……やがて、意を決したように一同を見渡して。シオンはゆっくりと口を開いた。

「俺は……この時代に残ります」

『え……？』

「シオン……。アンタ、本当に残るの？」

シオンが言い放った言葉に、一同は耳を疑った。“この時代に残

る”。今、確かにシオンはそう言い放ったのだ。

「あぁ。……タカ兄ぃに幾つか、聞きたい事があるんだ」

祐希奈の問いに、力強く答えたシオン。その瞳には、迷いの色は一寸たりとも存在しない。

「聞きたい事って……いつ聞くんだよ？」

「……タカ兄ぃは絶対にまた、この時代で何かをやらかす。その時に直接聞き出してやるさ」

シオンの言葉。つまり、それはタカトと戦う事をも意味していた。自分達が知り得る中では、まず間違いなく“最強”と言ってもおかしくない実力を持つタカト。

そのタカトに挑む事は自殺行為に等しい。しかも、シオンはタカトの実力を一番よく分かっているはず……。

「それよりも、ティアナ達が心配してるだろ？　まずはミッドへ戻って無事を報告した方が良いと思う」

「シオンの言う通りだ。それに、こっちには俺も残るから心配すんなって」

シオンとレンにこう言われてしまっては、流石に反論出来ず。結局シオンとレンを残して、カナン達はミッドチルダへと戻る事になった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

クラウスとオリヴィエに挨拶をして、シュトゥラを後にした一行。カナンが最初に飛ばされてた、森の一角に一同が戻ってみると。
そこにはカナン達をここまで運んで来た穴が、ぽっかりと口を開けて待ち構えていた。まるで、一同がこれからミッドチルダへ戻る事を悟っていたかのように。

「予想通りだな。しかし、タイミングが良いと言うか何と言うか……」

ぽっかりと開く穴を見て、呟くシオン。確かにタイミングが良すぎる。しかし、今はどうこう言っている場合では無い。

「レンさん、首尾はどうです？」

「ちょい待ち。……よし、大丈夫だ」

カナンの問いかけに、レンは目を閉じてしばらくしてから返事を返す。
……瞬間。穴は徐々に大きくなって行き、最終的には五人ほどが入れる大きさまでになった。

「さてと、準備完了だ」

「……本当に大丈夫ですか？」

「恐らくこれは同じ場所に戻れるはずだから、大丈夫だろうさ」

ヴィヴィオの不安そうな問いに、レンは確証は得られてないがと付け加えてそう答える。それにしばらくヴィヴィオは難しい表情を

していたが、やがて迷いを振り払い。
真っ先に飛び込んで行き、それに続くかのように一人、また一人と穴の中へと消えて行く。
最後にカナンが入るのを見届けたシオンは、傍らで制御をしていたレンに問いかけた。

「さてと。レンさん、これからはどうします？」

「……まずは地帝領に行ってみるか。あそこが槍皇領から一番近い所だからな」

言葉を交わしながら、二人はシュトゥラへ向かって来た道を引き返して行く。
次に目指す地帝領で“魔王”……伊織タカトと、会い見える事が出来ると信じて。

（第八話へ続く）

第七話　予想外のトランプ（後編）（後書き）

色々な意味で長かった……。
と言う事で、遅くなりましたが第七話後編をお届けしました。
フィリア＝レンは、勘の良い方であれば何となく想像は付いていたかと思いますw

そして、第七話終了現在の各キャラクターの状況ですが……。

ベルカ→ミッドチルダ：カナン（メイデン、レナス）、祐希奈、ヴィヴィオ、咲夜、アインハルト

ベルカ居残り組：シオン、レン

と言う感じになっています。古代ベルカに来た面々は、シオンとレンを残して現代へ。
原作をプレイしている方であれば、カナンがこの先でどういう目に遭うか……ご想像出来るかと思います。
……とまぁ、ネタバレはこの位にしておきましょう。

てな訳で。次はボン太郎さんにバトンパスをしたいと思います。
それではボン太郎さん、大変だとは思いますがよろしくお願いします！

ではではっ！

第八話　帰還、そして（前書き）

八番手、初クロスリレーでガクガクブルブル不安でいっぱいなボン太郎です。

……とか言いつつ文字数がとんでもないことに……いや、前後編にする必要はないだろ。と思い無理矢理詰め込んだせいなのですが……それよりもキャラが上手く動かせているか不安が氾濫をw

では、妙に長い第八話、どうぞ～。

第八話　帰還、そして

時は進み、現代。
時刻は既に正午を回り、ミッドチルダ建国記念祭の盛り上がりも最高潮を迎えつつある。
……が。その祭りを盛り上げる役割の一端を担っているはずの新型次元転移装置が設置されているスペースには、楽しませるはずの市民の姿もなく、鬱屈とした空気に包まれていた。

「……はぁ」
「ヴィヴィオ……」

その鬱屈とした空気を生み出している主な原因はこの二人。かのエース・オブ・エース、高町なのはと、金色の閃光、フェイト・T・ハラオウン。
管理局に所属する殆どの局員の憧れの存在であろう二人の魔導師が二人仲良く体育座りをし、どんよりとしたオーラを醸し出しながらブツブツと何事かを呟いたりため息を吐いていたりしている。正直言って怪しいどころの話ではない。
こんな姿、私ら以外には見せられへんな……――などと思いつつも、はやてはまったく同じ理由で落ち込んでいる二人に声をかける。

「なぁ、二人とも。ヴィヴィオが心配なんは分かるけど、せめてもう少しシャキッと――」
「ヴィヴィオ～。無事に帰って来てぇ～……」
「私が、私が傍に付いていれば……」
「……出来へんみたいやな」

呼びかけに一切答えない二人に、はやてはふぅとため息。だがま

ぁ、二人が落ち込むのも仕方がないことだと言えるだろう。
なのはの娘であり、フェイトも娘同然に可愛がっていたヴィヴィオが突然消失し、彼女を単身追いかけて行ったカナンが消えて、祐希奈にアインハルト、咲夜が彼らを追いかけて次元の穴に飛び込んでから既に四時間近く経っていた。
はやてたちがこの場に来てからはまだ一時間しか経っていないのだが、ものの三十分足らずでなのはとフェイトはこの状態。ヴィヴィオが心配なのは分かるが、もう少し耐えることは出来なかったのだろうか。

「というかやな、そろそろ戦技披露会が始まる時間やで？　ここは私たちに任せて、二人は一先ず会場に行った方がええんとちゃう？　連絡は定期的にするし」

あと三十分もすれば戦技披露会の時間だ。大勢の人々が見に来る大切なイベントであるし、憂鬱としている二人の良い気分転換になるだろう。そう思ったので言ってみたのだが。

「嫌だよ！　ヴィヴィオが帰ってくるまで私はここにいる！」
「なのはの言う通りだよ！　戦技披露会なんてどうでもいい！　ヴィヴィオの方が優先だもん！」

はやての善意は二人の反論によって因果地平の彼方に吹き飛ばされた。ここまで綺麗にバッサリと切り捨てられると、いっそ清々しいものがある。
半ば予想していた結果に苦笑するはやてに、なのはが追撃。
「はやてちゃんだって心配じゃないの！？　咲夜くんも行ってるんだよ！」
「あー、まぁそりゃ……ん、でも心配いらへんやろ」

『どうして！？』

意気消沈していたはずの二人が一気に気力を取り戻して、はやてに迫る。

しかしはやては、そんな二人に気圧されることなく。

「どうしてって……咲夜くんやで？」

『……あー』

しれっとそう返すと、なのはとフェイトは納得したのか間延びした声を漏らす。

あのはやコンは実際に十年の時間を逆行し、ちゃんと元の時間軸に戻ってきたことがある。そんな馬鹿な、と思うかもしれないが……はやてのためなら時空をも超える、そんな人外の領域に片足どころか全身突っ込んだ馬鹿がはやコンなのだ。馬鹿だけど。

と。

「う、うわわわわっ！？」

「シャーリー！？」

不意に、次元転移装置の改良を行っていたはずのシャーリーの慌てたような声が響いた。彼女の声に弾かれたかのようにはやてたちは次元転移装置へと身体を向け――驚愕で固まった。

「どうしたんですか！　一体何、が……」

次元転移装置を見に来た市民の応対をしていたティアナもすぐさま駆けつけ、はやてたちと同様に硬直。何があってもいいようにすぐ近くで待機していたリオとコロナも、目の前で起きている現象に驚きを隠し切れていないようだった。

だが、それも当然だろう。次元転移装置の転送ポートと転送ポートの間に、穴が現れていたからだ。
ヴィヴィオが飲み込まれ、彼女を追ってカナンたちが通って行ったものと同じ穴が。

「これって……！」
「はい！　これはもう……決まりです！」

なのはの半ば確信に満ちた呟きに、興奮で眼鏡がずり落ちていることにも気が付いていないシャーリーが嬉々として返す。そしてその直後、穴が一際大きく揺れ――

『――うわぁ！？』

穴から、消えたヴィヴィオとともに、カナンたちが一緒に飛び出してきた。

「……ッ、ぅん？」

――ど、どうなった？
ヴィヴィオを追いかける際に通った暗黒の波に流されることしばらく。出口と思われる穴から外へ弾き出された衝撃によって痛む頭を手で摩りながら、カナンは薄らとだが目を開く。レンの言葉通りならば、古代ベルカから自分たちが元々いた現代に戻ってこれたはずなのだが。
とりあえず立ち上がろう。そう思ったカナンはゆっくりと手を動かして――もにゅっ、という感触が手に伝わってきた。

「……あれ？」

なんだろう、この感触。それに、少し前にも同じようなことがあったような。

状況が理解出来ず呆けるカナンの視界の端に映り込む銀髪。見覚えのある髪だな、そう思いつつ視線を下に向けていく。そうして次に映り込んだのは、

「ふふーん♪」

「……」

見た者の誰もが惚れ込むような、極上の笑顔を浮かべている祐希奈だった。そして自分の手は、いつぞやのアインハルトとコロナの時のように、見事なまでに祐希奈の胸を鷲掴みにしていた。それはもうばっちしと。これでもかと。羨ましいぞこの野郎。

が、その笑顔を見たカナンの顔は一瞬で青ざめ、滝のように汗が噴き出てくる。冗談みたいに身体が震え、まったく言うことを聞いてくれない。まるで金縛りにあったかのようだ。……いや、実際に目の前の少女が浮かべる笑顔から発せられている無言の圧力によって、カナンは指一本動かすことが出来ないのだが。

壊れた人形みたいに震え続けるカナンに向けて、祐希奈は笑顔を浮かべたまま拳を握り締め。

「何してんのよ、このバカナン――――――！」

「ぐほぉっ！？」

乙女の怒りを乗せた鉄拳がものの見事にカナンの顔面に直撃し、カナンは空高く吹っ飛んだ。

まぁ、可憐な少女たちの胸をこれでもかと堪能したのだから、こ

の世に未練はないだろう。安らかに眠れ、カナン。

「眠れるかぁ！　なんだ堪能って！　わざとじゃなくて事故なのはどう見ても明ら――」

「逃がすかぁぁぁぁぁぁぁ！」

「がばぁ！？」

吹っ飛びながらも虚空にツッコミを入れるという高等テクを披露していたカナンに、顔を真っ赤に染めた祐希奈が追撃。華麗な飛び蹴りをまたしてもカナンの顔面に決め、地面に叩き落とす。

地面に突き落とされて息絶えたようにパタンと倒れるカナン。しかし祐希奈はそんな彼の身体の上に馬乗りになり。

「ふざけんなふざけんなふざけんな！　あんたって奴はもうなんていうかその……とにかくふざけんなぁーっ！」

「がっ、ちょっ、待っ……ぎゃあああああ！？」

「……あの、止めなくていいんでしょうか？」

「カナンくんなんて知らないもん」

マウントポジションからの情け容赦ない殴打によって、潰されたカエルのようになっていく哀れな少年にアインハルトは思わず助け舟を出そうとするが、ヴィヴィオは頬を膨らませながらそっぽを向いて少年を見捨てた。なんというか、やはり当然の結果である。

未だに殴られ続けている少年を完璧に視界から外し、ヴィヴィオは周囲を見回す。自身から最も近い場所には見覚えのある機械。――次元転移装置だ。無事に元の時代に戻れたことに、ヴィヴィオは安堵の息を吐き。

「――ヴィヴィオ！」

「……あ」

背後からかけられた声に、ヴィヴィオは思わず呆けた声を漏らし、固まった。
ゆっくりと、ゆっくりと背後に身体を向ける。その先にいたのは、目尻に涙を溜めて感極まった表情を浮かべているなのはとフェイト。その二人の後ろには花のような笑顔でヴィヴィオのことを見ているリオとコロナ。
――帰ってこれた。一気に湧き上がってきたその実感に、ヴィヴィオは微かに身体を震わせて。

「ママッ！」

跳ねるようにその場を駆け出し、なのはに抱きついた。
直後、わんわんと響くヴィヴィオの泣き声。突然古代ベルカに跳ばされた挙句、一度世界から存在を消されたのだ。それはつまり、”死”と同義だ。そんな状況に十三歳の少女が一時的にとはいえ陥っていた。そこから齎される不安は生半可なものではないだろう。
その不安が、元の時代へと戻れたこと、なのはたちと再会出来たことによって爆発した。声を出して泣き続けるヴィヴィオと、そんな彼女を慰めるなのはたちを見て、カナンは知らぬうちに微笑んでいた。祐希奈も拳を振り下ろすのを止め、どこか満足げに微笑んでいる。アインハルトも同様だ。
とりあえずは一安心。ヴィヴィオを救出に行ったメンバーは、皆一様に安堵の息を――

「はやてさんはやてさん！　東条咲夜、ただ今あなたの元へ戻ってまいりましたぁ！」
「おー、無事で何よりや咲夜くん！」
『……』

……吐こうとして、思いっきり雰囲気を無視した輩が一人いた。言わずもがな、咲夜（はやコン）だった。

ヴィヴィオとなのはたちが感動の再会をしている横で、ただ一人はやての元へと一目散に駆けていく。まるで飼い主のもとに戻っていく忠犬だ。何故だかカナンの目にはフリフリと動く尻尾と犬耳が見えた気がした。だからと言って、彼に向ける視線は絶対零度のもの以外有り得ないが。

「……と。まぁ感動の再会は後にして、や」

咲夜の頭を撫でながら、はやてはカナンたちに顔を向ける。その顔は、気構えは、かつてエースたちを率いた部隊長のものへと変わっていた。

はやてはカナンたちの前へと歩いていき――その後ろには彼女の傍を一寸離れずに着いてくる咲夜――、胸の前で両腕を組んで。

「さて、あの穴を通った先で何があったのか……教えてくれるか？」

「……はい」

その言葉にカナンは頷き、穴を抜けた先で何があったのかを話し始めた。

――穴を抜けた先は、古代ベルカだったこと。

――オリヴィエが殺されかけたことによって、ヴィヴィオが世界から消されかけたこと。

――が、どういうわけか先にベルカにいたシオンと、後の覇王であるクラウスの力を借りてオリヴィエを助け出し、ヴィヴィオを救い出したこと。

――そしてシオンは、自分の意志で様々な時代を飛び回っているというレンとともに、古代ベルカに残っていること。

そして――タカトが魔王を名乗って、絶対なる四皇家の一人であ

る槍皇を殺害したこと。

「――これが、俺たちが穴を通った先で体験したことのすべてです」

複雑そうな表情のカナンがそう言って話を打ち切る。そのまま周りを見渡すと、やはりと言うべきか、場はなんとも気まずい静寂に支配されていた。

だが、それも仕方のないことだろう。なにせ、話題が話題だ。こんな話を聞いて陽気でいられる方がおかしい。

しばらくして。静寂を破ったのは、はやて。

「……そうか、そないなことが……。ヴィヴィオが助かってめでたしめでたし、ってわけにはいかんみたいやな」

「タカトくん、どうしてまたそんなことを……」

「……シオンの馬鹿。あたしに何も言わずに……！」

はやてに続いて、なのはが憂鬱そうな表情を浮かべながら呟く。他の皆も同じような表情だ。……ティアナだけは憤怒で魔力を滾らせていたが。

対し、祐希奈はふん、と不服そうに鼻を鳴らし。

「面倒くさいわねぇ。ここでウジウジしてるくらいならもう一度古代ベルカに行って、タカト殴って目的聞き出しちゃえばいいんじゃないの？」

「いやいや、祐希奈。それが出来れば苦労は――」

「うーん、はやてさんが”やれ”と言うんならちょっくら行ってくるが」

「あんたが喋ると話がややこしくなるんで黙っててください」

「……おう」

自分寄りだと思っていたカナンからの冷たい視線に、咲夜はおずおずとはやての後ろに下がる。なんというか、馬鹿である。
途端に元気のなくなった咲夜にはやては苦笑した後、こほん、と仕切り直しとばかりに咳払いをし。

「とにかく、このままタカトくんを放っておくわけにはいかんな」
「そうだね。ヴィヴィオの件でタイムパラドックスが起きるってことが証明されちゃったし……タカトが何かしたせいで、私たちが今いる現代にも何か影響が及ぶかもしれない」

フェイトが何気なく漏らした言葉に、ヴィヴィオが微かに身体を震わせる。もし再びオリヴィエが命の危機に晒されれば――そう考えているのだろう。

「……」
「ふぁ……か、カナンくん？」

そんな彼女を見かねたカナンは、無言でヴィヴィオの頭を撫でる。不意に頭を撫でられ怪訝そうな表情をするヴィヴィオに対し、カナンは。

「大丈夫だ。――お前は絶対、俺が護る」

少し赤くなった顔を隠すようにそっぽを向きながら、そう言った。
その言葉に、ヴィヴィオは一瞬呆けて――すぐに、顔を綻ばせてこくんと頷いた。それだけで通じ合えた。そんな気がした。

「んー、そんじゃまぁ……咲夜くん」
「はい！　なんですかはやてさん！」
「咲夜くんはレフィにミオさんと合流して、協力してくれそうな人

たちに事情を説明しに行って。念話じゃ説明しにくい話やし。とりあえずは……お兄ちゃんと剱くん辺りかな。よし、咲夜くんＧＯ」
「了解です！」

瞬間、一瞬でその場からかき消える咲夜。
あれって、ただの体の良いパシリなんじゃ――とカナンは思ったりもしたが、はやては満足そうに笑ってるし、咲夜自身も嬉しそうだったので問題はないのだろう。多分。

「で、や。カナンくんたちはお祭り楽しんできぃ？」
『……は？』

続いてはやてが発した言葉に、カナンたちは揃ってわけがわからないと言いたげな表情を浮かべる。
再び場を支配する静寂。いち早く復活したのは、やはり祐希奈だった。

「それってどういうことよ！？　まさか、ここまできて私たちを除け者にするつもりじゃ――！」
「ああっ、ちょお落ち着いてぇな祐希奈。私がいつ、キミたちを除け者にするなんて言ったん？」
「……え？」

はやての言葉の意図が掴めず、呆けた声を漏らす祐希奈。それを見かねたなのはが、はやてのフォローに入る。

「私としてはもうみんなを危険な目に遭わせたくはないけど、どうせ止めても無駄でしょう？　それに、何か行動を起こすにしても色々と準備が必要だから……それまではみんな、お祭りを楽しんできてってこと」

「そういうわけや。皆、理解したか？」

確認するような口調のはやてに、カナンたちはおずおずと頷く。そこまで心配してくれているのに、どうして断れようか。

カナンたちの反応に満足したのか、はやては嬉しそうにうんうんと頷き。

「そんじゃ、とりあえずキミらは解散や！　面倒事は私らに任せときや！」

二カッと笑って、そう言った。

▽△▽△▽△▽△▽

「――さて」

燃えるような紅髪を風に靡かせながら。

少女、ミオ・レッドフィールドは自身の周囲をグルッと見渡し。

「……ここ、どこなのかしら」

困った風に両腕を組んで、ハァ、とため息。

祭りを楽しんでいる最中に変なオーロラに飲み込まれたと思ったら、次の瞬間にはミッドとはまったく違った別世界。そりゃあため息も吐きたくなる。

「まっ、来ちゃったものは仕方ないわよね。……納得は出来ないけど、するしかないわけだし」

改めて、ミオは自身の周囲を見回す。まず最初に目につくのは森だ。彼女の周囲を覆うようにこれでもかと生い茂っている木々の壁。枝の上に鳥が巣を作っていたり、リスが歩いていたりしている。平常時ならば彼らを眺めて楽しむのも良かったかもしれないが、生憎と今はそんな余裕はない。

視線を斜め上へ。木々が生い茂っているずっと先――巨大な山々が見える。山々と言っても、ゴツゴツとした岩肌が目立つ巨大な岩と言った方が正しいか。

「人の手が加えられた様子はない……となると無人世界かしら？でも、こんな世界があるなんて聞いたことないし……なんだか、面倒になってきたわね」

先程納得するしかないと心に決めたはずなのに、ものの数秒後にはブレ始めているミオ。本当に執務官か、お前。

「……ん？」

と、不意にミオはさっきまでまったく気にも留めていなかった方向へ顔を向ける。森を抜けた先……そこから、何かが聞こえたような気が。

……気のせいか。突然ミッドからこの世界に飛ばされたことで、少し疲れが溜まっているのだろう。そう考えたミオは、近くの木に背を預けて休もうとして――今度こそ、誰かの叫び声が聞こえた。

「――ッ！」

瞬時に己のデバイスである焔を象った刃を持つ斧杖、レギオンをセットアップし、騎士甲冑を装着。飛行魔法を発動し、声が聞こえ

た場所へと向かう。
全速力で空を翔け、森を抜ける。その先には、色褪せた大地が広がっていて――一人の青年が、三体の謎の生物によって追い立てられていた。

「な、何よあれ？」

青年を追い立てる三体の生物の姿を見て、ミオは思わず絶句する。
なにせ、頭がどこからどう見てもトカゲなのだ。身体もそう。トカゲをそのまま二足歩行にしたような、そんな姿。そうとしか言い表しようがないのだから、どうにも言葉にしにくい。
――っと、今はとにかく。
大地に向けて加速。その勢いのまま、青年とトカゲ人間たちの間にレギオンを叩きつけ、トカゲ人間たちの動きを遮る。

「ぁあっ！？　なんだぁ！？」

突然割り込んできたミオに、他の二体……いや、二匹よりも少し大きなトカゲ人間がそんな言葉を発した。トカゲ人間が言葉を発したことにミオは驚き、改めて三匹の身体を見て思わず眉をひそめた。
三匹は、まるで騎士のように武装していた。率先して青年を追いかけ回していた二匹は肉厚の大剣に鎧、先程声を発したリーダー格と思しき一匹はそれらに加えて盾も装備している。なんかもう、どこかのＲＰＧに出てくるモンスターそのものである。トカゲ人間改めトカゲ男とでも呼称しておいた方がいいのか。
とかく、謎が更に上乗せされた状況に、ミオはふむ、と顎に手を当て。

「……おかしいわね。まさか私はゲームの世界の中に紛れ込んだー、とか魔法もビックリなファンタジーを体験してしまってるんじゃ…

…」
「おうおうおうおう！　いきなり喧嘩吹っかけてきたと思ったらぁ！　なぁに一人でブツブツ喋ってやがんでい！　この荒ぶる竜巻ことナカミ様を無視してんじゃ――」
「あ、ちょっと黙ってて」
「うおおおおおおおっ！？」
『兄貴ぃぃぃぃっ！？』

なんだか非常にうるさかったので、パチンと指を鳴らして生み出した焔で荒ぶるなんちゃらを飲み込んだ。直後、荒ぶるなんちゃらの絶叫と子分らしき二匹の悲鳴が響き渡る。
――って、やっぱ。
目の前のトカゲ男たちが人間の言葉を使用しているということは、意思疎通も出来るということ。ならば何かしらの情報を手に入れられるかとしれなかったのだが……どうしよう、変なノリに乗っかって燃やしてしまった。
ミオのちょっとだけ心配そうな視線もむなしく。哀れ、荒ぶるなんちゃらは燃え尽き――

「――てねぇよ！　俺ぁ不死身だ！　泣く子も黙る、荒ぶる不死身ことナカミ様でぇい！」
「あら？」

が、ミオの予想に反して荒ぶるなんちゃら――ナカミは、少し鎧が焦げただけでまったくと言っていいほどダメージを負っていなかった。
先程ミオが放った焔は、適当に放ったものだったとはいえAランクを軽く超すだけの威力は秘めていた。それを真正面から受けてほぼノーダメージとは、この世界の――と言うのも変だが――トカゲ男は魔力に対して耐性があるのかもしれない。

密かに感心するミオに、ナカミとその子分たちが噛みつく。
「おいおい嬢ちゃん！　いきなり魔法かましてくるたぁ、何してくれてんでい！
――惚れた！　結婚してください！」
『結婚してください！』
「……え、嫌よ」

何故だか知らないがいきなり求婚された。
ミオは露骨に嫌そうな顔をするが、ナカミは挫けない。

「まさか竜人以外に……というか魔法を使える人間がいるたぁ夢にも思わなかった！　お前さんは殺しちまうには惜しい！　特別に俺の嫁さんにしてやらぁ！　嬉しいだろ！」
「いえ、これっぽっちも」
『姉御！　姉御！』
「誰が姉御よ、誰が」
「そう恥ずかしがるこたぁねぇぜ！　退屈はさせねぇからよぉ、げへへへへ」
「無性にあなたを燃やしたくなったのだけれど」
「その下半身を覆うヒラヒラとした布の下を見せてくれないかい？」
「嫌」
『あ・ね・ご！　あ・ね・ご！』
「だから誰が姉御よ！　……ん？」

――なんだか、ナカミたちとは違う声が紛れ込んでいたような。
怪訝そうに眉をしかめるミオ。対し、ナカミはぴくぴくと眉らしき辺りをひくつかせて。
「くっ……お、俺様の求婚をこうも容赦なく断るなんてなぁ……荒

ぶるガラスこと俺様のハートをなんだと思ってるんでい！　やっちまえ、子分ども！」
『分かりましたぜ、兄貴ぃ！』

どうやら”荒ぶる～”のフレーズが好きらしいナカミの号令に従って、大剣を振りかぶりながらミオに迫る子分ｓ。動きは異様に鈍くさいが、あれだけ巨大な大剣を振りかぶることが出来る膂力は本物だろう。あんなものの直撃をくらっては、いくらバリアジャケットを纏っているとはいってもただではすみまい。

「それがどうした、って話だけどね」
【クリムゾンエッジ】

――ミオが何もしなければ、だが。

轟！　とレギオンの刃に焔が走り、そのまま刃に纏わりついて魔力刃と化す。
焔刃を纏った相棒を振りかぶり、子分ｓに向けて疾走。すれ違いざまにレギオンを振るい――子分ｓが持つ大剣を刀身の半ばから溶かし、切断した。

『ひやぁ！？』

奇声を上げる子分ｓ。防がれるやもとは思っていても、まさか切断……否、溶断されるとは思ってもいなかったのだろう。半分となってしまった大剣の刀身を見て、二匹仲良くあたふたと慌てている。
そんな子分ｓの様子にミオはニッと口の端を吊り上げ、
「さて、次はあなたよ、リーダーさん……って、あら？」

ナカミにレギオンの切っ先を突きつけるが、その先にいるはずのナカミの姿はなく。

「はーはっはっはっは！　やるじゃねぇか我が嫁よ！」

ナカミの声は、随分と遠くから響いてきた。

身体を声が聞こえてきた方向へ向ける。ナカミは、５０ｍ以上離れた大岩の上に仁王立ちしていた。……生まれたての仔馬のように脚をガクガクと震わせながら、だが。

ミオの呆れが多分に……というより、呆れしかない視線を受けながらも、ナカミは胸を張って威風堂々を装い。

「ここはお前さんの強さに免じて退いてやらぁ……だがな！　俺ぁお前さんを諦めねぇぞ！　次会った時には、俺の物になることを覚悟しておくんだなぁ！　がーはっはっはっは！　……シュダッ」

『あ、兄貴ぃ！？』

格好いいかどうかは疑問な口上を声高々に告げた後、わざわざ口で効果音を出してとんでもない速さで逃げていった。あれが神速というやつなのだろうか、もう姿が見えない。

リーダーが真っ先に逃げたことにより、先程よりも目に見えて慌て始める子分'ｓ。終いには涙目でミオを見つめ始める始末。なんだか哀れに思えてきたので、視線だけでナカミが逃げて行った方向を指し示すと、子分'ｓは何故かミオに頭を下げて走り去っていった。案外良い奴らなのかもしれない。

「……なんだったのかしら、あれ……」

脱兎……訂正、脱トカゲのごとく逃げ去っていった三匹のトカゲ

男たちの後ろ姿を見送る。結局情報は引き出せなかったが、どうにもあの三匹は馬鹿っぽかったので、どうせ大した情報は引き出せなかっただろう。そう結論付けたミオは、背後で尻もちをついている青年に身体を向ける。

背中の半分ぐらいにまで伸ばした輝くような金髪に、サファイアのように透き通っている青い目。顔立ちもこの世のものとは思えないぐらい整っていて、身体も妙に鍛えられている。余分な脂肪がまったく見当たらない。どこからどう見ても完璧だ。……身に纏っているものが、下半身を覆うだけのただの布きれだけなのは多少気になるが。

ああ、こういうのが俗にいうイケメンってやつなのかしら――と、関西弁の女の子が好きな男に恋して玉砕して以来、あまり男が信じられなくなったミオは、冷め切ったテンションで青年を見下ろして。

「さて、それじゃあ話を聞かせてもらおうかし……」

「ふんっ！」

「――ら？」

突如、ミオと青年の間を風が吹き荒れた。

それによって、フワッと舞い上がるミオのスカート。何故か右腕を振り上げた状態で静止している青年は、スカートの下に隠されていたものが現れる瞬間を凝視し――視認した瞬間、カッと目を見開き。

「な、なんだねこれは？　苺、なのか？　いや待て、落ち着くんだ。そもそも何故女性の下半身を布が覆っているんだ？　そこからしておかしいだろう、不可解だろう、不自然だろう」

「……」

「……しかしなんなんだ、この胸の異様な高まりは。この苺の布を穿いた女性も悪くない……そう思えて仕方がない。……ハッ、そう

か！　これは神が僕に苺の布をこの世に生きるすべての女性に広めろ、という啓示で……ん？　どうしたんだい、キミ。そんなに顔を真っ赤にして――」
「――へ、変態ぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！」
「がっはぁ！？」

コロコロと表情を変えて唸っていた青年改め変態の顔面に、ミオは全力で拳を叩き込んだ。
とんでもない勢いで吹っ飛び、地面を転がった先にあった岩壁にぶつかって止まった変態。随分と間抜けなポーズで岩壁に張り付いている変態に対して、ミオは片手でスカートを押さえながら焔を纏わせた拳を掲げ。

「ふっ、ふざけんじゃないわよこの変態！　助けてくれた恩人相手に……いえ、女の子相手にいきなり何するのよ！　馬鹿なの？　死ぬの？　というか死んで！」
「お、おおぅ……何故だかその”変態”という言葉は妙にしっくりくるな……。それに、キミのような可憐な少女に罵られると、不思議と胸が――」
「クリムゾンバスター！」
「うおおおおおおっ！？」

焔を纏わせた拳を突き出し、焔の砲撃を放つ。放たれたそれは変態へと一直線に向かうが、変態は恐るべき反応速度と身のこなしで避けてみせた。避け方が無駄に格好いい。
グルグルと転がった後華麗に立ち上がった変態は、追撃を加えようとしているミオに両手を向けて。

「待て！　待つんだストロベリーガール！　キミは僕に聞きたいことがあったんだろう？　であれば、殺してしまっては意味がないじ

ゃないか！」
「……そのストロベリーガールっていう呼び方には尋常じゃない殺意を覚えるけど、確かにその通りね」
「ふっ、分かってくれたかストロベリーガール。ならば僕にもう一度苺の布を見せて……分かった。黙るから首筋に刃を添えるのはやめてくれ。流石の僕でも首と胴体を分けられたら死んでしまう」

レギオンを変態の首筋に添えると、流石の変態も懲りたのか大人しくなった。
その様子にミオはため息を吐くと、レギオンを待機形態の指輪に戻し。

「それじゃあまずは一つ目。この世界はなんていう名前なの？」
「質問の意味がよく分からないな。この世界も何も、世界は一つだけだろう？」
「……ふぅん？」

――となると、ここは管理局にまだ発見されてない世界かしら。
変態の返答と自身の考えを照らし合わせて、そう結論づける。変態の言い回しが少し気になったが……気にしてどうなるものでもないだろう。気にしないことにする。

「じゃあ二つ目。さっきのトカゲ男たちは何？　あなたを追っかけてたみたいだけど」

そう尋ねると、変態は何故か驚いたような表情を見せ。

「竜人を知らないのかい？　あいつらは人間を滅ぼそうとしている敵だよ。僕はたまたま奴らに見つかって、追いかけられていたわけさ。……くそっ、せっかくたまに女の子の衣類が吹き飛ぶぐら

いの風が吹く場所を見つけたのに」
「今、心の底からあなたを助けたことを後悔してるわ」
出来得る限りの軽蔑を込めた視線を変態に向けた後、ミオは彼に背中を向ける。いくらか情報は集まったし、この世界に人間がいることは確認出来たので、ミッドへの帰還の手段を探すために村に相当する場所を探そうとしたのだが。
「む、どこに行くつもりだいストロベリーガール？　行きたいところがあるなら僕が案内してあげるが」
「……いえ、謹んでご遠慮するわ」
「警戒心剥き出しだね……よく分からないけど、キミはどうにも色々なことについて無知な様子。ここは案内役の人間が必要じゃないのかい？」
「む……」
確かにそう言われるとその通りだ。未知の世界を一人で当てもなく飛び回るなど自殺行為に等しい。まさか、変態に一枚食わされるとは思ってもいなかった。けどその無駄にかっこいい笑みは止めてほしい、ムカつくから。
ミオの沈黙を肯定と解釈したのか、変態は妙に爽やかな笑みを浮かべ。
「それじゃ決まりだ！　僕の名前はパンツィーラ！　よろしく頼むよ、さすらいのストロベリーガール！」
「……私の名前はミオ・レッドフィールドよ。いい加減そのストロベリーガールってのはやめ――」
「さぁ行こうかストロベリーガール！　とりあえずは竜人に反抗している人間が集まってる村に行こう。僕が行くと何故か門前払いされてしまうんだが、キミと一緒なら平気だろう！　はっはっはっは

！」
「……最悪だわ」
――やっぱり、助けなければよかった。
非常に憂鬱なテンションになりながらも、ミオは変態の同行者とともに歩き出した。

▽△▽△▽△▽△▽

「やっちまったな……完全に遅刻だ」
路上に設置されている時計を見て、男性にしては少し長めな黒髪の、童顔で身長の低……失礼、身長の低い少年が面倒くさそうに顔を歪めていた。

「待て！　どうして身長が低いってわざわざ言い直したんだよ！？　それって意味あんのか！？」
「それはね、剱ちゃんだからだよ～。それと、遅刻したのは剱ちゃんが寝坊したせいでしょ？」
「俺が急いでるっていうのにお前が何度も露店で立ち止まってたせいもあると思うんだがな！　というか”剱ちゃんだから”ってなんだよ！」
「それはね、剱ちゃんだからだよ～」
「リピート！？」
自身のユニゾンデバイスにこれでもかと弄られてガックリと項垂れる少年、浅儀剱。そんな彼を見下ろしながら、一応彼の従者であるレインは先程露店のおじさんに貰ったたこ焼き――まさかのユニ

ゾンデバイスサイズである――を美味しそうに頬張り。
「でも実際問題どうするの？　もう戦技披露会始まる時間だよ？」
「……そうなんだよなぁ」
戦技披露会。読んで字の如く凄腕の魔導師たちが戦い合い、その卓越した戦技を披露する催し物である。一般市民からすれば万国人間ビックリショーといった感じだろう。……参加する側である剏からすればその例えは甘っちょろいと言わざるを得ないが。ビックリショーで済めば御の字だ。
いっそこのままサボってしまおうか、という考えが一瞬頭の中をよぎるが、すぐにその考えを脳内ゴミ箱に捨てる。そんなことをしたら最後、金色の死神が剏の首を刈り取りにやってくるに違いない。いやまぁ、行っても同じような目に遭いそうな気はするが。
「行っても地獄、行かなくても地獄……俺は一体どうすれば……ッ！」
「大変だねぇ……あれ？　あそこにいるのはもしかして――」
「ん？　どうしたレイン？」
ふらふら～、と剏の頭近くを浮遊していたレインが飛んでいく。彼女が向かっている先に視線を向けると、そこには片手でおにぎりを頬張りながら、もう一方の手で地図を広げて唸っている九歳ぐらいの少女がいた。……何故か手にしている地図は上下逆さまだったが。
というか知り合いに似ている気がする――ふと頭の中に馴染みの狸の顔が浮かんで、いやいや、と思った直後……少女の正体に見当がついた。確か彼女は――
「やっぱりレフィリアだ、久しぶりー！」

「――む？　おお、レインか！　久方ぶりだな！　……おっ、剏も一緒か。相変わらず小さいな！」
「いつまで身長のこと引っ張るつもりだ！」

レインの声が届いたのか、こちらに顔を向ける少女。知り合いのユニゾンデバイス、レフィリアだ。その知り合いの嗜好――正確には違うのだが――により、幼少時のはやての姿をしている。

「で、レフィリアは何してるの？」
「ふ、よくぞ聞いてくれたなレイン。実を言うとだな……この地図がどうにもポンコツでな、こいつに書いてある通りに歩いても、目的の場所に辿り着けんのだ」

――いやまぁ、そりゃ地図を上下逆さまに見てたらそうなるよな。
ぷんぷんとご立腹の様子のレフィリアを見て呆れる剏。レインもレインで、地図が上下逆さまだということに気づいているのに面白がって教えてないのだから性質が悪い。

「ふーん、大変だねー。じゃあさ、そのおにぎりはどうしたの？　レフィリアがおにぎりなんて作れるはずないから、どっかで買ったやつ？」
「今地味に我を貶さなかったか？　これはだな、なんかそこらへんに置いてあったから貰ってきた。まったく、食べ物を粗末にすると罰が当たると言うに。
……しかし、これを入れてあった袋に”わしのおにぎり”とか書いてあるのだが……なんだこれは？」
「人の物！？　それ窃盗だよお前！」

さも自分の物みたいに堂々と食ってるから気づかなかった！　と剏は大声を上げる。

対し、レフィリアはわけがわからないとばかりに首を傾げ。

「せっとー？　なんだそれは。美味いのか？」

「この野郎……変なところで無知を発揮しやがって……！　ええい、お前の主様は一体どこで何して――」

「あ、ここにいますよー」

「うおおおっ！？」

憤っている最中に突然背後からかけられた声に、剏は身体を仰け反らせて驚く。そんな彼の姿を見てレインは、剏ちゃん今日はすごい元気だねー、とのほほんと笑っていた。

背後に気配もなく立っていた咲夜を見て、剏は表情に疲れを滲ませながらため息を吐き。

「咲夜……お前、忍者かなにかだったか？」

「はやてさんが言うのならば、俺は忍者にでもなんでもなりますよ」

「お前のその忠誠心に似た何かが怖い」

咲夜がこういう男なのは知っていたが、流石に引いた剏だった。

「……って、お前どうしてここに？　レフィリアを探してたのか？

……というか、随分と傷だらけなような……」

「本当だねー。はやてちゃんと喧嘩でもしたの？」

「もしくははやてを巡って新と喧嘩でもしたのか？」

剏に続いて、レインとレフィリアも疑問を口にする。後半が全部はやて絡みなのはご愛嬌。

何故かは分からないが、咲夜は結構傷だらけだった。重傷を負っているというわけではないが、細かい傷がチラホラとある。なんだか”ちょっと大冒険かましてきましたー”とか言われても信じてし

まうレベルだ。
三人の疑問に対して、咲夜は困った風に頬をかき。
「あはは……なんと言いますか、ちょっと大冒険かまし――」
咲夜が最後の言葉を告げようとした瞬間。
――ヴォンッ
赤茶けた結界が、世界を覆った。
『――ッ！？』
突然張られた結界に、四人は一斉に身構える。刱は双剣――アートＮｏ．１、２を、咲夜は凪とソーディアンを既にセットアップしていた。
――来る。誰が呟いたやも知れない言葉。瞬間、二十人もの男たちが建物の物陰から一斉に飛び出してきた。
「咲夜！」
「はい！」
同時、刱と咲夜は互いに反対方向へ駆けた。ちょうど半分ずつ、そういうことなのだろう。
身体中から黒い魔力のようなものを放出しながら、刱に向けて銃型デバイスの銃口を向けてくる男。対して刱は、魔力で強化した足で全力で踏み込むと、一気に男の懐へ入り込み。
「ふっ！」

左の剣で、銃をその身体の半ばから切り裂いた。
その役目を果たすことなく、駆動を終える銃型デバイス。武器を失い無防備となった男の首筋に向けて、剏は間髪入れずに右の剣を振るう。
振るわれた剣は、見事なまでに男の首筋を叩いて男を気絶させ――なかった。

「なっ……くっ！？」

仕留めきれなかったという事実に愕然とするも、剏は横合いから振るわれた剣型デバイスを避ける。そして、その剣型デバイスを振るってきた男の頭を蹴って一旦距離を取り、改めて自身に迫りくる男たちを迎え撃つ。
――どうなってやがんだ……！？
振るわれる剣を双剣で防ぎ、放たれる銃弾を避けながら、剏は思考を加速させる。先の一撃は確実に男の首筋を打ったし、手応えもあった。少なくともダメージはあるはずなのだ。だというのに、男たちはまったく堪えた様子がない。
何らかの手段で痛覚を遮断されている？　いや、それならば首筋を打てば気絶するはずだ。ならば、他に考えられることは――

「単純に、どんなに無茶をしても平気なぐらい身体が強化されてるってことじゃないですか！？」

咲夜の声が剏の耳に届くと同時、剏に迫っていた男たちが吹っ飛ばされる。
ソーディアンで精製したのだろう、自身の身の丈の二倍以上はある大剣で男たちを吹っ飛ばした咲夜は、大剣を迫りくる銃弾に対する盾にして剏の隣に並び立つ。
彼の視線の先には、大剣で吹っ飛ばされたはずなのに、これまた

まったく堪えた様子のない男たち。一体どれだけタフだというのか。
「生半可な攻撃じゃ意味がないってことか……。チッ、面倒だな……！」
《刱ちゃん刱ちゃん！　面倒だからってとんでもない大技とか使っちゃ駄目だよ！　その人たち、よく見たらミッドチルダ政府の人たち！》
「ん？　……ああ、確かに」

レインからの念話を聞き、大剣の陰から男たちを覗き見る。確かに彼らが着ている服装はミッドチルダ政府に所属する者たちのものだ。今刱たちに向けて振るっている武装も、確か政府の正式装備だったか。

「……ていうかレイン。お前今どこにいるんだ？」
《建物の間の物陰だよ。どういうわけか私たちには襲ってこないんだよねー》
《あれだろう、変態しか襲わないんじゃないか？　うむ、今のところこれが一番可能性が高そうだな》
『んなわけあるか！』

あんまりにもあんまりな言い分に、二人同時にツッコミ。その間にも、男たちからの攻撃は続いている。
好転することのない状況に嫌気がさしたのか、刱はアートＮｏ．１、２の代わりにＮｏ．３――西洋剣を取り出し。
「おい、咲夜。さっきも言ったが、正直言って面倒になってきた」
「奇遇ですね。俺もはやてさんに頼まれたお願いをさっさと遂行したいんで、ちょっとイライラしてきてます」
「そうか、奇遇だな。それじゃあ、物は相談なんだが……あいつら、

”纏めて”くれるか？」
「――了解！」
剏の声に応えると同時、咲夜は地面に突き刺し盾としていた大剣を引き抜く。
突然盾代わりの大剣を引き抜いたことに、狂気に囚われているはずの男たちが一瞬硬直。その一瞬の隙を突いて、咲夜は大剣を勢いよく放り投げる！
『――――！』
迫りくる大質量に対し、男たちは一斉に飛び退く。瞬間、大剣が先程まで男たちが立っていた場所に突き刺さり――――――爆発した。
『ッ――――――！？』
大剣の中に込められていた魔力が爆発したことによって、男たちの全員が空中に吹き飛ばされる。無抵抗のまま宙に浮かぶ男たちを視界に収めながら、彼らの真下に潜り込んだ咲夜はソーディアンでナイフを精製。男たちに向けて投げ放つ。
次々と投げ放たれた二十ものナイフが、男たちへと迫る。ナイフが男たちに限界まで近づいたことを視認した咲夜は、
「弾けろ！」
キーワードとなる言葉を叫び、ナイフを爆発させた。
ナイフの爆発によって更に吹き飛ばされ、男たちは空中の一か所に纏められる。そして、その一瞬を待ち望んでいたのは――彼。
「神煉流肆式……！」

跳躍し、空中に飛び上がった剏から魔力が溢れ出し、まるで風のように荒れ狂う。
それを剣に纏わせた剏は、まるで団子のように纏められた男たちへ向けて……解き放つ！
「――旋風（つむじ）ィッ！」

振るわれた剣から打ち飛ばされた竜巻が男たちを飲み込み、荒れ狂う風と鎌鼬がデバイスを切り刻み、男たちの身体を切り裂く。
しばらくして竜巻が収まり、男たちが地面へと落ちる。男たちは全員気を失っていて、起き上がってくる様子はなかった。先程まで身体から溢れ出ていた黒い魔力のようなものも消えている。
男たちが完全に気絶していることを確認した剏は、ふぅ、と息を吐き。

「終わった、か。なんだったんだこいつらは」
「政府の人間がいきなり襲ってくるなんてことはないでしょうし……何らかの魔法で操られていたってのが妥当でしょうね。――おいレフィリア、こっち来い。こいつらに何があったのか調べるぞ」
「ふぅ、相変わらず人使いが荒いな、主は。……って、やり過ぎだ。こいつ腕曲がってるぞ」
『生きてりゃいいだろ』
「最悪だ、こいつら……」

そんなことを呟きながらも、レフィリアは咲夜とともに倒れている男たちに近づいて調査を始める。それを見た剏は、何故か黙りこくっているレインのもとに行き。
「どうしたレイン。まさかお前までやり過ぎだって言うんじゃない

だろうな？　言っておくが、手加減してる余裕なんて……」
「ううん、そうじゃないの。なんだか、変な感じがして――――ッ！　翔ちゃん足下！」
「は？　足下って……なっ！？」

レインの切羽詰まったような声に導かれ、自身の足下に視線をやると……まったく底が見えない穴が、翔の足下に広がっていた。
――な、なんだこれ！？
翔ちゃん！　とレインが頭に飛びついてくる。瞬間、穴は一際激しく揺らぎ――

次の瞬間には、翔とレインの姿は消えていた。

「……あ、そうだ。俺、翔さんに話さないといけないことが……って、あれ？」

はやてに頼まれた用事を思い出した咲夜は、その内容を伝えるために背後に振り向く。が、先程までそこにいたはずの翔とレインの姿はどこにもなかった。
――おかしいな。どこ行ったんだ？
要件を伝え損ねてしまった。まぁ、こいつら調べ終わった後でいいか――と咲夜は楽観的思考をフル稼働させ。

「で？　何か分かったか？」
「こんな短時間で分かるはずなかろう。何らかの魔法で強制的に狂わされていたのは確かだが……」
「おい！　貴様らそこで何してる！」

『は？』

――その楽観的思考が、一瞬で仇となった。

不意にかけられた怒鳴り声に、咲夜とレフィリアは同時に顔を上げる。するとそこには、自分たちの周囲を囲んでいる政府の人間たち。最も、先に戦った者たちとは違い、狂わされてはいない正常な者たちだったが。

警戒の眼差しとともに突きつけられている銃口を見て、はて、何かしただろうか――と咲夜は考え、ふと視界の隅にボロボロのズタズタにされた……というかした政府の人間たちが映った。

――あ、もしかして。そんな咲夜の思考を読んだかのように、隊長らしき男が一言。

「そいつらをそんな風にしたのは、お前たちだな……？」

「……ハッハッ、何を言うんです。俺たちはたまたまここを通りすがって、あまりの惨状に見かねて介抱に駆け付けた善良な一市民。そんな俺たちを捕まえておいて、いきなり犯罪者のような扱いは止めてくれませんかね？」

もうまるっきり気絶している男たちをぶっ飛ばした犯人なのだが、逮捕されるなんてことになったらとてつもなく面倒なことになりかねない。何よりはやてに迷惑がかかる。

――レフィリア、お前も合わせろ！

視線だけをレフィリアに向けて、アイコンタクトを試みる。咲夜の視線に気づいたレフィリアは、視線の意味を理解してくれたのか小さく頷き。

「うむ、そうだ！　我たちはこやつらを手当てしてやろうと――」

「あ、あいつじゃ！　あいつがわしのおにぎりを奪ったガキじゃ！」

「……なんだと？」

不意に発せられたしわがれた声に、隊長の目尻がピクッと上がる。彼の視線が向けられている先は……レフィリアが手に持っている、”わしのおにぎり”と書かれた袋。

まさかの伏兵の登場に咲夜は固まり、レフィリアは突然現れたおじいさんと袋を交互に見て。

「ああっ、これはお前のだったのか！　いやぁ、すまんな。てっきり捨てられていたものだと――」

『確保ぉっ――――！』

「ぬ、ぬおおおおお！？」

「最っ悪だ、ちくしょう！」

東条咲夜、レフィリア。

暴行罪及び窃盗罪で、逮捕。

第八話　帰還、そして（後書き）

原始ははっちゃけろって言われたので。原始ははっちゃけろって言われたので↑大事なことなので二回（ｒｙ

現在の状況は、

原始：ミオ、パンツィーラ

現代↓？？？：剱、レイン

逮捕：咲夜、レフィリア

逮捕ってなんだと自分でツッコミを入れたい。でもお弁当イベントが余ってたから（ｒｙ

さて、一旦状況をまっさらにしたところで……次はイクス・スタンスさん、お願いします！

第九話　敵側？　中立？　……それが定めとされる者（前書き）

どうも、バトンをまかされましたイクス・スタンスです。
正直痛感しました。

うん、自分のツッコミの分にキレがない！
ああ……、自分はどう行けば……

カオスか混乱を加速させてしまいましたが続きをどうぞ。

第九話　敵側？　中立？　……それが定めとされる者

さて……時を同じくしてここ、戦技披露会会場。

開催が徐々に迫る中、そこでは戦闘狂……いや、失敬、バトルマ……でもなく、管理局内、ベルカ騎士の最高峰と言われてもおかしくないシグナム、そして、ヴィータ、シャマルが会場に居た。

現在、三人は観客席をうろつきながら焦っていた。

何故か？　簡潔に言うなら……。

「まったく、何をしているのだ！　あいつ等は！」

「まぁ、あいつ等のことだからまた呑気に菓子でも堪能してんじゃねぇか？」

「あら？　お菓子が目当てなのはヴィータちゃんじゃないの♪」

「なっ！　んなわけねぇだろ！　あ、あたしはただっ！」

「ただ？　パレードのお菓子が食べたいのは本当でしょう♪」

「確かに……アイスに目がないのは相変わらずだからな。お前は」

「う、うっせぇ！！」

賑やかな空気が流れているが、シグナム達は、なのは達が来なくて困っていたのだ。

本人達にとってはいろいろ確認したいことが盛りだくさんである

のだ。
若干数名、己の欲望的な部分がむき出しなのが居るが、そこは気にしない方針で行こう。
気にしたらきりがないのだから……
とはいえ、
「でもよぉ、本当にどうすんだ？　シグナムも打ち合わせがあったんだろ？」
「ああ、“例の件”だな」
「本当にやるのね……」
その“例の件”という言葉に、シャマルは苦笑い気味に異様に反応してくる。
それもそのはずである。その惨劇の結果は皆が良く知っているのだから……。
特にそれは、医者としては、当然のことなのだから……。
そう……本当に披露と言えるものなのかと……。
まぁ、結果は自ずと見えてくると思われるため、ここでの説明を――
「ほう、“例の件”か……。お前たちはいったい何をしようとしてんだろうな……」
――省略しようとしたら、何か、ドスの入った重苦しい声がシグ

ナム達に響き渡る。

――まさか……。

一同は戦慄した。

海鳴でよく聞く声である。

まさか、彼がここに来るはずはないだろう……皆はそう思っていた。

しかし、今の声は確かに……

「事と次第によっては、楽しい披露から“ありがたい個人面談”を行わなくてはならないんだがなぁ……」

一同、機械の錆ついた音が聞こえるかのように首を回し、声のする方向に振り向く。

そこには、普段は物事に容赦ないが、とても義理堅く、高校教師最凶たる、自称『非常勤教師』。

尚且つ目の前の彼は、とても笑顔で――恐い……。

「まぁ、なんだ……。戦技披露会があるっつうんでここに来たら、偶々お前らを見つけてな。んで、来てみたらなぁ……いや、ここで話すのも悪いな。場所を変えようか」

「「……はい」」

その場に威圧が放たれてないのに重く感じさせる、東誠　流寺がそこに居た。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「で、お前たちは戦技披露会があったんじゃねぇのか？　確か……なのはとフェイトも参加だろ？」

「いや、テスタロッサはシャマルとザフィーラと救護班に配置されている。高町とは私が相手になっているが？」

「何故、疑問形になっている」

「いや、別にそうではないが」

「ホゥ……」

先ほどの空気は軽くなり、今の状況を確認するかのように、情報を聞き出す東誠。

それに変わって、その内容に淡々と答えるシグナム。

ではあるが、何か気にしている様子だ。

東誠はそのことにやや疑問を抱いた。

その疑問を聞こうとすると、東誠に代わりヴィータが言葉を紡ぐ。

「なのは達がまだ来ねぇんだ」

「ええ、もう準備には入った方がいい時間帯なんだけど、何か問題でもあったのかしら？」

シャマルも首をかしげながら答えた。

――なるほどな。確かになのは達がいないのは問題だな。

そこは本来、万全な準備が出来るように既に現地に到着しておくべき時間でもある。

しかし、一同はまだ知らない。

なのは達が抱えていた問題を……。

「はやては今回、解説だから何の問題も起こらねぇし、問題があるとすれば、お前が“地獄の灼熱狂騎士（すじがねいり バトルマニア）”になるか、なのはが全ての天敵たる白い悪魔こと。“無茶無理無謀の全力全壊の殲滅魔導師”になるぐらいだろ？」

「「……」」

「なんだ？」

「いえ……その……」

「おまえ……それあいつ等に言うなよ」

「それと私のことが気がかりなのだが」

さらりと爆弾、いや、核爆弾……、もとい、アルカンシェル照射発言が飛び出てきたことに、ヴィータとシャマルは顔色を真っ青にして後退。

シグナムに到っては、自分の発言のことで視線が冷たくなる。

しかし、東誠はそれに動じることなく、寧ろ清々しい顔で言い放つ。

「何か間違った発言をしたか？　言わせてもらうが、シグナム？　俺が剣をやっていることを知ったあの後、依頼、手合わせと言いながら毎日のように俺のところに来ては試合（死合）をやっていたよな？」

シグナムはうぅ、と言葉を詰まらせる。

更に東誠は言葉を続ける。

「尚且つその時、お前は笑い、楽しんでいた。さらに魔法が使えることを知ってからは今度は地下室で問答無用の模擬戦だぞ？　そんでもって、フェイトやシャッハと知り合って早々、結構やり合っていると聞くが？　まぁ、フェイトに至ってはガキの頃だが……。はてさて、今言った内容のどこをどう解釈すれば、お前がバトルマニアでないというのが証明できる？」

「そ、それはだ……。ただ、わたしの生きがいのようなもので……」

「生きがい？　俺の予定を無視して、剣道のバイトに俺を誘ったり、高校（こっち）の剣道部に顔を出しては生徒共に容赦なくやっていたこともか？　まぁその分、あいつ等がたくましくなったから、俺は文句言わなかったが……」

「……」

「だがな、剣の道の探究心を持つことにいいことだと思うぜ。まぁ、そのことに関してはどうでもいい。それに対して、十分と言えるほど周りを巻き込んでいるぞ？　少しは自重を考えてほしいものだが」

「す、すまない」

流石にそこまで言われると、反論することもできず、素直に謝罪するシグナム。
中々に見れない光景だ。
「まぁ、分かったならいい。問題はもう一人の反省の色を見せない我が儘エースか……」
「あははは」
「まぁ、あたしらが言ってもしょうがねぇ。けどよう……」
「どうした？」
「本当に今のことは、なのはに言うなよ。あいつが怒り出すと……」
ヴィータは言葉を続けようとするが体が震えだす。
トラウマが出てきたようだ。
流石に言いすぎたかと普通は誰しもが思った。
しかし、東誠にそのようなものを求めてはならない。
何故なら……。
「問題ねぇだろ？　あいつの攻撃魔法は俺効かねぇし、納得しなけりゃ個人面談で済む話だろ？　シグナム同様に過去の過ち情報を淡々と述べれば嫌顔でも納得するさ」
「「……」」
忘れがちのトラウマ、秘蔵話は、相手を止めるためなら、東誠は情け容赦なく告げる。問答無用な毒舌の持ち主である。

そして、あの魔法を保有している彼には、遠距離攻撃は通用しないのだ。

シグナム達はそれが分かっているようで、簡単に答える。

「ああ、それもそうだな」

「でも、今回は“乱入しない”でくださいね。フェイトちゃんが救護班に居るのはそのためだから」

シャマルが念押しして、今回の救護班の役回しの意味を込めて伝える。

フェイトが救護班にいることの意味を理解した東誠は少し嘆息しながら、

「ああ、わかった。余程の限度がない限りはな。そういえば、他の連中はどこ行ったんだ？　なのはとシグナムの披露はあいつらも楽しみにしてたんだろ？」

「ええ、もう少ししたら来ると……」

「おっ？　エリオとキャロにルーテシアだな？　それと……ヒィッ！？」

――バ、ガシ！！――

「あ？　どうした……って、ああ……なるほど」

ヴィータが向こうに目を向けていたことに気付いて、他の者も、その視線の先を振り向く。

そしてヴィータは東誠にしがみ付き、その行動の理由に一同納得。

理由はエリオ、キャロ、ルーテシアではなく、その3人と“一緒にいる人物”。

そう、ある意味では、はやてと同類かもしれないショタでベタでロリコン限定のポジションになっていてもおかしくない人物。

それは――

「あっ、東誠さ――あぁっ！！　ヴィータちゃん♪　こんにちは♪」

「あ、はい、こんにち……うわぁぁー！！」

颯爽と東誠に挨拶をしかけたが、“お気に入り”を見つけ、いつの間にやら、誰の目にもくれず、一目散にヴィータに抱きつく――河海　川（りお）であった。

「相変わらずだな……」

「「ああ／ええ」」

「エへへへ♪　何度抱いてもいいな♪　この感触♪」

川は公私の場一切関係なく、ヴィータの顔をスリスリしながら、ひたすら抱きついたままで、解放する気０％だった。

『シグナム！　シャマル！　東誠！！　見てないで助けてくれ！！！！』

ヴィータの泣きながらの助けを念話で送る中、エリオとキャロは

今の光景についていけず、茫然としており、東誠やシグナム達は、“出くわす恒例の儀”に特に何も気にしなかった。

なお、川から解放はされたのは、披露会開始直後に、東誠が動くまでそのままだった。

◇◇◇◇◇

「う～ん、はやてさん達はあぁ言っていたけど、やっぱり気になるなぁ～」

「うん。んぐんぐ、確かにね。あむ、でも、楽しんでって言ってから。このまま待つしかないよ～」

「うなにゃ～♪　このクレープ、おいしいぞ♪」

「もう、メイデン、そんなに慌てずに♪」

祐希奈、ヴィヴィオ、アインハルト達、学生組は、はやてから、楽しんで来いと言うので、指示が出るまで、取り合えず、パレードを堪能することにした。

しかし、若干一名、暗いオーラを出しているヘタレが居た。

「な、なぁ、そろそろ……」

「あー！　おいしそうなリンゴ飴があるわよ♪」

「わ、ホントだ～♪」

――ジュルリ♪――

――おい、なんだその音は

「と、いうわけでカナン♪　買ってくれるよね♪」

「祐希奈……、俺……」

そう、カナンは“とある珍騒動”の後、祐希奈達の“買い物代金”を“全額”払っていたのだ。

しかもここで１０軒目……。そろそろ金銭が問題となってき始めたのだ。

「え、何？　一人２つずつ買ってくれるって？　それじゃぁ遠慮なく♪」

「やめぇぇぇ！！　もう金が無くなるんだ！　これ以上はマジで後生だから！！」

カナンは叫びながら全力で土下座！！

しかし、祐希奈がそれで止まるはずがない。

「え、もっと買ってあげるって？　今日はやけに優しいわね♪　それじゃぁ遠慮なく♪」

情け容赦なく死刑宣告が言い渡された。

カナンは溜まるに溜まった涙がナイアガラの滝の如く流れ出しそうな表情になる。

その時、目の前に、ある人物が現れる。

「余り買いすぎると、後からの楽しみで使えなくなりますよ」
現れた人物は祐希奈達の目の前にある屋台に目を向けると、
「リンゴ飴ですか？　すみません、リンゴ飴７個お願いします」
あいよーと店員のいい声が響く中、祐希奈達に購入したりんご飴を渡す。
その人物は、
「ところで、なのはさん達見ませんでしたか？」
日頃無愛想、無表情の現在２６を過ぎていた青年、ラルクであった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「あれ？、ラルクさん、その鞄に入っているの物はなんですか？」
ラルクにおごってもらったリンゴ飴を食べ終わると、ヴィヴィオは、ラルクの肩にかかっている鞄に気づいて、中身につて問い掛ける。
その声に気づいて、祐希奈達もその鞄を見つめる。
「別に気にしないでください」
が、ラルクはあえて何も答えず、はぐらかした。
だが、このメンバーで、そんなことで追跡を終わらせる者などいない。

当然。

「あんたねぇ、気にしないと言った方が無理があるでしょう？」

「そうですよ。流石にそんなデカイ鞄を背負っているのを見て無視するのが無理っす」

《ラルク（さん）》

じぃーっと、鞄を見られ、何気ない視線が怪しい視線へ転移していく。

仕方ない、とラルクはこれ以上の誤魔化しが無理と判断し、話し始めた。

それは、1時間前に遡る。

◇▼◇▼◇▼◇▼◇▼

「ミッドも地球のパレードとあまり変わらないのですね……」

ラルクは現在、パレードの6区エリアを眺めながら歩いていた。

実を言えば、川と一緒に来ていたのだが、

「あ！　エリオ君――にキャロちゃん♪」

と、一言叫び出すと、一目散に三人の居るとこに行ってしまった。

ラルクは追いかけようとしたが、密集地だったためか、川の姿をすぐに見失ってしまった。

「まぁ、戦技披露に皆さん行かれますから、その時でいいですか……」

と、共通の観光地自分の中で勝手に納得し、再びパレードの中を歩き回るのであった。

「ん？　あれは？」

ふとしたところで、ラルクは足を止める。

市場のようで（いや、どこもそうだから）、フリーマーケットの写真店のようだ。

ラルクはその写真店に立ち寄る。

「お！　にぃーちゃん、いらっしゃい」

店員が気づいて、ラルクも軽く会釈をすると、

“この本”は何なのですか？」

「お？　ああそれかい？　面白いもんだぜ？　なんなら見ていきなよ？」

「……」

店員に進められ、そこにあった手短な本をめくる。

その瞬間、ラルクの機嫌がエスカレーターのように下がっていった。

「どうだ？　すげぇだろ？　その本はなぁ、特殊な本でな？“一

度刻まれると二度と消えない本”だぜ？」

「なるほど……」

ラルクはその瞬間、瞬速をかまし、店員の背後に移動する。
そして、そのまま関節外しを繰り出し、仕込みワイヤーで縛り上げた。

「てぇ！！　にぃーちゃん、何しやがる！！」

店員は、激痛を訴えながら、その行動に猛抗議！
しかし、ラルクはどうでもいいように、指をならし。

「アルフさん、ザフィーラ……。しらみ潰しにお願いします」

「あいよ／心得た」

何故が突如現れた、アルフとザフィーラの狼コンビ。
ラルクの指示通り、店をしらみ潰しに当たると。

「ラルク、当たりだよ。他の奴らの本もあった」

「こっちもだ」

「さぁ、遺言はありますか？」

「ごめんなさいっ！！」

そして、ラルクが立ち寄った店は、一瞬で管理局に逮捕された。
そう、あの本の中身――

――機動六課にその後見人、全オリキャラの赤ん坊～今に至るまでの写真の詰まった、
“禁書目録”（写真集）であった。

余談で、壊すことができない本は、現状で、ラルクが預かることとなった。
ついでに、手伝った褒美で、アルフとザフィーラに、フライドチキン（十二個入り）をそれぞれ５パックずつおごったのであった。

◇◇◇◇◇

「と、言うわけなんですが……あれ？　どうかしましたか？」

ラルクは一通りの事情を話し終えると、皆から様々な視線で見られていた。
特に凝視されているのは、ラルクとその鞄の中身……。

「ねぇ、ラルク……」

そして、とてもいい笑顔で祐希奈が一歩一歩と前進、語り始めてくる。
薄らであるがダークオーラがで溢れ出してきている。

「はい？」

「あんたは、その“写真の中身”は見たの？」

「……」

その一言にさらに視線が集中する。

が、ラルクはその視線を全く気にしない。
顎に手を当て、考える素振りをしながら、
「クロノさんとカナンさん……、それにシオンさんの写真は見ましたね。あの後すぐにオーナーを潰して写真集は“全部”、私が没収しましたが」
「そう……」
祐希奈はそこまで確認すると、無言のままアシェルを起動し、セットアップ！
さらにそこに、手に魔力を纏い炎を全開にする！！
「あたしねぇ、まどろっこしいことは嫌いなの♪」
「なるほど、そうきますか……」
祐希奈がダークオーラ全開、いや、闇魔降臨状態に急変！！
ラルクは、祐希奈が言いたいことを即座に察し、“手をポケットに入れる”。
そして、ヴィヴィオとアインハルトは祐希奈の行動が分からずアタフタしている。
カナンは先ほどから冷や汗が止まらず、震えている。
――あ、ああの顔は！！！
カナンは祐希奈の顔を見て、確信、戦慄する！！
間違いなく、“ドＳモード”の祐希奈だと。

『カナンさん』

『は、はい！！』

ラルクから念話が送られ、緊張のあまり、余り呂律が回らないまま、カナンが答える。

ラルクは淡々と……

『……ここで死すか、これからも死に続けるか、生き地獄を生きながらえるか……好きな方を選択してください』

『へ？　な、何々すか！　その選択は！！』

――絶対！　ロクな選択じゃねぇ！！

カナンは内心そう叫んだ！！

ラルクが言っている選択の意味、それは、今から死刑宣告が下ることと同然！！

今からでも空間突破を使って逃げ出したい！

だが、ラルクはカナンのそんな、当たり前の思考を読み取っており。

『これらの本は、“世界で一つしかない”本。しかも、あなた方に会う前から、破壊、消去を行ってもできなかったんです。さて、カナンさん、私が言いたいことぐらいわかりますね？』

『あ、悪魔か！　あんた！！』

『酷いことを言いますね。冷徹の殺戮者（シャドー・オブ・ジェノ・サイダー）の３つの通り名は持っていますが、悪魔など。それに少なからず、“未来への地獄（カナン＆シオン＆ヴィヴィオ限定）”は回避でき出ますよ』

『……』

『……良い選択です。後は任せますね』

――鬼ぃぃっ！！

カナンにとっては最悪な交渉が結ばれたことで、ラルクは再び祐希奈を警戒する。

というより、祐希奈の行動に冷静な対応をしている彼の精神が異常なのか？

そして祐希奈は。

「その写真集！！　まとめて全部よこしなさい！！　（特にあたしとカナンとヴィヴィオとシオンのはね！！）」

全力で、烈破爆砕拳をかましだし、ラルクに接近！！

しかし、ラルクはその攻撃を避けようとせず、ポケットに中に仕込んでいた“二つの物”を取り出し、

「別に道場で使われるのは構いませんが、（物理的な）被害範囲が拡大しますし、それに“お話”が発動しますので遠慮します」

と地面に叩きつけた。

次の瞬間、それが爆発した。

その爆発により広範囲の煙幕が広がる。

「きゃ！　ケホ、ケホ、なめんじゃないわよ！　ヴィヴィオ！」

「フェアリー！」

【Ｗｉｎｄ　ｉｍｐａｃｔ！】

しかし、ヴィヴィオが風を起こし、煙幕を消し飛ばす！！

やがて煙が晴れると、

「あれ？　いない！」

「あの野郎！！　どこ行ったぁぁ！！　というより、写真集よこせぇぇ！！」

ラルクの姿はどこにもなく、後には……

「あれ？　主、何か落ちていますよ？」

「ん？　なんだ？」

レナスがラルクの居た場所の路上に何か“落ちているもの”を発見。

カナンたちはそこに行くと、祐希奈がそれを拾い上げる。

そこには書置きが。

「何々？　『以前の話していた、“カナンさんの幼少時代のファッション雑誌（１０冊）”を差し上げます。後少ないですが、少しばかりのお小遣いです。Ｐ．Ｓ．　その雑誌は、とても“無邪気で着

ぐるみパジャマや幼女服がとてもお似合いなカナンの写真集”があります。他にもまぁいろいろと……ｆｉｎ．『」

「「……」」

一同亜然。

そして何故か知らないが、お小遣いの６万が置いてあり、カナンへはおまけと言わんばかりに、不幸という名のプレゼントを贈呈された。

「なんじゃそりゃぁぁぁ！！！」

それに対して祐希奈は、

「まぁ、写真集はあいつは悪用しない側だし、“おもしろいもの”が手に入ったし♪」

とてもとても、無邪気にほしい物が手に入った、喜ばしい笑顔であった。

「んなわけあるかぁぁ！！　それよこせぇぇ！！」

「にゃん♪（烈破爆砕拳♪）」

「グハ！」

―バタン！―

結論からすれば、ラルクは、カナン以外を助け、祐希奈に素敵なプレゼントを贈ったとさ。

そう……、俗に言う“恩を仇で返す”であった……。

◇◇◇◇◇

「あれ？　ここは？」

気がつくと、“何処かの荒野”にラルクは立っていた。

――おかしいですね。空間突破でこんなところに跳べるはずはないはず。となるとここは……。

ラルクは思考を模索する。

そう、さっきの煙幕は時間稼ぎで、カナンの空間突破を利用し、遠くに逃げたのだ。

だが、それが不幸なことを引き起こしてしまうが……。

『変わるぞ』

「え？　ヘイムダル、ちょっ」

ヘイムダルはいきなり変わり、ラルクの姿がヘイムダルと化した。

ラルクは慌てて理由を聞き出そうとするが

「貴様より、“この時代”は我の方が詳しい。“過去に居た”場所だからな」

『え？　それはどういう？』

「動くな！！」

二人の会話とは別にある声が響き渡る。

そう、先ほどカナンたちが話していた男の声。

『貴様か……』

ヘイムダルは振り返るを嘆息し、面倒ごとが増えたと頭を抱える。

「俺はクラウス殿下、オリヴィエ殿下直轄自由騎士。シオン・カンバだ。てめぇ、こんなところで何してやがる！」

目の前にいる者の正体に気づいていない。

仕方なく、名乗ろうとすると、

「待つんだシオン！」

シオンの行動を制止する声。その声の主は、クラウス。

シオンはクラウスをみて静止するが警戒を解かないままである。

クラウスは“目の前にいるヘイムダル”を見て、

「“また”この時代に来たのか？　ヘイムダル？」

『そういうことだ、クラウス。そして、“ミッドで遊んでいたシオンよ”』

「！？」

――なんで俺のことを！？

シオンには何故自分のことを知っているか、わからない。

その悩んでいるシオンを無視し、ヘイムダルは淡々と語る。

『我は、貴様の居た時代の者だかならな……。確か、向こうでは貴

様の呼び名は、ヘタレオンやらしーちゃんが仇名であったな』

「そこは断固としてちげぇーわ！！」

『ヘイムダル？　昔ここに来たことがあるのですか？』

『ああ、この者たちとは気が合ってな……』

ラルクは少し経緯を確認。

ヘイムダルはそれに答え、シオンは叫びによる突っ込みを入れた。

▼▼▼

かといって、容赦無く指摘を繰り出す毒舌であるが……。（主な被害者：フェイト　個人面談被害者：なのは、はやて）

しかし……その楽しみの反面、場合によっては“一種の個別面談”が発動するありさま。

これにより“被害者となるのは披露をする者たち”だが……。

理由は述べなくてもよかろう……。

とにかく、ここでの通信は人の迷惑になると判断し、その場を離れようとした。

「あ？　東誠ぇーどこ行くんだ？　もうすぐ始まるぞ？」

ヴィータは東誠が席を離れるの見えたため、当然のように声をかける。

東誠は当然、声をかけられることを予測しており。

「ちょいと電話だ。ついでにアイス買ってくるから、しばらく待ってろ」

東誠は適当にごまかしに入る。

相手の好物を利用して……。

当然、アイス好きのヴィータは、それはそれは満面の笑みで。

「おお！！　そ、それならそれなら！　三区にある屋台の特大バニラアイス！」

「……腹壊すだろ。ソフトクリームな」

その言葉でヴィータは若干不機嫌になるが、アイスを食べられることに変わりはないので、楽しみにする事にした。

「あ、エリオ達も同じのでいいか？」

「あ、はい、すみません」

「ありがとうございます。あの、出来れば苺で」

「私はチョコレート……」

「りょーかい」

ほしい物を確認し、とりあえず席から離れ、通信相手を確認すると、

「は？　“何かあった”ようだな。これは」

『そうみたいですね……“観光で連絡することはまずないですから”。とりあえず、ここから離れましょうか』

「ああ」

東誠は会場をチラリと、一目見ると、やや残念そうに、その場を離れることにした。

「まぁ、仕方ねぇか……」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

場所を移動し、人通りが少ないところへ移動した東誠は、通信する相手“２人”が映る画面を睨みつけていた。

「で、このパレードの最中に今度はなんの面倒ごとだミゼット？……そんで、“銀髪殲滅野郎”？」

『まぁまぁ、そんなに機嫌を損ねないの』

『その通りだ……そして貴様の第一声がそれとはな、“老いぼれ”』

―カチン！―

「てめえは毎度毎度……通信切るぞ」

『まぁまぁ、流寺もそんなにカリカリせずに、ね』

「チッ」

本当に相性の悪い二人である。

原因が原因で、第一声が、互いの“禁句”と筋金入りだ。

しかし、東誠は目の前で通信しているの正体がラルク（肉体は）であるとは未だに気づいていない。

もし気づかれでもしたら大変なことになるのは確定事項である。

そう、“個人面談”とか“個人面談”とか“個人面談”とか……

まぁ、そんな余談は置いておくとしよう……それよりも、

「まぁ、いい。それで何があった？　わざわざ“極秘回線”を使っ

てくることは余程の問題のようだな」

東誠は最早、疑問詞なしで確認している。

つまりは、この手に通信の際は、必ず厄介事になっているということ。

それは確定事項と言うことであろう。

まぁ、日々、“彼の立場上でのこと”なのだから仕方がないと言えばそうであるが……。

「おい作者！！　そう押し付けているのはテメェだろ！」

地の文に突っ込みを求めてはいけません。

地の文は地の文、あくまで心境と内容なので……。

「……」

はいはい、進める、進める。

「チッ！」

とりあえず東誠はモニターに向き直ると、ミゼットは真剣な眼差しで

『楽しんでいる最中に連絡したことは悪いと思っているわ。でも、今回ははやてさん達に頼むことが出来なくて』

その言葉を聞くと一瞬眉をひそめる東誠。

「？　はやて達に頼めない？　管理局内の揉め事か？」

「ん～、管理局内と言えばそうとも言えなくないけど……少しね……」

「……」

東誠は思いつくものを挙げ、ミゼットに聞く。

しかし、ミゼットは難しそうな顔をし答えられない。

東誠はその行動に不信感を抱き、さらに追及に入ろうとすると、

『あの者達に頼めぬのは“身内問題”だ』

ミゼットの代わりに答えたのはヘイムダル。

どうやら、大方の事情は聞いている、もしくは、携わっているようだ。

そして、それを聞くと東誠は、“身内”という言葉を聞いてピンときた。

「身内？　おい……、まさか誰か面倒ごと起こして捕まったのか？」

東誠は軽く、ふと該当しそうなものを挙げる。

実に当たりたくない、嫌そうな顔である。

そして、ミゼットは東誠の意見を聞くと口元が揺らいだ。

やや苦笑い気味である。

ヘイムダルは、無愛想・無表情で全く反応がうかがえないが、やや嘆息気味である。

その反応に、東誠は一時動作が停止した。

――まさか……

「おい……マジか？」

東誠は確認の意を込めてもう一度、ミゼットたちに聞く。

その答えと言うと。

『『事実よ／だ』』

「おい、一割弱は冗談だったんだが……」

『信用がないのね、彼には？』

『身から出た錆であろう』

「否定はしないな。で、なんで俺に？」

東誠は理由を一通り確認すると、整理する。

「なるほど、東条咲夜とレフィリアが暴行と盗みの罪で逮捕か……しかも暴行が政府の連中ねぇ……」

『ええ、管理局としても、政府関係者関連と揉め事は面倒なの。それに、この場合はあなたの方が動けるでしょう？　今回捕まった人たちは何故か“管理局員”との面会が許可されないの……どういうことかわかる？』

「何かの前触れか……政府がそれを企ててるとは思えんねぇが。ま

ぁ、上に行くほど影があるか……で、“もう一人の俺”なら問題ないと？」

『つまりは、そういうことだ』

「そんで“俺の本職”か……バレたらマズイんだが……」

『でも、このことがはやてさん達にばれたら、もっと大変なことになるわよ』

ミゼットたちも焦りを隠せない。

流石にこれ以上は、彼らにも介入ができないのだろう。

東誠は仕方ないと判断し、

「わかった。ただし、どこまでやれるか保証できないぞ？」

『ええ、頼むわ』

「やれやれ、あと銀髪？　テメェ今どこにいるんだ？　通信画面のノイズが気になって仕方ないんだが？」

『こちらも少しややこしいことになっている。後は任せる』

「あ、おい！」

そう言うとヘイムダルは通信を切り、ミゼットも切った。

東誠は辺りを見回し、誰もいないことを確認し終えると、

「さて、こっちも行くか……」

東誠は魔法陣を展開し、いつもの無愛想・目つきが恐いのは変わらず、髪は水色、後頭部ではなく、首のところに髪をまとめ、頭が何本（密集してのまとまった数）立った、３０代前後の青年の姿となった。

二人のところに行く前に、注文を受けたアイスを渡してから行ったのであった。変身はその後……

◇◇◇◇◇

「で、ここか……」

東誠は結局、政府拘置所に来てしまう。

「やれやれだな……さて、行くか」

適当に歩いていると、そこに巡回中の監査官を発見、

「おい、そこの監査官？」

「ん？　あ、あなたはっ！！」

「ここに拘置している“東条咲夜”並びに“レフィリア”との面会を要請したい」

「は、失礼ですが、何故あなたが？　それに彼等の件は」

東誠がここにいることに疑問を抱く監査員。

しかし、東誠はその対応に慣れており。

「暴行で政府の者がやられたそうだな？」

「あ、はい。ご存知でしたか」

「ああ。それはもう俺の耳に届いている。となると、何かが起こりうる前触れかもしれん。そこは俺の管轄内に入ってもおかしくないだろ。尚且つ、そいつらから何か聞き出せるなら今から動いても損はない。違うか？」

「ですが、上層部からの命令で――」

「その上層部に俺が来たことを伝えても何の問題はないだろう。サッサと案内しろ！」

「あ、はい……了解しました。“アトラス提督”」

――はぁ、やれやれだ。

とりあえず、うまく釈放にいけるようしてみるか……。

――個人的には、捕まってた方がいい気がするが……。

東誠は本当に面倒臭そうに、あの二人の居るところに歩く。

監査官は、東誠を“あなたは！？”といった。

そう、東誠が変身した姿……アトラスこと、ツヴァイルド・アトラス・ジャッカー。

そして、彼のもう一つの役職……民間災害救支援統括総合理事会、通称『P．K．E．V』――統括官兼総帥であった。

第九話　敵側？　中立？　……それが定めとされる者（後書き）

さて、原作キャラ、トコトンやってしまいました。
かなり、無茶苦茶ではありますが・・・では、軽く状況・概要を、

現在：祐樹奈、ヴィヴィオ、カナン

古代ベルカ：ラルク（ヘイムダル状態）

拘置所：東誠（面会）、咲夜、レフィリア（服役中）

そして、東誠の役職、民間災害救支援統括総合理事会、通称：P．K．E．Vについて
これは、民間の救助企業、俗に言う、レスキュー隊・病院の医療関係等の統括企業で、政府・管理局両方の協力の厚い、中立立場の組織。
なお、東誠の正体を知っているのは、現在、ミゼットとヘイムダムのみになっています。

ヘイムダルは、以前にも次元事故でこの時代に来たという設定です。
勝手ながらよろしくお願いします。・・・魔法の情報を早めに転機しておきます。遅くれすみません。

さて、バトンを・・・ここは・・・暴走・加速させて申し訳ありませんが、クロックさん！、お願いします！

第十話　人知れず巻き込まれる者達。（前書き）

予定ギリギリまで使ってしまいました。
胃が痛い中結構頑張りましたクロックです。
正直誤字の確認まで手が回らなかったので誤字があるかもしれません。

第十話　人知れず巻き込まれる者達。

「

突然ながら、人の一生とは百年ほど生きると仮定したうえでそれを秒数に変換したところで。およそ三十一億五千三百六十万秒となる。

まあ、こんな大きすぎる数字を出してみたところで、意味などないのだが、私は時間を数えると言う事の無意味さを問いたい。

時間の概念というものは、人……否、存在によって異なると私は考える。

蝉という昆虫をあなたはご存じだろうか？

この昆虫は知っての通り地面の中で七年あまりの年月を過ごし成虫になり、そして十日という期間を祖先を残す為の活動期間として過ごし、最後には死にいたる。　これが皆様ご存じの、蝉の一生でございます。

これを私たち人間という存在に当てはめたならそれは、

短すぎて、

儚すぎて、

それはもう、その為の時間が悲しく感じられるのかもしれない。

しかしながら、これを新たに蝉の視点から見てみる事にしてみた場合。

彼らはこの期間を、“短い”と言って哀しむのだろうか？
これは私の推論である為、正しいなんては言えないが……きっとそんな事は言わないのではないだろうか？

つまり私が言いたい事を纏めるなら、それは即ち……存在する物によって時間というものの価値観は変わっていくのだ。ということなのです

」

【長々と語って、お仕事をサボりたいお気持ちも、祭に一人いけない寂しさも何となく理解はしますが、そんな事を語ったって現状は何も変わりませんよ】
「……知ってるよ」

ミッドチルダから五日ほど次元航行艦に乗りたどり着く事が出来る辺鄙な世界の更に辺鄙な場所に存在する、とても古ぼけた図書館。
そんな場所に、蒼髪と睨みつけるような眼つきが目印の少年とその愛機の姿はあった。

愛機の名前は、シャドウ。
そして少年の名前は、レン・クロフィール。（以降この作品中ではフィールと表記されますのでご了承ください）

彼らは、図書館の最も古い本や家財を置いていた倉庫に案内され、

ある一台の古ぼけた機械と睨めっこをしながら、特に生産性もない無意味な話をしていた。

まあ、話をするのはフィールだけなのだが……。

そして同時進行で、その古ぼけた機械の修理にも取り掛かっていた。

そんな中で、フィールが取りあえず手元にあるケーブルを繋ぎながら、思いついたように話し始める。

「知ってるか、シャドウ」

【何をですか？】

「小耳にはさんだ話なんだけどな、最近ミッドチルダの政府がなんか妙な兵器を作ったって噂があるんだ」

【妙な兵器？】

ああ。と言った感じで続けてフィールはこんな説明をした。

その兵器を技術者からの視点で言うなら、意味が分からないものだ。

そして同時に、利便性のない物でもあるらしい。

こんな感じに、とても適当に話した。

【……すごく意味が分からないのですけど？】

「端折りすぎたか？」

そう言って作業をする手を止めたフィールは、すこし話題をそらしながら話を進めた。

「そもそも兵器の歴史というものについて、お前は知っているかい？」

【物にもよりますが、大概については】

そう言ったシャドウの言葉に、フィールは“違うそう言った意味じゃない”と述べると、少し楽しそうに一冊の本を取りだす。それは歴史書だった。

決して兵器一点に、情報を絞った専門書でもないものを取り出してフィールは語りだす。

「そもそも兵器の歴史とは、戦争の歴史なのさ」

【戦争の？】

「兵器を使うのは戦争。それなら戦争を語らずして兵器は語れないのが兵器の歴史ってやつかな、例えてみるなら古代ベルカやアルハザードの時代が分かりやすいだろうね。　あの時代の王たちもしくは権力者たちは――」

またも長く語りすぎるので簡略的に説明させていただくが、つまりは兵器は道具という事なのである。

「――つまり話を戻すが、兵器というものは目的を果たす為だけの道具なんだよ」

そこまで満足げに持論を語り。

珍しく少し上機嫌なフィールは、そのままの勢いで作業を再開した。

だが、シャドウに一切の感想を聞かないまま数十秒が過ぎた後、フィールはこんな言葉を聞いた。

【それは私もですか？】
「……」

珍しくフィールがいつも以上のツッコミをギリギリのところで自重した瞬間がたった今訪れたのだが、一人と一機という環境はとても彼には着かれる状態になってきたらしい。

「……自分の好きなように取ってくれ」

そう一言だけ流すと、フィールは作業することだけに集中しようとしたが……。

結局は無言が苦手な彼は、新しい話題に触れる。

「さっきの話題からの延長線上にある話なんだけど知っているか、ミッドチルダの拘置所の事を話してみようかなって」
【拘置所ですか。　何でそんな物を話題にするんですか？】
「そういう理由の詮索は無しにしてくれるとありがたいね」

などというが、フィールが最初の話題からして話しだしたのは彼が聞いたとある噂だった。
そして彼にはそれが実証に代わるのがもうすぐに迫っているのではないか。という疑念が回っていた。

だが、ミッドを離れすぎたフィールには何もすることはできないという事から、
彼は特に対策を知人に伝える事もせずに、ただ何もせずにこんな場所にやってきている。

「あの拘置所は対応が非常に悪いな、そして警備も悪い」

【えっと、捕まったんですか？】
「……一回だけな」
【うわぁ～】

哀れですね。などとデバイスに続けて言われ下を向いて顔を暗くするが、
すぐに持ち直し話を続けた。

「あの拘置所はな、罪状の検査やらより先に、いきなりぶち込まれるとあって驚いたぜ。……まあ、警備が見事に雑で脱獄もしやすかったけどね」
【……脱獄をしたんですか？】
「つまりとっても、警備が雑だってことだ！！」

自慢げに話すフィールの言葉に、冷静にそして的確に問題点を指摘するシャドウ。
だが、一切気にせずにその言葉を無視した。

【早く作業を終わらせたらどうですか？　そしてさっさとこんな古屋敷から帰りましょうよ】
「機械の修理が終わる……見通しがついたらな」

とても遠くを見ながら、とっても辛そうにフィールは悲しくそう一言だけ呟いた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

フィールが辺境の地で機械の修理をしていたのとほぼ同時期。
彼の元上官でもあり、師匠でもあった男。バルト・シェルトは行方不明になった警備部隊の一隊を探しに建国際の警備から離れて、森にまで来ていた。

ただし。良い面も悪い面も含めてフィールの師匠である彼が、真面目に仕事をすること自体がとても少ないという事は部下たちからのとても多い彼への不満である。

「何でこの俺がこんな場所で、仕事をサボっている奴を探してやらなきゃならないんだろうな」
《あんたもサボってんだろうが！！》

つまり部下からのこういう状態での無礼な台詞は、日常茶飯事になってしまったという事である。

「別にサボったりしているわけじゃないぞ！！　ここで迷惑にならないようにしているだけだ」
《つまり居なくても良いってことでしょ！！》

副官やその他の本営にいる部下たちからの一斉の言葉に、そこまでサボっているかな。と心の中で考えてみるが、
どう見ても弁解できないほど何もしていないのだから、何を言われても仕方がないだろう。

「……取りあえず、まだ見つからないのかその行方不明になった奴らは」

などと調子に乗っていって見れば

「あんたがサボらなければもっと早く見つかるさ」「上官がまともならきっと見つかってますよ」「ってか、あんたが探してこいよ」

なんて感じに、もう上官であることすら忘れられている違いない。

バルト自身は、一切気にしない事にしている……って言うか気に掛けなければならない事なのだが無視しているのだけれども。

取りあえず自分が喋らなければ周りは部下たちが見つけてくれるだろうと彼は結論付けて、事の次第を見守る姿勢に入った。

バルトが喋らなくなって数分。周りにいた部下たちは彼の部下たちは一切彼の方を見なくなった。

その間、彼の表情が少しばかり真面目なものになっていた事に気付いた人物はいなかった。

「――何でこんなタイミングで警備隊の一部が一斉に行方不明になったのだろうか？　一人二人が行方不明になる事ならあり得ない事態では無いのに」

心のうちで彼は珍しくそんな事を冷静に考えていた。

特に後者の点では彼には少しばかり不安に思う点があった……奇しくも弟子（フィール）が胸の内に秘めたまま持っていってしまったある一種の疑念。

“ミッドチルダ政府への不信”という、とても大きい火種を。

だが『今』という時期を選ぶよりは、もっと警備が少なくなる時期を選んだほうがまともな結果というものになるだろうと、当事者

側に立った場合の見解を考えていた彼は、特に何も気にせず自分の部隊をこの森にまで引っ張ってきたのである。

全く持ってその予想を外している事に気づかずに、そこで思案する事をやめた。

とは言っても思案する事をやめたら、全く持ってやる事が無くなってしまうバルトは、

珍しくまじめに仕事をしてみるか、と考え

「捜査の方に何か進展はあったか？」

《うるさい！！　仕事の邪魔すんな！！》

邪魔と勘違いされた事を少しばかり後悔した。

だが、一応上司である事を思い出してもらうべく真面目な表情で、

「……だから、捜査の方に進展はなかったのか？」

真面目に真剣に聞いてみれば、なんとか伝わったようで、

「複数人の警備隊の足跡と何者が逃亡していた形跡。そして攻撃をした跡があります」

同時に足跡や木々のかけてしまった写真などの資料を見せられた。

「攻撃した跡か……」

バルトが注目したのは一点だけ、誰かが逃亡していた事よりも攻撃の跡が残っていた点である。

「――そもそも殺傷設定にすらしていない魔力弾でこの跡が出るか？」

管理局員は基本的に殺傷設定をしないで、魔法を使う場合が多い。そうした場合、魔力ダメージだけで相手をＫＯしなくてはならないので、大変になる部分があるのだが、鎮圧する事に対してはそれほど有効的なものは無い。

その原則的なルールを無視した攻撃に彼は疑問を浮かべたのだ。

珍しく一日に何回も、それも長時間まじめに考えるをするハメになっている彼に、

「隊長。ちょっとよろしいですか？」

とても丁寧に、部下が声をかけてきた。

「ああ」

とても淡白にバルトは声をかけて、それと同時にポケットからデバイスを取り出して起動させた。

そして……。

【ｂｌａｓｔ　ｓｈｏｔ】

部下に背を向けたまま、後ろに立っていた部下の頭に目掛けて黄色い魔力弾を叩きこんだ。

その部下が倒れるよりも早く立ち上がると、すぐに振り返った。

そこで彼は気がついた。
むしろ彼が振り返った時点でそれに気付く事が出来なければ、彼は本当の愚者（おろかもの）であっただろう。

彼の部下たち全員が、彼に各々のデバイスを向けていた。
おそらく殺傷設定にした状態で、殺意むき出しでこちらに彼に向いていた。

《やっちまえ！！》

普段と大差ない様な怒号であるが、その言葉にはとっても濃厚な殺意が乗っていたように思えた。

「はてさて……恨まれるような事をした記憶でいっぱいなんだけど、どうしたものかね」

バルトがいつもの調子でそう呟くと、
ほぼ同時に、全くの容赦がない魔法の嵐が彼に向けて撃たれた。

その瞬間にバルトが見た部下たちの表情はともかく、その目は真っ赤に染まっていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ようやく修理は終わったかな？」
【以前として、動く様子は見られませんけどね】

元上官にして師匠であるバルトが部下たちの謀反？　に遭遇した時とほぼ同時刻。
古屋敷で修理作業をほぼ完了させたフィールは、取りあえず手を止めていた。
ただし、修理が終わったというよりは出来るものは全てやったのだからもう良いだろう。というただそれだけのことなのだが。

【それにしても、一応修理はしたんですよね？】
「切れてたケーブルをすべてつけかえただけの事を、修理というならな」
【それだけの事に、こんなに時間をかけていたんですか？】
「主には、無駄話に八割の時間を割いていたと自負している」

修理を開始して数時間。
そしてその大半は無駄な話に使われているのだが、修理の終わった機械は沈黙している。

フィールからしてみれば、確かに技術者であり科学者である自負はあるが流石に用途も構造も一切知らない機械の修理など元々無理だ。という風に考えていたのでこの結果自体には特に悔しさが込み上げたりするわけでもないのだが、ただとても疲れたという意味での徒労はあった。

それゆえに彼は、この機械が動いている姿……もしくは壊れる姿が見てみたかったのである。

その両極端な願い事が、悲しい事に彼をある一つの渦中に引きずり込む事になるとは知らずに。

「このポンコツが動かないのはさ。きっと動力が足りないからだと思うんだ」

【動力ですか？】

「ああそうだ。どんな物体だって――人間だって栄養分という動力がなければそのうち止まるだろ」

【そう言えばそうですけど】

「……ならさ」

そう言って彼はシャドウを銃として展開し構えた。

そして常に睨んでいる眼つきを更にきつくして、引き金に手をかけた。

「俺が直々に動力として魔力を送ってやろう。って考えてみるわけよ」

【その前に壊れると思いますけど！！】

「知るかよ」

シャドウは出来る限り丁寧に今の状態を伝えて、早まった行為を止めようと思ったが。

一言だけ言い放つと彼は引き金を引いてしまった。

硬い金属装甲ごと貫いた銃撃に晒された機械は、なすすべもなく煙を上げる。

「ようやくスッキリしたな」

そう一言だけ呟き。シャドウを待機状態に戻すと、何事もなかっ

たように部屋を去ろうとした。

しかし……。

【機械から異常な出力を検知しました！！】

という珍しいシャドウからの危険通知と、肌でも感じられるような空間の異常を確認して、

ようやくこの時点で自分が行った行動に少しばかり危機感を覚えた。

「さっさと逃げるぞ！！」

【合点承知です！！】

息を合わせて逃げる事を選んだ彼らは、この古屋敷がどうなろうが知らん、といった風な感じで長距離転移魔法の準備をした。

「座標の指定、出入り口の作成が完了」

【いけますか？】

「もちろんだ！！」

超高速でこの場から逃げるべく得意の転移魔法を組んだフィールは、無論さっさと逃げる事を選んだ。

だが彼らは走って逃げる事を選ばなかった事をこの後悔いる事になった。

何故かって？　それは至って単純な事だ。

「【八式転移陣！！】」

彼らが発動したその魔法に、
この場に満ちた時空の乱れが干渉してしまったという、二人が知り得ないイレギュラーな事が発生してしまっていたのだから。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「俺ってそこまで人望ってものがないのかな？」

部下たちの襲撃を受けたバルトは一人そう呟いていた。
ただし襲い来る者はだれ一人いない、全員が地に伏せていた。
真っ赤な瞳も何もかもが閉じられ、全員が意識というものを喪失していた。

「それにしても……マジで人望がないと部下の目は真っ赤になるもんなのかな？」

普段なら部下たちから辛辣なツッコミを受けるであろう間の抜けた発言を繰り返してみるが、誰一人として返事を返す事はない。
むしろ返せる奴がいたら、それはそれで驚きの結果というものになるのだが。

そんな中で、普段からそんな間抜けの様な態度を繕っていたバルトは少しばかり困っていた。
自分の言葉がどこかへスルーされている状態と、真面目な対応を

久しぶりにしなくてはならないのでは？　という事実に。
だが、前者の最も必要のない心配はともかく。
後者の心配に関しては、１２０％揺るがない事実になってしまった。

彼の目の前に、赤一色で統一された衣服と髪に１７０ｃｍはありそうな長身の少女が現れてしまったから。

「……初めまして紅蓮の衣装がお似合いなお嬢さん。このような場所で奇遇ですね」

バルトは何時もの調子で語りかけてみるも、珍しくその目は真剣だった。
決して相手が美人だったからという意味ではないのだが、ようやく中途半端であるが部下たちの謀反の原因が目の前の少女にあるのではないかと考えるだけの事は出来るようになったのだ。

考えてみれば、ここにいる時点で怪しむのが普通だろうが。
あえてそこに思考が回らないのは、彼がまだ本調子でないという事だろう。

バルトは一言目を発した後。相手の返答を待った。

「一つ確認しますが。あなたがレン・クロフィールで宜しいでしょうか？」

紅蓮の少女がバルトに求めたのは、彼が彼の弟子であるかの確認であった。
そこでバルトが考えたのは、果たして自分の名前を名乗ってしま

う事が重要なのか？
あるいは、敢えて弟子の名前で名乗るべきなのか？
という、異例の二点だけである。
彼にしてみれば、そもそも何でフィールと間違えられる事になったのか？　という点も気にしてみたいのだが、
そこはいつもみたいに、あいつも追われているのだろう。　と決着をつける事にした。
「そうです。私がレン・クロフィールです。　そういう貴女はどちら様ですか？」
バルトは名乗ったうえで相手の正体を探る事にした。
すると紅蓮の少女は、素っ気なく名乗ったのだ。
「私は刀のフラメと申します」
堂々と名乗るフラメを目の前にしてバルトはこう考えた。
「――フラメってどういう意味だ？」
取りあえず目の前の相手について考える事ではなく、
その名前についてと言う、とても生産性のない無意味な事ばかりではあるのだが。
「あなたに耳寄りなお話を持ってきたのですが。お聞きして頂けるでしょうか？」
「耳寄りな話？」

フラメが明示した話題に対しては、取りあえず適当に話を合わせるにして、
「――炎って意味にしては安直過ぎるから、フラメンコの略あたりか？」などと考えていた。

「ええ。あなたの望むような世界への招待状です」
「へぇ。招待状ね」

などと軽く流した時点で彼は“招待状”という言葉の意味を測りかねた。
いや。真面目にしていれば気付く事が出来たのかもしれない。
真後ろにあった、真っ白な雪原を写すオーロラの存在に。
「おや。予定していた出口とは異なるものが出て来ちまったな」
などという声と共に、彼の姿は現代から消えた。
奇しくも、フィールと間違えられたままに。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「めちゃくちゃ寒いんだが。ここは何処だ？」
【少なからずとも、予定していた出口とは違う様に見えますが】
だよな。とフィールは返答して周りを見渡してみる。

彼らの目に映るのは、一面銀世界なうえにとても吹雪いているという、地獄の様な環境であった。

生来寒さというものを嫌うフィールは、取りあえず寒さを凌げる場所を探す為に歩き出そうとした。

しかし……。

【どうしたんですか主】

「いや……。体の調子が悪くて」

そう言って彼はそのまま雪原に倒れ込んだ。

【あるじ！！】

「……クソが」

定まらない焦点の所為で視界が揺らぐ中で、彼は自身の軽薄さを後悔した。

自分が発動した長距離転移魔法に全魔力を持っていかれるという失態をしてしまった事に。

どんなに後悔してみても、吹雪は止まずして、彼を呑み込み……大地の一部へ変えてしまうことはすでに決まっているように見えた。

ただ、その場に差し伸べられる手があった事が彼を……。

そしてある一定数の人間を救ったというのは、また後で分かる事である。

第十話　人知れず巻き込まれる者達。（後書き）

フィール＆バルト……アルハザード

という異色の時代へ行かせてみました、

次の出番こいつらに来るのかな？

っという事で次の走者は、ほっばーさんにお願いしたいと思います。

（ごめんなさい）

第十一話　暗躍（前書き）

期限をオーバーしてご迷惑をおかけして申し訳ございません。

しからば十一番手ほっぱー、参ります。

第十一話　暗躍

「なるほどな……」

そう言って東誠流寺は手元のファイルに目を落とした。
テーブルを挟んだ向かい側には東条咲夜とそのユニゾンデバイス、レフィリアが座っていた。

あれから東誠はさしたる苦もなく咲夜達との面会にこぎつけていた。
しかも東誠の目の前の2人は一応犯罪者なのだが、3人が話す部屋はおおよそその手の面会に使用される部屋とは雰囲気が違っていた。

一目で上質と分かる革張りのソファ。
汚れ1つ見当たらないガラステーブル。
さらに3人の前にはほんわかと湯気の立ち上る紅茶と、クラナガンでも人気の洋菓子店の茶菓子まで用意されている始末。
咲夜とレフィリアの右手首に着いた安っぽいゴム製の囚人用ネームバンドが無ければ、どこからどう見てものんびりしたお茶会にしか見えない光景だった。
これも全て東誠の手腕のなせる技である。

「まぁ、なんだ。　窃盗に関しては悪意があったわけでもないし、何より即牢屋行きになるほど重いものじゃない。　政府局員への傷害行為も調べれば、お前たちに非が無い事はすぐに明らかになるだろう」
「よかったぁ……」

事件の状況報告ファイルの最後の1文字を読み終えた東誠は、淡々と呟いて紅茶を手に取る。
そのリラックスした様子を見て咲夜は安堵の息を吐き、ソファの背もたれに力の抜けた体を預ける。

「だがすぐにという訳にもいかん。　それまでは窮屈だろうがここに居てもらうぞ。　なに2、3日の辛抱だ」
「は、はい。　お願いします」

温和を絵に書いたかのような口調で話を進める東誠を前に、咲夜も緊張で固まった体から力を抜いた。
何せ政府と管理局の両方に顔の利くアトラス提督が自分に面会しにきたのだ。
さらにこんな部屋に通されたと思えば監視の為の政府局員まで提督によって部屋から追い出され、アトラスを前に最初は緊張で固まっていた。
しかし部屋に入るなり提督の姿が自分も知る東誠に変わった時は数秒開いた口が塞がらなくなった。
そして開口一発、お前を釈放する為に来たなどと言われれば、緊張だけでなく色んな意味で固まってしまうのも無理はない事だった。

「主、主！　このお菓子美味しいぞ！」
「お前はもうちょい危機感持て！　つーか元はと言えばお前がじーちゃんのおにぎり食ったからだろうが！！」

それに対して緊張感などどこかに置き忘れて来たかの様な顔でお菓子をぱくつく相方を怒鳴り散らし、咲夜は別の意味で頭を抱える。
本格的にこの世の常識を1から叩き込むかと考えつつ、咲夜も東誠に倣って紅茶に手を付ける。

「では俺は手続きと捜査の指示に行ってくる。　適当に寛いだら戻ってくれ」
「はい。　何から何までありがとうございます！」
咲夜より一足先に紅茶を飲み終え、東誠が席を立ちそれを見送ろうと咲夜も席を立つ。
それに気にするなと一言返し、アトラスに姿を変えた東誠は部屋を後にした。
「はあぁぁ……。　マジで助かったぁ……」
人目が無くなった事もあり、咲夜は今度こそ全ての緊張から解き放たれ、ソファに倒れ込むように体を預ける。
拘束され、即放り込まれた冷たいコンクリートに覆われた部屋にあった簡素な作りのベッドとは雲泥の差の柔らかさが咲夜の体を包んでくれた。
「む……。　拘束されたままだとはやてとの結婚を許してもらえないからか？」
「当たり前だろ！！」
微かな嫉妬を含んだレフィリアの一言に咲夜は間髪入れずに応対する。
理由はどうあれ政府に拘束されたなんてことが未来の兄（咲夜の中では予定ではなく確定事項）に知られようものなら、結婚どころか今後一切会えなくなる可能性すらある。
収監された後その考えに至ってから東誠が来るまでの数時間、咲夜は奇声を上げながら壁に頭を打ち付ける、体育座りでコンクリートの地面に後が残るまでのの字を書く、不意に立ち上がってはやての名前を大声で叫ぶ、虚ろな目ではやてさんごめんなさいはやてさ

んごめんなさいと呪詛の様に呟き続ける等ここには書ききれない程の異常行動をとり続けていた。
そしてそんな咲夜を見てレフィリアが必死で止め、無駄だと分かって泣き叫ぶ、それを牢屋の看守に怒られると政府監獄の一角はカオスを絵に書いた様な状況に成り果てていた。

そんな咲夜に救いの手を差し伸べたのが東誠であった。
咲夜からすればどれだけ感謝してもし足りない存在だった。

「2、3日……。　2，3日なら耐えられる……！　はやてさん！　俺は耐えてみせます！」
「うぅ……。　ここから出られるのは嬉しい……。　嬉しいのだがこの胸がモヤモヤするのは間違いなく主のせいだ……」

3日後に向けて高らかに決意表明する咲夜からぷいと咲夜から顔を逸らしたレフィリアが口にする甘いはずのお菓子に少ししょっぱい物が混じったのは言うまでもない。

◆◆◆

「あぁ。　暫くしたら中の二人を牢に戻しておけ」
「はっ」

面会に使用した部屋を後にし、すぐ傍に控えていた政府局員に支持を出し、アトラスはその場を後にする。
ふと窓の外を見れば黒に染まった空にはミッドチルダの夜空の主役、二つの月が顔を出していた。

「ふっ……」

笑う。
それは咲夜達の釈放が滞りなく進むための安心から来る笑みでもなければ、政府局員の無能さに対する嘲笑でもない。
二つの月に照らされて笑みを浮かべる彼の心の内を知る者は、まだ少ない。

アトラスは政府局員への指示もそこそこに政府拘置所を後にする。
暫く歩けば夜にも関わらず大通りは賑わい、昼間と変わらない程の人が思い思いに行き交っていた。

ミッドチルダ最大の祭典とも言える建国祭。
その祭りが開催されている間、文字通り首都クラナガンは眠らない街と化す。
賑わいの衰える気配すら見せないクラナガンの街の中に、変装を解いた東誠流寺は静かに消えてゆく。

眠らずとも、休まずとも、時は過ぎる。
時間の流れは止まることはない。

――ミッドチルダ建国祭の1日目が終わりを迎えようとしていた。

◆◆◆

もう諦めたほうがいいんじゃないかな……とのヴィヴィオのお言葉をやんわり突っぱね、カナンは血走った目で祐希奈が手に持つ本に目をやる。
カナンにとってアレはこの世に存在してはいけない部類のものだった。
必死にそれを取り返そうとするたびに傷つき……
倒れ、それでも尚立ち上がる。
実に王道といっても差し支えない展開なのだが、如何せん取り返そうとする物が物だけに何とも締まらない感じになっている。
「オレにとっちゃ死活問題なんだよ！！」
……あえてもうこの行為に反応するのも止めていいだろう。
「地味にひでぇ！！　……ん？」
涙目のカナンは視界の端に気になるものを捉えた。
俯いたヴィヴィオだ。
ヴィヴィオは少し顔に影を落とし、ここではない何処かを見るように虚空を寂しげな瞳で見ていた。
「ヴィヴィオ？」
「……アインハルトさん、大丈夫かなぁ……」
前日はやてから祭りを楽しんで来いとのお達しを受け、街に繰り出そうとしたカナン達一行にアインハルトは少し一人で考えたい事があると言って別れたのだ。
そして今日もヴィヴィオが一緒に祭りを回ろうと誘ったのだが、断られてしまっていた。

無理もない話ではあった。
アインハルトは古代ベルカで深く関わった、覇王クラウスの記憶を少なからず受け継いでいる。
かつてその記憶故に強さを求め、通り魔紛いのストリートファイトを行い、軽い問題になった事もあった。
そんな彼女が己の原点そして目標とも言える人物と顔を合わせ、言葉を交わし、共に肩を並べて戦ったのだ。
こうして落ち着いて考える事が出来る時間が出来た今、彼女の中では様々な思いが渦巻いているのだろう。
それこそ他者が入り込む余地などない程に。

「……」
「ヴィヴィオ……」

本来ならヴィヴィオはアインハルトと一緒にいたかっただろう。
しかしアインハルトと違い、聖王のコピーたるヴィヴィオに元となったオリヴィエの記憶は一切なく、アインハルトの助けになるのは難しいのが現実だった。
そんなアインハルトをヴィヴィオが心配しないはずもない。
そしてそんなヴィヴィオをカナンが心配しないはずがない。

「……」
「ん……。　カナン君……？」

気付けばカナンはヴィヴィオの頭を撫でていた、

「大丈夫だって。　俺、アインハルトの事はあんまりよく知らないけどさ、なんか大丈夫な気がするんだよ」
「カナン君……」
「なんて言うか強そうなんだよ。　腕っ節とか魔法がとかじゃなく

て、心がさ。　だから何となく大丈夫そうに見えるんだよ」

カナンの言う事は全て憶測の域を出ないものだった。
だがそう語るカナンの横顔と淀みない物言いには、何処か確信めいた説得力があった。

「だから信じててあげようぜ？　友達だろ？」
「……！！　うん！」

友達を信じる。
その言葉にヴィヴィオは顔を上げる。
その顔を見て、カナンは笑みを見せた。

「よし、じゃあ行こうぜ。　祐希奈にまたどやされそうだしな」

そう言って歩き出すカナンの背をヴィヴィオは追いかける。
しかしその顔は先ほどとは別の理由で曇っていた。

（なんでこういう時だけ妙に鋭いんだろう……）

いつもは鈍感野郎な風間カナン。
鋭さを見せたと思えばそれは自分以外の女の子について……。
ヴィヴィオが不機嫌になるのも致し方ない。
そのうち後ろから刺されはしないかと心配になる男である。
というか１回位刺されなければこの鈍感さは治らないのではなかろうか。

「さっきからなんか酷い言われようをされてる様な……。　……ん？」

軽く涙ぐんだ顔で祐希奈の方を見れば、いつの間にか祐希奈は足を止め、一人の青年と話していた。
青年の手には例のアレが。
「ちょっと待てよ！！　なんでさも当然の様なナチュラルさで新さんがそれをグボアァっ！！？」
「うっさいからちょっと黙ってなさい」
鉄拳一発、誠に理不尽である。
それを見て相変わらずだなとくつくつ笑う青年。
八神新がそこに居た。
「久しぶりに会ったってのに変わらねぇな、お前らは」
一頻り笑った新は三人と一緒に歩きながら親しげに話しかける。
カナン達と新の出会いに関しては紆余曲折あるのだが、今は割愛しておく。
「で？　新は戦技披露に行かなくていいの？」
「あぁ、俺の出番はまだ先だしな。　出番が来るまでに飯でも済ませとこうかと思ってよ」
「あぁそう、じゃあ奢るわよ？」
「マジで？」
「カナンがね」
「ちょっと待って、おかしいだろこの展開！！」
「あはは……」
喚くカナンと苦笑いするヴィヴィオをよそに、手近な屋台を物色し始める二人。
なにやら出会った当初から馬が合うらしく、二人はずんずん話を

進めていく。
そしてものの数分でベンチに座る４人の手には、祭りの定番たこ焼きが収まっていたのだった。

◆◆◆

「ホント元気だねぇ……」
正拳、膝蹴り、掌底。
「何もそこまでムキになんなくてもいいじゃない！！」
前蹴り、裏拳、肘打ち。
「いいんじゃない？　これ結構楽しいし！！」
手刀、回し蹴り、踵落とし。

四者四様。
思い思いの方法でサンドバッグを打つ。
それに伴い鳴り響く鐘。
攻撃一発につき一回の鐘の音が周囲に響きわたり続ける。
この『鐘鳴らし』ただ力任せに殴ればいいというものではなく、殴るポイントや力加減が割と難しいのだが、そこは近接戦闘主体の４人。
コツを掴めばこの程度はお手の物である。
ここまでの散財を取り返そうとサンドバッグを殴った甲斐もあり、イベント係員に「もう勘弁してくれ」と止められるまでに４人合わせて１００を超えるポイントを稼ぎあげていた。

「じゃあ俺ポイント換金してくる！！」

皆から受け取ったポイントカードを手に笑顔満点で駆けていくカナンを見送り、残りの３人はジュースを片手にベンチに座る。

「ふぅ～。　楽しかったですね」
「俺たちはな。　止めに来た係員、最後半泣きだったぞ。」
「カナンのせいでしょ。　止めても目血走らせて殴ってたもん。ホント子供よね、アイツ…」

余程財布の中身を毟り取られたのだろう。

カナンは祐希奈の鉄拳を叩き込まれるまで一心不乱にサンドバッグを殴り続けていたのだ。

「全く、あんな事があった後だったってのに……」

「あんな事？」

「あ～……。　実はね……」

軽く話してしまって良いものかと一瞬悩んだが、いずれはやてによって伝わる事だろうと考えた祐希奈は新に前日起こった事を伝える事にした。

そして大まかなあらましを聞いた新は祐希奈とヴィヴィオに質問し、大抵の事情を把握する。

「なるほどな……。　こりゃ戦技披露会なんて出てる場合じゃねぇかもな」

事情を把握したものの新の口調が目に見えて不機嫌になっていた。

それもそのはず自分が呼ばれなかったからである。

この男もまたはやてが困っているならば例え火の中水の中。

歳を重ねて落ち着いてはいるものの、新も十分すぎるほどにはやコンなのである。

一応咲夜が拘束されずに人員集めをしていれば昨日の内に新にもお呼びはかかっていたのだが、咲夜が拘束されている事を知る由もない新は取り敢えず次に会ったら咲夜を殴ろうと心に決めた。

言わずもがな八つ当たりである。

同時刻冷たい牢屋の中のはやコンが凄まじい寒気を感じたのは言うまでもない。

「つーかここでジュース飲んで落ち着いてる場合でもねぇな。　ち

ょっとはやてのとこ行ってくる」
「ちょっと待って。　それなら私達も行くわ」

はやての元に向かおうとした新に祐希奈の声がかかった。
祐希奈は飲み終えたジュースのカップをベンチ傍のゴミ箱に放り込んで立ち上がり、新を見据える。

「遊んでても気になって仕方ないのよね。　はやてさんはあぁ言ってくれたけどどうにも……ね」
「私も……。　なにか出来ることがあるなら手伝いたいです」

はやてが祐希奈達の手を借りるという事は先程祐希奈の口から聞いた新が断る理由は無い。
3人はカナンが戻ったらすぐにはやての元に向かう事に決め、カナンを迎えにポイントの換金所のある広場に向かう。
しかし……。

「ん？」
「え？」
「お？」

3人揃って素っ頓狂な声を上げて固まった。
視線の先にはカナンがいた。
数人の政府局員に囲まれ、護送車に放り込まれ、護送車はそのまま走り去る。
余りにいきなりの出来事に3人は見間違いと判断し、祐希奈は念話を飛ばし、ヴィヴィオは手持ちの通信端末で通信し、新は換金所の周りを探し歩いた。
しかしその結果さっき護送されたのがカナンである事を裏付けてしまった。

「「「……」」」

そして再び固まった後……。

「どどどどうしよう！？　今のやっぱりカナンくんだよぉ！！」
「おおお落ち着きなさいヴィヴィオ！！　じゃあなんでカナンが捕まんのよ！？」
「わかんないよー！！」
「いやいや、２人共取り敢えず落ち着けって。　な？」
「アンタはなんでそんなに落ち着いてんのよ！？」
「……こういう時、焦った方が負けなのよぉうふッ！！」
「そんな悠長な事言ってる場合じゃないでしょうが！！」
「人殴ってる場合でもないと思うね……」
「カナンくーーーん！！」

公園の一角は阿鼻叫喚と化した。

◆◆◆

ところ変わって次元転移装置が設置されている広場。
転移の準備を進めていたはやてに通信が入った。

「もしもし？　祐希奈？」
『はやてさん？　そっちにカナン行ってる？』
「カナン君？　いや、来てへんけど……。　どないしたん？」
『そう。　じゃあ、こっちでもう少し探してみるわね』
「あ！　祐希……切れとる……。　咲夜君も帰ってこーへんし……なんなんやろ……」

僅かなやり取り。
はやてがそれに感じた微かな不安は僅かな間をおいて現実のものとなるのだった……。

◆◆◆

何かがおかしい……。
カナンが拘束される謂れなど無い。
しかし現にカナンは拘束されてしまった。
新は祐希奈にはやてと連絡を取る様に言ってすぐにどこかに消えてしまった。

「祐希ちゃん……。　カナン君、どうなっちゃうのかな……」
「間違い……で済めばいいけど……」

そう口にする祐希奈だが心の中には拭いきれない不安の様な物が渦巻いていた。

「どーやら間違いじゃ済みそうにないみたいだな」

そう考えている内に新が戻ってきた。
そして手にした自身の通信端末を上着のポケットに放り込み、かわりに分厚い黒塗りの端末を取り出した。
タッチパネル式のそれのディスプレイの上で指を滑らせ、ページを開く。

「これ、見てみろ。　最近捕まった逮捕者のリストなんだけどな、カナンの名前がある」

新が指さす画面の中央。
そこには確かにカナンの名前が記入されていた。
しかし……。

「でもこれって……！！」
「罪状がどこにも書いてないじゃない！！」

そう通常ならば逮捕者の名前のすぐ横に犯した犯罪の名称が記入されているはずなのだ。
カナンの様に現行犯逮捕されたのなら尚更の事。
しかしカナンの罪状の欄は未記入のまま空欄になっていた。

「祐希奈。　はやてはなんて言ってた？」
「カナンの事は何も……。　あと咲夜が昨日から帰って無いらしいんだけど……」
「……咲夜も捕まってるみたいだな」
「「……え？」」

祐希奈とヴィヴィオは揃って絶句する。
そして端末を操作して昨日の逮捕者を見てみると、そこには咲夜とレフィリアの名前が記入されていた。

「そんな……」
「これってどういう事よ……」
「しかももう全員の簡易裁判の日取りまで決まってやがる。　こりゃどう考えても異常だ」

ここまで来るともう異常を遥かに通り越した事態である事は言われずとも2人にも理解出来る。
管理局員が2人も拘束され、内1人は罪状も定かではないというのに逮捕されている。
更にはその事が所属する隊に知らされていない。
そして祐希奈とヴィヴィオは1つの結論に至る。

「まさか政府が何かしでかそうとしてる……？」
「十中八九そうだろうな」
「でもなんでカナン君達が……！！」

「それはわからん。　でも暗躍してるだろうお偉い方はちょっとした綻びをつついて管理局を瓦解させるシナリオを書き上げてるんだろうよ。　でなきゃこんな大層な事はやらないだろ。　カナンや咲夜はそれに巻き込まれただけだろうな」
「そんなっ……」

管理局と政府の不仲はここにいる全員の知るところだった。
しかしこうもあからさまな手段に打って出るなど誰も予想だにしていない事だった。

「でもま、未だに誰にも公表されてないってのは好都合ではあるよなぁ……」
「……？　どういう事ですか？」
「カナン達の逮捕はまだ誰にも知らされて無い。　一般人は勿論、6課にも公表されてない……。　って事はだ。　カナン達が捕まってるのを知ってるのは何かやらかそうとしてる政府の一部と俺達位って事だ。」
「……何が言いたいのよ？」
「今ならなんとか助け出せると思わないか？」
「「あ……！！」」

新の言葉に2人は顔を上げる。
今カナン達を助けたとしたらカナン達の罪は無かった事になる。
まだ誰にも公表されていない以上、助け出した後にどれだけ騒ごうと再逮捕など出来る筈もない。
何故なら少なくともカナンは罪を犯してなどいないのだから。

「咲夜とレフィリアの事はどうかわからないにしても、取り敢えずカナンだけならなんとかならなくもないだろうな。　……どうする？」

そこで新は2人に向かって問いかける。

――やるか、やらないか

新は暗にそう言ったのだ。

今からやろうとしている事は公になれば理由はどうあれ立派な犯罪行為。

もしバレれば機動6課どころか管理局全体の信用問題にまで発展しかねない。

しかし……。

「何言ってんのよ……。　やるに決まってんでしょ！！」

「こんな理不尽にカナン君が巻き込まれていいはずありません！！」

2人は間髪入れずにそう言い切った。

一瞬たりとも悩む事なく決断した2人を見て新は一瞬呆気に取られ、直後に吹き出した。

そしてここまで想われているカナンに軽い殺意が沸いた。

「そういえば政府の逮捕者リストなんてどうやって手に入れたのよ

？　まさかハッキング？」
「俺がそんな頭脳派に見えるか？」
「……じゃあ、どうやってあの端末……」
「そこらへん警備してた政府局員からすれ違いざまにスリ……ちょいと拝借した」
「いや言い直しましたけど全然誤魔化せてないですよ！？　えぇ！？　っていうかそれって犯罪じゃ……！！」
「バレなきゃいーんだよ。　気付かれないようにスったから無くしたと思ってるって」
「もう隠す気ないですよね！？　い、いいのかな……」
「良くはないでしょ……。　アンタのその無駄に手際のいいとこ偶に尊敬するわ……」
「そりゃどうも」

ついでに政府拘置所に向かう途中こんな会話が交わされていたそうな……。

第十一話　暗躍（後書き）

今回時間軸を移動したキャラはいません。
しかし他の作者様のキャラを動かすとは難しい……。
では次はｍｅｂｉｕｓさんにパスさせていただきます。

第十二話　飛ばされる者達（前書き）

かなり期限ギリギリですね……ども、十二番手のｍｅｂｉｕｓです。中間テスト＆模試と時期がもろ被りした事もあり、なかなか執筆時間が確保できずにここまで遅れてしまいました。そのうえ文字数も少ないという……。

それでは、どうぞ。

第十二話　飛ばされる者達

時は少し戻り、カナンが逮捕される少し前。
カナン達からは離れた場所で建国祭を楽しんでいる三人の男女がいた。
――いや、正確には二人の男女と一人の融合騎、か。

「……おい、そろそろ向かった方がいいんじゃないか？　戦技披露会の時間も近いし」

融合騎を肩に乗せた男性が尋ねると、女性は振り返った。
その動きに合わせ、肩ほどまである茶髪を纏めたポニーテールが揺れる。

「まだまだ大丈夫よ。……それとも、私と一緒にいるのが嫌になった？　未来」
「い、いや。そういう訳じゃねえけど……」

上目遣いで見つめてくる女性――のぞみに、男性――未来は少し赤面しながらもそう否定した。
その言葉を聞くとのぞみは笑顔になり、未来の右腕を抱いた。

「ならいいじゃない。ほら、次行くわよ、未来！」
「お、おい！　のぞみ！？」

のぞみは嬉しそうにそう言うと、未来の腕を抱いたまま駆け出した。
突然腕を抱かれた事に戸惑いながらも、未来は躓きそうになりながらついて行く。

何故のぞみが嬉しそうなのかは理解できていないが。

「せっかく溜めてた有休使ったんだし、もっと楽しまないとね……」

未来に腕を引きながら、のぞみはそう呟いた。

長年溜めていた有休を使い、何とか警備の仕事は入らずに済んだ。

戦技披露会だけは入ってしまったが、それでも未来と共に過ごせる時間はかなり多いだろう。

「ん？　何か言ったか、のぞみ？」

「別に。何でもないわよ♪」

未来の問いに対して、のぞみは腕を引いたままはぐらかした。

未来と一緒に祭りを楽しめる嬉しさからか、その声は弾んでいた。

何か機嫌良いけど……まぁ、別にいっか。

そんなのぞみを見ても、未来はそう思うだけ。

のぞみの気持ちには全く気付いていなかった。

……死ねばいいのに。

「はぁ……相変わらず、マスターは鈍感ですね。せっかくのぞみさんが素直になっているというのに……」

未来の思った事がわかったのか、未来の融合機であるルナは呆れたように溜息を吐いた。

そして振り落とされる可能性のある肩から降り、未来達の後ろを飛んでついて行くのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ん〜♪　このクレープ美味しっ♪」

買ったばかりのクレープを食べながら、未来とのぞみの二人は手を繋いで露店巡りをしていた。

しかもその繋ぎ方は俗に言う恋人繋ぎであり、傍から見ると恋人にしか見えない。

……まあ、未来の方は微塵もそんな事は思っていないのだが。

恋人繋ぎも無意識でやった事だし。

「ん……？　のぞみ、クリーム付いてるぞ？」

「え？　どこどこ？」

ふと、のぞみの頬にクリームが付いている事に気付き、未来はそう言った。

のぞみは頬に手をやるが、クリームが付いているのはその逆。

見かねた未来はじっとしてろと言うと、指でクリームを取り、自身の口に運んだ。

「え？　……っ！？」

突然の事にのぞみは一瞬何があったのか理解できなかったが、すぐに理解しその顔を真っ赤に染めた。

頭の中が真っ白になり、文句を言おうにも何の言葉も出てこない。

「な、な、なななな……」

「のぞみ……？　顔赤いけど、熱でもあるのか？」

何故赤くなってるのか全く気付いていない未来はそんな事をのたまうと、のぞみの額に自身の額をくっつけた。

……いや、額同士をくっつけなくても確認できるだろ。
まあ、当然の如くのぞみの顔は更に赤くなる。
湯気が出ているように見えるのは気のせいだろう。
「やっぱ熱あるな……そんなんで披露会に出られ……のぞみ？」
「あ・ん・た・は……！」

ついに限界を超えたのだろう。
のぞみは繋いでいない方の腕を引き絞った。
その拳は薄っすらと白銀に輝き、魔力が纏われているのがわかる。
「ちょ、のぞみ！？」
「この、鈍か……っ！」

ああ、久々だな……などと思いつつ、未来は来たる衝撃に備え目を閉じる。
しかし、一向に衝撃はやってこない。
疑問に思いながら目を開けると、のぞみの拳は当たる直前で止まっていた。
魔力も消えている。
「今日は殴らないって決めたんだから……！　落ち着け、私……」

何と言っているのかは未来には聞き取れなかったが、のぞみはそう呟くと深呼吸をした。
未来を殴らないという決意を貫く為に。
今までのぞみは未来と二人でデートした事が何度かあった（未来はデートとは思ってないが）。
しかし、その度にのぞみはふとした事がきっかけで未来を殴って

しまい、最後まで楽しむ事ができなかった。
その為、建国祭では未来を殴らず、素直でいると決めたのだ。
ちなみに、できれば建国祭の間に告白しようなどと考えてもいる。

「……よしっ！　ごめんね、未来」
「いや、別に気にしてねえよ。それより、祭り楽しもうぜ」

両の掌で頬をパシッと叩き気合いを入れ直すと、のぞみは手を合わせ謝る。
それに未来はそう返すと、再びのぞみの手をつかんだ。
無意識とは分かっているものの、のぞみは繋いだ手から伝わる温もりに笑顔になる。

「……えぇっ♪　とりあえず、次はどこかで体動かしましょ♪」

さっきの鬱憤も晴らしたいし。

そんな事を考えつつ、のぞみは未来の隣に並び歩き出すのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……流石にあれには入りづらいわね」
「……そうだな」

そう呟く二人の視線の先では、一人の少年が一心不乱にサンドバッグを殴り、鐘を鳴らしていた。
『鐘鳴らし』に勤しんでいるカナンである。

「これじゃ、鐘鳴らしはできそうにないな」
「そうね……流石に、係員の人が可哀想だし」

サンドバッグを殴り続けるカナンを見て、二人はそう呟いた。
二人は体を動かす為（のぞみの場合は鬱憤を晴らす為でもあるが）に『鐘鳴らし』をやりに来たのだが、知り合いであるカナンがやっているのを見つけ、遠くから眺める事にしたのだ。
見つけた時は話しかけようとしたのだが、何やら話しかけづらかったので断念。
まあ、近くに祐希奈達がいたので普段のカナンの扱いから大体の事は察したのだが。

「とりあえず、別の場所に行きましょ」
「そうだな。えっと、他に運動できる場所は……」

未来は建国祭のパンフレットを取り出し、運動できる場所を探す。
しかし、どこも今いる場所から離れている為移動だけで時間を食ってしまう。

「あの、マスター、のぞみさん」
「ん？　何だ、ルナ」

近場で運動できる場所を探していると、今まで二人の後方でついて来ているだけだったルナが話しかけてきた。
探すのを一旦止め、振り向いた未来にルナは言った。

「戦技披露会の時間、大丈夫ですか？」
「あ……！？」

慌てて未来は腕に付けている腕輪――未来の愛機であるメビウスリングを見る。
主の意思を察したメビウスリングが表示した時刻を見て、未来の

顔から血の気が引いた。
表示されている時刻は、戦技披露会の会場に着かなければいけない時刻の２０分前。
今いる場所からだと急げばギリギリで間に合うが……この人混みではまず間に合わないだろう。

「どうする……？　どうすれば間に合う……？」
「……未来、こっち！」
「っ！　のぞみ！？」

どうすれば間に合うか悩む未来の手を引き、のぞみは走り出した。
突然の行動に未来は戸惑いながらもついて行く。
何か考えがあるのだろうと推測できるから。

「近道知ってるのよ！　その道なら間に合うから！」

走りながらのぞみはそう言い放つと、更に速度を上げた。
急な加速に一瞬バランスを崩しそうになるが、未来はすぐにバランスを整えのぞみの後をついて行くのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……なあ、どうしてこうなったんだ？」
「そんなの私に聞かないでよ……」

約十分後、二人は関係者以外立ち入り禁止と書かれた紙が入口に貼られていた路地裏で背中合わせになり、展開したそれぞれの愛機を構えていた。
何故なら、突然結界を張られた上に、十人ほどの男達が囲んできたから。

その服装はミッドチルダ政府のものであり、二人には何故自分達が囲まれなければならないのか理解できなかった。

「いくらここが立ち入り禁止だからって、それだけでここまで殺気を向けられるとは思えないしな……」

「当り前でしょ。……よく見なさいよ。ほら、目が赤いでしょ。操られてるのよ、あの人達」

肘で未来を小突くと、のぞみは背中越しに未来にそう教えた。

その言葉に、未来はメビウスリングを油断なく構えたまま目をやり、確かに目が赤くなっている事に気付いた。

「……どうする？　何とかしてこの状況から抜け出さないとやばいぞ」

「そりゃ、ぶっ潰すしかないでしょ？　さっさとぶっ潰して披露会行くわよ。そんで、そこで事情を話す」

「……そうするしかないのかねぇ」

言うと同時に自身の愛機――ノアからカートリッジを排出するのぞみに呆れながらもながらも、未来も構えを防御用のものから攻撃用に移す。

同時に、二人の姿が消えた。

「はっ！」

―撃！―

「でやぁっ！」

―閃！―

次の瞬間、二人はそれぞれ別の男の懐に潜り込み、愛機を振るっていた。
突き出されたのぞみの拳は的確に男の鳩尾に決まり、振り下ろされた未来の剣は男の頭部を強打。
非殺傷とはいえ、十分な威力を持つその一撃に二人の男は気を失った。
更に動きは止まらず、未来は隣の男の足を払い転倒させる。
しかし追撃はかけずに、後ろへ跳ぶ。
同時にその下を体を低くしたのぞみが通り、転倒した男に拳を叩き込んだ。

「はぁっ！」

そして、後ろへ跳んだ未来は振り向き様にそこにいた男の胸部に蹴りを入れ、わざと他の男を巻き込むように吹き飛ばす。
そこへカートリッジを排出し、刀身に魔力を纏わせたメビウスリングを振るった。
魔力斬撃が放たれ、二人の男は小規模の爆発に飲み込まれた。

「撃て！」
「「っ！？」」

瞬く間に相手の約半数を倒した二人へ、残った男たちは大量の魔力弾を放つ。
中には死角から放たれたものもあるが、Ｓランクオーバーの二人には通用しない。
あるいは切り裂き、あるいは拳で打ち消す事で二人は魔力弾を無力化すると、再び駆け出した。

――数分後、そこに立っているのは未来とのぞみの二人だけだった。
男たちは全員気を失い、地面に倒れ伏している。
「これで終わりか……さっさと行くか、のぞみ」
「そうね、早く行き……っ！？　待って！」
愛機を待機形態に戻し、再び走り出そうとする未来の襟をのぞみが掴んだ。
ぐえっ、などと聞こえた気もするが気のせいだろう。
「気のせいじゃねえよ……！　て、のぞみ？　いきなり……」
どうした、と続ける事はできなかった。
何故ならのぞみの視線の先に広がっている異常なものに気付いたから。
――それはまるでオーロラのようで、しかしその先に広がっているのは路地裏ではなく、鬱蒼と生い茂る森だった。
「何だ、これ……」
「わからない……でも、誰かに連絡した方がいいことだけは確かね」
そう言うと、のぞみは空中に画面を展開し誰かしらに通信を繋げようとした。
しかし、突然としてオーロラが動き出した――未来達の方へと。
「っ！？　マスター！　のぞみさん！」
「え――っ」

それに気付いたルナが二人に声をかけるが、時すでに遅し。
何の抵抗もできず、三人はオーロラに飲み込まれ消え去った。
そして、オーロラも消え去ったその後に残されたのは気を失った政府の男達だけだった――。

第十二話　飛ばされる者達（後書き）

未来＆のぞみ＆ルナ…原始

のぞみのデレがかなり増えてますが、クロス設定ということで（ぇ

では次の走者は……オメガさん、お願いします！

第十三話　再会したくない相手（前書き）

どうもバトンを任されてオメガです。

今回はうちのキャラを3人とも出しました。

若干、ネタに走てます。

第十三話　再会したくない相手

クラナガン・アパート

洗濯機を目の前に刀を腰にさし、腕輪を付けた少年が体育座りで座っていた。

【あの、マスター、これはどう言う状況でしょうか？】

「なにって、洗濯してるに決まっているだろブレイブ」

少年は腕輪の形状をした愛機、ブレイブハート――通称ブレイブに対して遠い目をして答えた。

【そうではなくてセロ。世間は建国祭で賑わっているというのに何で我々は自宅に引きこもっているんだ？　と言う話だ】

「祭りなら行ったじゃん。この間デパートの家電祭り」

今度は刀型のデバイス、ルシファーの問いに対して少年――セロは面倒臭そうに答えた。

それ以前に、建国祭と家電祭りを同列に並べるのはどうかと言う話である。

同じ祭りでも、国とデパートと言うだけでもかなりの規模の差が確実にある。

「そもそも金のほとんどこれに使っちゃったし」

【だから、あの時隣にある一世代前の旧型にしとけと言ったんだ！

！】

「そう言う問題！？　怒るポイントズレてないか！？」

ルシファーの何とも言えない怒りにセロも負けじとツッコミを返す。

「えぇ、だって買うなら最新型の方がいいじゃないか！！　だって、こう言う時じゃないと買えないんだぜ」

ルシファーの方が確実に正論だと思われる。

最新型だからと言って、それが必ずしも当たりとは限らないのだから。

ハズレの可能性だってゼロではない。

【だからって有り金をはたくのはどうかと思いますよ？　マスター】

「有り金？　違うぜ、ブレイブ。これはユーノさんに足りない分、“借金”して買ったんだっ！！」

セロは親指を立てながら、自身満々に答えた。

【威張（いば）るな。自信満々に答えることでは、全くと言っていいほどない！！】

セロの発言に嫌気がさしながらも主のために頑張ってツッコミを入れるが大した効果が無い。

「ちなみに、返す目処は立っていない」

【おい！】

追い打ちを掛けるように、セロはさらに満面の笑みで付け加えた。
要するに返す当てがないため、気まずい接触をさけたいと言うことである。

（ダメだ！　この子早くどうにかしないと……）

「と言う訳で、俺は現実逃避、洗濯ものを干す」

セロはそう言いながら、洗濯機から、洗濯ものを籠（かご）へと移しだした。

今更だがこの男、さらりと現実逃避と言う言葉を紡いだ。
自覚があるなら、借金を返す方法を考えろと言う話である。

【ところで、小僧、ベランダにでてるオーロラはなんだ？】
【マスター、怪しいから今日は部屋干しにした方が……】
「ごめん、もう吸い込まれ始めてる！！」

ルシファーが尋ね、ブレイブが警告した時には既に時遅し。既にセロは片足を吸い込まれていた。
そして、そのまま完全にオーロラに吸い込まれた。洗濯ものごと。
今まで、いろいろな人間が姿を消していったが、洗濯ものを干そうとして、そのまま時間を超えたのは彼が初めてだろう。南無。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

クラナガン・市街地

「だから、僕は男だと言ってるだろ！！」

「ひでぶ！」

銀髪をした局員が、比較的にチャライ恰好をした男を殴り飛ばした。

「たっく、なんでこういう頭の軽い馬鹿がどこでも沸いてくるんでしょうね？」

局員――デミルはチャラ男に少々苛立ちながら、言葉を口にした。デミルの外見は、首のあたりまで伸びた銀髪に、緑と淡いピンク色のオッドアイ、中性的で整った顔立ちをしている。そのため、一見すれば、女性とも間違えられることも多い。

だから当の本人は士官学校の時代から、いろいろと苦労している。

「それでもいいから俺と……」

「来るな！　変態！！」

「……そこはダメだろっ」

チャラ男は立ち上がり、再度アタックする前に股間を蹴りあげられ力なく倒れた。

強烈な蹴りを男性の大事な部分に大ダメージを受け男は悶絶する。これが本当の急所に当たった。更に男にとっては弱点でもあるがために効果は抜群と悶えるしか他ない。

「ふぅ、ようやく収まりましたか……。さて、仕事に戻りますか」

チャラ男（変態）を放置して、デミルはその場から離れて行った。悶絶している変態は他の誰からも相手されないまま悶え続けていた。

この変態に近づける者は恐らく局員か同じ変態くらいだろう。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

変態とのやりとりからしばらくして。

シルバーポイントの換金所のある広場にて、デミルは足を止めた。

尚、シルバーポイントは建国祭で使用できるポイントの事であり、いわゆる商品券的な位置付けのモノである。

「あれは確か……風間カナン君でしたっけ？」

直接の面識はないが上司であるティアナ・ランスターから、以前話を聞いたことのある少年だ。

その少年が、何故か政府局員に囲まれ、護送車に放り込まれていた。

そして、そのまま護送車は走り出した。

「これは、どうしたもんでしょうかね？」

無論、デミル自身も管理局と政府の不仲は良く知っている。

だが、同時に捕まった少年に関しても人から聞いただけでよくは知らない。

政府の言いがかりの線もあるが、同時に少年が何かをしたと言う線も捨てきれない。

上司の知り合いだからと言って首を突っ込むのは、よくない事であろうし、なにより一般人にも政府側にも、局員として示しがつかない。

なによりも、本当にその護送車に乗せられた少年と面識がない。

自分が下手に動いても、事態が好転しないことは目に見えている。

自分にはあからさまに判断材料がなさすぎる。

広場の一角で“少年の知り合いらしき人物の叫び声が聞こえた。”
それだけでは決め手として弱い。
取り敢えずは上司に連絡をして判断を仰ぐ。
「――これが、僕には一番妥当な判断でしょう」
そして、自分の端末の電源を入れる。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「ここどこだよ？」
【知りませんよ？】
【見当もつかん】

オーロラを抜けた先を見てセロは苦笑いを浮かべた。
辺り一面、廃墟だった。

「取り敢えず、人を探すか」
【案外、知り合いがいるかも知れんしな】

状況を知るために行動を開始しようと、籠に手を伸ばした瞬間……
レーザーが当たり、籠は崩壊した。

「なぁ、今のってスゲー見覚えがあるんだけど……」
【あぁ、間違いなく奴だろう】
【知り合いがいるかもしれないと言いましたが、よりにもよって……】

セロはルシファーを握り、ブレイブをいつでも起動できるように構えてレーザーが飛んできた方向へ視線を向ける。

そこには、ガジェットと共に一機の鉄の蠍（さそり）がこちらに向かってきていた。

できることならもう二度と会いたくない奴だ。

第十三話　再会したくない相手（後書き）

セロ：現代→崩壊したミッドチルダ

デミル：現代

１１月は卒論締め切り一か月前なので、こちらの執筆含め活動報告以外は、お休みします。

では、次のバトンは月兎さん、お願いします。

第十四話　準備！（前書き）

代筆、二階堂です。期限オーバーすいません（汗）さらに本文も短いという……本当にダメダメですね（汗）

第十四話　準備！

時代は古代ベルカに戻る。魔王タカトの槍皇城襲撃を経て地帝領の中心地にある地帝城に向かう昶、イルナリア、サクラの三人は地帝城に向かう途中にある町、イクトナに立ち寄る。

そこでイルナリアと昶の新しい服などを買う予定だったが、服屋でとあるハプニングが発生。サクラの全力の一蹴りが昶をぶっ飛ばし、彼はそのまま意識を手放したのであった。

「馬鹿馬鹿馬鹿

は罰を、確かに間違ってなどいない。

「それいいね！　うん、昶には何か罰を受けてもらおっか！」

「余り酷なものは……」

「大丈夫だって。昶にも簡単にできるやつだし、あいつ自身が嫌がらなきゃ、ね♪」

先程までの怒りはどこへやら、一転して楽しげな表情を浮かべ、中途半端に終わっていなかった着替えを済ませたサクラに苦笑を浮かべ、イルナリアもサクラが選んだ新しい衣服に着替えた。

「いつも似たようなお洋服でしたから、こういった服も新鮮でいいですね♪　サクラさん、似合ってますか？」

「もうバッチリ！　やっぱり私の見込みに間違いはなかったね」

ウインクにピースサインまでつけて大絶賛するサクラに嬉しげな笑顔を輝かせ、最後に歩きやすいようにと購入したブーツを履いて更衣室を出る。

「あれ？　人混みができてる……」

「そのようですね……ところで、昶はどこに行ったのでしょう？」

「私が蹴ってぶっ飛ばしたから……まさか……」

サクラはあの人混みの原因に思い当たる節があるらしく、リボンの色に合わせたスニーカーを急いで履いて走り出す。思い当たる節どころか原因を作ったのは彼女なのだが。

「あー、やっぱり……」

やはりというか、人混みの中心には気絶したままの昶がいた。と

いうか、店先に何故か気絶した男がいるのだ。むしろ人混みを作らないほうがおかしい。
仕方ない、と溜め息を吐いたサクラは腕力を強化。兄、姉と同じ高速移動魔法で昶を回収し、イルナリアのもとへ戻った。

「騒ぎになるといけないし、どっか行こっか」
「騒ぎには既になってると思うのですが……」
「細かいことはいいのっ！」

昶の服の襟を掴んだまま、サクラとイルナリアは服屋周辺から退散する。これ以上騒ぎになっては面倒だし、バレないとは思うがここには槍皇の娘がいるのだ。誘拐など冤罪を着せられる可能性もなくはない。

「ここまで来れば大丈夫かな……」
「あの、サクラさん？　昶の顔が青白くなっているのですが……」
「あっ！」

イルナリアの指摘で慌てて手を離した瞬間、昶の後頭部は重力の影響を受けて地面に吸い寄せられ、鈍い音を立てて地面にぶつかる。これには気絶していた彼も一瞬で目を覚まし、後頭部を押さえながらサクラを睨む。

「何すんだよサクラ！」
「ごめんごめん、手が滑っちゃって……」
「だからってなぁ……！　つか、ここどこだ？　確か服屋で悲鳴を聞いて……」

そこまで呟いて、昶は自分がやらかした重大な失態を思い出し、今度は自らの意志で額を地面に擦り付けた。

あの時は彼自身、軽いパニックに陥っていて何が何やら分かっていなかったが、改めて考えてみるとあれはあまりに馬鹿げた行動であり、サクラの逆鱗に触れて蹴り飛ばされるのも当たり前である。

「悪気はなかったんだ！　その……あんなことがあった後で、悲鳴聞いたらもう体が動いてて……本当にごめん！」

「謝られてもねぇ……そうだ。私の言うこと五つ聞いてくれたら許してあげてもいいよ？」

「本当か！？　ありがとう、サクラ！」

条件さえ呑めば許してくれるというサクラに昶は感謝を述べて再び頭を下げる。しかし、彼は気付いていなかった。彼女の口許に浮かんだ妖しげな笑みに。これが地獄の始まり、悪魔との契約に他ならないことに。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

騒ぎが収まるのを待ち、昶達は市場の外れにある武器屋にやって来た。なんでもイルナリアには槍術の心得があるらしく、修理を終えた彼女の愛機がこの武器屋にあるのだということだ。

「誰かいませんかー？」

「ずいぶん寂れたとこだな……」

「こら、昶。失礼だよ」

率直な感想を述べた昶をサクラが小突く間、さらにイルナリアは奥へと進んでいく。確かに彼の言う通り、この店は外観、内観ともに寂れていると言わざるを得なかった。商品であるはずの剣が分厚い埃を被ってしまっている辺り、客が来ていないことを顕著に示している。

「姫様？」
「店主さん、お久しぶりです」
店の裏口から頭にタオルを巻いた短髪の若い男が出て来て、イルナリアのもとに駆け寄ってくる。どうやらこの男がこの店の店主らしい。
「どうしたのですか！　お一人で、見知らぬ者達を連れていらっしゃるなんて。槍皇様はこのことをご存じで？」
「……父には許可をいただいております。この方々は私の友人で、私の我が儘に付き合っていただいているのです」
少し長い空白の後、イルナリアは一つだけ嘘をついた。父親の許可など取ってはいない。許可を取るべき槍皇は既にこの世にいないのだから。
「今日はどのようなご用件で？」
「レイガンドの修理が終わったということなので取りに来ました」
「分かりました。直ちに持って参ります」
「お願いします」
そう言って店主は裏口の奥にある工房に戻り、すぐに指輪のケースを持って戻ってくる。そのケースの中に彼女の愛機、レイガンドと呼ばれる槍が納められているのだ。
「基礎フレームまで損傷が広がっていたのでフレームごと交換致しました。フレーム強度は以前の約2倍に上昇しましたが、機体重量も以前の1．5倍になり、多少扱い辛くなっているかもしれません」
「少し軽いと感じていたので、ちょうど良かったです。ありがとう

ございました」

指輪のケースから琥珀色の宝石が付けられた指輪を取り、イルナリアはいつものように礼を言う。そして、昶とサクラを連れて武器屋を出て行った。

「それがイルのデバイスか？」

「はい。“光槍”レイガンド、幼い頃、お父様からいただいた私の愛機です」

左手の人差し指に填めた指輪を右手で撫でながらイルナリアは昶の質問に答える。

光槍と呼ばれる由来は起動後の形状によるものだが、今は待機形態であるため二人には何故光槍と呼ぶかは分からなかった。

「うわ、もう日が暮れちゃったか」

「今日はここに泊まるしかなさそうだな。イル、宿屋の場所は分かるか？」

「任せてください」

イルナリアの案内のもと、三人は宿屋へと向かうこととなった。もちろんイルナリアの財布には一泊と言わず数日遊べるだけのも金額が詰め込まれているのだから、金銭の面は特に心配する必要はない。

だが、昶はなんとなく嫌な予感がした。次元の歪みに共に飲み込まれた部隊の仲間と同じ、あるいはそれ以上の天然であるイルナリアが何かやらかすのではないかという小さな不安と、未だ一つも告げられていないサクラからの五つのお願いに対する大きな不安、この二つが彼の心の中で渦巻いていたのだ。

そして、宿屋に到着したとき、案の定二つの不安は的中してしま

う。

「……待て、イル。お前今なんて言った？」
「え？　三人部屋を取って来ました、と言ったのですが」
「……俺、男なんですが」
「知っていますよ？」

――確かにあの時、俺が事故で二人の着替え中の更衣室に飛び込んじまった時もイルはやけに冷静というかいつも通りで……まさか、この娘、サクラが何でキレたかとかまるで分かってない？

そんな思考が頭を駆け巡るが、さすがにそれはないだろうと首を振り、恐らく自分が気を失っている時に何故イルナリアがあんなに平然としていたか聞いていたであろうサクラに視線を送って、

「昶、私はもう諦めたよ」
「馬鹿な……！」

何かを悟ったような目で微笑み返され、彼の口から驚愕に満ちた言葉が飛び出す。イルナリアは男女という性別の差を感じないのか、それ以前に城にいた人々はこの姫様にいったい何を教えてきたのか、数々の疑問が瞬時に頭を巡り、昶は頭を抱えたくなった。

だが、既にイルナリアは部屋を取ってきてしまったので今さら何を言ったところでキャンセルするわけにもいかず、半ば諦めたように溜め息を。

「昶？　どうかしましたか？」
「いや、イルはイルだなって改めて思っただけだよ。んで、俺達が泊まる部屋番号は？」

「２０２号室です」
彼女が読み上げた部屋番号を宿屋の壁に掛けられた表に照らし合わせる。すると、２０２号室は階段を上って行き止まりまで進んだところにある部屋だというのが分かった。

「二人ともー、置いてくよー？」
「ん？　ああ、今行く……って、サクラの奴、もう二階かよ……」
「私達も行きましょうか、昶」
「だな」

二階への階段を上がった先で待っているサクラに急かされ、昶とイルナリアは階段を上り、２０２号室を開けた。

「お、なかなか広い部屋なんだな」
「そりゃ三人部屋だからねぇ。あっ、シャワーついてる！」
「ここは王族や貴族がお忍びで来ることもある立派な宿なんです。外観があまり修復されていないと、そういった方々が宿泊している宿には見えませんよね？」
「じゃあ、さっき行った武器屋も？」
「ええ、そういうことです♪」

上着をベッドに脱ぎ捨て、インナーとズボン姿になった昶がベッドの上で胡座をかいたまま隣のベッドにちょこんと座ったイルナリアの説明を聞く。
とても一国を治める王の娘、つまりは姫との会話のようには見えないが、自然体でいてほしいと言ったのは彼女のほうだったので昶は直すつもりはないらしい。実際、イルナリアも何らそれを気にしている様子はない。

「ふーん、いろいろ考えられてんだな」
「みたいだね。てことは、イルナリアも何回かここに来たことがあるの？」
「はい。ここに宿泊するのは3年振りくらいですね。他にもいくつか訪れたところがあります。お話ししましょうか？」
「うんうん！　古……ベルカのこともっと知りたいし、教えて！」

サクラまで参加してイルナリアによる槍皇領の説明は続く。食生活だったり、他国にも有名な名所だったり、明日以降立ち寄る予定の町だったり、昼間の市で買っておいた槍皇領付近の地図を使って詳しく説明する彼女の豊富な知識に昶とサクラはただただ感心するしかなかった。

「以上で終わりますが、何か質問はありますか？」
「俺はないな。サクラは？」
「私も大丈夫かな。教えてくれてありがとう、イルナリア」
「どういたしまして、お役に立てて良かったです♪」

時間にして約一時間。イルナリアによるベルカ講座が終了し、昶はすっかり忘れていたサクラのお願いを実行することとなった。その内容とは、

「……俺、こういうこと初めてなんだけど」
「その言い方、なんかいやらしいね」
「初めてなのは事実だから仕方ないだろ……つか、俺でいいのか？」
「いいってば。あー、もう。マッサージ程度で何うろたえてるのよ！　それでもお酒飲める年！？　肩とか足適当に揉んでくれればいいって言ってるの！」

ベッドの上でうつぶせになっているサクラはいつまでもマッサージをすることに渋る昶のヘタレ加減に苛つき、声を荒げた。
サクラからの一つ目のお願いは今日一日の体を疲れをほぐすことだったのだが、昶はマッサージなど一度もやったことのないド素人。さらに言えば、彼はつい最近まで鈍感の名をほしいままにしてきたという不名誉な実績がある。その為、一般的な成人男性よりも女性に対しての免疫は多くないのだ。

「……分かった」

ようやく決心がついたらしい昶はベッドに横になるサクラの隣に座り、ゆっくりと手を伸ばして彼女の肩を掴み、何故かそこでぐっと力を入れた。

「痛たたたた！　ちょっと力入れすぎ！」
「悪ぃ……」
「もう、ちゃんとしてよ？」
「……善処します」

そうして苦戦すること約３０分。肩、背中、腕のマッサージがようやく終わり、次はいよいよ足のマッサージに移ろうとしていた。

「その、行くぞ？」
「ただでさえ長引いてるんだから早くして。　この調子だとシャワー浴びるの明日の朝になっちゃう」
「あ、ああ」

未だヘタレ全開の昶はやはりぎこちない動きでサクラの足を揉みほぐしていく。女性の足に触れるなど滅多にないことなのでその緊張もさらに高まり。

「ねぇ、緊張してるのまるわかりなんだけど」
「し、仕方ねぇだろ。初めてなんだって」
「ヘタレ」
「ヘタレって言うな！」

結局さらに３０分かかり、計一時間で昶の初めてのマッサージはようやく終わりを告げた。終始緊張していたせいか、精神的に余計疲れを感じる昶はすぐにベッドに倒れ伏せ、すぐに眠りに就いてしまった。

「寝るの早いなぁ、もう」
「昶も疲れていたのでしょう。私達も寝ましょうか？」
「そうだね。おやすみ、イルナリア」
「おやすみなさい、サクラさん」

こうして昶達三人の旅路、その初日が終わった。地帝領に到着するまで後６日。そこで彼らを待ち受けるものはなんなのか、旅はまだまだ続く。

第十四話　準備！（後書き）

というわけで、時間かかったわりにかなり短くなってしまいました（汗）　反省しなきゃ……

では次は月兎さん、お願いします。それではっ

第十五話　闇の左手（前書き）

どうも、月兎です。
まぁ、締め切りギリギリセーフということで……（苦笑

とりあえず、オリキャラだけです

それでは、どうぞ♪

第十五話　闇の左手

仄暗い一室に二人の影。

「人が、消えた？」

灰色の瞳を曇らせ、怪訝な顔を浮かべているのは情報一課に所属する局員、シノブ・ユキタカであった。四十過ぎの壮年の上司は真面目そうに頷く。そんな上司に雪鷹は冷めた言葉を放つ。

「お言葉ですが、一人や二人いなくなっただけで動くほど情報一課は暇でなければ、お人好しでもないでしょう」

「ただの失踪事件ではないからな」

そう言って上司の男は一枚の報告書を雪鷹に渡す。雪鷹は受け取った報告書を一読して顔をしかめた。

「目撃証言によると穴に吸い込まれるように突然消えたそうだ。魔法を使われた痕跡はないが未確認の系統の魔法という可能性もある。自然現象か何かの前兆、あるいは結果という可能性も否定はできない」

「ようするに、何も分かっていないということですね」

そういうことだ、と頷いた上司の顔はどことなく、にこやかに見えた。そんな上司の笑みを見て、雪鷹は溜め息を零さずにはいられなかった。一見すると冴えない中年男なのだが、中身は雪鷹以上に強かな切れ者なのだ。

「自然現象か或いは人為的なものなのかもわかっていない……嫌な感じだな」

漠然とした不安を呟いた雪鷹に上司はにこやかに笑う。それはもう、清々しいくらいの笑みだった。

「いやなら別の案件もあるぞ？」

差し出された書類の束にはミッドチルダ政府の文字が並んでいた。かたや一枚の紙切れ、かたや数十枚の束。どちらが詳細に書かれているのかは言うまでもなかった。

「最近、どうにもきな臭い。今までは笑って見逃せる可愛いものだったが、そうもいかなくなってきた」

顔は笑っていたが、目だけは欠片も笑っていたかった。

「管理世界のいくつかが一斉に蜂起すれば抑えきれん。もし、ミッドチルダで反乱が起きれば、他の次元世界へも飛び火する」

管理局を是と思わない人間は決して少なくはない。犯罪者はもちろんだが、管理局の思想と相容れない文化や制度を持った世界や地域、民族も存在する。それにもかかわらず、まがりなりにも管理世界として一つにまとまっているのは管理局の有する圧倒的な戦力とその組織の大きさに拠る所が大きい。

「そんな憎まれてるならいっそ滅びてしまえばいいのに」

自嘲気味に雪鷹は笑う。単一世界、或いは単一組織において管理

局を凌ぐ規模と武力を兼ね備えている所はない。つまり、一対一で管理局に勝てる世界や組織はない。しかし、それはあくまでも一対一に限定した場合の話であり、次元世界の至る所で反乱が起きた場合、あるいは複数の世界や地域が連合した場合、管理局の戦力は分散され、その力は極めて低くなる。雪鷹の言葉通り、滅びてしまう可能性もなくはない。

「なら、滅ぼすか？」

冗談とも本気とも取れる上司の言葉に雪鷹は苦笑いをして首を横に振った。

「貴方が言うと笑えないよ」

管理局の下部組織である情報部が管理局に仇をなすことはない。しかし、それはできないという意味ではない。少なくとも、それが可能なだけの力と情報は揃っているのだ。

「まぁ、冗談はこれくらいにして、だ……どちらか好きな方を調べろ。どちらも調べてくれるなら嬉しいが、まぁ、そこまで言うのは贅沢だよな」

いかにも譲歩してやった、と言わんばかりの上司の言葉に雪鷹は溜め息を零した。実際、どちらも急を要する事項であり、二つとも調べて欲しいという上司の本心は雪鷹も理解できる。しかし、そう容易い案件でないことは書類を見ればすぐに判る。

「まぁ、ミッド政府の件は楽観視していたツケが回ってきたとも受け取れるわけだからなんとも言えないが……」

観念したかのような雪鷹の溜め息。困難ではあるものの、引き受けざるを得ない状況にあることは否定できない。結局、それが雪鷹の仕事なのだ

「ついでに、嘱託を含めた魔導師が何人がパクられたからそっちも適当に頼む」

「……面倒だから、そいつら全員殺して、ミッド政府を犯人に仕立ててもいいか？」

こめかみに皺を作った雪鷹がにこやかに微笑む。ただでさえ、仕事が山積みになってしまったのに、また仕事を押し付けられたのだ。雪鷹が怒るのも無理はない。もちろん、雪鷹も本気ではないが、そういった考えが一瞬よぎったのは紛れもない事実だった。

局員逮捕の裏にミッドチルダ政府の暗躍があるのはまず間違いない。そうなると正攻法で動いても対応が間に合わない。労力と効率を考えても裏で動いた方がいい。元々、情報部はその為の組織なのだ。今更、迷う理由はどこにもない。

「好きにしろ。多少のことには……まぁ、目を瞑ってやる」

「了解。さて、どこから手をつけようか……」

上司からの了承を得た雪鷹は嬉々とした様子で微笑む。苛立たしい気持ちをぶつける相手を見つけて、喜んでいるのが手に取るようにわかる。鬼畜や外道と形容するのが相応しい雪鷹の笑顔を見て上司は苦笑を禁じ得ない。先程まで嫌だ、嫌だと言っていた人間にはとてもではないが見えない。

「期待しているよ、氷の懐剣（アイス・ダガァ）」

上司は雪鷹を名前ではなく、コールサインで呼ぶ。その意味に雪鷹は不愉快そうに顔をしかめたが上司に敬礼をする。

「情報部情報一課、シノブ・ユキタカ一等空尉は只今をもって指示された調査任務にかかります」

雪鷹が出て行った後、上司の男は溜め息混じりにぽつりと呟いた。

「まったく……面倒な世界だな」

第十五話　闇の左手（後書き）

雪鷹&上司…現代残留

では、次のバトンは夕さんにお願いします。ではでは

第十六話　政府裁判（前書き）

はい、何故か一週目にトリを務めることとなった夕です。

初参加のクロスリレーにビクビクしながら書かせていただきました。

そしたら何故かえげつない文字数に（笑）

なので前後編ではないですが二部構成となっています。

ではどうぞ～

第十六話　政府裁判

「これより、被告人風間カナンの裁判を行う！」

バンっと小槌の叩く音が静寂な空間に鳴り響いた。

ドーム、とまではいかないが二百人ほどは悠に収まるほどの室内。

ここで今まさに行われようとしているカナンの簡易裁判。

彼の手首には安っぽいゴム製の囚人用ネームバンドが装着されており、これが魔力の放出の一切を封じている。

ちなみにメイデンとレナスは監獄の中でお留守番……留守番という言葉が正しいのかどうか定かではないが。

「……どうしてこうなった」

カナンの心境はまさしくこの一言に凝縮されていた。

証人台に立つのは十三歳の少年。一体そんな少年が何を犯したというのか、

なにせ彼には身に覚えがまるでない。

捕まったあの時も換金所に行っていただけだし、その前は確か祐希奈に殴られ、弄られ、奢らされ――

「……なんでアイツじゃなくて俺が捕まってんだよ」

元々納得がいかなかったのだが、なんだか更に納得いかなくなってしまった。

捕まってからこの数時間、初めの方はいろいろ混乱して暴れたが今では少し落ち着いてその行動は逆効果だと思い至り大人しくしている。

どうせただの誤認だ。この裁判ですぐに開放されるだろう。

そうカナンは安直に考えていた。
表情には出さずとも彼も少し動揺しているのだろう、普通は逮捕後すぐに裁判など行われるわけがないということを。

「それでは被告人、氏名と年齢、住所に職業を述べてください」

「……風間カナン、十三歳。住所は管理外世界の九十七番、嘱託魔導師やってます」

裁判長の質問にカナンは素直に答えた。
若干ふてぶてしい物言いになってしまったがそこは許してほしいところだ。無実の罪で捕まった未成年に求めてはいけない。

「それでは被告の罪状を述べさせていただきます」

そう言って一人の女が資料を片手に立ち上がり、カナンの方を見据える。
先ほど検事だと紹介されていた女だ。

――ようは敵ってことだろ。

考えはかなり大雑把なものだが、決して間違っているとは言えない。
こういった場合、敵と味方をはっきりさせておく必要がある。
検事はちらりとカナンを一瞥し、罪状を読み上げた。

「被告人、管理局嘱託魔導師風間カナンは先日より発生している魔導師失踪事件の容疑者としての疑いが掛けられています」

「ハァッ！？」

流石に声を荒げた。
容疑者！？　失踪事件！？　なんだよそれ！？
失踪事件なんていうのも初耳で既に容疑者にされてしまっている。
さすがに我慢出来ず異議を唱えようと――

『待ちなさいカナンくん！』

「――ッ！？」

不意に掛けられた念話に踏みとどまり、キッっとその発信源である男を睨みつける。

『なんで言い返さないんですか！？　ビエールさん！』

『今ここで反論しても相手の思うつぼです。気を覗いましょう』

カナンにビエールと呼ばれたこの男はなんでも敏腕の弁護士らしくこんないきなり開廷された裁判の弁護人を受け持ってくれたのだ。
もともと地球でさえこんな裁判沙汰とは無縁の生活を送ってきたカナン。
ましてやここは日本でもなく海外でもない異世界ミッドチルダ。法律やらなんやら、地球の日本とはまるで違うのでカナンだけでは抵抗することも出来ない。
まぁ、仮にここが日本だったとしてもカナン一人で出来たことなど皆無に等しいのだが。
そんな中でやってきた敏腕の弁護士。つい数時間前に初めて話しただけでぶっちゃけ得体のしれない男。
そんな人間を問答無用で信頼出来るほどカナンはできた人間ではない。

――フェイトさんがいてくれれば

少年は自身の師の顔を思い浮かべる。彼女なら執務官として働いている手前、法律などにも多少なりとも理解があっただろう。

しかしそんなものは今の現状にとってはない物ねだり。

目の前にいる男の手を借りねばこの状況を打破することは出来ない。

『ッ……わかりました』

渋々と承諾する。

信用しきったわけではないが、この現状で彼は味方。

ここは素直に言うことを聞いておいた方が賢明だと判断し、カナンは検事の言葉に再び耳を傾ける。

「現在政府の方で確認している失踪者は数十名。管理局所属バルト・シェルト一等陸佐、レン・T・ハラオウン執務官長、ミオ・レッドフィールド執務官、相原のぞみ執務官、レン・クロフィール一等空尉、浅儀剏三等空尉その他にも政府関係者も含め、数多くの局員が行方不明となっており、嘱託魔導師もルミオ・デュアリス、神藤昶他、幾人か報告されています。そのうちのルミオ・デュアリスには風間カナンと同様の容疑が掛けられています」

――ルミオが行方不明で容疑者!?

行方不明者として見知った名前が挙げられ、容疑者扱いの友人にカナンは内心驚いた。

ルミオだけではない。レンや昶といった知り合いにフェイトから

聞いたことのある名前まで。
それら全員が行方不明だというのだ。
これは何かの事件に巻き込まれた可能性が非常に高い。
しかし少なくとも知り合い達は皆かなりの猛者揃い。
簡単にどうにかなるようなメンツじゃないんだけど、と考えて……やめた。
皆が皆巻き込まれ体質なのでありそうな気もする。いやむしろある。
そしてここでどうにも腑に落ちないことが、
――その犯人が俺とルミオだっていうのかよ。
意味がわからない。そんなことをして一体俺達になんの得がある？　むしろそんなことできると思ってんのか？
そう目で訴える。
しかし、そんな視線に構わず検事は続ける。
「この行方不明者の中には被告、風間カナンと懇意にしていた者も多く、彼がなんらかの方法を使用し監禁、ないしは殺害したのではないのかと」
「さ、殺害！？」
事実無根の事をここまで言われ、更には人殺しとまで言われてしまった。
これにはさすがにカナンも我慢の限界だった。
「ちょっと待てよ！　さっきから黙って聞いてりゃ好き勝手言いやがっ――」

「被告人静粛に。君の主張を述べるのはまだ先です」
「なっ！？」
裁判長がカナンの言葉を遮る。
「わかりましたか？」
「……」
『カナンくん、ここは抑えて！』
「ッ……はい」
ビエールに諭されなんとか怒りを抑える。
ここで暴れたら向こうの思う都合だと自身に言い聞かせながら。
「検事、続けてください」
「はい、彼の行動を洗っていたところ二日前の午前十時頃から数時間に渡っての足取りが掴めませんでした。被告にはこの時間、何をしていたのか説明していただきたい」
「そ、それは……」
検事の言葉に言い淀む。
管理局と政府との関係が良好ではないことはカナンも見ていてなんとなく知っている。
そして最後にはやてと別れた時に言っていたこと。

――あぁ、それとこの話あんまりいろんなとこで言いふらしたらあかんよ？　もし政府の人間の耳に入ったりしたらまた面倒やし。

実際、自分が火種で政府側に知られたら責任問題の追及やマスコミの対応、ヘタをすると捜査権限まであちらに奪われてしまうことだって考えられる。

過去に発生したＪ・Ｓ事件の折にも政府とはいろいろごたごたしたのはまだ記憶に新しい。

それだけではない。自分がここで発言することでヴィヴィオにも何か迷惑が掛かるかもしれない。

――それにアイツにも。

思い浮かべたのは過去のベルカに残った友の顔。

過去の人間だとはいえ彼の兄はそれこそ王様を殺害している。そんなことをこんな場所で自分の口から言えるわけがない。

そんなもろもろの理由でカナンは向こう側の問いに答えることが出来ないのだ。

「被告、どうなんですか？」

「っ……」

裁判長の催促が歯痒い。

悪いことはしていない。むしろ、タイムパラドックスなどというものから現代を守ったともいえるのに答えることが出来ない……歯痒い。

「黙秘しますか？」

「……はい」

黙秘するしかなかった。不用意な嘘を付いて問い詰められたらこちらが更に不利になってしまう。傍聴席が何やら少し騒がしいが今のカナンにそちらを気にする余裕はない。

「それだけではありません。彼はその前にも自らぶつかっていき公衆の面前で二人の女性の胸を触っていたという目撃情報があります」

「そんなことまで調べたのかよ……」

確かに事実だ。あの日確かに不可抗力の事故、不可抗力の事故――大切なことなので二回言った――とはいえヴィヴィオの友人であるアインハルトとコロナの胸を触ったのだ。

「被告人、それは事実ですか？」

「そりゃ確かにそうだけど……」

「異議あり！　検事側のその発言は本案件とは関係ありません」

「いえ、被告の人間性を理解する為に重要な事です」

「検事側の発言を認めます」

「……っ」

抵抗も虚しくアッサリと検事に主導権を握られ、ビエール自身も顔を歪める。

それに味を占めたのか、検事は口元を吊り上げ、言った。

「その同時刻頃には彼の友人である高町ヴィヴィオを誘拐したとの未確認情報まで入ってきています」

「それは違う！！」

カナンの叫び声に一瞬法廷内が静まり返る。

「俺が……、俺が大切な友達を誘拐なんてするかっ！！」

「だが、現に行方不明となった者も居るのも確か……。誘拐していないと言い切るのであれば、先ほどの裁判長の質問にも答えて貰いたいのですが？」

「それは……言えない」

「黙秘ですか」

言える訳ない、言える訳がないだろ。

タイムパラドックス以前に、どこかの次元に行っていたことを証言すると確実に失踪事件に噛んでいることを自ら晒すことになる。

それにしても向こう側の検事の女、名前をカレン・ロット、と言ったか。

どうもこちら側の事情を知り尽くしている節がある。

「良いでしょう。では質問を変えます」

検事――カレンはゆっくりとカナンの元へと足を運ぶ。

「不可解とは思いませんか？　みなさん。失踪した局員の面々を思

い返してください」

カレンは再び手に持っていた資料をカナンに見せつける。

確かにそうだ。

先ほど考えようとして諦めたことを再度考え直す。

失踪した局員のほとんどが尉官クラス。しかも何かしら自分と関わりのある人物が多い。

「嘱託魔導師でもある被告ですがその実、交友関係は広い」

「……それとどういう関係がある」

「さぁ、ここは法廷。憶測で発言するべき場所ではありませんから。だから貴方に聞きたい、風間カナン。彼らは一体どこに行ってしまったのか？　貴方はどう思いますか？」

「……憶測で発言する場所じゃないんだろ、ここは？」

「それは私や弁護しているビエール氏に限ってのこと。もちろん嘘を付かれては困りますが貴方は貴方の思ったまま、感じたままを私達に教えて欲しいのです。それに勘違いしていただきたくないのですが私は何もカナン君を犯人にしたいわけではないのです。ただ真相を明らかにしたいだけ、それだけです」

カナンの肩に手を置くようにして語りかける。

カナンから見えるカレンの表情では感情を上手く読み取ることが出来ないが傍聴席、裁判官からはまるで親身に問い掛けるように見える。

「カナン君、貴方の考えを聞かせてくれませんか？」

女はそう尋ねた。
だからカナンは答えてやった。自身の想いを。己の考えを。
「俺は知らない。アンタ達がどういう訳で俺を捕まえて、ルミオを共犯と思ってるのかなんてわからない。でもこれだけは言える……いいか？　俺は絶対に“やってない”！！　もちろんルミオもだ！！」

再び法廷から音が消えた。
嘘偽りのない気持ちが響いたのか傍聴席からも徐々に喧騒が蘇る。
これでカナン側の言い分も伝わりやすくなる。
そう思った。

「そうですか……」

流れを断ち切るカレン・ロットさえいなければ。

「なら行方不明者に貴方の知人が多いのも、消えた彼らの行方も全て貴方のあずかり知らぬところで起きたどうでもいい事件だと……そういうことですね？」

「そういうことを言ってんじゃねぇ！！」

「そう言うことでしょう？　貴方はこの事件とは何も関係ない。黙秘を続けるその中身がどういう内容なのかは知りませんが、その内容になにか重要な鍵が隠されているとしても、貴方は自身のプライベートを語るつもりはないそうでしょう？　なんなら今から答えてくれますか？」

「……っ」

歯を食いしばるように真横のカレンを睨みつける。

その怒り交じりの視線も彼女からすれば子犬に睨まれたようなもの。

涼しい顔で話を続ける。

「沈黙は黙秘と受け取りますよ」

やられた。こちら側に持っていけそうな波を完全に飲み込まれた。

先ほどまで悩んでいた傍聴席や陪審員のざわついた声が再び疑心のものへと変わっていくのがわかる。

現状、圧倒的にこちら側が劣勢。カレンのペース。

「何かないですか？　それなら私の方からはい――」

―轟！―

爆撃のような音がした。

傍聴席から飛び出したナニカは法廷にクレーターを作りだし、今も炎を上げている。

「消火、急いで！！」

「傍聴席の皆さんは速やかに避難を！！」

突然の轟音とメラメラと高まり続ける業火に法廷全体が慌てふためく。

「大丈夫ですよ、避難しなくても」

叫んだ様子はない。
だがその声は法廷中に届き、三度目の静寂を作り出した。
「その火は燃え移ることはありません。いえ、“今はまだ”その気はない……そう言ったほうがいいですか？」
カレンの視線は真っ直ぐと炎を見据える。
法廷に出来たクレーターからは地面からコンクリートが穿つようにえぐられ、視界を遮るように土煙が宙を舞う。
カレンの声も合わさり、今や法廷中の視線は土煙の中心にある炎に向けられている。
そしてカナンにはその炎に……いや、その炎を生み出す“幼なじみ”に酷く覚えがあった。
「……んじゃ……わよ」
……ほら、毎日聞いてる声だ。何やってんだよコイツは……こんなことしてどうなんのかわかってんのか？　ったく、考えなしで動きやがって。
カナンはこんな大それた行動を起こす幼なじみに内心呆れたような物言いだが、その顔には何故か無意識に笑みが零れた。
「……んじゃないわよ」
コイツがいるってことはもう一人この法廷にいるんだろうなぁ、などと漠然と考えながら煙が晴れる。
「ふざけんじゃないわよっ！！」

一之瀬祐希奈。
唯我独尊の体言者とも言える少女が目の前に立っていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『――管理局嘱託魔導師風間カナンは先日より発生している魔導師失踪事件の容疑者としての疑いが掛けられています』

「ハァ！？　何よそれ！？」

「祐希ちゃん、静かにしないと！」

「……二人共静かにしろ」

傍聴席の片隅で三人の男女がカナンの裁判を聞いていた。
検事の言葉を聞き、騒ぎたて今にも飛び出して行きそうな祐希奈。
その祐希奈を抑えようとして逆に同じように騒ぐヴィヴィオ。
そしてもう一人、いつもならここにカナンの名前が連なる筈なのだが現状、それが叶うことはない。なにせカナンの裁判を見に来ているのだから。
代わりにこの度なんの因果か二人と行動を共にすることとなった八神はやての兄、八神新の表情にはのっけから疲労の色が見え隠れしている。

――お前らには隠密という言葉は存在しねぇのか。

こめかみを押さえながら騒ぐ二人を黙らせる。
現在この三人は一応、この法廷に潜入しているのだ。

新がスリ……少し拝借した情報端末から裁判が極秘りに行われる事を知り、法廷へと侵入する為に政府の制服を手刀で気ぜ……もとい肉体言語にて三着お借りしてきて今に至るわけなのだが。
一応潜入しているという自覚はあるみたいで祐希奈は髪をショートポニーに、ヴィヴィオはベレー帽を被り髪を隠している……が如何せん、長い金髪を全て隠せるわけもなく、ちらりと見える美しい金髪と祐希奈の透き通るような銀髪が揃い踏みで他者から注目を集めてしまっている。
少しでもバレないようにとサングラスを掛けてはいるが、なんだか変装している有名人のような雰囲気を見事に醸し出している。

――まぁバレなきゃどうでもいいんだがな。

二人とは異なり服に着させられてる感じが全くなく、ビシッと決めたオールバックで制服をバッチリ着こなす新。
これが子供と大人の違い、というやつなのだろう。
まぁ十三歳に大人らしさを求めるのも酷な話なのだが。

「……けど今のアイツにはその対応が必要なんだよな」

呟きながら法廷を見遣る。その中心にはカナンの姿。
検事側の女性、カレン・ロット。聞いたことのない名前だが彼女の持つ空気は尋常ではない。
その佇まいも触れれば切れる日本刀を連想させる。

――やっぱ一筋縄にはいかねぇよな。

これからの動きを予想していき思わず舌打ちする。

「……た」

新的にもあまり目立つ行動は極力避けたい。
祐希奈やヴィヴィオといった幼い少女たちに前科を付けるわけにはいかないというのもあるが、何より妹の経歴に傷が付く。
何よりも可愛く愛しいマイシスターはやて。

「……た、……て……の？」

優しい彼女のことだ、きっと自分が前科持ちになったとしても『私は気にしてへんよ。お兄ちゃんは間違ったことはしてないもん』などと天使……いや、女神のような微笑みで許してくれるだろう。

「……んの？　……度胸……ね……」

だがそんな女神（はやて）の優しさに甘えるわけにはいかない。たとえ聖母（はやて）が許しても自分で自分を許せない。
てか合わせる顔がない。
その悩みの内容は奇しくも独房に拘留されていたどこぞのコンプレックス患者と同じ内容だったが、そこははやコンとして一般的な思考なのだろう。

「失敗出来ねぇな、こりゃあ」

そう言い聞かせ、気合いを入れ直そうと自身の頬を叩こうと――

「歯ぁ食いしばりなさい！！」

―殴！―

「グハァ！？」

――したのだが思い切り殴られた。
グーパンチ。かなり痛い。
「……何しやがる」
「アンタが無視するからでしょうが！！」
「ゆ、祐希ちゃん落ち着いて！　見つかっちゃうよ！？」
「お前らに学習の二文字はねぇの……いや、すまん。俺が悪かった。とりあえずトーンを落とせ。……で、何かあったか？」
祐希奈に睨みつけられ、ツッコミを変更し素直に謝罪する。幸い周りもざわざわとしていた為とりわけ目立ってはいない。
……まぁ近くの傍聴者からは奇異な目で見られているが。
「アンタやっぱ聞いてなかったのね……今さっき名前挙げられた行方不明者の名前、聞いたことある名前がかなりいたんだけど」
「うん、私もいっぱい……ううん、挙げられた人だけなら殆ど顔見知りな人達ばっかりで……」
大抵カナンと共に行動している二人もそれなりに顔が広い。
ヴィヴィオに至っては母親二人がなのはとフェイトなだけに更に凄いことになっている。
「それに新も行方不明者は気になってたんじゃないの？」
「あぁ、少しフェイトちゃんに頼まれててな」

「フェイトママに？」

実は法廷に忍び込む前に新はフェイトから通信を受けていた。

フェイトから通信とは珍しく、どんな要件なのかと繋いでみるとやはりというか案の定というか、それなりの厄介ごとだった。

――新さん、刱とレイン見てないかな？　二日前から連絡が取れなくて、戦技披露会にも結局来なかったみたいだし、はやての方も咲夜が帰ってこないって言ってて……兄さんも音信不通だし……皆どこ行っちゃったんだろ……

モニターに映った表情はぎこちなく、不安が隠しきれていない。

ティアナが独り立ちしたことでフェイトの執務官補佐へと返り咲き、シャーリーと共に奮闘する毎日を送っている刱。

そんな刱は過去に一度失踪したことがあり、そんなことがあったからか、新には忽然と消えてしまった彼を本当に心配していると容易に見て取れた。

咲夜の件を伝えてもよかったが時間がなかったことや今伝えても彼女の心配ごとを増やすだけだと思い、新はこちら側からも調べてみるとだけ伝え通信を切ったのだ。

「行方不明者のリストにはどんな名前が含まれてた？　刱やレンはいたか？」

「刱って刱さんのことですよね、フェイトママの彼氏さんで執務官補佐の。名前が挙がっててびっくりしましたけど……レンさんの名前も確かにありました」

「チッ……やっぱ関係してんのかよ」

予想通り過ぎる回答に思わず苛立ちが少し表情に出てしまう。
ここまでくると全てが繋がっていると考えた方が賢明だ。
どんな内容が話され、何が関係してくるかわからない。新は一層女検事、カレン・ロットの話に意識を向ける。

『――この行方不明者の中には被告、風間カナンと懇意にしていた者も多く、彼がなんらかの方法を使用し監禁、ないしは殺害したのではないのかと』

―軋―

隣で何かが崩れる音がした。
目をそちらに向けると傍聴席の柵が握りつぶされている。
いくら木製だからといっても簡単に壊れるものではない。
握りつぶしたのは華奢な腕だ。
細い、綺麗な白い腕。

「抑えろ、祐希奈っ……ヴィヴィオ、手伝ってくれ！」

今にも単身突っ込みそうな勢いの彼女の腕を掴む。
だがそんな抵抗に屈しないと言わんばかりの力で推し進む祐希奈を止めるために新は声を殺してヴィヴィオを呼ぶ。

「……すみません、私もちょっと我慢できないです」

「なっ！？」

三人の中で一番の良心であるヴィヴィオ。
彼女は心配ないだろうと考えていた新だが、考えが甘かった。

三人の中で一番の頑固者、言い出すと止まらない彼女の性格を新はまだ理解しきれていなかった。
最早いつデバイスを起動してもおかしくない。
カナンが、大事な友達が殺人者扱いされているのだ。
それを黙って見過ごすことなど二人には到底できない。
この感情を押し殺す必要なんて、何一つない！！

「今出て行ったらカナンが不利になるだけだ」

「――っ！！」

新の進言に二人の動きが止まる。

「……それを言うのって卑怯じゃないの？」

「事実だ」

まるで親の仇を睨みつけるように新を凝視する祐希奈。
ヴィヴィオも突きつけられたその言葉に押し黙る。
非情とも取れるが新の言う通りカナンを思っての行動がカナンを苦しめる事となるのだ。
それに今飛び込んでも獅子身中の虫、逆に政府に捕まってしまう可能性もある。

「状況を見ろ。感情に身を任せるな、押し殺せ」

黒いレンズの奥から鋭い目付きが容赦なく二人を刺す。
二人だって理解はしている。だから新の言葉で踏み止まった。
ただ納得が出来ない……したくないだけだ。
新だって辛いのはわかっているつもりだ。祐希奈が、ヴィヴィオ

が怒りではらわたが煮え繰り返る想いなのも理解している。

「けど堪えろ。まだそん時じゃねぇ」

だが新は言う。

はやてと二人で暮らしていた昔とは違う。

はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リイン、アギト。

家族だけじゃない。

どこぞのはやコンに今一歩を踏み出せないヘタレ執務官補佐、可愛い少女二人を侍らせる目下裁判中のバカ野郎に猪突猛進の銀髪少女に頑固者の天然金髪少女。

少しの間で些か護るものが増えたのだ。

「恨みたきゃ俺を恨め。晴れねぇかもしれねぇが、今はそれで堪えてくれ」

だから言う。

俺が見てんだ、そこでもしも何かあったら……それこそはやてに顔向け出来ねぇ……！

真剣に、最高の結果を導けるように。

「……んなこと出来るわけないでしょうが」

そう呟いた彼女の拳は今も震えている。

握り締め過ぎたのか、ぽたぽたと地面には赤い斑点が出来上がる。

「……すみません、でした。もう少し、我慢してみます」

もう一人も似たような感じで斑点を作り出す。

「俺は別に謝られるようなこたぁしてねぇよ。謝るのはこっちだ、済まない」

中学生の少女たちに大人の都合を押し付け、二人の気持ちを踏みにじったのだ。謝りこそすれ、謝られる道理はない。

――ガキのくせして、いい女じゃねぇか二人とも。

口には出さず、新は二人にハンカチを差し出した。

「……なんで二枚も持ってるのよ」

「んなもん紳士の嗜みだ」

訝しむ祐希奈に新はさも当然のようにそう言った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「それにしてもおかしくないですか？」

「おかしいって何がよ？」

ヴィヴィオの消失した話が出た時にまた少々慌ただしかったが今は二人とも落ち着きを取り戻し、静かに裁判を傍聴していたのだが不意にヴィヴィオが呟いた。

「だって祐希ちゃん、さっきからあの検事さん、二日前の事ばかり

聞いてるよ？」

――彼の行動を洗っていたところ二日前の午前十時頃から数時間に渡っての足取りが掴めませんでした。被告にはこの時間、何をしていたのか説明していただきたい。

――だが、現に行方不明となった者も居るのも確か……。誘拐していないと言い切るのであれば、先ほどの裁判長の質問にも答えて貰いたいのですが？

確かに検事はそこを皮切りにカナンを追い詰めていっている。

「これじゃあまるで――」

「まるであの事件を知っているかのようだ、か？」

新の言葉に無言で頷くヴィヴィオ。新もちょうど同じような事を考えていたらしい。

「ちょっと待ちなさいよ。なんであの検事が知ってるってんのよ」

「さぁな。それはわからねぇが、少なくともアイツがこの件に絡んでることは確かみたいだな」

どこまでも燃えるような赤髪とは対照的な冷めたような瞳は今もカナンを攻め立てる。

が、覗き込むように問いかけるカレンにカナンは発した。

『俺は知らない。アンタ達がどういう訳で俺を捕まえて、ルミオを共犯と思ってるのかなんてわからない。でもこれだけは言える……

いいか？　俺は絶対に“やってない”！！　もちろんルミオもだ！！』

声を荒げながら発したカナンの言葉は法廷に静寂をもたらした。
混じり気のない気持ちの乗ったそれは傍聴席にざわめきを起し、それはもちろん祐希奈たちにも伝わり。

「カナンくん……」

「あのバカ……そんなこと初めからわかってんのよ……」

そう悪態を付くもその表情はどこか嬉しそうで、ヴィヴィオの顔にも笑みが戻る。
良い風が流れてきた。
二人は率直に思った。
だが一人、一人だけ、この状況に不信感を募らせる者がいた。

――マズイな。

カナンの性格を鑑みるにあそこで発するだろう言葉は大体予想できる。
そして子供の心からの言葉というものは何故か響く。
理屈じゃない。
カレン・ロットという人物はそれに気が付かないのだろうか。
答えは否。
仮に彼女自身がそんな言葉に惑わされないような性格をしていたとしても、あの女は理解している。
にもかかわらず、新からはこの状況が至るまでカレンに誘導されたようにも見えた。

――嫌な風が吹きやがる。

『そうですか……』

そして案の定、彼女は逆転の一手を打ってきた。

『なら行方不明者に貴方の知人が多いのも、消えた彼らの行方も全て貴方のあずかり知らぬところで起きたどうでもいい事件だと……そういうことですね？』

『そういうことを言ってんじゃねぇ！！』

カレンの挑発にカナンの怒号が乱れ飛ぶ。

それでも彼女はなおも冷淡な表情で言葉を紡ぐ。

『そう言うことでしょう？　貴方はこの事件とは何も関係ない。黙秘を続けるその中身がどういう内容なのかは知りませんが、その内容になにか重要な鍵が隠されているとしても、貴方は自身のプライベートを語るつもりはないそうでしょう？　なんなら今から答えてくれますか？』

そうカレンが語ったところで新は再び気付いた。

隣にいる二人が黙りこくっていることに。

「おい、お前ら――」

「……ごめん、やっぱ無理だわ」

「待て、ここで動いたらカナンが――」

そう言い切る前より早く。

―疾！―

新の視界から祐希奈の姿が消えた。

「――ッ！？　クソッ！！」

次の瞬間には。

―轟！―

業火の拳を地に突き立て法廷内へと着地。
突き立てた拳が地面にクレーターを生み、轟と依然その拳を燃やしている。

「祐希ちゃん！　――ッ！？」

「お前まで行かせるわけにはいかねぇッ！　捕まりたいのかっ！！」

祐希奈に続こうと、動き出すヴィヴィオの腕を掴みとる。
ついて来い！
追っ手がくることを想定すると最早ここに留まる猶予はないと思い至った新は怒鳴りながらヴィヴィオを連れて法廷から脱出する。
ヴィヴィオは新の怒りと焦りが混ざった怒号で少々萎縮してしまっているがそんなことに構ってる暇などない。
幸い周りの傍聴者たちも突然上がった火の手に混乱し、抜け出すのは容易だった。
なにやらすぐに静かになったが新は振り向かない。

最大の速度にて駆け抜ける。

――クソッ！　祐希奈、カナン、ちょっと待ってろよ！！

自分の不甲斐なさと共に後ろ髪を引かれる思いで新はヴィヴィオを逃がす為法廷を後にする。

必ず二人を助け出すと決意して。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ふざけんじゃないわよっ！！」

カレンの言葉で静寂になった法廷で祐希奈の怒りが燃え上がり、火の粉を纏う銀髪がなびく。

「……おい、お前は一体なにしてんだこんなところで」

それとは対照的に落ち着いた声で問い掛けるカナン。他に怒っている人間を見ていると逆に冷静になるもんだ。

「アンタには関係ないでしょ！」

「あるわボケ！　お前、こんな……これがどういうことになるかわかってんのか！？」

「だからどうだって言うのよ！　私は私のしたいことをする、バカナンにも政府にも、誰だろうとそれを止める権利はないわ！」

まさに天上天下唯我独尊傍若無人傲岸不遜。
だがそれでこそ祐希奈。
放たれた獅子はどこまでも気高く、どこまでも勇猛。
法廷内の誰もが呆然とする中、コツコツと一人、カレン・ロットが歩み寄る。

「一之瀬祐希奈ですね」

「私のことも調べてるってわけ」

「風間カナンの周りは一通り調べましたよ。例えば高町ヴィヴィオ、八神新なども」

「……」

このタイミングで連ねられた名前。

ヴィヴィオはまぁわかる。だが普通、その次に新の名前が出ることは明らかにおかしい。
それがどういう意味なのか、祐希奈とて正しく理解している。

「ふ～ん、全部お見通しだったってことね」

「そんなことはありませんよ。貴女が飛び出してくるとは思いませんでしたから」

「よく言うわ、散々挑発してたくせに」

今ならわかる。必要以上の挑発的な物言い。
あれは決してカナンだけに向けられた言葉ではなかったのだとい

うことが。

「それで、ここまで出てきてどうするつもりですか？　彼らは行ってしまったみたいですが、貴女一人で風間カナンを助けると？」

「誰がそんなこと言ったのよ、そんなつもりないわよ」

「じゃあお前は何の為に出てきたんだよ！？」

手首を錠で繋がれたカナンが割って入る。だがまぁ確かにカナンの言う通りだ。何しにきた祐希奈。

「気に入らないのよ……アンタが、アンタのやり口がっ！！」

「そうですか」

燃え盛る拳をカレンへと突き付け言い放つ祐希奈と嘲笑うカレン。カナンが捕まった事は百歩譲って許そう、どうせ助け出すし。カナンが容疑者扱いなのは千歩譲って許そう、実際人の胸とか触ってくるし実際チカン野郎だし。カナンを使ってアンタが何か企んでるのは万歩譲って許そう、絶対私たちが打ち砕いてあげるから。けど。

「……訂正しなさい。謝りなさい」

あの一言だけは赦せない。

「今何と言いました？　聞き取れなかったもので」

「訂正して謝りなさいよ」

私だけじゃない、ヴィヴィオだってきっと同じ想いのはず。

「訂正？　謝る？　何に対して？」

神経を逆撫でするようなカレンの物言いに祐希奈の怒りはますますヒートアップし、魔力が、炎が、更に溢れ出す。

「アイツを、人殺し扱いしたことをっ！」

カナンに、ヴィヴィオに、私に！！

「謝りなさいっつってんのよぉぉぉッ！！」

―爆！―

刹那。

膨張したかのように膨れ上がる炎と魔力。

腰を落とし膝を曲げ、バネのように跳ねる。

振りかぶった拳は一切の躊躇なくカレンの顔へ――

―煙―

「――なっ！？」

「――これは」

突如二人の間放り込まれたナニカから出た白煙が法廷を覆い隠す。

すぐに法廷中に広がった煙に祐希奈は戸惑いを隠せない。

そんな彼女のすぐ近くから聞こえた声。

――喋るな、舌噛むぞ。

「え？　ちょっ！？」

返事をする間もなく祐希奈は抱き寄せられてしまう。

しかも肩と足を抱えられ、思わず顔を赤らめる。

俗にいうお姫様抱っこだ。

――何なのよアンタ！？

そう発しようとして自分を抱える誰かを見る。

室内の構造を全て頭に叩き込んでいるのか、迷いなく凄まじい速度で駆け抜ける。

背の高さからして男、黒塗りのローブで身を包み、周りからはその素顔を視界に捉えることは難しい。

だが、抱えられている祐希奈からは例外でその表情ははっきりと見えた。

旅人用の黒ローブのフードを被るもちらりと見え隠れするワインレッドのマフラー。

その表情はいつもとは違い真剣さが滲み出る。

先ほどまで共に行動していた兄貴分。

「あ、新ぁ！？　アンタ何やって――」

「黙ってろって言ったろうが！！　速度上げるぞ！」

ヴィヴィオを避難させ、新は祐希奈を連れ出すために再び戻ってきたのだ。

「ちょ、このまま行っちゃっていいの！？　カナンは！？」
「今は無理だ！　次第に包囲されちまう！」
「――っ」
自分の早まった行いに唇を噛む祐希奈。
これでカナンへの警備が強くなってしまう。
助け出すのは難しく――
「まだだ、まだ諦めんな」
祐希奈を抱える腕に力が籠る。
「お前が諦めてどうすんだよ。ヴィヴィオもまだ諦めてねぇぞ」
―蹴・蹴・蹴・蹴・蹴―
前からやってくる政府の人間をひたすら蹴る蹴る蹴る。
一撃で意識を刈り取る程の蹴りを放ち、尚速度を落とすことはない。
「もちろん俺も手を貸すし、策もまだある。なのにお前は諦めんのか？」
お前らしくねぇぞ。
祐希奈にはそう言われているようにしか聞こえなく、自然と手に力が籠った。

「ふん、そんなわけないでしょ！　さっさとバカナン助けて殴り飛ばすわよ！」

なかば八つ当たりに近いその言葉を聞いて新はフッと笑いかけ。

「いい返事だ」

ヴィヴィオの待つ場所まで駆けた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「まさか戻ってくるとは、これも予想外でしたね」

煙幕で姿をはっきりと捉えることは出来なかったが、あれは恐らく八神新。

――流石に追いつけませんね、あの速さには。

内心そう思いながらも彼女――カレン・ロットはほくそ笑む。

しかし風間カナンはまだこちらにいる。

恐らくまたすぐ襲撃を仕掛けてくることだろう。

そうすれば次こそは戦闘が起こりうる。

「裁判長、いらぬ邪魔が入りましたが幸いにも役者は欠けていません。再開しましょう」

「う、うむ」

一連の出来事に終始茫然としていた裁判長にカレンが促す。
それと同時にカナンの弁護人であるビエールや傍聴人たちも我に返る。

「今の襲撃者は被告、風間カナンの知人です。このように法も守らずに脱走を手助けするような人物がいるのです。そのようなものたちが友人である被告の人間性も判断材料にできると思います」

「アイツを悪く言うんじゃねぇ！！」

この状況でカナンの怒号は最早なんの意味も持たない。
すでにこの場にカレンを止められるものはいない。
全て、カレンの思うが儘。

――そして。

「裁判長、判決を」

――被告、風間カナンを死刑に処す。

バンっと小槌の叩く音が静寂な空間に鳴り響いた。

第十六話　政府裁判（後書き）

どうでしたか？

新が私的には凄いかっこよくなっちゃいました（笑）

では次話もできるだけ早く上げさせてもらいますね。

現代：祐希奈、ヴィヴィオ、新→軽く逃走中

カナン→死刑宣告（笑）

では、次話にてお待ちしております！！

第十七話　知らない人物、知らない性格（前書き）

はい、後半を書き終えました夕です。

何故こうも支離滅裂な文章に……

話も前半よりは短いです。

ではどうぞ！！

第十七話　知らない人物、知らない性格

荒れ果てた荒野。
淀んだ曇り空の下、一人の少年が大地を駆ける。

―弾・弾・弾―

ガジェットが放つ青い閃光を最低限の動きで回避すると一気に加速、そのまま鞘に納めた刀を抜刀！

―閃！―

ＡＭＦなど関係ない、少年の技術のみに頼った一閃は容赦なくガジェットを切り裂いた。
最早ただの鉄屑と化したガジェットは音もなく崩れ落ちる。
よく見ると辺りには他にもガジェットの残骸が転がっており、それは全て少年が破壊した物に他ならない。

「これでとりあえずは大丈夫だろ……終わったぞー」

そう言って少年は刀を鞘に戻す。同時にそれは一つの指輪へと戻り、六つの指輪が少年のズボンにアクセサリーのように引っ掛かるのを確認すると後方の方へと声を掛けた。

【お疲れ様〜】

ふわふわと少年の頭に座り込んだのはこの荒れ果てた荒野にはあまりにも不釣り合いな着物を着た手の平サイズの少女。

「一応、ここら一帯にいたのは全部壊したよな？」

【なんだか群れてたし、はぐれガジェットとかいないならこれでおしまいだね】

いたら経験値いっぱいもらえそうだなぁとか意味のわからないことを考えながら二人――浅儀刱とレインは歩き始めた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……でもなんでこんなことになったんだろ」

そんな今更過ぎる事を呟くのと同時に一つ大きな溜息を付く。

そのトボトボと歩く背中は厄介事が飛び込む度にこんにちはしてるので要するにはいつもの事なのだが。

「……結局戦技披露会サボったってことになるんだよな？」

【まぁそうなるんじゃない？】

レインの返答にまた溜息を付く刱。溜息を付くと幸せが逃げていくと言うが既に幸せなど目下高速で逃走中の彼にとって詮無きことだ。

そもそも二人はミッドで戦技披露会に向かっていたのだ。

本当にただそれだけだった。

……若干遅刻気味だったが。
まぁそんな事はさて置き、その途中で咲夜（愛すべきはやコン）（読み方はレイン談）とレフィリア（愛すべきバカ）（しつこいようだが読みはレイン談）と出会い、話をしているといきなり政府の人間の襲撃、すぐさま迎撃。
一見落着とおもいきや、レインと共に変な穴へと落ち、気が付けばドームと呼ばれる建物に落っこち、ボロボロの服を着た人々に怪しまれ、話を聞いてみると仕舞いにはここが未来のミッドチルダだときた。
そりゃあいきなりこんな場所が未来の、１０００年後のミッドチルダだと言われれば落ち込みもする。
刱の溜息を付く気持ちもわからなくもない。

「……フェイト怒ってるだろうなぁ」

【気にするのそこなんだ】

前言撤回、最近巷では弱フェイコンとまで呼ばれ始めるこの男はこんな状況下よりフェイトの方が恐ろいらしい。
ツッコミもそこそこにレインも真面目な話へとシフトしていく。

【実際こんな現象おかしいよ。次元跳躍じゃなくて時間跳躍だなんて】

「けど現実に起こったぞ？」

【だから考えてるんじゃない。はい刱ちゃん、今現状考えられるこんなことになった理由を答えなさい】

どこの先生だどこの。
心の中でそうツッコミつつも刱は素直に考えはじめている。

こういうところが剏とレインの関係を如実に表しているのだろう。

「……やっぱりロストロギア、だろうけど……問題はそこじゃないんだろ？」

【うん、考えるべきなのはこれが偶然なのか、それとも……】

「必然か……」

先ほどまでとは違う、真剣な顔立ちで剏はぽつりと呟いた。

現代ミッドで襲撃されたあの状況から偶発的な事故と考えられるほど剏もレインもお気楽な頭は持ち合わせていない。

そうなると考えられるのは一つ。

「誰がなんの目的で仕掛けたのか、それと――」

【剏ちゃんを狙って跳ばしたのか……】

会話という域を超えた意思疎通を可能とする互いの理解力。

しかしその内容は答えのない袋小路。

如何せん手持ちの情報が少なすぎる。

【確かに、ね。私たちが今すべきなのはドームの周辺警護と元の時代に帰る方法を探すこと】

「徘徊してるガジェットはあらかた片付けたし後は……レジスタンスの奴らか」

この時代に落ちて間もない剏たちだが二人は一度レジスタンスと接触している。

……というよりも剏がぶっ倒してしまったのだが。

【あれはちょっとやり過ぎだったと思うけどなぁ】

「う……そ、それはそうかもしれないけど……あ、アイツらだって悪いだろ！？　態度デカいし、食料を奪うし、小さい子を殴るし……」

レジスタンスはガジェットを初めとした機械の集団と無償で戦ってくれる組織なのらしいが、自分たちの規則を強要する集団でもあるらしく、剏とレインが落ちてきたその日にレジスタンスは偶然ドームにやってきた。

いきなり我が物顔でやってきた数人の男たちが共に戦う同志を募ると叫び始めた。

その呼び掛けに誰もが目を背け、下を向き、一人として名乗り上げるものはおず、それがわかるや否や『せめてもの義務』やら『お前たちのような弱者を守るために戦ってやっている』と再び叫び始め、食料をよこせと要求してきたのだ。

――こんな場所に食料なんて余ってるのか？

大きな建物だといってもボロボロでパイプラインもどうにか繋がっているような状態だということは剏からも容易に見て取れる。

やはり、というか当然というか、食料の備蓄は殆どないらしく住人が食べ繋ぐだけで精一杯だということ。

にもかかわらず、男たちは食料を求め暴れ始め、次第には子供の持っていた缶詰を取り上げ殴り飛ばしたのだ。

流石に黙っていられなくなり剏も殴った男を蹴り飛ばす。

そこから剏ＶＳレジスタンスの構図が完成するまで二分も掛からなかっただろう。

男たちは怒りのままにデバイスを起動、目の前の生意気なガキにお灸を据えるつもりだったのかすぐさま魔力弾を放ってきた。
しかし恐らくは下っ端だっただろう男たちは大した魔導師ではなく、アートを起動した刱にあっけなく倒されてしまったのだ。

【でもわざわざデバイスを壊さなくてもよかったんじゃない？　こんな世界なんだしあんなのの持つデバイスでも貴重なんだろうし】

「だ、だってアイツらの誤射であそこにいた人たちに当たりそうになってたし……あの方が手っ取り早かったし……それにこんな世界だなんてまだ知らなかったし……」

頭上から聞こえる真っ当な正論に段々歯切れが悪くなる。
二人の会話からわかるように刱はレジスタンスを止めるためにデバイスを狙って戦闘不能にしたのだが、この時はまだ現状を把握していなかった刱は別段気にせずにデバイスを破壊した。

【刱ちゃんが壊したおかげであの人たち丸腰でこんなとこを帰らなきゃいけなかったんだしねぇ】

「うぅ……だからこうやって辺りを動き回ってるんだろ」

【ドームの人たちに頼まれたからっていうのもあるけどね】

「ま、まぁそうだけど……」

デバイスを潰されたレジスタンスたちは真っ青な顔でドームを後にしたのち、刱とレインはこの世界の事をドームの住人から聞いたのだ。
世界が機械たちに支配されていること。ドームの外を歩いている

と徘徊しているガジェットに殺されてしまうこと。そして先ほど追い出した男たちが機械に唯一対抗しているレジスタンスという組織――この時刎はレジスタンスの存在を知った――だということ。この世界にも過去に管理局が存在していたということ。

そしてここが新暦１０８１年だということ。

それらの話を総合し、二人はここが未来のミッドチルダだと推測した。

その推測に至った当初は茫然としていたが元の時代へ戻る方法を探すことを決意し、ついでにここら一帯の用心棒を頼まれ、ガジェットの掃除をしていたのだ。

【仲間をぞろぞろ連れて来たらどうするの？　結構面倒だけど】

「大丈夫だろ。小規模な組織らしいけどそこまで日が浅い組織じゃないみたいだからリーダーはしっかりした人なんだろう。ちゃんと止めてくれるさ」

【じゃあもしやって来たらどうするの？】

「その時はまた追い返すよ」

【ふ～ん、じゃあ頑張ってね】

「え？」

自身の頭から飛びだっていくレインの言葉にきょとんとする刎は彼女が指差す方向へと顔を向ける。

まだ遠目でしか見えないが彼女の差す方から男女の二人組がこちら側へとやってきている。ご丁寧に男の方は既にバリアジャケットまで装着済み。

「こういうのなんて言うんだっけ……剣気盛ん？」

【血気盛んね】

阿呆としか思えない発言にも慣れた様子でツッコミを入れつつ、頑張ってね～とレインはすっかり観戦モードへと移行。どうやら本当に刱一人に任すご様子。

まぁいいけど。

薄情者の力なんか借りなくてもどうってことない。

刱はアートＮｏ．１、２を起動させ近付いてくる赤髪の少年に警告を――

「――――ん？」

袖で目を擦り再度確認する……が、見間違いではないらしい。

何やら知り合いの少年に酷く似ている。

いや、似ているなんてもんじゃなく瓜二つ。

近頃急激に背丈が伸び、自分を悠々と追い抜いていった少年と。

相違点はバリアジャケットとその手に収まる銃（デバイス）くらいなものだ。

しかしそもそも刱のよく知る少年は槍使いで今も現代ミッドで女の子二人を侍らせ建国祭を楽しんでいるはずでこんな殺伐とした場所もとい時代にいるはずがない。

向こう側からも既にこちらの姿が見えている筈。

にもかかわらずなんのアクションもないということは少なくとも今ここにいる少年はアイツではない。

――考えてても仕方ないよな。

このままでは埒があかないと感じ、刱は目の前にまで迫った赤髪

の少年に小太刀を突き付け、問いかけた。
「止まれ。何者だ、何故ここにいる？」

◆◆◆

そうやって心の中で何度も言い聞かせる。
だが哀れ。それらに一切気が付かず、少年は言った。
「だから、小さい子供がこんなモン持ってたら危ないだろ――」
プチン。
今度は確かに聞こえた。
―閃―
「――ってオイッ！？」
白く光る刃が少年を襲う。
咄嗟に身を翻し回避行動を取る。
しかし予想外の剣速は少年の赤毛を数本散らす。
「もうどうでもいい……話聞くだけにと思ってたけど、もう関係ないっ！　たとえお前がエリオの子孫だろうと、息子だろうが知ったことじゃない！」
「オイ！　今あんたエリオって――」
剏の言葉に少年は今度こそ驚きの表情を浮かべる。
しかし悲しきかな、次は剏が気が付かない。
「俺は子供じゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
―閃・閃―

怒号と共に二筋の剣閃が光る。

「――ッ！？　待てって、オイ！？」

少年は手に持った銃の銃身で捌く。

だがその怒りの咆哮とは打って変わり、剏の剣技が予想以上だったのか少年の表情が一気に真剣なものへと変わっていく。

彼は思った。

強い。

その一言に尽きた。

剏の狙いと鋭さにブレはない。

「――チッ！！」

顔を歪めつつも少年は剏の斬撃を大きく後退することで回避。

腹を括ったのか銃口が剏へと向けられる。

直後。

雷光が迸る。

―弾・弾―

放たれた二筋の雷。

高速で撃ちだされた雷撃に剏は転がるように飛び退く。

―弾・弾・弾・弾・弾―

次々と狙い撃たれる雷弾を剏は速度をもって対抗する。

少年は雷の魔力変質持ちでその銃弾は常時その力を行使している

為に切り裂くことも弾くこともままならない。

――けどコイツ。

銃しか使わないくせに狙いが甘い。

初めは牽制の意味を込めているのかとも思ったがそれにしても甘い。

大したことのない魔導師。

そうも考えたが少年の本来の狙いは決して悪いものではない。

接近させないようにと剏の動きを計算しながら雷撃を放っている。

恐らくメインデバイスは銃ではないのだろう。

剏はそう確信していた。

――だとしたらなんで？

そんな思考が浮かび上がる。

怒りに身を任せて斬りかかった人物とは思えない冷静な分析力。

伊達に何度も死線を潜り抜けてきたわけではない。

剏はもう一度男の顔を見据える。

攻撃が当たらないことに歯痒く感じている、そんな表情。

そしてその表情を作り出す彼の顔はやはり自分の知るエリオ・モンディアルと同じ。

だが纏う雰囲気や、バリアジャケット、戦闘法など異なる点、違和感が多々あることも事実。

やはりこの少年はエリオとは別人。しかし関係はある。そんなところか、ととりあえず結論づける。

――コイツの表情から見て多分メインデバイスを使用できないんだろう。ならここで一気につめる！

剏の黒い眼（まなこ）が僅かに細まる。

――神煉流壱式。

左右に持つ二刀に籠る青白い魔力。

「――蒼閃ッ！」

―戟・戟―

振るった双剣から飛び出した魔力斬撃。

鋭利な刃と化した魔力は迫りくる雷撃に着弾、小規模な爆発が発生する。

この爆発により生まれた爆煙が二人の視界を遮る。

だが刱には視えている。少年の位置が。その朱い眼には。

その瞳も一瞬、次の瞬間には黒い瞳へと戻り、次の一手を打ち進める。

―擲・擲―

舞い上がる煙の中から突き抜けていく二本の剣。

まさかデバイスごと投げてくるとは思ってなかったのか、少年の表情には焦りが生じる。

「――ッ！？」

タイミングをずらした短剣を少年は銃を使いなんとか弾き返す。

だがこの危機を回避したことで刱の手にはデバイスがなくなった。

もちろん少年も気が付いているはず。

だからその隙を突く。

―疾―

重ね掛けした身体強化で急速接近。
筋を、骨を、体の内から更に細かく強化したその速度はまさに神速。
地を大きく蹴り、その名を口にする。
「？４、ｏｐｅｎ」
現れたのは刀。同時に腰の方で現れた鞘に帯刀した形でそのデバイスは起動された。
少年は知らなかった。剏が複数個デバイスを所持していることを。
―閃！―
声も、音もなく一閃。
抜刀からの蒼の斬撃は静かに速く、目標へと向かう。
このタイミング、回避は間に合わないはず。
防御もプロテクションを張るのが精いっぱいだろう。
だがその行動にさえ布石を打つ。
すぐさま刀を帯刀し直し、懐へ飛び込む為加速。
魔力を練り上げる拳。
神煉流伍式、砕覇。
防壁ごと破壊して身体へと叩き込む！
――はずだった。
「――ッ！？」
次に驚愕を表したのは剏。
何故か？
答えは目の前の光景。

レジスタンスの少年へと迫る蒼閃。
それが忽然と『消滅』したのだ。
そして接近する剏にも変化が訪れた。
内と外。
二方向から施した拳の魔力コーティングのうち、外側からの強化が消えた。
練り上げた魔力の突然の消失に驚きを隠せない。
威力は半減、更にはそれを見越していたのか少年はこちらに銃口を向けている。

―弾―

放たれる雷弾。
障壁は張れない。
剏自身が接近して行った事により互いの距離は既に数メートル。
狙いが外れる事はなく、スピードに乗ったこの状況では今更真横に飛びのくことも困難。

「なめ、るなぁッ！！」

曇天の空の下に轟き響く声。
幸い体内で精製した魔力に変化はない。
無理やり身体を捻り上げ身体の内から強化した筋を収縮、バネのように引き延ばし跳躍。
そのまま雷撃、更には少年までもを飛び越え間髪を入れずに少年の元へと疾走。

「――っ」

回避は不可能と思っていたのだろう、少年は焦りの表情を浮かべ

ながらも、引き金をひくがそのどれもを剏は最低限の動きだけで回避していく。
今も大気に魔力を形にすることができない。
――けど。
強化魔法には自信がある。自身の師すらも自分程上手くは使いこなせない。
あんなに強い彼女ですらだ。そんな魔法を簡単に消されては堪らない。
―膨―
剏の体内から拳へと、更に魔力が練り上げられる。
標的は距離を取ろうとしたのだろう、後方へと大きく跳ぼうと――
――もう逃がさない
「――ッ！？」
静かに聞こえたその声は少年の懐から。
剏の左手は少年のジャケットを掴んで離さない。
「これで終わりだ」
魔力が籠ったその拳はようやくその真価を発揮しようと少年の懐へと吸い込まれ――
「やめてぇぇぇ

ピタリ。

拳は少年の皮一枚で止まった。少年を突き抜けたのは剏の拳圧と少女の嘆き。

だがその声(想い)は確実に剏にも届いたのだ。

こうして一人の少女の悲鳴によって不毛な戦闘は終結を見せた。

第十七話　知らない人物、知らない性格（後書き）

どうでしたか？

ん～あまり上手く書けなかったかなぁ（汗）

やっぱ剱に格好よさはないって話（笑）

未来：剱、レイン←どこぞの赤毛レプリカと交戦

これでトリを務めたことになるのか激しく不安ですが……

では二週目の第一走目はほっぽーさんにお願いします！！

第十八話　自分が信じた人のため　前編（前書き）

リレー2週目のトップランナーを務めさせていただきます、ほっぱーでございます。

まずは最初にご注意をば……長いですスイマセン。
書いてる最中にテンションが天元突破した結果がこれだよ！

などとのたまってしまいましたがホントに長いので出来ればお暇な時にでも読んで下さいませ。　では始まります。

第十八話　自分が信じた人のため　前編

「ちくしょう……」

薄暗い無音の独房に1つ、呟きが漏れた。

両手両足の動きを完全に封じる拘束服を着せられ、その上から皮製のベルトを何重にも巻き付けられ、一切の身動きを禁じられた状態でカナンは独房に収監されていた。

無論魔力は完全に封じられているため、力ずくでの脱出など出来よう筈もない。

今のカナンは余りにも非力だった。

――なんだってこんな事に……

もうすぐ自分は処刑される。

それだけがカナンの思考を支配していた。

――ここに入れられて、どれ位たったんだ……

時間の流れを知る術（すべ）さえ奪われた状況に置かれたカナンにとって、たった数分が何時間にも感じられるようになっていた。

最初は助けを期待した。　それは当然の事。

しかしこの独房に拘束されて閉じ込められ、どれほどの時間がた

ったのかすら分からない状況にカナンの精神は次第に磨り減っていった。

――助けに来るって言ったって……どうやって……

――俺の死刑はもう正式に決定して覆せないんじゃないか……？

――それに……もしかしてもう3日たってるんじゃ……

――もうすぐ目の前の扉が開いて死刑執行官ってヤツが俺を……

これはカナンの知らない事だが、この独房の内部には微弱ながら精神操作系の魔法がかけられていた。

その作用はほんの少し人の不安を煽るだけの、平時では歯牙にもかからない程に他愛の無いものだったが、死刑を言い渡されたカナンにとってその効果は絶大だった。

時間の経過も分からず、独房の端すら薄暗がりに隠れるような物音1つしない陰鬱な空間。

通常の檻とは違い、覗き穴すら開けられていない分厚い扉と灰色の壁しか目に入らないような部屋の中、指一本すらも動かせない程に全身を拘束されてただ1人で放置される。

そんな状況に置かれて、ましてやそんな経験など一度もない少年が、果たしてまともな思考を保てるだろうか……？

結果は言わずもがなであった。

現に時間が立つごとにカナンの頬には汗が流れ、呼吸は浅く、早くなっていく。

目の焦点は定まらなくなり、顔から血の気が引いてゆく。

この場に彼の融合騎であるメイデンとレナスがいてくれたなら、まだ彼の精神はここまで追い詰められる事はなかっただろう。

しかし希少価値の高い融合騎は、様々な面で格好の研究対象にな

る。
更に罪を犯したとされるのはカナンのみ。
そして今は政府の手の内にいるメイデンとレナスが、その後どうなるかは想像できる。
無論良くない方向ではあるが……。

「くっ……そ……」

最初は喉が潰れんばかりに叫びもしたがその絶叫が部屋に反響し、ただ不快なエコーになって自身の鼓膜を揺らす以外に、なんの反応も無かったため1時間とたたない内に無駄だと悟った。
それからはこうして呟くように声を上げることしか出来なくなっていた。

「祐希奈……　ヴィヴィオ……」

不意に呼んだ2人の名前。
あの法廷に飛び込み、自分の為に声を荒らげた少女の顔を思い出す。
あの場に祐希奈が1人で来る筈がない。
必ずヴィヴィオも近くにいたはずだ。

――あのバカ……　ほんとに後先考えずに行動しやがって……
あれで捕まってたらどうす……ッ！！

もしかしたらあの法廷での事が切っ掛けで、祐希奈やヴィヴィオも同じ目に合ってるんじゃないか……？

そう思い立った瞬間、カナンは奥歯を砕けんばかりに噛み締めた。

そして今自身に出せる全ての力を全身に込めた。

しかしただ軋む様な音を上げるだけで、拘束具はびくともしない。

しかしカナンは力を込め続ける。

――腕が折れてもいい……！！　足が千切ぎてもいい！！　アイツらだけは……っ！！

「……ッ！！　出せよ！！　ここから出せよぉぉぉッ！！」

あらん限りの声量で絶叫する。

無論その声は残らず反響してカナンの鼓膜を貫くが、もうカナンの耳には何も入らない。

ただ自身が想う人達の為に、今はこうする他にカナンに出来ることは無かった。

◆◆◆

祐希奈とヴィヴィオは2人とも口を噤んでいた。
今2人は政府本部から脱出し、とにもかくにも落ち着こうという新の提案でミッド繁華街の裏路地にある寂れたカフェに入店した。
2人がいるテーブルにも店内に流れる落ち着いたBGMは届いている筈なのだが、如何せんそれを楽しめる状況ではなかった。
新は店に入るなり席を外してしまっている。
席に残された2人は何をするでもなく、ただ黙って座っていた。

「……っ」

しかし祐希奈の頭の中には様々な感情が渦巻いていた。
怒りに我を忘れてあの場に突貫した事を悔いてはいたが、それよりもカナンの受けた扱いに対する怒りの方が勝っていた。
そして政府本部から外に脱出して一呼吸おいた今、ギリギリの所でその怒りが爆発するのを抑えているところだった。

「祐希ちゃん……」

目の前で歯を食いしばる親友を見て、ヴィヴィオもまた顔を曇らせていた。

「おいおい、怒りすぎて椅子とかテーブルとか焦がしてくれるなよ？　そんな事されたら俺がここのマスターに出禁くらっちまう」

ヴィヴィオが祐希奈にかける言葉を選んでいる所に酷くいつも通りの、しかしこの場に限って言えば空気を読めていないと言われても可笑しくない程に落ち着いた声が響いた。

「……」

「新さん……」

眼光鋭く睨み付ける祐希奈も、軽く呆れを含んだヴィヴィオの視線も全く意に介さず、新は全員分のコーヒーを配り終えて自分のカップに口を付ける。

「そう睨むなよ。　俺はちゃんと言ったよな……？」

「！　……っ」

「……ぅ」

カップから口を離し、祐希奈の視線を真っ向から受け止るような鋭い目をした新は重い口調で言い放った。

そんないつもは見せない雰囲気の新から祐希奈は思わず視線を逸らし、ヴィヴィオは小さく声を漏らして萎縮する。

事前に言われていたにも関わらず、怒りに我を忘れて先行した祐希奈とそれを止められなかったヴィヴィオにとって、その一言は重くのしかかった。

「……ま、そうカリカリくよくよすんなよ。　それより本題に入るか」

ふぃと溜め息と共に固く結んだ口と目の力を抜き、新は再び落ち着いた口調に戻った。

「あの後カナンは死刑に決まった。　執行は3日後だ」

「そんな……！！」

「嘘……」

新の口から出た言葉に、祐希奈とヴィヴィオは絶句した。

「なんで……！！　なんでよ！！　なんでアイツが死刑なのよ！！」
「ダメなんですか！？　もうどうにも出来ないんですか！？」
「正直アイツらがここまでやるなんてのは予想外だったな……」

今にも掴みかかろうかといった勢いで詰め寄る二人を尻目に、新はただただ落ち着いた様子で吐き捨てるように呟いた。

「……ッ！！」
「待てよ……」

新の言葉を聞き、座っていた椅子が倒れるほどの勢いで立ち上がろうとした祐希奈の肩を新の手が掴んで制した。

「離しなさいよ……！！」
「また1人で暴れようってのか？　無駄だ、止めとけ」
「こんなトコで黙ってるよりかはずっといいでしょ！？」
「私も……そんな事聞いて黙ってなんていられません！！」

今にも泣き出さんばかりの声を張り上げる祐希奈の対面の席に座っていたヴィヴィオも、堪えきれずに立ち上がる。

「ったく、わからねぇヤツらだな……　大人の話は聞いとけって……」

深く溜息をつき、新は一度顔を伏せる。
そして再び顔を上げた新を見た瞬間、祐希奈とヴィヴィオはさっきとは違う意味で絶句した。

……笑っていた。

不敵に、嘲笑うように、さも楽しそうに……
新は2人の少女が今まで見てきた笑顔のどれにも当てはまらないような笑みを浮かべていた。
まるでカナンが死刑に処される事など、まるで意に介していないかのように……
今のこの状況がまるで日常茶飯事だとでも言うように……

「あんた……なに笑って……」
「あ、新……さん……？」

そんなある意味で異常とも言える新を見て、祐希奈とヴィヴィオの怒りは一瞬ではあるが、そのなりを潜める。
それを待っていたとでも言わんばかりのタイミングで、新は口を開いた。

「無策で暴れたって仕方ねぇさ。　どうせやるならしっかり入念に、これでもかって位に準備してから……」

そこまで口に出して新は僅かに声量を上げ、言い放った。

「大暴れした方がいいに決まってんだろ？」

祐希奈とヴィヴィオにとって3度目の絶句だった。
それを見て新は、満足そうな笑みを浮かべてコーヒーに口を付ける。

「ほら座れよ、お嬢ちゃん達。　年くったヤツの話は長いんだ。
座ってコーヒーでも飲みながら聴かねぇと、暴れる前に疲れちまうぞ？」
「「……」」

……2人の少女はまるで吸い寄せられるかのように、全く同じタイミングで椅子に腰を下ろした。

「よろしい」

それを見て新は、また満足そうな笑みを浮かべるのだった。

◆◆◆

カナン達が拘束されている牢の場所などは、どうやったのか定かではないが新が入手していた。
……間違いなく正規の手段で得た情報ではないという事は、もう祐希奈とヴィヴィオにもなんとなくわかっていた。

「じゃあこれからの事、はやてさんやママ達に伝えなきゃ……」
「いや、この事は俺達3人だけでやる」
「え……？」
「はやて達には今回俺達がやることは一切伝えない」
「……どういう事？」

訝しげな顔の祐希奈とヴィヴィオをよそに、コーヒーのお代わりの注文を済ませて新は口を開いた。

「カナン達の奪還が上手くいったとしても、俺達は政府に難癖つけられて追われる身になる可能性が高い。　そうなって暫く姿を隠すとなれば、はやて達と連絡を取るのは難しくなる。　だが連絡も無しに姿を消したとなったら俺達の事を調べる。　はやてなら必ず……な。　そうなったら政府のやろうとしてる事には、嫌でも行き着くさ。　その後の事は任せる。　心配しなくてもすぐに俺達が動けるようになる状況を作り出してくれる。　はやてとアイツらなら、絶対にだ」
「「……」」

祐希奈とヴィヴィオにとって作戦を聞いている最中のものも含め、もう何度目になるかわからない絶句だった。
今新が言った事を簡潔にまとめるならば――
『黙ってやる事をやって姿を消し、後の事ははやてに任せる』

という事だった。
それを全く悪びれもせず、さも当然の様にいい放ったのである。
面倒事は全て丸投げ、無責任極まりないと罵倒されても可笑しくない新の言い分。
しかし祐希奈とヴィヴィオが新に向ける視線には呆れもなければ怒りもない。
むしろ尊敬や羨望に近い感情が僅かに込められていた。
なぜならば言い回しはどうあれ新の言葉の節々からは、はやてや彼の家族に対する信頼が滲み出ていたからである。
自身が如何なる状況に置かれようと、それを打破するために動いてくれる家族への信頼。
例え一時(いっとき)彼女達の手を煩わせる事があっても、その信頼を上回る働きで応えようと全身全霊を尽くす姿勢と覚悟。
その全てが先程の発言に集約されていた。
全ては彼らの家族の内に存在する、断ち切れぬ絆のなせる技であった。
「さてと……　質問もなしって事で、作戦決行まで腹ごしらえしてしっかり休むか。　ディナー用のメニュー貰ってくるわ」
そう言って壁にかけられたレトロな時計で時刻を確認し、席を立った新の背中を見て2人の少女は顔を見合わせる。
「なんていうか……」
「凄い……よね」
具体的に何が……と言われれば口ごもるしかないのだが、祐希奈

とヴィヴィオにとって今カウンターで店のマスターと談笑する新が、酷く大人びて見えていた。

「参考にしてみたり……しようかな」

「いや、ヴィヴィオはそのままでいて。　あんな大人にはなっちゃダメだからね、絶対」

そう言って話す二人の顔にもうこの店に入った時の様な暗い影はない。

あるのはこれから自分達が成すべき事に想いを馳せる顔だった。

「今日は随分可愛らしいお姫様を連れてるじゃないか」

「おいおい、政府に喧嘩売ろうってお嬢ちゃんがお姫様ってガラか？」

寂れたカフェを営みつつ情報屋としての裏の顔を持つマスターに、コーヒーの代金と共に得た情報分の料金を支払って、新はマスターからディナーのメニューを受け取る。

「僕にとっちゃ可愛い女の子は皆お姫様だよ。　それに……」

「ん？」

「騎士を引き連れて囚われの王子様を助けに行こうってお姫様なんてのも、なかなかどうして悪くない」

「……だな」

祐希奈とヴィヴィオが座る席から、少し離れたカウンターの向こう。

そこで屈託の無い笑みを浮かべるマスターを見て、新もまた笑みを浮かべていた。

◆◆◆

彼女が張った悪意の根は、確実に政府を侵食していた。

――さぁ、アイツらはどう出るか……　なんにせよ楽しませてもらうか……

法廷に飛び込んできた祐希奈、白煙の向こうに消えた新、あの場にいたであろうヴィヴィオ。

その全てが彼女、カレン・ロットこと刀のフラメの対象だった。

――奴らは必ずここに来る。　奴らにとって風間カナンは重要なｆａｃｔｏｒだしな……

モニターを見つめ、先の展開に心躍らせる。

そんな彼女の高揚はさほど時間を置かずに消し飛ぶ事になる。

その瞬間はなんの前触れも無く、突如として訪れる。

日付が変わるのと、ほぼ同時の事だった。

政府本部拘置所の一角を、地震と錯覚するほどの衝撃と凄まじいまでの爆音が貫いた。

◆◆◆

―爆！―

「うぉわっ！？」

突然の閃光と爆発が、カナンの絶叫で満たされていた独房を吹き飛ばした。

爆風と衝撃でカナンを縛り付けていた椅子は強固に固定されていたにも関わらず、その足は床材の強化コンクリートごとへし折れてカナンは独房を転がった。

「アホかこの馬鹿！！　人が1人通れるだけ壁を壊すだけでいいっつたろ！！　それがなんで部屋半分吹っ飛ばしてんだよ！？」

「やっちゃったもんは仕方ないでしょ！？　ていうかアホかこの馬鹿ってなによ！！」

「うぉお危ねぇ！！　喚くな殴るな暴れんな！！」

「二人共ちょっと落ち着いてぇ！！」

地べたに這い蹲りながらもカナンの耳には聞きなれた声が飛び込んでいた。

「……ははっ」

あまりにダイナミックな突入に、一瞬何が起こったのかわからなかったが思わず笑みが溢れた。

――まさかほんとに来るなんてな……

信じていなかった訳じゃない。

だが不安がカナンの心を支配しかけていたまさにその時、絶妙とも言えるタイミングでその瞬間はやってきた。

「くっそ……　結局殴りやがって……　それもこれも全部お前のせいだからな」

「いってぇ！！」

悪態と共に突如カナンの縛り付けられた椅子が蹴り上げられる。空中で2回3回と回転し、実に乱暴なやり方で無理やり椅子は立たせられた。

そしてカナンの目に入ったのは、自身の前に得意げな表情で立つ2人の少女。

「助けに来たわよ、カナン」

「助けに来たよ、カナン君」

2人は同時にそう言い放った。

◆◆◆

モニタールームに響きわたった大音量のアラートに、政府局員は目を見張る。
そして次の瞬間、混乱もそのままに一斉に局員たちは動き始めた。

確認と指示の為に通信器に手を伸ばす者。
異常をきたした監視モニターの復旧に取り掛かる者。
現場の応援に向かおうとモニタールームを飛び出す者。

しかしその全員の顔には、焦りと驚きが見て取れた。
それもそのはず、先の裁判中に起こった爆破事件。
それから僅か半日しかたっていないというのに、今度は拘置所で爆発が起こったのだ。

――テロリストによる攻撃

今、事態の収拾に当たっている全ての局員の頭の中には、その可能性が刻み込まれていた。

――やってくれるじゃねぇか……！！

その中でたった1人。
モニタールームの壁際に設置されたソファに腰を降ろしたまま、フラメは口元を歪めて笑みを浮かべた。

――まさかこうも正面からきやがるとはな……！！　Ｃｒａｚｙなヤツらじゃねぇか……！！

阿鼻叫喚のモニタールームの中で1人異質な空気を放ちつつ、フラメはスーツの内ポケットに忍ばせた通信端末に手を伸ばす。

「さぁ……　楽しませてくれよ……？」

耳に当てた通信端末の単調な呼び出し音を聴きつつ、笑みを浮かべたままのフラメはぽつりとそう呟いた。

第十八話　自分が信じた人のため　前編（後書き）

便利すぎた……
自分のキャラだからというわけではありませんが『大人』という立ち位置の新があまりにも発言させやすく、便利すぎた……

という訳で前編終了でございます。
後編は更に長いです。
では続きをどうぞ。

第十八話　自分が信じた人のため　後編（前書き）

という訳で後編です。
そして皆様に１つお願いが。

皆様お気に入りの燃えＢＧＭをご用意の上お楽しみ下さい。
ＢＧＭを流すシーンは……心で感じて下さい。

では始まります。

第十八話　自分が信じた人のため　後編

―剛！―

「椅子は壊れたけど何よこの服！　なんでここまで雁字搦めにしなきゃならないのよ！？」
「いでででで、折れる！　そこは関節！！　そしてそれはその方向には曲がらないっってぇええ！！」
「さっきからうるさいのよ！！」
「誰のせいだあああぁ！！」
「お前はいいよなぁ……　そうやって叫ぶだけで……　俺なんか必死で立てた作戦がしょっぱなからパァだよ……　あんだけドヤ顔でカッコつけたってのに……　はぁぁぁ……　どうせ俺なんか……」
「溜め息ついてる暇があったら助けてくだぁあああっ！　お前なにやって――！！」
「祐希ちゃん、燃えちゃう！　カナン君が燃えちゃう！！　っていうか燃えてる！！」

政府本部のモニタールームもそうなのだが、この独房の中も相当なまでの阿鼻叫喚に陥っていた。

祐希奈はカナンが着せられた拘束服の周りにまとわりつく様に巻き付けられた皮ベルトを燃やそうと炎を滾らせ、魔力を封じられて拘束されているカナンは触れれば火傷必至の炎を防御することすら出来ずに声を荒らげ、どうするべきかと思案していたヴィヴィオもカナンの頭に炎が飛び火したのを皮切りに仲間入り、それをちょっと離れた壁際で顔に影を落とした新が眺めつつ毒づく。
その光景は数で劣るとはいえ、十分すぎるまでに阿鼻叫喚の体を成していた。

「動くな！　貴様らを器物破損の現行犯で――！！」
「えぇい、もう！！　まどろっこしいわね！！」
「ちょっ！　止め――！！」

―豪！―

「ぐあぁぁ！！」
「ぎゃあぁぁ！！」

政府本部全域に轟いた警報を聞きつけ、いち早くこのカオス独房に踏み込んだ局員を出迎えたのは、祐希奈の怒号と共にフルスイング『される』カナンだった。
カナンが直撃した局員は哀れにも意識を手放し、その場に倒れ込む。
バットの如く振るわれたカナンの意識も飛びかけたが、そんなのお構いなしとばかりに祐希奈は独房を飛び出す。

「もうこのまま行くわよ！！　ほら、新は先導！！　ヴィヴィオは殿（しんがり）！！」
「……あいよー」
「う、うん！！　それより祐希ちゃん！！　せめてカナン君は引きずらないで担いで行こう！？　私も手伝うからぁ！！」

この独房に突入してからストレスのメーターが振り切り気味な新と、カナンを心配するあまりキャラが崩れかけているヴィヴィオも祐希奈を追って独房を飛び出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ここね……！！」

―轟！―

咲夜とレフィリアが収監されている第2監獄に向かう為の通路に当たる空中通路の入口の扉に、祐希奈は燃える拳を叩き込んで爆砕した。

しっかりと閉鎖され、見た目から強固な材質であることは明白な扉だったが、如何せん祐希奈の前では紙と同義だった。

「カナン君……　大丈夫……？」

「今までで一番酔った……　うぐ……っ」

そして並走していたヴィヴィオは、再び祐希奈に引きずられ始めたカナンの顔を覗き込んで声をかける。

ヴィヴィオは爆走する祐希奈に引きずり倒され、散々なまでに廊下や壁にその身をくまなくぶつけたカナンを心配しての言葉だったが、当のカナンは体の外より中からの不調に晒されていた。

身動き1つ取れないまま縦横無尽に振り回され続ければ、無理もない話ではあるが……

「……ん？」

もうツッコむ気も失せ、祐希奈のナビに徹していた新が前方の空中通路の出口の扉の異変に声を漏らした。
通路の扉が徐々に開き始めたのだ。
そして……

「！！　２人共止まれ！！」

扉が半分ほど開かれた瞬間に『発射』された物を見て、新は３人の前に躍り出た。

「はっ！！」

―迅！―

一声、短く息を吐いて拳を振り抜く。
そこから放たれた藍色の魔力弾は４人に向かって飛来するそれを捉えた瞬間、先程の祐希奈の炎に勝るとも劣らない爆炎を撒き散らして飛散した。

「い、今のって……」

新の声を受け、咄嗟にシールドを展開して祐希奈とカナンを庇ったヴィヴィオの顔が驚愕に染まった。
シールド越しに鼻を突く、不快な『火薬』の臭気。
夜風に吹かれて散ってゆく、赤黒い火花を纏った黒煙。
明らかに質量兵器による攻撃だった。

【逃がさん……】

一段と重苦しい音を最後に響かせ、重厚な扉は開ききる。
それと同時にその扉の向こうから機械を通した、最近聞いた覚えが無い気がしないでもない声が空中通路に響きわたった。

【逃がさんぞ犯罪者共め！！】

再び響く機械越しの声をかき消さんばかりの排気音と駆動音が徐々に近づき、その全貌が月明かりに照らし出された。

「……なによあれ」
「え……と」
「なんつーか……」
「な、なんだよ？　なにが起こってんだよ……！？」

前に立つ祐希奈に遮られて見えないカナンを除き、扉の向こうから現れた物を見た3人はなんとも言えない声を漏らした。

【貴様ら全員拘束してやる！！　私とこのドラゴン戦車がな！！】
【ガオオォォォォォォン！！】
≪うわぁ……≫

何者かが搭乗しているのか遠隔操作なのかは定かではないが、操縦者は自信たっぷりにその名を言い放った。
見た目に加えてネーミングセンスまでも不憫なそれに、3人は思わず顔を顰めた。
姿を現したのは1機の機動兵器。
他に塗る色は無かったのか、何故か錆びた金属を思わせる色で塗装を施されたずんぐりとしたボディ。
その脇には明らかに走行する際に邪魔になるであろう、刺付きの

車輪を装着している。
とどめにボディから伸びた首の先に、その体躯の3分の1はあろうかという巨大で不細工なドラゴンを模したの頭部を搭載した機動兵器。
それが本物のドラゴンと聴き間違える程に生々しい咆哮をあげる様は、紛れも無くシュールそのものだった。

【ゆくぞ犯罪者共め！！】
「なんだか知らないけど今はアンタみたいな不細工に構ってる暇は無いのよ！　アシェル！！」
「あ、おい！！　待て、祐希奈！！」

新の静止を振り切り、祐希奈はアシェルを起動させて疾走した。

【くらえぃ！！】
「なによ、こんなもん！！」

ドラゴン戦車は迫り来る祐希奈に向けて、口の内部に装備された火炎放射器で応戦する。
だが炎熱変換のスキルを有する祐希奈はそれをものともしない。
手にしたブレードを片手一本でフルスイング。
なんなく炎をなぎ払い、一切速度を落とす事なく一直線に前進する。
そしてドラゴン戦車の眼前で地面を踏み抜かんばかりに跳躍し、その頭部に向かってブレードを――

「祐希奈、上だッ！！」
「なっ！？」

振りおろさんとするまさにその瞬間、すぐ後ろから焦りを含んだ

声が響いた。
カナンの声に弾かれる様に顔を上げた祐希奈の目が捉えたのは、自身に向かって降り注ぐミサイルの雨！
「フェアリー！！」
【アクセルランサー！！】

―閃！―

事態を把握したヴィヴィオが即座に放ったアクセルランサーは、寸分たがわず祐希奈に殺到するミサイル群を迎撃する。
だが撃墜されたミサイルが生んだ爆炎は、最も近くにいた祐希奈の視界を覆い尽くした。
【マヌケめ！！】
「……っ！！」

爆炎の切れ目から祐希奈が捉えたのは今まさに放たれんと光を漏らす、レーザー機銃の銃口だった。
「ったく……」

しかしシールドを展開しようと身構えた祐希奈の視界は、一瞬で切り替わる。
まるでテレビで流れている映像のシーンが切り替わったかの様に錯覚する程の視界の変貌。
そんな祐希奈に構わず酷く近い位置で呆れたような、疲れきったかのような声が放たれたのはドラゴン戦車がまるで見当違いの方向にレーザーを放ったのと同時だった。

「え……？　ちょっ！？」

ここにきてやっと祐希奈は自身の状況を把握した。
つい半日前にも陥った状況、お姫様抱っこである。
そしてその状況を作り上げた相手も、また同じだった。

「待てって言っただろうが」

ドラゴン戦車を見据えたままそう呟く新の顔は、気の抜けた口調とは打って変わって真剣そのものだった。

「ななな何してんのよ！？　あんなのシールド張れば防げて……！！　それよか早く降ろしなさいよ！！」
「あー　わかったからそう喚くなっての。　つーかお前……」

腕の中で喚く祐希奈を地面に降ろし、新は指で地面をさして言い放った。

「突っ込むのは勝手だけどな……せめて置いていってやれよ」
「……ぅあ」
「げっほ、ごほ……っ　う、ぅおぇぇぇ……」

その先には爆炎を吸い込んで咳き込みながら、今にもリバースしそうなまでに切羽詰ったカナンがのたうち回っていた。

あろうことか祐希奈、カナンを引き連れたまま突貫したのだった。
これが先程祐希奈のすぐ後ろからカナンの警告が聞こえたのと、最初に新が祐希奈を止めた理由である。
しかしここに至るまでに散々痛めつけられて置きながら、祐希奈の為に体を張る男カナン。　流石は我らが主人公である。

……払った代償に対してあまりにも割に合わない活躍なのでは、とツッコんではいけない。　いけないったらいけないのだ。　主にカナンの名誉のために。

【ふはははは！！　抵抗は止めて大人しく拘束されるがいい！！】

―弾！―

自身の優位を確信したのかドラゴン戦車から響く声と共に、こんどは背中から伸びたキャノン砲が砲弾を吐き出した。

「避けろ！！」

「言われなくてもそうするわよ！！」

「でもこのままじゃ……！！」

放たれる砲弾やミサイルをかわしつつ、全員が顔を歪めた。

こういった状況に置いて、目の前のドラゴン戦車は最も面倒な類の敵だった。

今ここにいる目的は咲夜達の奪還。

その為には今いる空中回廊を通る他に道は無い。

そうなれば立ち塞がるドラゴン戦車は、なんとしてでも倒さねばならない。

だというのに……

【ふはははは！！】

―弾・弾・弾・弾・弾！―

操縦者の高笑いと共に、直撃すればただでは済まない質量兵器が惜しみなく放たれる。

加えて身を隠す場所すらないこの通路も、遠距離攻撃主体のドラゴン戦車に味方していた。

【諦めるがいい！！　もうすぐ武装局員がこの場を包囲する為に集結する！！　そうなれば貴様らとてもう逃げられんぞ！！】

「この……っ。鬱陶しいわね！！」

「これじゃ近付ない……！」

「調子に乗んなよ……？」

―瞬！―

弾幕と呼んで差し支えない程の質量兵器の雨を、一瞬の隙を突いて突破したのは新だった。

【ぬっ！！】

「遅いんだよ……！！」

―撃！―

ドラゴン戦車のボディに向かって魔力を纏った右足を振り抜く。

新の蹴りは装甲の表面を引きはがし、そこから内部の機械がその身を覗かせる。

さらに作り上げた弱点に追撃を加えようと、新は一層の魔力をその四肢に込める。

しかし……

「なッ！？」

追撃は放たれる事なく新は驚きを含んだ声と共に、一足飛びにその場を離れる。

「おいおい、マジかよ……」
「新さん！？」
「新！！　どうしたのよ……！？」

新の攻撃を受け、質量兵器の弾幕が途切れたのを見計らって攻撃に移ろうとした祐希奈とヴィヴィオは、新の不可解な回避に戸惑い後退する。
新は苦笑いを浮かべてはいるが、その顔には明らかな驚愕の色があった。
そしてその理由は間もなく明らかになる。

【ふふふふふ……】
「そんな……！？」
「嘘でしょ……！？」

祐希奈とヴィヴィオの二人が目にしたのは信じがたい光景だった。
なんと先程新に破壊された筈の装甲が、傷１つ無く再生していたのだ。

【ふはははは！！　見たか！！　これが我がミッドチルダ政府が誇る科学力の結晶、自己修復金属だ！！】

まるで捻りのない名前はともかく、その名の意味する事を想像した祐希奈とヴィヴィオの顔も新と同様、驚愕に染まった。

【このドラゴン戦車の装甲は全てこの自己修復金属！！　そしてダメージを受ければ即座に再生を始める！！　如何なる部位が破壊されようと秒単位で完全な修復が可能なのだ！！　貴様らが幾ら束になったとて、このドラゴン戦車を破壊することなど出来ようはず

もないわ！！】
【ガオオォォォォォォン！！】
操縦者に同調するかの如く、ドラゴン戦車は咆哮する。
【加えて頭部に搭載されたセンサーがリアルタイムで貴様らの動きを記録し、我々が保管する過去の膨大な戦闘資料と照合、最適な迎撃パターンを算出して自動的に迎撃行動を取る！！　どうだ！！　貴様らが如何に無謀な行いをしているか自覚出来ただろう！！　ふはははは！！】
「大声でギャーギャーと……うるっさいのよ！！」
饒舌にスペックを話し続けるのに耐えかねて、炎を滾らせた拳を振り上げて祐希奈が通路を駆けた。
「そんなモン修復できなくなるまで壊せばいいだけでしょうが！！」
―轟！―
【馬鹿め！！　それをさせない為のこの重武装よ！！】
その拳をドラゴン戦車の頭頂部に叩き込もうとした寸前に背中の装甲が開き、またしてもミサイルが祐希奈に殺到した。
「このおぉぉぉっ！！」
「祐希ちゃん！！」
祐希奈の援護の為ヴィヴィオもドラゴン戦車に立ち向かう。
――でもこのままじゃ……っ

しかしそのヴィヴィオの思考は、焦りに染まっていた。
今この場を切り抜けるには目の前の敵を迅速に、かつ完全に破壊しなければならない。
だがそれには何もかもが足りなかった。
間もなくこの通路は政府局員に包囲される。
ドラゴン戦車を破壊出来るだけの砲撃を撃つにしても、操縦者の言葉が正しければ砲撃の為のチャージタイムを狙われる。
最も効果的なのは質量兵器が例外なく抱える弱点である弾切れを待つ事だが、それより前に包囲されてしまっては元も子もない。

――そうなったらカナンは……！

焦りを抱くのはヴィヴィオだけではなく祐希奈も同じだった。
まだ公表されていないとは言え、一度死刑が言い渡されたカナンがここで再び拘束される様な事があったら、その後に待っているのは逃れようの無い死であることはヴィヴィオも理解していた。
ここまで来てそんな結末に終わる事など誰も望んでいない。
しかし今の2人の少女にとって、目の前の敵は余りにも相手が悪すぎた。
時間、状況、敵。
その全てが自身の想いを打ち砕く為だけに存在しているかのような錯覚に、2人の少女は陥ろうとしていた……

『2人共、下がれ！！』

この念話が頭の中に響く迄は。

「「――！！」」

その声を聞いた祐希奈とヴィヴィオは攻撃を中断し、瞬時にドラゴン戦車と距離を取った。

「ったく、バカスカ撃ちやがって……　やかましいったらありゃしねぇ」

「新……」

「新さん」

―閃！―

祐希奈とヴィヴィオを追撃しようと放たれたミサイルを、新は魔力弾で残らず撃ち落として1つ溜め息を吐いた。

『いいか、よく聞け。　今から俺が隙を作る。　そしたら合図を出すからヴィヴィオはヤツの頭を狙え。　祐希奈は……待機だな』

新は両脇に移動した祐希奈とヴィヴィオに目もくれず、ドラゴン戦車を睨んだまま操縦者に聞こえないように2人に念話を飛ばす。

『そんなっ！！　それにそんな事出来るの……！？』

『無茶です！！　新さん1人じゃ……！！』

突然に新が出した策を聞き、祐希奈とヴィヴィオは当然の如く反論する。

しかしそれをまるで気に留めずに新は1歩踏み出し、祐希奈とヴィヴィオの前に立つ。

『説明してる時間も惜しいんだ。　あと合図を出すまで2人とも絶対に攻撃すんなよ？』

「新！！」

「新さん！！」

そのまま歩を進めようとする新に向かって祐希奈とヴィヴィオは声を荒らげる。

しかし……

「大人の言うことは聞けって……言ったろ？」

「「――っ」」

振り返った新が2人に見せたその顔には、寂れたカフェで見せた『あの笑顔』が浮かんでいた。

【ふふふ……　ついに投降する気になったか？】

「はっ、まさか」

再びドラゴン戦車に向き直り、そこから響く声を鼻で笑い飛ばして新は首にかかるトレードマークの真紅のマフラーを巻き直す。

「確かにそいつは大したもんだ。　まさか政府がそんなもんを作ってたなんて、知らなかったよ」

【ふん！！　思い知ったか！！　ならば大人しく……】

「でもそいつには決定的な弱点がある」

【なんだと……！？】

これにはドラゴン戦車の操縦者だけでなく新の後ろの祐希奈とヴィヴィオも声を上げかけた。

今まで散々苦戦した敵の弱点を指摘しようというのだ。

新は自身の後ろの祐希奈とヴィヴィオを振り返らずに指差し、口を開いた。

「さっきこいつらが攻撃してる時に見させて貰ったけどな……　そいつは頭への攻撃にはいち早く反応してたのさ。　他の部位が破壊される事にも構わずに、まるで頭部に攻撃が来るってのが分かってるみたいに先手を取ってな。　つまるところ頭には他を犠牲にしてまで守らなきゃならないモンが詰まってる……だろ？」
【ぬっ……！！】
「あ……っ」

これみよがしに頭を指先でコツコツとつつきながら締めくくった新を見て、操縦者から苦しげな声が漏れる。
それを聞いた新は笑みを浮かべてまた1歩踏み出す。

もう1つ漏れた声は祐希奈だった。
思い返せばドラゴン戦車に向けた最初の斬撃も、言われてみれば頭部に向けて放ったものだった事を思い出していた。
そして祐希奈がその斬撃を放つ前に、確かにドラゴン戦車は火炎放射で先手を取っていた。

「ま、お前が聞いてもいないのに聞かせてくれたスペック通りの事が出来るってんなら、頭の1つや2つ守りきるくらい簡単だろうな」
【そ、その通りだ！！　それがわかったとて私の優位に変わりはない！！】
「じゃあ……　こうしてみるか」
【なに……！？】

そう言って新は歩き始めた。
それを見て操縦者は驚愕の声を漏らす。
そんな操縦者などお構いなしに、新はまるで散歩でもするかのような速度でドラゴン戦車に近づいてゆく。

「お、攻撃してこねぇな。　はっはっ、やっぱり歩いて向かってくる敵なんざいるわけねぇか」
【き、貴様……！！】

小馬鹿にするように笑いながら歩みを止めない新を見て操縦者は怒りに震え、奥歯を噛み締める。
政府が長年かけて心血を注いで開発した最新鋭の兵器に戦闘中に歩いて近づくなど、プライドに傷を付ける行為以外のなにものでもなかった。

【ふん！！　大馬鹿者めが！！】

しかしこの操縦者も一筋縄ではいかなかった。
あれだけ煽られたにも関わらず、すぐさま冷静さを取り戻してドラゴン戦車の全武装の照準を、新に向けてロックする。

【このドラゴン戦車は私が操縦している事を忘れるな！！　手動で迎撃すればよいだけの事よ！！】
「ま、当然そうするわな」
「新！！」
「新さん！！」

ドラゴン戦車に搭載された全ての砲門が、新を捉えたのを見た祐希奈とヴィヴィオは思わず新の名を呼ぶ。
しかし新は突貫するどころか歩みを止め、さらには腰を落として待ち構えるかのような体勢を取り、完全に動きを止めた。

――でもなぁ……

【くらえぇぇい！！　全砲門からの一斉射撃を！！】

―轟！―

まさに一斉射撃と呼ぶに相応しい夥しい量のミサイルが、砲弾が、レーザーが爆音と共に放たれ、新1人に殺到した。

――そんなもんは……

―爆！！―

凄まじいまでの爆音が通路に響き、炸裂した質量兵器の爆風が祐希奈とヴィヴィオを襲い、2人は思わずシールドを展開した。

しかし2人は見ていた。　爆発の僅か一瞬前に、ドラゴン戦車に向けて疾駆した一陣の藍色の閃光を――！

「弾より早く動くヤツに当たるはずがねぇんだよ」

【なんだとぉ！？】

操縦者は今度こそ驚愕に染まりきった声を上げた。

自身のすぐ傍から響く声などまるで耳に入らず、代わりに思い出したかのように鳴り響く警報音がその鼓膜を貫いた。

僅か数瞬前までまるで異常など無かった目の前のモニターが一転、今は全ての計器が停止し、コントロールディスプレイには残らずアラートを示すレッドランプが燦然と光を放っていた。

とうの新はと言えばドラゴン戦車の首の後ろに回り込んでいた。

そしてその根元に深々と打ち込んだ右手を握りこみ、その中に走るコードをわし掴んだまま根こそぎ引き抜く。

機動兵器といえど所詮は機械。　複雑であるが故に僅かな部分でも破壊されれば異常をきたしてしまうのは、最新鋭の機動兵器と言えど変わりはなかった。

『よーし、頭は機械しか詰まってねぇから遠慮はいらねぇぞ。　やっちまえ』

そして緊張感のカケラもない声色で祐希奈とヴィヴィオに合図を送った。

「ヴィヴィオ！！」
「うん！！」

２人も我に返り、ヴィヴィオはその手に魔力を込める。

「フェアリー、ファイアリングロック解除！！　ディバイィィィン……！！」

無機物を破壊する為にリミッターを解除、そして放つは彼女が母から受け継いだ直伝の砲撃！

「バスタァァァッ！！」
【ひっ！！】

―轟！―

それは寸分たがわずドラゴン戦車の頭部に直撃し、その首を根元から消し飛ばす。

「祐希奈！！」

それを確認する事もなく、新は祐希奈の傍に舞い戻りその名を呼ぶ。

そしてとてつもなくいい笑顔でこう言い放った。

「我慢は飽きたろ？　やっちまおうぜ」

「……！！　おっけー……！！」

―煌！！―

溢れだすのは紅と藍に染まった魔力光。

２人はその顔に、見る者全ての背筋が凍りつかんばかりの笑みを浮かべて構えを取る。

祐希奈は己が両手と手にしたブレードに炎を纏わせ、新は持てる魔力を己が四肢に集中させる。

「そういえば馬鹿だのマヌケだの……散々言ってくれてたわねぇ……！？」

「そういや俺もさっき大馬鹿者って言われたっけなぁ……！！」

【や、やめて！！　やめ……くれ！！　ドラ……ン戦車が！！　私たちの……と汗と涙……結晶が……！！】

「「うるさい」」

ドラゴン戦車からとぎれとぎれに聞こえる涙声を一喝し、祐希奈と新は同時に動く。

「アクセルバレット！！」

―閃！―

新の放つ無数の魔力弾と並走し、祐希奈は地面を滑る様に疾走する。

ヴィヴィオと同じく物理破壊のリミッターを解除された藍色の魔

力弾は、吸い込まれる様にドラゴン戦車に命中し、そのボディに無数の穴を穿つ！

「紫電……一閃！！」

―豪！―

裂帛の気合いを込めた祐希奈は身体のバネをフルに活かし、その剣先で通路の地面を抉りつつドラゴン戦車を切り上げる！

その威力たるや凄まじく、ドラゴン戦車はその装甲を無残に撒き散らしつつ空中高くまで運ばれる。

「ラグナ……！！」

ドラゴン戦車の向かう空中には、滲み出んばかりに魔力を集中させた右手を振りかぶった新が待ち構える。

「ブレイクッ！！」

―撃！―

振り抜いた拳はドラゴン戦車の背中に突き刺さり、祐希奈によって引き剥がされた装甲の奥から粉々に砕け散った基盤や、千切れ飛んだコードが四方八方に撒き散らされる。

「ふっふ～ん♪」

打ち返されるかの様に寸分たがわず地表に向けて進路を変えられたドラゴン戦車を見上げて待ち構えるのは、笑顔でパキポキと指を鳴しつつ身に纏う炎をその右手に集中させる笑顔の祐希奈。

それを確認した新もまた、その顔を喜色に染めてカートリッジをロード。
そして得た魔力の全てを右足の先に集中させ、ドラゴン戦車に向かって突貫する！
「瞬牙閃烈……！！」
「烈破紅蓮……！！」
互いに名を告げて放つ技は、自身が誇る最高峰の威力を叩き出す！
その脇でヴィヴィオは「あわわわわ……」と口にしつつ、ドラゴン戦車の行く末を見ている事しか出来なかった……
「フィンブルバイトォ！！」
「爆！！　砕！！　撃ぃ！！」
―轟！―
―爆！―
二人の拳と脚から放たれる必殺の一撃の挟まれたドラゴン戦車は、それがドラゴン戦車という物だったという事など誰にもわからない程に、完膚なきまでに破砕された。
「嵐火双鎚撃（らんかそうついげき）……ってところかしらね♪」
「いいセンスだ♪」
そして一拍おいて轟音と共に爆散するドラゴン戦車だったものを背に、2人は満面の笑みを浮かべつつどちらともなくハイタッチを始めるのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「よっこらせ……と」
「おやじ臭いわよ、新」
「もう若くねぇんだから多めに見ろよ」
「そんな事より早く引き上げて……！！」
「お～　悪い悪い」
「カナン君大丈夫……じゃないよ、ね……」

空中通路の脇に設置されていた外灯の傍で、新は通路の外に投げ出されていた皮ベルトを手繰り寄せる。
命綱と呼ぶには余りにも頼りない囚人拘束用の皮ベルトのその先にはカナンがぶら下がっている。
事もあろうに新、カナンを拘束していた皮ベルトを一度解いてその先にカナンの足を揃えてくくりつけ、その反対側を外灯のポールに結びつけて空中通路の外にぶら下げていたのである。
所謂みのむし状態を連想していただければわかりやすいだろう。
空中高くに拘束され、魔力を封じられたうえに自身の命を1本の皮ベルト預け、カナンは祐希奈達が戦っている間ずっと宙吊りになっていたのだ。
しかもミサイルが爆発するたびに、当然その少なくない衝撃がカナンにも伝わる。
なのに当のカナンは通路の上で何が起こっているのか知る術もな

く、ただその衝撃で生まれる振動と自身を撫でる強風に晒されていたのである。
その恐怖たるや尋常ではなかっただろう。
「仕方ねぇだろ？　通路の上に放置してたら、流れ弾に当たって死ぬかもしれなかったんだぞ？」
「でもこれはあんまりです……！！」
「「ぷっ……」」
「笑うなよ！！」

恐怖と寒さと嘔吐感で顔面を蒼白に染めたカナンはやっとの事で引き上げられる。
そして生きている実感を確かめるように深呼吸しているカナンを見て、祐希奈とヴィヴィオは思わず吹き出す。

「笑うなって！　……ん？」

ふとカナンの目が何かを捉えた。
それは通路の端で大の字になる男の姿だった。
ところどころ焦げているが、体にぴったりとフィットする仕様のやたら色鮮やかなパイロットスーツを着込んでいる。
それが虚空に向かってなにやらブツブツと呟いている。

「ドラゴン戦車……私たちの血と汗と……涙の結晶が……」
「……あれって……」
「あぁ、あれな。　ドラゴン戦車の中身。　ラグナブレイクぶち込んだ時についでに引きずり出したんだよ。　流石に人が入ったモンをあそこまで滅茶苦茶にできねぇしな」
「あぁ……」

外灯に結びつけていた皮ベルトを解きながらの新の話を聞いたカナンは、あの操縦者に軽く同情した。
原型がなくなりかけるほど完膚なきまでに破壊されたドラゴン戦車の残骸を見れば、祐希奈と新が放った嵐火双鎚撃の威力は押して然るべきである。
それを途中までとは言え、ドラゴン戦車の中に搭乗したまま味わったのである。
その恐怖は先程までカナンが味わった恐怖と比べても遜色ない物だったに違いない。
同情の1つもしたくなる筈である。
さらに……

「なぜだ……　なぜ私がこんな目に……　昨日まで第2監獄での口を開けば八神はやてとかいう人物の事を話したがる囚人担当の看守を終えたと思えば……　『顔がそれっぽいから弁護士役をやれ』と駆り出され……　裁判中に目の前で爆発が起きて、その爆風でカツラが取れて同僚には馬鹿にされ……　それをやった犯罪者に機動実験と称して報復をしようと最新鋭機のドラゴン戦車まで持ち出してたのに……　それがボコボコの滅茶苦茶に……　うっ……うぅぅ……」

こんな言葉が目の前の男の口から漏れ出したのである。

≪……不憫すぎる≫

これには流石にその場にいた全員が同情せざるを得なかった。
顔を見ずともその操縦者の正体に気付いたカナン達は、あまりに不幸な男を前に思わず動きを止める。

――そんな一瞬の油断を無数の閃光が貫いた。

「――！！」
「何――！？」
「きゃっ――！？」
「くっ――！！」

サーチライト。
殺傷能力は皆無だが、全方位から発せられた凄まじいまでの光はその場にいた４人全員の視力を、一瞬ではあるが奪い取った。

――！！

次いで響いた炸裂音。
先程の大威力の質量兵器には劣るものの、その音が秘めた殺傷能力に新はいち早く動く。

スナイパーライフルの銃声だと確信した。
しかし平時では全員が難なくかわせるその銃弾も、今この瞬間に置いては純然たる脅威だった。
一瞬ではあるが視力を奪われ、誰を狙って放たれたかもわからない銃弾。
さらに今この場には非戦闘員のカナンがいる。
もし放たれた銃弾がカナンを狙った物であったならば……

刹那とも言える差で祐希奈とヴィヴィオも共に動いた。
３人の思考は一致していた。

カナンを庇う事。

そして全員が全方位に向かってシールドを展開した瞬間、１つの影が通路を駆けた。

―閃！―

影は手にした白銀の刃で、４人に迫る凶弾を斬り飛ばす。
そしてその影は新の前に降り立ち、すぐさま振り返って口を開く。
しかしそれは――

「大丈夫ですか、お義兄さ――！！」

―撃！―

「うごふッ！？」
「あるじー！！」
「あ。　謝りたくないけどスマン」
「なにそれ酷い！！」

新が次に見たら１発殴ろうと決めていた相手だった。
助けた相手に顔面を殴られ涙目になった咲夜と、そんな主を見て泣きかけているレフィリアがそこにいた。

「え！？　咲夜！？」
「なんで咲夜さんが……！？」
「我もいるぞ！！」
「レフィリアまでどうしてここに！？」
「マスター！！」　「主！！」
「メイデン！！　レナスも！！」

なんの脈絡もなく、そして奪還すべき対象でもあった咲夜とレフ

ィリアが現れた事でその場は一気に沸き立った。
今の咲夜とレフィリアはどう見ても拘束されているようには見えず、その手にはデバイスである凪を携えている。
さらに驚くべき事にレフィリアの肩には、カナンのユニゾンデバイスであるメイデンとレナスの姿まであった。
ここに来てさらに事態は混乱したが、これは間違いなく好機。
そう誰もが確信した。

「え……と話せば長いんだけど俺を釈放してくれるって東せ――」
「余裕ですね、包囲網が完成しているというのに」

――！！

しかしその確信を、冷たい一言が遮った。
その場に投げかけられた聞き慣れない声に、全員の視線が吸い込まれるかの様に未だに小さく炎を纏うドラゴン戦車の残骸の向こう側、咲夜が飛び出してきた通路の扉に集中した。

「「あいつ……っ！！」」
「あの人……！！」
「来やがったか……」

現れた者の事を知る４人はそれぞれに声をあげる。
ふわりと跳躍し、残骸の上に降り立って４人を見下す人物
その姿はあまりにもこの場に不釣合なスーツ姿。
そしてその服装と同じく、その顔に浮かんだ笑みはカナンを糾弾していた時と寸分たがわぬものだった。

「置いておきましょう、この際。　なぜここに東条咲夜とレフィリアがいるのかというのは。　消えていただきます、この場であなた

達には」
「あんたって奴は尽く……ッ！！」

―豪！―

言葉を紡ぎきる前に、祐希奈は腕を振るった。
その腕から伸びるのは炎。　ファイヤーアームと名付けられた技だった。
目の前に現れた赤い少女のさも独善的な物言い。　その顔を見るだけで沸き上がる激情をその炎の腕に込め、赤い少女に放った。

しかしそれは――

―煌―

「うそ……」

赤い少女ことフラメが僅かに指先を動かしたのちに現れた『炎の盾』によってせき止められた。
それを目にした全員が我が目を疑った。
先程の祐希奈の攻撃は、一切の手加減がなされていないもの。
そして祐希奈がダメージを与えるのは二の次に、連携の為の初撃として放ったとはいえ、並みの魔導師であれば一撃で倒しきる程の威力を有したものだった。
それ即ち『炎の盾の向こう側から姿を消したフラメ』は並みの魔導師ではないという何よりの証拠であった。

「焦るなよ――」
≪――！！≫

そして全員に向かってフラメの声が『降り注ぐ』
上空に向けた視線の先には、祐希奈と比べても遜色ない炎の塊が今まさに墜落せんと迫る！
――あの攻撃は危険だ
全員がそう直感し回避行動を取るのは必然とも言える行為だった。
―豪！―
通路のど真ん中に激突した炎の塊は爆炎を撒き散らし、通路全体に異常とも言える程の光源として顕現した。
「動くんじゃねえぞ？　数で言えばテメェらは圧倒的に不利なんだからな……」
炎が放つ光と熱。
その２つを浴びつつ通路脇の外灯の上に着地したフラメは、再び全員を見下ろした。
「なかなか派手なｓｈｏｗだったよ。　いい暇つぶしになった。八神新だったか……　お前だろ？　このガキ共を焚きつけたのは」
「暇つぶし……！？」
新に視線を移して先程の特徴的な口調とはうって変わり、誰が聞いても煽りと取れる台詞を言ってのけるフラメに、祐希奈の怒りの炎は更に激しさを増す。
「あぁ、暇つぶしさ。　検事の真似事なんてガラにもねえ事までやったんだ。　コレくらいのｂｏｎｕｓは貰って当然だろ？　まぁ、

あの裁判も似たようなモンだがな」
「お前ぇ……ッ！！」

自身を一瞥し笑みを消さないフラメ見て、祐希奈の中の一線が音をたてて切れようとしていた。
目の前の女はなんと言った？
カナンが逮捕されてから今の今まで必死で行なって来た事を、さらにはあの裁判も、転じてカナンを人殺し扱いしたあの言葉までも目の前の女は暇つぶしだと笑いながら言い切ったのだ
怒らずにいられない訳がなかった。

――こいつ！！
――この人……！！

それはその当事者であるカナンとそれを間近で見ていたヴィヴィオも同様だった。
……が、しかし1人例外がいた。

「そうかい。　そんなに楽しめたんならコレは代金って事でいいよな？」

キン……とコイントスをしたかの様な、場違いなまでに澄み切った音が怒りに燃える祐希奈たちを包んだ。
そして落ちてきた『それ』をキャッチし見せつけるように指先で弄びつつ、新はフラメに似通った笑みを浮かべた。

「……！　……てめぇ」
「おいおい、楽しいショーだったんだろ？　あいにくタダでやってやるほど俺達はお人好しじゃないんでね」

フラメは身に纏ったスーツの襟に目を落とし、怒り心頭の祐希奈たちから視線を新にシフトさせた。
新が指先で転がす物は、僅か数秒前までフラメが身に纏う赤の装いに紛れ込んだ一点の金色。
それは彼女が検事を演じる上で必要不可欠な代物、検事の証であるバッチだった。
それを誰にも悟らせず、掠め取っていた。

「新……！！　邪魔しないでよ！！」
「怒るなとは言わねぇけど落ち着けよ。　飛びかかってたらまた面倒なことになってたぞ？」
「気付いてんのか。　……手癖が悪いだけじゃねぇってわけだな」
「褒め言葉として頂戴しとこうかね」

激昂する祐希奈たちをよそに新とフラメは言葉を交わす。
しかしそんな新たちとフラメの間に突如オーロラが姿を現した。

――時空転移の……！！

そのオーロラを見た瞬間にカナン、祐希奈、ヴィヴィオの3人の怒りは驚きに塗り替えられた。
そしてオーロラの奥に広がる闇は、紛れも無く時空転移の際に通った異なる時空を繋ぐ道に酷似していた。
さらにそれが齎す現象も3人は理解している。

「いいぜ、気に入った。　お前はどっちかって言えば『私達の側』に近い匂いがする。　最初てめぇはｌｉｓｔに入ってなかったんだが……入れといてやるよ」
「おいおいマジかよ……　今度女の子と会うときは香水ふっとかねぇと匂いで嫌われちまう。　あ、あとついでに女の子に気に入られ

るのは悪い気はしないんだが……生憎と裏表のある女性はタイプじゃなくてな」
「ｊｏｋｅもいけるじゃねぇか」
「言葉遣いが荒い女性も、ノーサンキューだ」

まるでこの場に相応しくない会話の応酬。
どちらの顔にも相手を小馬鹿にした笑み。
オーロラを挟んで対峙する新とフラメの間に流れる空気は、祐希奈たちの周りを包む空気とは決定的な差があった。

「じゃあ、コイツも代金として受け取っときな。　時空旅行だ」
「そいつはまた随分と大層な……」
「お前らなら楽しめるだろうさ。　お前らなら……な」

そう言ってフラメは手を振り下ろす。
次の瞬間、脱出などさせてなるものかと言わんばかりに全方位から迫るオーロラに、その場にいた全員が飲み込まれた。

「……くくっ」

笑う。
外灯の上で自分以外誰１人いなくなった空中通路を燃やし続ける炎を眺めながら、フラメは声を漏らして笑っていた。

「ふふふ……っ……はははは……」

フラメには確信があった。
別の時空に飛ばされた彼らだが、間違いなくまた自分の前に、それほど時を置かずして現れるだろうと。

――楽しみだ……

心底フラメはそう思った。
彼女の望みを満たす為に、彼らはまた現れる。
それがフラメにこれ以上に無い程の歓喜を齎していた。

「精々あがいて私を楽しませろよ……？」

そう言い残し、フラメは悠然とその場から立ち去るのだった。

◆◆◆

「……全てはもう、止まる事なく進み続ける」

そう言い残し、東誠流時もその場から音も無く立ち去った。

◆◆◆

口を突いて出た皮肉。
それに対する返答は……
「不可抗力なんです動けないんです御免なさい防御できないんです御免なさい御免なさい御免なさい……」
「カ……カナン君……」
「あんたってヤツは……！！　なんで毎度毎度その手の展開に持って行くのよ！！」
―爆！―
「ぶるぁぁぁぁぁ！？」
背後から響いた謝罪と涙声と怒号と爆音、そして悲鳴だった。
どうせまた描写せずとも優れた勘の持ち主である読者様方には想像出来るであろうお約束展開にでもなっているんだろうと、メタな事を考えつつ振り返った新は、胸を押さえたまま顔を染めて蹲るヴィヴィオと惚れ惚れするようなマウントポジションでカナンを殴り続ける祐希奈という、自身の予想と寸分たがわぬ光景に思わず吹き出した。
しかし……
「……ん？」
足りないのだ、数で言えば2人程。
カナンのフェードアウトしてゆく悲鳴をさらっとスルーし、再度周囲を確認するが……やはり足りない。

「……咲夜とレフィリアはどこ行った？」

その返答は……暫く返って来そうにない――

◆◆◆

第十八話　自分が信じた人のため　後編（後書き）

時代移動

カナン、祐希奈、ヴィヴィオ、新→未来ミッドチルダ
咲夜、レフィリア→古代ベルカ

まずは謝罪を。
ごめんよ、カナン……
クロノトリガーでも屈指の暗さを誇る未来編に突入する前に、精一杯のギャグが書きたかったんだ……
ギャグとシリアス両方をこなす少年主人公の宿命として諦めておくれ……

そしてレッフィーをもっと書きたかった……w
文字数がさらに愉快な事になりそうだったので短い登場になってしまいましたが、レッフィーの秘めたるポテンシャルの高さを垣間見ました。
……もちろんギャグメイカーとしてのですがw

さて長々と御付き合い頂きありがとうございます。
次のバトンはヨシュアさんにお任せしたいと思います。
それではこれにて失礼いたします。

『怒りの』合体奥義・嵐火双鎚撃

威力：ＳＳ＋
速度：ＡＡＡ＋
範囲：一名

アクセルバレット→紫電一閃→ラグナブレイク→フィンブルバイト＋烈破紅蓮爆砕撃――と流れるように叩き込む連続攻撃。
祐希奈と新が放つ中の技でも、とりわけ威力の高い技によって構成されたこの合体奥義の恐るべき所は、この一連の技全てが『たった１人』の敵に対して叩き込まれるという点である。
さらには近接技故に怒りのオーラを纏った２人が迫り来るさまは恐怖以外のなにものでもないだろう。

第十九話　崩壊のミッドチルダ（前書き）

新年明けましておめでとうございます♪

今回二回目の執筆となりましたヨシュアです。

場を整えるためのお話ではありますが、楽しんで戴ければ幸いです♪

ではどぞ♪

第十九話　崩壊のミッドチルダ

▼▼▼▼▼▼▼▼

朽ち果てた廃墟の中で、ラッキースケベカナンの制裁を終えた後、ようやく許しを貰えた彼は拘束具の破壊を試みていた。
拘束の際に着けられた手錠と身体に巻きついた身動きを封じる鎖だ。
そのどちらもが魔力封じが施されており、触れるものの魔力の結合を阻害、魔導師に対してはこれ以上ない拘束力を誇る。

「では、行きますよ？　主？」
「ああ。頼んだ」

アウトフレームのフルサイズとなったレナスが手錠に手を添える。
細く綺麗な指だった。
確認のための問いかけを終えるとレナスは指に力を込めて。

―砕―

実にあっけなく手錠を引きちぎった。
メイデン、そしてレナスが使っている力は魔力での強化ではないために拘束具の効果が発動しない。
同じ要領で身体に巻きつく鎖も破壊され、カナンが数時間ぶりに立ち上がり、伸びをする。

「で、ここどこかわかったか？」
「ううん、手がかりが少なくてよくわかんないんだ。今は新さんと祐希ちゃんが外の見回りに行ってる」

「まぁ、あまり期待出来たものではないだろうがな」
ヴィヴィオとメイデンから返ってきた答えに、「そっか」と短く答える。
実際の所、なんとなくはわかっていた。
周囲の見回り程度で何かわかるような場所では無いだろうという事ぐらいは。

「俺らも出てみるか。ジッとしてるのもなんだし」
「もう動いて平気なの？　身体痛くない？」
「寧ろ身体動したいんだ。長い間抑え付けられてたせいで節々がいてぇ。どっかの誰かさんが振り回したせいもあるだろうけどな？」
「あはは。うん。じゃあ行こう」

カナンの冗談に笑いあいながらヴィヴィオと廃墟の外へ。メイデンとレナスもその後に続く。
その微笑みも短いものだった。
外に出た途端に四人に浮かんだのは険しい表情。

「酷いな……」
「うん……」
「自然の息吹がほとんど感じられない……」
「そうですね。何だか悲しいです……」

四人の瞳に映るのは見渡す限りの荒野であった。
昼だというのに薄暗い淀んだ空、見るからに枯れ果てた大地。
瓦礫の山しか見当たらない。
が、廃墟があることから考えて、高い文明を誇っていたのは確かなはずだ。
今はそれが見る影もない。

死んだ世界。
そんな言葉がこの世界にはしっくりと来る。
ただ呆然と、死した世界を見つめて。

「若いもんがボーっとすんな。老けるぞ」
「すでに老けてるアンタが何言ってんだか……」
「……一応２０代であるとは弁明しとこうか」
「１３歳からすれば十分におっさんよ♪」
「……はぁ」

響く声は頭上。
この状況下で明るい声を出せる人間は限られる。
どんな状況であろうとスタンスを崩さない祐希奈と、精神的に大人びている新だ。
最も、新の声が明るいのかどうかは微妙だが。
閑話休題。
見回りから帰ってきたのだろう。カナンとヴィヴィオの隣に綺麗に着地する。
状況はどうなのか、そう問いかける四人の視線。

「まず人らしい姿はねぇな。咲夜もレフィリアも周囲にはいない。転移の際にバラバラにされた可能性もある」
「偵察がてらぐるっと回ってきたけどホントにな～んも無いわね。手がかりゼロ」

肩を竦めた祐希奈にカナンとヴィヴィオは肩を落とす。
が、新は「いや」と首を振った。

「真新しい足跡があった。それに、戦闘らしき痕跡もある。ここには人間か、それに近しい知能を持つ生物がいる」

「なんかジッと見てると思ったらそんなもん見てたのね……。全然気づかなかったわ」
「それが咲夜さんって可能性は無いんですか？」
「まぁ無いことは無いが、可能性としては低いな」

生物がいたらしき痕跡はあるが、それが咲夜では無いと新は言う。根拠など、単純なものだ。

「アイツらは揃って馬鹿だからな。もっと派手にやる」
「「確かに」」
「ええ！？　否定しないの！？」

ヴィヴィオは驚いていたものの、カナンと祐希奈はそれで納得する。
東条咲夜とレフィリア、違う意味で周囲の信頼度が上がってきている不憫な青年であった。
閑話休題。
新の話は長々と続く。
例えるならば学校の校長先生の話のように。
まずは過程、そして結論、結論に至るまでの動き、理解をしているかの確認。

「さっきも言ったように高度な知能を持つ生物がいると過程して、俺と祐希奈はまだそんな姿を一度として見ていない。ということは、だ。俺が見かけた痕跡が間違いだったっていう線と、もう一つ――」

―撃！―

「姿が見えるとこにいないって線が残るんだが人がカッコ良く説明してるとこでなんで殴るんだ祐希奈よ？」

「年寄りの話長々と聞いてる趣味はないの。簡潔に言いなさいよ？」
「いや、なんていうか、うん、お前ぶち壊し過ぎ……」
「あわわ……」

新としては順をおってわかりやすく説明しようとしただけなのだが、祐希奈嬢にはお気に召さなかったらしく、その頬に拳がめり込んだ。
最も、新には物理ダメージよりも精神ダメージのほうが大きかったようでその場にしゃがむと怪しげな笑みを浮かべながら膝を抱える。

「どうせ俺なんか、カッコつけようとしたって無理なんだよ。わかってたさ。こんないい年こいたおっさんが若い力に勝てるわけねぇって。でも、たまには良いじゃねぇか。ビシっと作戦立てて全ては俺の掌の上、なんて夢抱いたって……」

そしてそのままボソボソと何やら呟き始めた新にカナンはどうするんだという責めの視線を祐希奈に送る。

「何で落ち込んでんの？」
「お前のせいだぁぁぁぁ！！」

が、祐希奈はてんで理解していなかったのだった。
それもそのはずだ。
彼女からすればこれは挨拶のようなもので悪気などないのだから。
つまるところ、今の今まで新の精神を削り続けているということを彼女はわかっていない。

「あー、えー、新さん？」
「なんだ、青少年……」

「えっと、その～……」

仕方ないとカナンが動くが、なんと言葉をかければいいのかわからない。

悩んで悩んで、言葉に詰まる。

カナンが自分の言葉の辞書の少なさに四苦八苦していると、ヴィヴィオが横に並んだ。

神の助けだと、カナンは思う。

不屈のエース、高町なのはの娘として今、ヴィヴィオが動く！

「新さん」

「……ん？」

「格好良く無くても！　おじさんでも！　新さんにははやてさんがいるじゃないですか！！」

《……》

「……あれ？」

――なんでここで天然だすんじゃぁぁあああ！！！！

いやまぁ、彼女は出来うる限りの言葉で慰めたつもりだったのだろう。

結果的にソレが新にははやてしかいない格好悪いおっさん、ということをダイレクトに叩き込んだとしても彼女には悪気は無い。

ヴィヴィオは真に純粋な子なのである。

閑話休題。

――きっつ、この空気きっつ……！

空気が凄まじく重い。

ヴィヴィオが放った言葉に重圧にも似た何かをカナンは感じてい

た。
さらにいうなればそれを感じているのはカナンだけ。
ヴィヴィオも祐希奈も何が起きているのかなど微塵もわかっていない。

――こうなったら！　俺が無理やりにでもこの雰囲気を変えてやる！

捨て身の覚悟でカナンが新を復活させることを決めた。
新は比較的まともな人格の持ち主で、ここにきて潰れられては行動に支障をきたすとの判断からだ。
多少自分がどうなった所で構わないと決意して――

「さて、ここでカナンの出番だな」
「なんで復活してんすかアンタ！？」

――すっくと立った新がそこにいた。
最早先ほどの暗い雰囲気は見る影もなく、寧ろどこか機嫌が良くなっているような、そんな様子。
ヴィヴィオなどは立ち直れてよかったと安堵していたが、いきなりの態度の一変にカナンは混乱する。

「いや、はやてに比べれば俺の世間体なんてどうだっていいかっつう結論に達しただけだ」
「はは。アンタもか……」

理由は至極単純であった。
八神新。この男性は脱出の際に一緒にいたはずの男、東条咲夜とタメを張れる程の男性。

「ああもう、なんつうかもう、殴っていいッスか？　最近こんな人ばっかでイライラがやばいんで。ほら、思春期に良くある行動ってことで」
「お前が思春期なのは認めるが、なんでソレが俺に――」
「るっせぇ！！　黙って殴られろぉぉぉぉ！！」
「ついでに私も♪」
「おいお前ら――うごふ！！」
「カナン君！？　ああ、祐希ちゃんまで！？」

その後、爆発したカナンの不満＋α祐希奈の八つ当たりは数十分に及び新にぶつけられたという。
この時、新は思う。
もう保護者役なんてこりごりだ、と。
ちなみに原因が自分にもあるということは気づいていない新であった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「全く、お前らときたら……」
「……アンタにも原因はあるんだぞ？」
「妹を大事に思って――」
「烈破～♪」
「――さて、ちゃっちゃか行くか」
「え、と、ごめんなさい……」
「気にすんな」

ようやくにして収まった八つ当たりに新は呆れ果てるが、ニコニコ笑った祐希奈の拳に猛った炎を見て明後日の方向を見ながら手を叩く。
おふざけもほどほどに、真剣な表情へと戻った新は状況を改めて

整理する。
もちろん。簡潔に。
「地表に見つからないのに生物の痕跡が見つかるってことは地下なら、どうだ？」
《あ～》

そう、今見つからないからいないとは限らない。
ここは現代ではないのだから。
これだけ荒廃した世界だ。何か対策を打っていてもおかしくはない。
問題はその方法であるが、そこは大人の新。
サーチャーなどで探すよりもずっと速く見つける方法がある。

「そこでカナン、お前の出番だ」
「へ？」
「空間把握の認識領域を最大にしろ。地上、空、地中、この辺りのもん全部洗い出す。出来る範囲で構わねぇ」

そう言った新に少年はニッと笑う。
何故そこで笑うのかわからない新は首を傾げた。
カナンが光を放ち、その身に纏う漆黒の騎士甲冑。
鞘走るように音も無く抜き放たれる剣を肩に担ぐ。

「四方何キロくらいまでいきます？」
「いけるなら2、3キロ」
「了解ッス」

ニッと笑ってカナンがあっさりと頷いた。
そこに迷いはない。負荷など気にもしていないとい様子だ。

空間把握がどういったものかということぐらいははやてから聞いたことがある。
発動した際にはカナンから周囲３メートルの距離を視覚的に認識する能力。
範囲内においてはいかな障害をも意味を成さない。
今回も提案はしてみたものの、カナンの負担が激しいようなら地道にサーチャーを飛ばすつもりでいた。
が、少年は新の予想を軽く覆してくれた。
「じゃあ、やってみます！」
剣が手中で回転し、大地へと突き立つ。
そこを始点に拡大していく空間把握。
ゆっくりと、己の世界に飲み込んでいく。
――話には聞いていたがここまでか……。
カナンから放たれる魔力に舌を巻く。
年齢に不釣合いな膨大な力が放たれる。
カナンの力が膨れ上がっていくのを新は感じた。
控えめに見てもなのはと同レベルの魔力量。
それを平然と使いこなしている少年に、何とも思っていない少女達に、新は苦笑した。
「人がいる……」
「方角は？」
「ちょうどこっから真っ直ぐ。なんか丸い廃墟の中に梯子があって、そこの地下に結構な数の人がいます……」
「よし。もう解いていい――」
「ついでにもう一個」

言葉を遮って、カナンが静かな声を響かせる。
遊びは一切感じられない雰囲気に、一同は黙った。
瞬間、突き抜けた閃光。
突き刺していた剣を引き抜き、カナンが振り放ったのだ。
位置にしてカナンの頭部にて光が弾けた。

「俺達、もう見つかってるみたいッス……」
「ほう？　中々派手な対応じゃねぇか……」

弾けたのは電磁弾。
驚くこともなく、新はウルスラグナを起動し、ならうようにヴィヴィオと祐希奈も続く。
この世界が決して平和でないことはわかる。
いつ襲撃があるかわからない。
事前に心構えをしていたからこそのこの対応。
臨戦態勢の四人の視線の先には荒野だけが広がっていたはずだ。
それがいつの間にか荒野だけではなくなっていた。
汚れた蒼のボディーの人型が１０体程。

【魔力反応を感知、人間と判断、殲滅します】

輝く紅い瞳、そこに一切の感情はない。与えられた任務をこなすだけ。
酷く、寂しく、冷たい声が響いたのだった。

▼▼▼▼▼▼▼▼

「俺が仕掛けて先陣を崩す。お前らは――」
「行くぞメイデン！　レナス！」
【了解だ／気をつけてください】
「おい！」

指揮を執ろうとする新を無視してカナンが消える。
空間突破を発動して駆ける。否、跳ぶ。
最初からその場に存在するかのように人型の中心へとカナンが切り込んでいた。
最も手近な一体に向けて音速を超えて一直線に伸びる、閃き。
首筋への一閃。
ボディから火花が散った時、叩き込んだ少年の姿は前に無い。
人型の背後を影が覆う。

「うぉらぁぁぁ！！」

空間突破で人型を突き抜けたカナンが大上段から頭に剣を振り下ろす。
息つく間もない連撃に認識すら出来無いまま脳天に一撃。
頭部に剣が切れ込むが、浅い。

【損傷軽微】
「硬ぇ……！」

自身のダメージを意にも介さず振り向いた人型は機械の拳を引き絞る。
ゾクリとしたものをカナンは感じる。
限界を知らない機械の拳。それがもし人体に打ち込まれればとうなるか。
良くて重症、最悪、死ぬだろう。

一切の容赦なく、死を呼ぶ拳が空を裂いて打ち抜かれる。

【ロスト……】

――最も、当たればの話ではあるが。
拳撃の先にカナンの姿は存在しない。
即座にレーダーで探知、その姿は空にある。
約１０ｍの高さから人型の軍勢を見下ろす。
構えるは刺突、対して、人型の背中に灯る光。
背中から噴出される炎、その正体は推進装置。
意味する所は、飛行。
さながらロケットが如く人型が一斉にカナンへと飛び上がって。

「まずは、一機！」

そんな声が人型の”下方”から響いた。
刹那、空へと光が駆け上り、人型の一体を貫き、遥か上空にて、巨爆を起こして人型が爆ぜた。
倒した人間は言うまでもなくカナン。
空へと飛び上がった人型達を空間突破で突き抜けた上でがら空きの背後から狩ったのだ。
一見頭を使ったように思える戦い方ではあるが、人型が飛び上がるなどカナンが予想しているはずはない。
出来るからやった。
カナンからすればそれだけの理由。

「暴れるぞ！　お前ら！！」
【怪我をしない程度にな】
【主、余力も残しておいてくださいね】

「任せろ」と景気良く響いた少年の声。
そうしてまた人型の中心へと飛び込んでいく辺り本当なのか疑わしいが。

―切！―

切って。

―閃！―

斬って。

―斬！―

斬りまくる。
放たれた電撃弾を、襲い来る人型を、手近なものから手当たり次第に叩き斬る。
９体の人型による息つく間もない攻撃を全て捌いた上で、だ。
だが、カナンの攻撃に人型は怯まない。
いや、人型が疲れを知っているならば十分に効果はあったのだろう。それが機械だからこそ出来る連続の攻勢。
一方で、カナンは魔道師とは言えただの人間だ。疲れもすれば痛みも感じる。

【対象に疲労を確認、さらなる波状攻撃をしかける】
【ラージャ】

「チィッ！！」

そんな少年の疲労を人型のセンサーが敏感に察知した。

カナンの舌打ちが空に響く。
傷つき、己の身体が傷つこうとも、仲間が傷つこうとも、攻勢を重ね続ける人型。
９体に囲まれ、拳、拳、また拳。
捌き続けながら、面倒だ、と思う。

「抜刀参式……！」

ニッとカナンが笑った。
人外に囲まれているというのに。
焦ってもおかしくないこの状況下で、少年は武器を収める。
間違いなくそれは危険行為。
だが、ジリ貧になるくらいなら多少のリスクを負わなくては状況は変わらない。
生じた隙に襲い来る人型。
カナンが放とうとしているのは対迎撃用斬撃。
しかし相手は多数。
人型の攻撃能力がカナンの防御能力を上回れば直撃を受けて死ぬだろう。

「絶、空ッッ！！」

―斬！―

だが、少年に迷いは無かった。
雷光が如く抜き放たれる一閃。
轟と唸る魔力の軌跡が創り上げるは巨大な竜巻。

【脅威判定大、最大出力】
【ラージャ】

打ち抜かんと、人型達が出力を上げる。
紅く輝くその躯体。
背中のバーニアが過剰なまでにブースターを噴出する。
竜巻に躯体が巻き込まれればただでは済まず、躯体の破壊の危険すらあるだろう。
気にするはずも無かった。
彼らにとって優先すべきはカナンの排除なのだから。

―爆・爆・爆・爆・爆―

一体、二体、三体、四体、五体と、立て続けに竜巻へと突貫していく。
その一撃一撃が、竜巻を大きく歪ませる。
が、残るは四体。
四体を耐え切れば勝利で終わる。

【まずいぞ。マスター……】
「わかってる！」

だが、竜巻の内にてカナンは歯を食いしばっていた。
理由はもちろん、消滅覚悟の突貫の威力故にだ。
どうする？　そう考えている時間も無い。

【能力の弱体化を確認、消滅と同時に殲滅】
【ラージャ】

「くっ！」

―爆！！―

一際大きな轟音が響く。
砕け散るように竜巻が霧散する。
それは必然的にカナンの身を守る壁が無くなったことを意味する。
カナンの動きは術後硬直により完全に停止、対して人型は動き続けている。
内一体が、完全に拳の射程内へと踏み込んできていた。

「もう、カナン君、頑張りすぎだよ？」
「はは、サンキュ」

刹那、引っ張られるような感覚に襲われ景色が変わる。
この感覚は何度か経験をしたことがある。
自分の手を引く細い指、フェイトを思わせるレオタード。
ソニックフォームとなったヴィヴィオに手を引かれていた。
カナンを狙った人型は最早遥か下方にある。
いや、下方から動かない、が正解か。
カナンがいた地点に入れ替わるようにして少女が到着したから。

『元々パワー型とは相性が悪いんだから格好つけてんじゃないわよバーカ』

届いた念話にカナンは苦笑する。
そう、入れ替わった少女は祐希奈だ。
別段格好をつけたわけではなく、溜まった鬱憤を発散しようと抜け駆けした結果、思いのほか相手が強かったというだけなのだが。
まぁ、言い訳がましい上に少々ピンチになっていたので絶対に言ったりはしない。

【新たな脅威を確認、排除、開始】

―撃！―

気が逸れているのを好機と、拳を打ち出す人型。
だが、それは違う。

「……残念ながら私はアイツと違って強いわよ？」

気にするまでも無い相手、そう思われているだけなのだから。
展開される銀の障壁。
それは人の数十倍を誇る拳を阻んで尚、揺らぎすらしない。
が、人型の攻勢はそれだけに終わらなかった。

―撃・撃・撃・撃・撃―

出しうる速度で、出しうるだけの闘打を打ち込む。打ち込み続ける。
衝撃が空気を振動させる。つまり、拳撃にはそれだけの威力がこもっていると言うことだ。
まだ障壁は砕けない。というより人型の前の祐希奈は相変わらず片腕で障壁を張ったまま微動だにしていない。

【インパクトステーク、セット……】

ならば、さらなる威力で打ち抜けば良い。
拳が変形し、現れるのは鉄杭。
ステーク、相手の装甲ごと貫くためだけに生まれた兵器。
こと、防御破砕能力においては特化した性能を誇る。
流石の祐希奈も目を見張る。
回避は許さないと、即座に障壁に突き立つステーク。

ガシャンと、人型の中に内包されていたのだろう。爆薬が炸裂し鉄杭を押し出す。突き立つ先は祐希奈の障壁。

―弾！―

放った威力に人型の本体が数メートルの後退をきたす程の反動。相応しい威力と轟音を持って打ち込まれた鉄杭。

実に呆気なく砕け散った。

”障壁に打ち込んだ鉄杭が”

障壁本体には、やはり傷一つ存在していなかった。

「びっくりした。あの腕、変形とかするんだ……」

【貴女は変形に驚いていたのですか……】

「だって変形よ？　男のロマンよ？」

【普通は威力に驚く所です。そして貴女は女の子です】

アシェルの溜息に彼女はあははと――いつもそう笑えればもっと可愛いのだが――年相応に笑った。

だが、それも一瞬のこと。

反撃のための思考を行い、秒単位で結論を弾き出す。

相手は直接対決を挑んできたのだから、応えるのが礼儀というものだろう。例えそれが機械であったとしてもだ。

目には目を歯には歯を、力には――。

「次、こっちの番ね！」

―撃！―

――力を。

障壁を解除されると同時に漲る魔力、祐希奈の拳が人型の頭部へ

と炸裂する。
カナンが幾度斬撃を叩き込もうと小さなダメージしか無かった人型。
その頭部に亀裂が走った。

【頭部破損、センサーに重大なダメージ】

「なんだ、案外脆いわね」

同時、期待外れだと言わんばかりに祐希奈は溜息をつく。
ただの一撃。彼女の拳は人型の頭部突き抜け、躯体を吹き飛ばす。
否、拳が突き抜けているということは粉砕して尚余りある証拠。
しかし、故にこそ、彼女は踏み込みすぎた。
人型はもう戦闘継続が困難な状況にある。
そんな状態で命も省みない機械が選ぶのは一つ。
センサーも砕け散った今、目標を特定した上での排除は困難。だから。出来うる限り、祐希奈へと密着する。
輝く躯体、その意味は見ただけでもわかる。

【自爆シークエンスを起動します】

「面倒な奴！！」

言葉がそれを裏付けた。
もう少し軽めでも良かったと、後悔しようとそれは後の祭り。
祐希奈がどう動こうとこの距離で回避など不可能――。

「せぇぇぇぇ！！」

―撃！―

――ならば、第三者が別方向に吹き飛ばしてしまえば良い話。
刹那の時に空間を駆けたカナンが人型の真上に出現、輝く躯体を打ち下ろす。
それだけには終わらない。
空に煌く蒼光。
杖を構えて下方に向けるもう一人の少女、ヴィヴィオだ。

「ヴィヴィオ！　やっていいぞ！」
「うん！」
【Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ！】

カートリッジがカナンの眼前を落ちていく。
ほぼ同時、カナンと祐希奈と掠めるようにして砲撃が地上へと突き刺さる。
下方にて発生する巨爆が空気を揺らした。

【脅威判定、大】
【現段階での最も危険とされる敵生体を排除します】

ガクンと、残った二体の頭部がヴィヴィオを捉える。
バーニアを噴かせ、電磁弾を打ち出しながら猛然と突貫し――。

「させるかって！」
「言うのよ！」

―斬！―

内の一体の両肩に黄金の剣と銀のブレード。

ヴィヴィオを護るために駆けた二人が多対一を防ぐために一体を叩き落したのだ。
最も、余計な世話かなと二人は思っていたのだが。
上空を見上げれば一体と対峙し、二振りの剣を構えるヴィヴィオ。

「……ッ！」

打ち抜かれる拳を火花を散らして背後へ受け流す。
通常ならば生まれるはずの隙。
だが相手は機械、躯体の悲鳴など気にすることもなく、強引に捻った裏拳を叩きつける。
完全に意表をついていた拳は空を切る。屈んだヴィヴィオが肘を引く。

「はぁ！」

―刺！―

人型の頭部に突き立つ碧の剣。
カナンと同じく彼女の一撃に威力は無く、撃墜には至らない。
軽度の損傷に構わず突進してくる人型にヴィヴィオはどこまでも冷静。
距離にして一歩分下がり、拳の一撃を回避。

「ランサー」

人型の背後に光槍を設置する。
たった一発。
脅威には値しないと人型はさらに踏み込んで。

「ファイア！」

―弾！―

背中に打ち込まれた光槍が、否、光槍の打ち込まれた先にあるバーニアが破損、制御を失った人型は墜落してゆく。
双剣から双刃へ、轟と風が鳴き、刃に集束されていく。
見据えるのは落下していく人型。

【Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ！】
「はぁぁぁぁッ！！」

宙をふら付いていた人型の姿が消失する。
高速移動魔法を発動したヴィヴィオは双刃にて人型の背中を穿ち、大地へと急降下。
胴体も、空も、音も、碧の光は真っ直ぐ真っ直ぐ、突き抜けて。

―砕！―

そのまま大地に人型を叩きつける。
バラバラと砕け散る人型。
流石に急転直下から衝撃を逃がすことも出来ずにまともに衝撃を受けたのだ。これぱかりは攻撃力云々の話ではない。

「こっちは終わったよ～」
「こっちもだ～」
「楽勝ねコイツら」

人型達はミスを犯していた。
倒すのなら、この三人を揃えてはならない。

この三人は互いの弱点を理解している。故にこそ、揃った時の戦力は単独で戦うよりも遥かに跳ね上がるのだから。
カナンの直感と空間跳躍能力、ヴィヴィオの判断力と加速、祐希奈の度胸と力。
三者三様、互いの弱い所を補い合うチームバランスに隙などあるわけがない。
結論から言って、この三人が揃った時点で、初めから人型達に勝ち目など消えていたのだ。

「若いってのはいいねぇ……」

呟きながら、トントンと階段を下りていく。
”また見つけたから”
次の瞬間にはその姿は消えている。
ヴィヴィオと同じかそれ以上の加速を持ってして移動したのだ。

「なぁ？　お前もそう思うだろ？」

人型の狙撃タイプの背後に。
語りかける新にようやく反応した人型は振り向きながら銃を捨て、拳を構えて。

【戦闘を――】

―撃！―

「背後を取られた時、相手が自分より速いなら振り向くのは下策だって、知ってるか？」

言葉と共に崩れ落ちるその躯体。

人型の丁度胴体の部分に突き立つ新の拳。
相手が自分より速い時、下手に振り向けばどうなるか、その結果がこれ。
自分から急所をさらすはめになるため、一撃ですら致命傷になりやすいからだ。
捌けるだけの技量があるならば話は別だが、人型にそんな対応能力は備わっているはずもなかった。
内側から掌を開いた新は内臓を引きずり出すが如く配線の類を一気に引き千切られ何も出来無いまま倒れ付す。

――最も、真っ向から叩き潰せる奴には策なんてのは必要ねぇんだけどな。アイツらみたいに。

新が狙撃タイプを潰している間に前線を制圧した少年達を見て苦笑する。
相手が戦い易いタイプだということを考慮しても十分に早い。
素質は十分過ぎるほどにある。

「あれで言うこと聞いてくれれば文句なしなんだが……」

若いということは同時にして青いということと同義であり、こと三人は――ヴィヴィオはまだマシなものの――それが顕著であった。
どうしたものかとガリガリと後頭部を掻きながら新はまた一つ溜息を落としたのであった。

▼▼▼▼▼▼▼▼

戦闘を無事終えた一行は自分達を襲った人型が何なのか、比較的損傷が少ない人型を探し、調べていた。
何かを見つけたのかヴィヴィオが肩の辺りをジッと見つめる。

「ラ、プ、ター？」
「ラプターだと？　本当か？」
肩を指でなぞりながら読み上げたヴィヴィオに新は耳を疑う。
何がおかしいのか、嘱託の魔道士であるカナンと祐希奈は首を傾げていたが、ヴィヴィオは覚えがあるのか新に頷く。
「えっとね、このラプターって言うのは管理局ではまだ試作段階の機体でね。実装されてるはずないんだけど……」
だが、確かにカナン達はラプターと戦い、撃墜している。
加えて。
「開発も難航してるって話だ。とてもじゃねぇが実装なんてのには程遠い。なのに計画案すら上がってないだろうステークやら狙撃用のラプターやら、明らかに技術が進んでる」
ひょっとしてここは。
一行の頭に浮かび上がるのは認めたくないも答え。
新一人を除き、そんなことを考えたくもないのか先へ進もうと促す。答えはこの先にあるはずだから。
「ここっスね」
「こりゃぁ、お前がいて良かったよ……」
「ですねぇ」
「わかり辛……」
新の言葉にヴィヴィオを初めとする一行は頷いた。
地下に人がいる。

そこまではなんとなくで予想出来たかもしれない。
だが、パッと見で気づけるようなカモフラージュではなく、それこそ透視か何かの能力でも無ければ気づけなかったであろうというレベルだ。
地面に偽装してある鉄の扉を持ち上げると、錆付いた梯子が顔を覗かせる。
相当に深いのか、中を見るも闇だけが続いていた。

「じゃあ俺が先に降りるから――」
「馬鹿、変態、死にさらせヘタレ」
「カナン君のエッチ……」
「なんでだよ！？」

相変わらず地雷を進んで踏み抜くカナンに二人の少女の視線が突き刺さる。
この状況に置いても変わらないカナン達に新は――この日何度目になるだろうか知らないが――溜息しかつけない。

「こういう危険な所は男が先に行くもんだろ？」
「ホンッとにデリカシーに欠けるわねアンタは！」
「やっぱりカナン君エッチ……」
「何がじゃぁぁぁぁぁぁ！！」
「やれやれ、飽きないねぇお前らは……」

八神新。今年２５歳にして猛烈な勢いで白髪が増えそうな苦労人であった。
ともあれ、何事も無く着地した一行は――結局、祐希奈がカナンを蹴り飛ばした隙に二人が先に下りた――周囲を警戒しながら見渡す。
地下には確かに人がいた。

カナンの言うとおり、数十名程はいるだろう。
ただし、これほどまでに痩せ細った人を見たことがないが。
「貴方方は、レジスタンスかい……？」
「レジスタンス？」
おずおずと、というよりは若干の期待を含みながら、近場にいた老人が話しかけてきた。
首を傾げたカナンに老人を含めた人々は肩を落とす。
人々の目からは諦めの空気が流れる。
「おじいさん、力になれるかはわからないですけど、取りあえず話して貰えませんか？」
「おお、優しいお嬢ちゃんだねぇ……」
ヴィヴィオの微笑みに安心したのか、老人はゆっくりとだが事情を話してくれた。
ここに備蓄されている食糧も尽きかけていること。
補給に行きたいが、外ではレジスタンスと呼ばれる武装組織と人を滅ぼそうとする機械達の戦闘が頻発しているために恐ろしくて出て行けないこと。
話を聞いただけでもここの暮らしがいかに苦しいものであるかは想像がついた。
「そんな事態になっているのか、”ミッドチルダ”は……」
「確かにここはミッドチルダと呼ばれてはいたがそんな昔話、良く覚えているねぇ……」
「……やっぱり、な」
「未来、ですね……」

新の鎌かけに老人はしっかりと頷いた。
当たってほしくなかった予想だけに一行は――特に中学生である三人は――沈み込む。
認めたくはないが、先刻に保留にした答えがこれで確定したから。
老人は昔話と言った。ということはここは確実に現在のミッドチルダより年代はどうあれ、未来の話ということになる。
現代のミッドチルダの見る影もない、この場所が。
なんとなく予想していたこととは言え、辛いものは辛い。

「取りあえず、ここの人たち困ってるみたいだし、助けないか？」
「アンタね、私達が動けば歴史が変わるかもしれないってわかってる？」

あっけらかんと言うカナンに祐希奈が反発する。
そう、カナン達は次元渡航所か、時空渡航しているのだ。
下手な介入をすればどうなるか予想もつかない。

「でもそれは過去の話だろ？　ここは未来なんだし何も変わらないと思う」
「で、根拠は？」
「無い！」

ニッとカナンは笑った。
これには一行も呆れ返るしかない。
結局、カナンに考えなど求めた時点で無駄なのだろう。

「何なら俺だけ言って見つからないように食料だけとって帰ってくるからさお前らは――」

――待っていろ。

そう言うつもりだった。
しかし、それは叶わない。
「出来るわけねぇだろうがド阿呆」
―撃！―
「い〝っ！」
脳天に叩き込まれた新の拳に言葉を遮られたが故に。
ズキズキと疼く頭を抑えながらカナンは新を恨みがましく睨んだ。
「一番の心配要素が何言ってんだ。お前に行かせるくらいならまだ祐希奈の方が――」
―撃！―
「なんか言った？　おっさん♪」
「――俺が行ったほうがまだマシだ」
「よろしい♪」
子供に言い聞かせるには怖気づくようではいけない。
だからこそのこの強気。
まぁ、一度意見を強制変更させられるという事故もあったりなかったりしたが。
ともあれ、カナンの独断で動かせるのは危険過ぎると新は判断したのだ。
そうなれば新の行動は速かった。
スタスタと梯子へと歩んでいく。

「ほら、ボーっとすんな。行くぞ」

どこへ？

そんな表情を浮かべた一行に新はニヤリと笑う。

「どうせ行くなら、数は多く持って帰ったほうがいいだろうが？」

「ちょ、待っ！」

「何なのよアイツは！」

「新さん意地悪さんだ～」

そう言って梯子を上って行く新を三人は慌てて追いかけていく。

表向きは食料補給の旅だ。

だがそこで、思わぬ人物達との出会いが待っていることを一行はまだ知らない。

第十九話　崩壊のミッドチルダ（後書き）

カナン、ヴィヴィオ、祐希奈、新→崩壊したミッドチルダ

ありがとうございました♪

さてさて、次はボン太郎さんに飛ばしたいと思います♪

後は、任せた……ぜ……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6769t/

魔法少女 リリカルなのは 〜時の引き金〜

2012年1月4日02時53分発行